(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第100集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第14集

熊野堂遺跡(2)

まとめ編

1991

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第100集

上 越 新 幹 線 関 係
埋蔵文化財発掘調査報告

第 14 集

熊野堂遺跡(2)

まとめ編

1991

群 馬 県 教 育 委 員 会
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
東 日 本 旅 客 鉄 道 株 式 会 社

熊野堂遺跡水田跡（Ｃ水田上・ＦＡ水田下）

熊野堂遺跡水田跡（Ｃ水田左・ＦＡ水田右）

例　　言

1　本書は上越新幹線建設に伴い事前調査された群馬県高崎市大八木町、群馬県群馬町大字井出に所在する「熊野堂（くまのどう）遺跡」第II地区の発掘調査報告書である。体裁は、遺構編２冊、遺物編１冊、まとめ編１冊の４冊からなり、本書はその第４分冊　「まとめ編」である。

2　第４分冊　まとめ編は、前３冊の編集にもれたものの補遺及び、資料集成、資料分析、各種の化学的分析を掲載した。

3　資料集成は、女屋和志雄、関根慎二が担当した。

4　資料分析及び化学的分析については、外部の次の方々に協力及び原稿をいただいた。

奈良・平安時代の土器	三浦京子氏（シン航空写真株式会社）
馬歯の鑑定	宮崎重雄氏（大間々高校教諭）
飾り金具	加島　勝氏（東京国立博物館）
胎土分析	花岡紘一・小沢達樹氏（群馬県工業試験場）
	三浦京子氏（シン航空写真株式会社）
プラントオパール	藤原宏志氏（宮崎大学）

これ以外の執筆については当事業団職員が当たり、文中に記した。

5　第３分冊と本文冊の整理編集事業は、群馬県教育委員会を通じ、東日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成元年４月１日から平成３年３月31日にかけて実施した。担当職員は、以下の通りである。

事務担当	邊見長雄　松本浩一　田口紀雄　神保侑史　岩丸大作　住谷進　国定均　笠原秀樹 小林昌嗣　須田朋子　吉田有光　柳岡良宏
整理担当	調査研究第２課長　桜場一寿（平成元年度）　能登健（平成２年度）
担　　当	女屋和志雄　関根慎二
嘱 託 員	新井悦子　三浦京子
補 助 員	阿部幸恵　安達好子　石井きよ子　岩渕節子　宇佐美征子　大野容子　小野寺仁子 岸トキ子　五明志津子　佐子昭子　立川千栄子　田所順子　筑井弘子　戸神晴美 富沢スミ江　長岡美和子　原島弘子　平林照美　山田キミ子　吉田文子 六反田達子　岡田美知枝

凡　　例

1　遺構・遺物の縮尺は図版中にスケールを記載したが、資料分析中のものについてはスケールを記載しないものもある。遺構、遺物編を参照されたい。

目　　次

第１章　調査に至る経過と遺跡の概要
第２章　検出された遺構
（以上遺構編）
第３章　出土した遺物
（以上遺物編）

口絵１・２
例　　言
目　　次

補遺・資料編 …… 1
第４章　補　　遺 …… 3
第１節　遺構編補遺・住居址遺構図資料 …… 3
第５章　資　料　集　成 …… 14
第１節　特殊遺物集成 …… 14
弥生時代石鏃・未製品 …… 16
埴　　輪 …… 18
土製模造品 …… 20
石製模造品 …… 23
鉄　　器 …… 28
墨書土器 …… 37
瓦 …… 39
碁　　石 …… 49
こも編み石 …… 51
まとめ・分析編 …… 59
第６章　ま　と　め …… 61
第１節　熊野堂遺跡の住居変遷について …… 61
第２節　弥生時代磨製石鏃の製作工程について …… 95
第３節　古墳時代前期の土器について …… 101
第４節　奈良・平安時代の土器 …… 107
第５節　熊野堂遺跡第49号住居出土の装飾金具 …… 123
第６節　熊野堂遺跡Ⅱ地区出土の瓦について …… 127

第７章　分　　析 ……130
第１節　熊野堂遺跡出土須恵器胎土分析 ……130
第２節　熊野堂遺跡Ⅱ地区出土の馬歯について ……138
第３節　プラント・オパール分析による群馬：熊野堂遺跡水田址の考察 ……157

挿　図　目　次

口絵１　口絵２
第１図　18号・28号・45号住居址遺構図
第２図　51号・54号・83号住居址遺構図
第３図　92号・146号・162号住居址遺構図
第４図　175号・177号・183号住居址遺構図
第５図　178号・179号住居址遺構図
第６図　190号・191号・192号住居址遺構図
第７図　193号・207号・208号・212号・216号住居址遺構図
第８図　222号・225号・228号・244号住居址遺構図
第９図　249号・255号・258号住居址遺構図
第10図　260号・３区17号住居址遺構図
第11図　弥生時代石鏃・未製品集成図
第12図　埴輪集成図
第13図　土製模造品集成図
第14図　石製模造品集成図
第15図　石製模造品集成図
第16図　鉄器集成団
第17図　鉄器集成団
第18図　鉄器集成団
第19図　鉄器集成団
第20図　鉄器集成団
第21図　墨書土器集成図
第22図　瓦集成図
第23図　瓦集成図
第24図　瓦集成図
第25図　瓦集成図
第26図　瓦集成図
第27図　瓦集成図
第28図　碁石集成図
第29図　こも編み石集成図
第30図　こも編み石集成図
第31図　こも編み石集成図
第32図　こも編み石集成図
第33図　こも編み石集成図
第34図　こも編み石集成図
第35図　熊野堂遺跡住居址変遷図弥生・古墳時代
第36図　熊野堂遺跡住居址変遷図古墳・奈良時代
第37図　熊野堂遺跡Ⅱ地区住居址変遷図平安時代
第38図　熊野堂遺跡Ⅱ地区時代別住居方位図
第39図　熊野堂遺跡時代別住居規模
第40図　弥生時代磨製石鏃の製作工程図
第41図　弥生時代磨製石鏃の製作道具
第42図　古墳時代前期の土器
第43図　古墳時代前期の土器
第44図　７世紀代の土器
第45図　第１段階の土器
第46図　第２段階の土器
第47図　第３段階の土器
第48図　第４・５段階の土器
第49図　第６・７段階の土器
第50図　第８段階の土器
第51図　第９段階の土器
第52図　第10段階の土器
第53図　第11・12段階の土器
第54図　第13段階の土器
第55図　第14段階の土器
第56図　第15段階の土器
第57図　装飾金具
第58図　装飾金具
第59図　Ａ類の瓦
第60図　Ｂ類の瓦
第61図　胎土分析土器実測図
第62図　胎土分析土器実測図
第63図　群馬県内の主な古窯跡の Sr/Rb と Ca/K 比率
第64図　熊野堂遺跡の Sr/Rb と Ca/K 比率
第65図　69号住居址馬歯出土状態図
第66図　馬歯集成図69住（１）
第67図　馬歯集成図69住（２）
第68図　馬歯集成図69住（３）
第69図　馬歯集成図69住（４）
第70図　馬歯集成図
第71図　192号土坑平面図、牛歯図
第72図　プラントオパール分析図
第73図　プラントオパール写真

図　版　目　次

図版１－１　233号住居址全景（北より）
　　２　234号住居址全景（北より）
　　３　234号住居址遺物出土状態（東より）
図版２－１　235号住居址全景（西より）
　　２　235号住居址カマド（西より）
　　３　237号住居址全景（西より）
図版３－１　237号住居址カマド遺物出土状態（北より）
　　２　238号住居址全景（西より）
　　３　238号住居址遺物出土状態（東より）
図版４－１　239号住居址全景（西より）
　　２　239号住居址カマド（西より）
　　３　240号住居址全景（西より）
図版５－１　241・246号住居址全景（西より）
　　２　241号住居址遺物出土状態（南より）
　　３　242号住居址全景（西より）
図版６－１　242号住居址遺物出土状態（西より）
　　２　243・245・246号住居址全景（西より）
　　３　243・245・246号住居址全景（南より）
図版７－１　243号住居址遺物出土状態（西より）
　　２　243号住居址カマド（西より）
　　３　245号住居址全景（西より）
図版８－１　246号住居址遺物出土状態（西より）
　　２　246号住居址遺物出土住居址（西より）
　　３　244号住居址全景（西より）

補遺・資料編

第４章　補　　遺

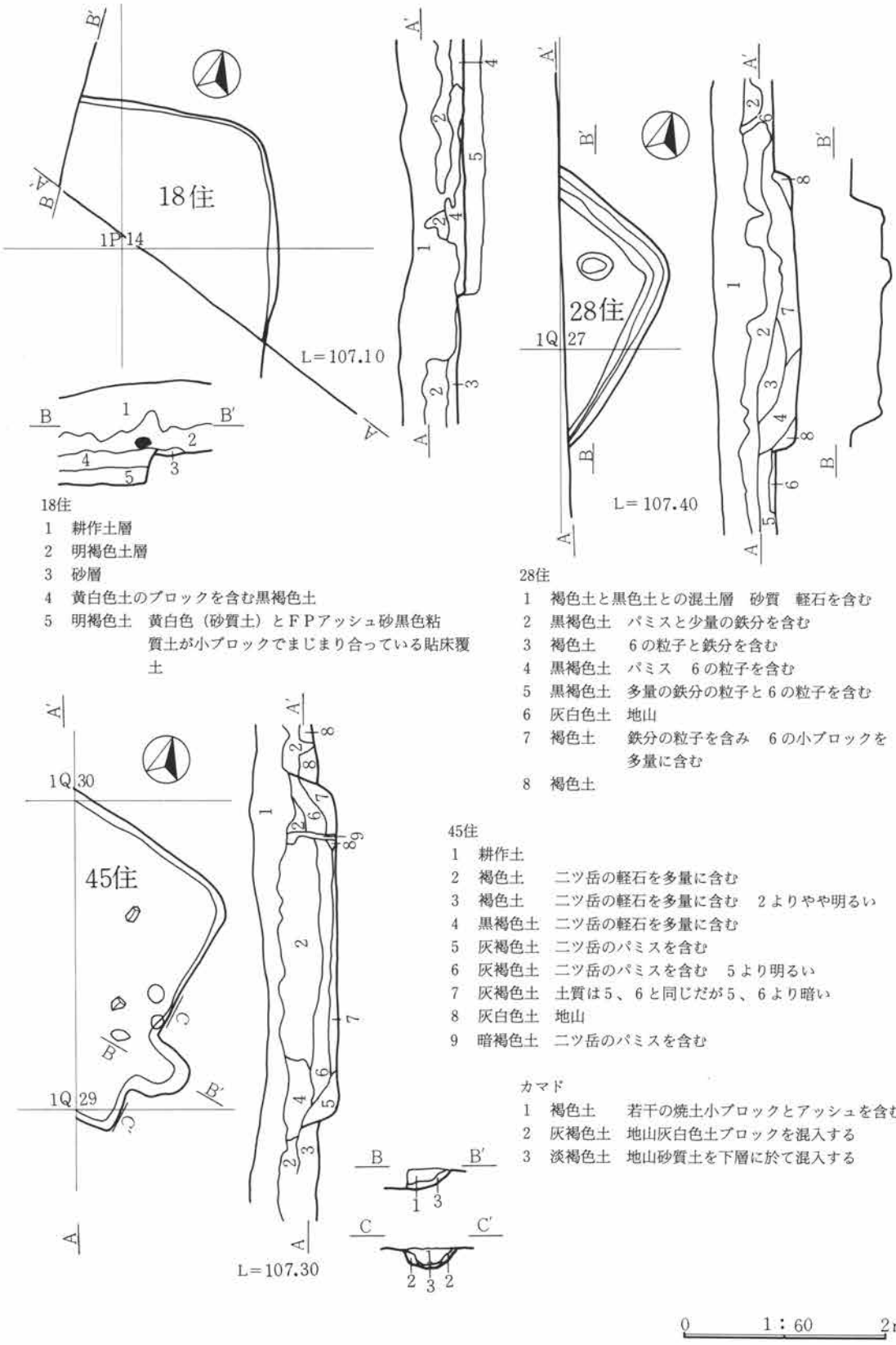
第１節　遺構編補遺・住居址遺構図資料（第１図～第10図）

ここに掲載した住居は、調査区域外にかかるか、複雑に重複するという調査時の状況の中で、全体の一部だけが確認されたか、全貌のつかめなかったものである。その数は32軒である。従って、上記の内容を持った住居は、遺構編　第１分冊からは割愛した。ただし、177住、178住の様に当初予定からもれたものもあり、それを補う意味から、上記の確認状態の住居を含めて補遺資料として一括掲載をする。

なお、遺構説明は、既に遺構編　第１分冊に掲載してあるので、ここにその頁を付記する。

住居番号	遺構編	本文頁
18住	第１分冊	P－52
28住	〃	P－62
45住	〃	P－64
51住	〃	P－64
54住	〃	P－75
83住	〃	P－95
92住	〃	P－103
146住	〃	P－145
162住	〃	P－155
175住	〃	P－169
177住	〃	P－171
178住	〃	P－171
179住	〃	P－171
183住	〃	P－176
190住	〃	P－182
191住	〃	P－183
192住	〃	P－183
193住	〃	P－183

住居番号	遺構編	本文頁
207住	第１分冊	P－183
208住	〃	P－187
211住	〃	P－195
212住	〃	P－195
216住	〃	P－201
222住	〃	P－204
225住	〃	P－204
228住	〃	P－205
244住	〃	P－220
249住	〃	P－224
255住	〃	P－229
258住	〃	P－230
260住	〃	P－231
３区17住	〃	P－247



18住
1　耕作土層
2　明褐色土層
3　砂層
4　黄白色土のブロックを含む黒褐色土
5　明褐色土　黄白色（砂質土）とＦＰアッシュ砂黒色粘質土が小ブロックでまじり合っている貼床覆土

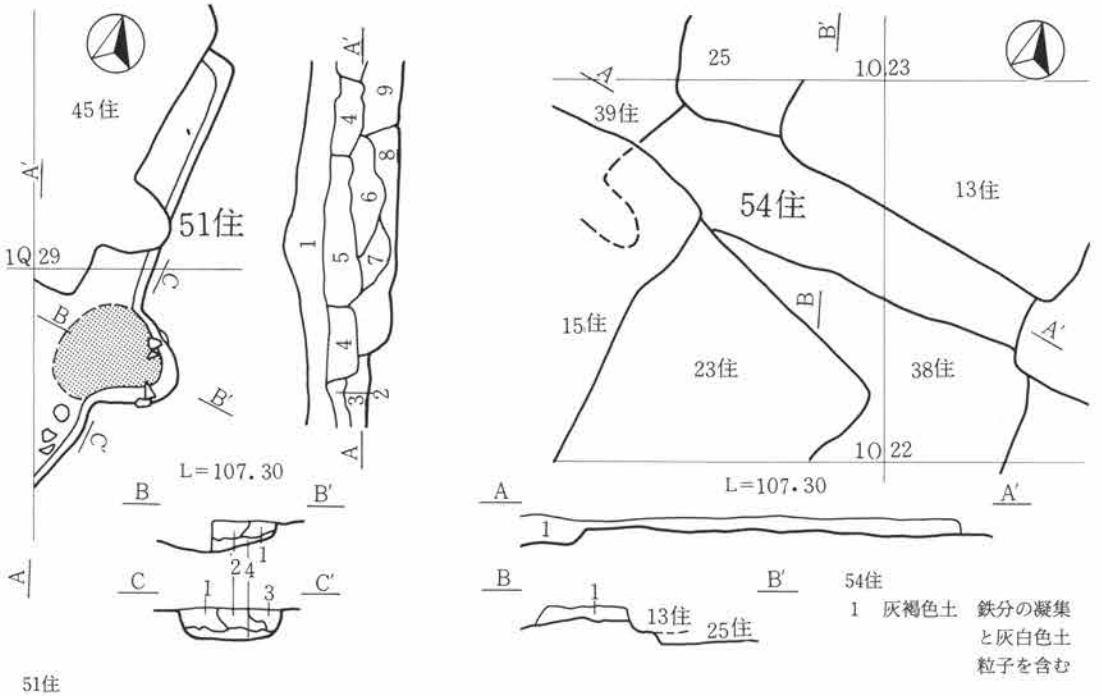
28住
1　褐色土と黒色土との混土層　砂質　軽石を含む
2　黒褐色土　パミスと少量の鉄分を含む
3　褐色土　　６の粒子と鉄分を含む
4　黒褐色土　パミス　６の粒子を含む
5　黒褐色土　多量の鉄分の粒子と６の粒子を含む
6　灰白色土　地山
7　褐色土　　鉄分の粒子を含み　６の小ブロックを多量に含む
8　褐色土

45住
1　耕作土
2　褐色土　　二ツ岳の軽石を多量に含む
3　褐色土　　二ツ岳の軽石を多量に含む　２よりやや明るい
4　黒褐色土　二ツ岳の軽石を多量に含む
5　灰褐色土　二ツ岳のパミスを含む
6　灰褐色土　二ツ岳のパミスを含む　５より明るい
7　灰褐色土　土質は５、６と同じだが５、６より暗い
8　灰白色土　地山
9　暗褐色土　二ツ岳のパミスを含む

カマド
1　褐色土　　若干の焼土小ブロックとアッシュを含む
2　灰褐色土　地山灰白色土ブロックを混入する
3　淡褐色土　地山砂質土を下層に於て混入する

0　1：60　2m

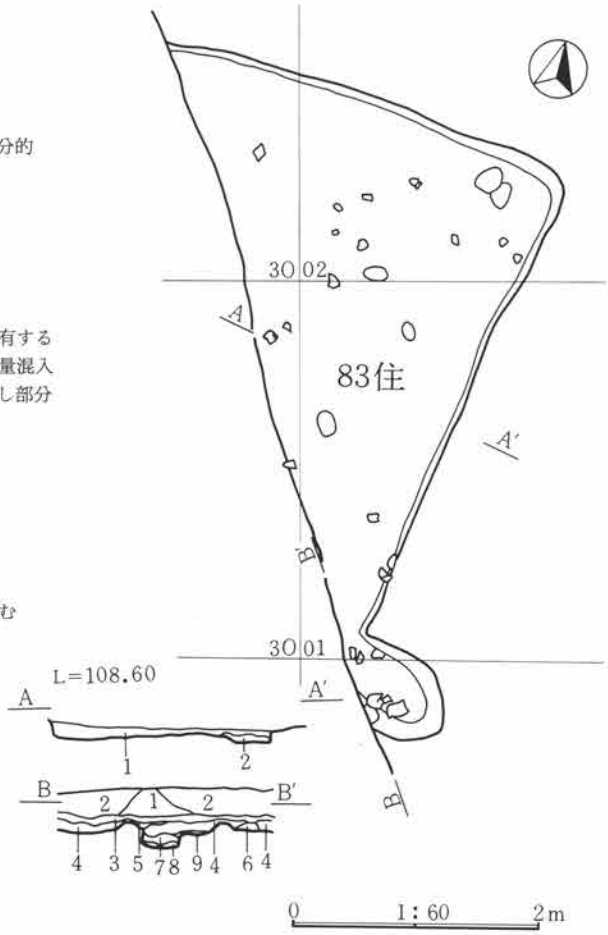
第１図　18号・28号・45号住居址遺構図



54住
1　灰褐色土　鉄分の凝集と灰白色土粒子を含む

51住
1　耕作土
2　褐色土　わずかにパミスアッシュを含む
3　灰白色土　地山層
4　暗褐色土　撹乱層
5　褐色土　パミスアッシュを多量に含む覆土上層
6　暗褐色土　パミスアッシュを極くわずかに含む　部分的に鉄分凝集を認める
7　灰褐色土　層中に地山灰白色土ブロックを含む
8　暗褐色土　６層に近似する下層に灰層を認める
9　45号住覆土

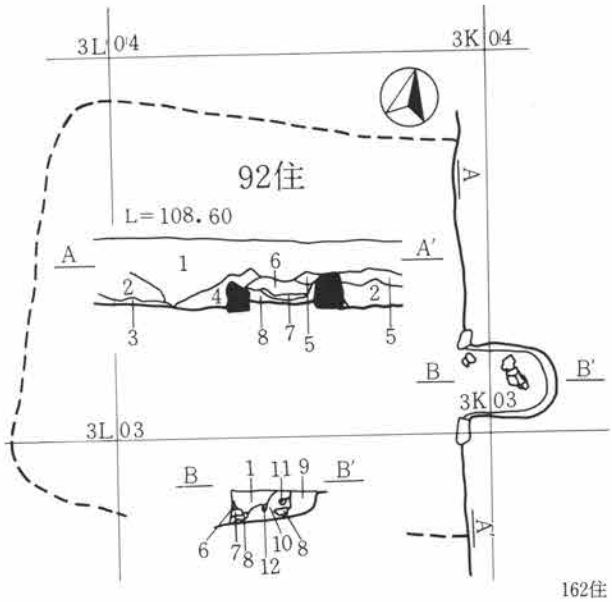
カマド
1　暗褐色土　地山層灰白色土小ブロックと灰を若干含有する部分的に鉄分の凝集を認めるアッシュ少量混入
2　褐色土　やや多量に地山灰白色土ブロックを混入し部分的に鉄分の凝集を認める
3　暗褐色土　アッシュを極くわずかに含む
4　灰　わずかに焼土粒子を混入する

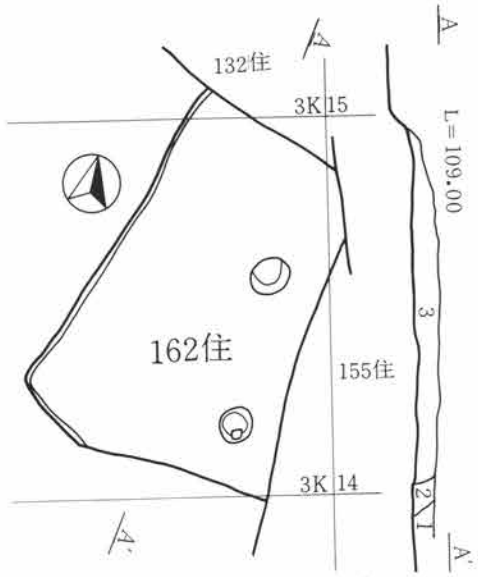


83住
1　黒褐色土　Ｃ軽石とローム漸移層の小ブロックを含む
2　黒褐色土　Ｃ軽石とロームブロックを含む

カマド
1　ＹＰ層　耕作土を含む
2　耕作土　ＹＰ、ロームブロックを含む
3　黒褐色土　Ｃ軽石とローム漸移層の小ブロックを含む
4　茶褐色土　ＹＰ・ローム粒子を含む
5　黒褐色土
6　ローム層
7　灰　焼土を少量含む
8　灰　焼土を多量に含む
9　砂

第２図　51号・54号・83号住居址遺構図





92住

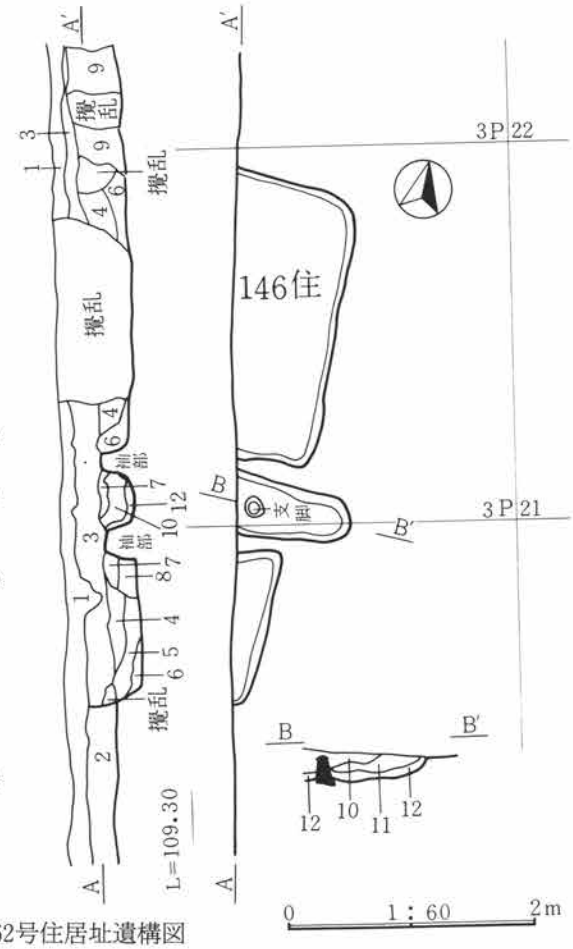
1　灰褐色土　耕作土　浅間B　二ツ岳ＦＰの軽石を含む砂質
2　黒褐色土　ＦＰとロームの小ブロックを含む　砂質
3　ローム
4　灰褐色土　砂質でしまりがない　撹乱層である
5　黒褐色土　浅間B　二ツ岳ＦＰの軽石を含む
6　灰褐色土　二ツ岳ＦＰの軽石と焼土の粒子と灰を含む
7　焼土　純粋
8　灰　焼土の粒子を含む
9　暗褐色土　焼土を含む
10　暗褐色土　9層よりも焼土の含有量はずっと多い
11　茶色粘質土
12　砂粒　砂岩のかけらと思われる

162住

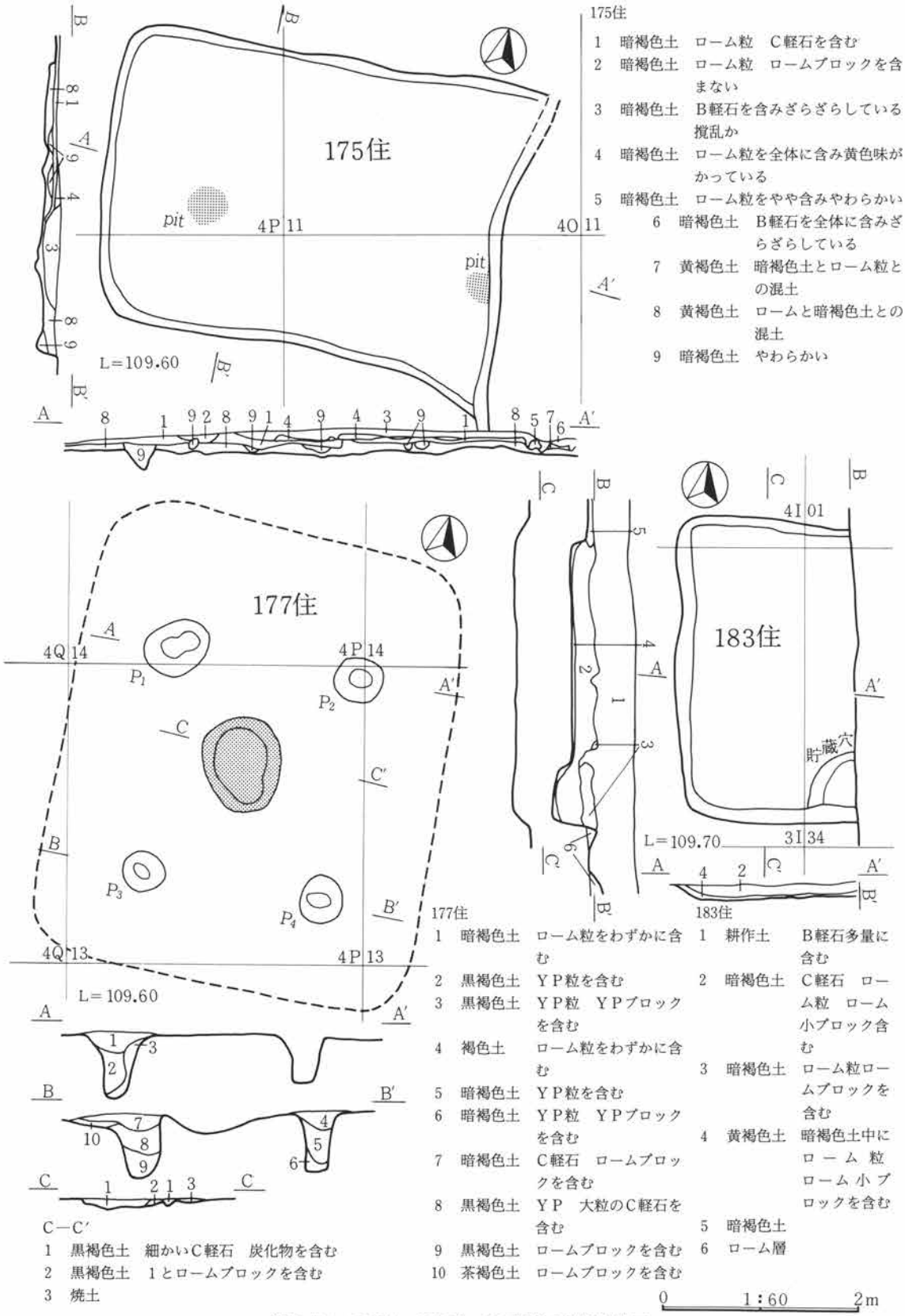
1　黒色土　多量のＣ軽石と若干のＹＰを混入する層
2　黒褐色土　1層と同質層であるが若干のロームブロックを混入する
3　黒色土　1層に近似する

146住

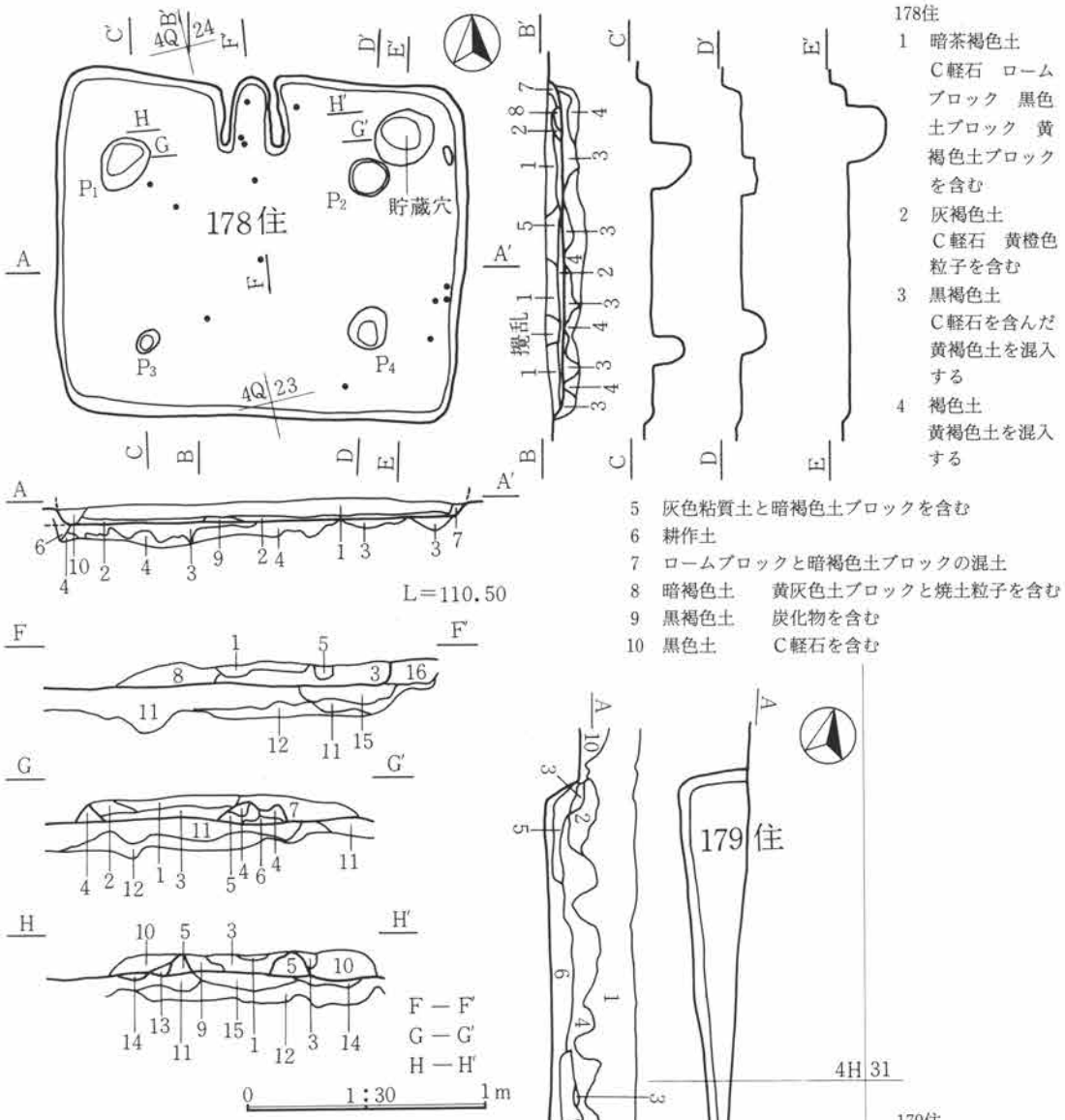
1　耕作土　B軽石を含む
2　褐色土
3　褐色土　Ｃ軽石を含有する下層に於いて　ローム粒をわずかに混入する
4　暗褐色土　ロームブロックをわずかに混入しアッシュも若干含む
5　黒褐色土　2層に近似するが色調やや暗い
6　黒褐色土　わずかにロームブロックを混入するやわらかい層
7　茶褐色土　Ｃ軽石とローム粒を多量に混入する
8　暗褐色土　Ｃ軽石　ローム粒を混入する
9　淡黄褐色土　ＹＰ　Ｃ軽石　ローム粒を多量に混入する
10　黄褐色土　ローム粒と焼土粒を含有する
11　焼土　真赤に焼けた焼土ブロック
12　灰　かまど底部に推積した灰で焼土ブロック粒を混入する



第3図　92号・146号・162号住居址遺構図



第４図　175号・177号・183号住居址遺構図



178住

1　暗茶褐色土　C軽石　ロームブロック　黒色土ブロック　黄褐色土ブロックを含む
2　灰褐色土　C軽石　黄橙色粒子を含む
3　黒褐色土　C軽石を含んだ黄褐色土を混入する
4　褐色土　黄褐色土を混入する
5　灰色粘質土と暗褐色土ブロックを含む
6　耕作土
7　ロームブロックと暗褐色土ブロックの混土
8　暗褐色土　黄灰色土ブロックと焼土粒子を含む
9　黒褐色土　炭化物を含む
10　黒色土　C軽石を含む

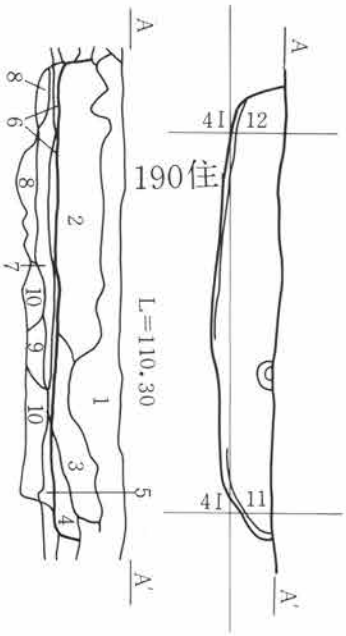
178住カマド

1　褐色土　焼土粒　炭化物　灰をわずかに含む
2　褐色土　ローム粒　白色粘土粒をわずかに含む
3　褐色土　焼土ブロック　炭化物　灰を多量に含む
4　淡黄褐色土 } カマドの袖部分
5　灰白色土 }
6　褐色土　灰を含む
7　褐色土　わずかにローム粒を含む
8　褐色土　焼土粒　灰白色土小ブロックを含む
9　黄褐色土と褐色土との混土
10　褐色土　灰白色土ブロック　焼土粒を含む
11　暗褐色土　C軽石を少量含む黄褐色土を混入する
12　褐色土　黄褐色土との混土
13　褐色土と灰色粘質土との混土
14　黒色土　C軽石と焼土ブロックを含む
15　褐色土　1層より焼土ブロックを多く含む
16　褐色土　灰　ローム粒を含む

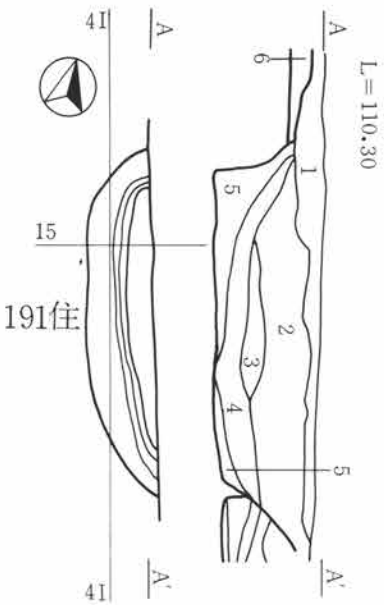
179住

1　耕作土　B軽石を含む
2　暗褐色土　ローム粒を全体に含む　C軽石含む
3　黄褐色土　砂層　小石も若干含む
4　黄暗褐色土　暗褐色土にローム粒が多量に混合したもの
5　暗褐色土　ローム粒を若干全体に混合
6　暗褐色土　ローム粒を全体に混合3層よりもロームの量少なく4層よりも多い
7　黒褐色土　ローム粒を全体に含む
8　暗褐色土　ローム粒を全体に混合
9　暗褐色土　ローム粒　ロームブロックを多く含み黄褐色に近い
10　ローム層

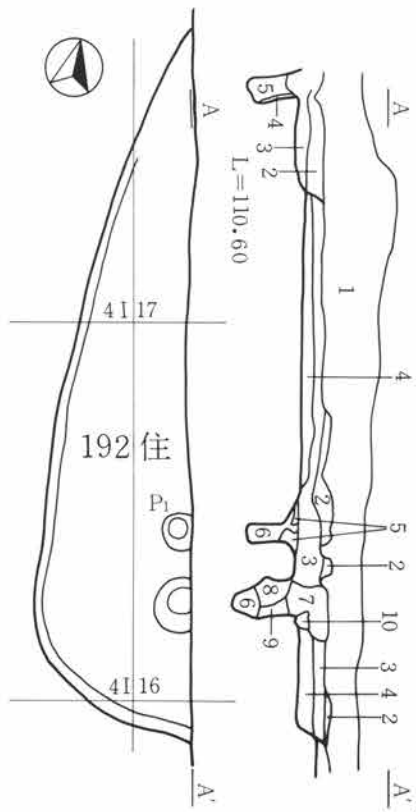
第5図　178号・179号住居址遺構図

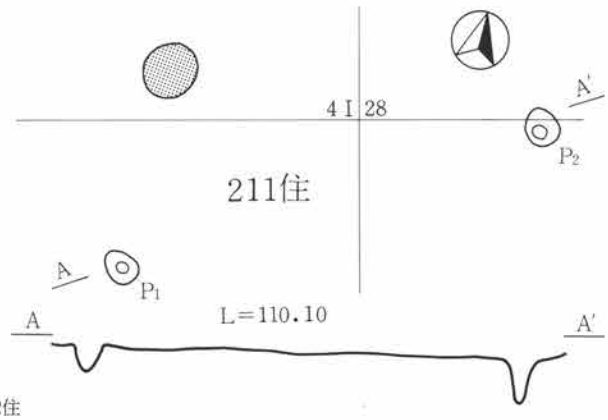


190住
1　耕作土
2　褐色土　C軽石粒（2～5㎜）ローム粒を含む
3　褐色土　C軽石粒　ローム粒　焼土粒を僅かに含む
4　褐色土　細かいC軽石　ローム粒　焼土粒を僅かに含む
5　褐色土　ローム大ブロックを含む
6　褐色土　C軽石（2～3㎜）ローム粒　YP粒　ローム小ブックを含む
7　褐色土　c軽石（2～5㎜）YP粒　ローム粒　YPブロックを多く含む
8　暗褐色土　YP粒　YPブロック　ローム小ブロックを含む
9　褐色土　YP粒　ローム大ブロック　灰白色粘質土　焼土ブロックを含む
10　褐色土　YP粒　ローム大ブロック　YPブロックを含む



191住
1　耕作土
2　暗褐色土　ローム粒　C軽石を含む
3　暗褐色土　2層よりもやや暗い
4　暗褐色土　砂小石を含みざらざらしている　ローム粒を僅かに含む
5　暗褐色土　粒子細かくしまっている
6　黒褐色土

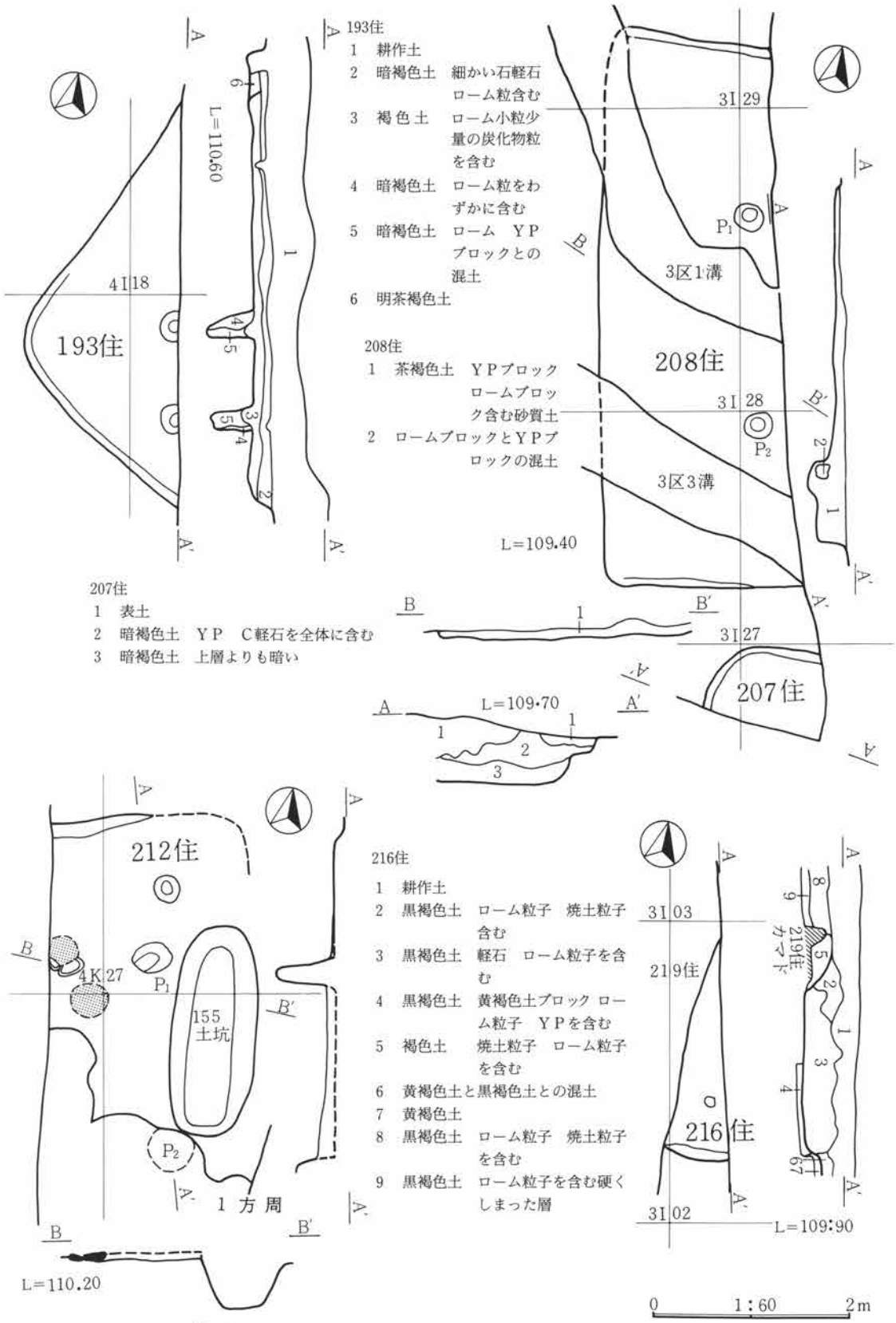




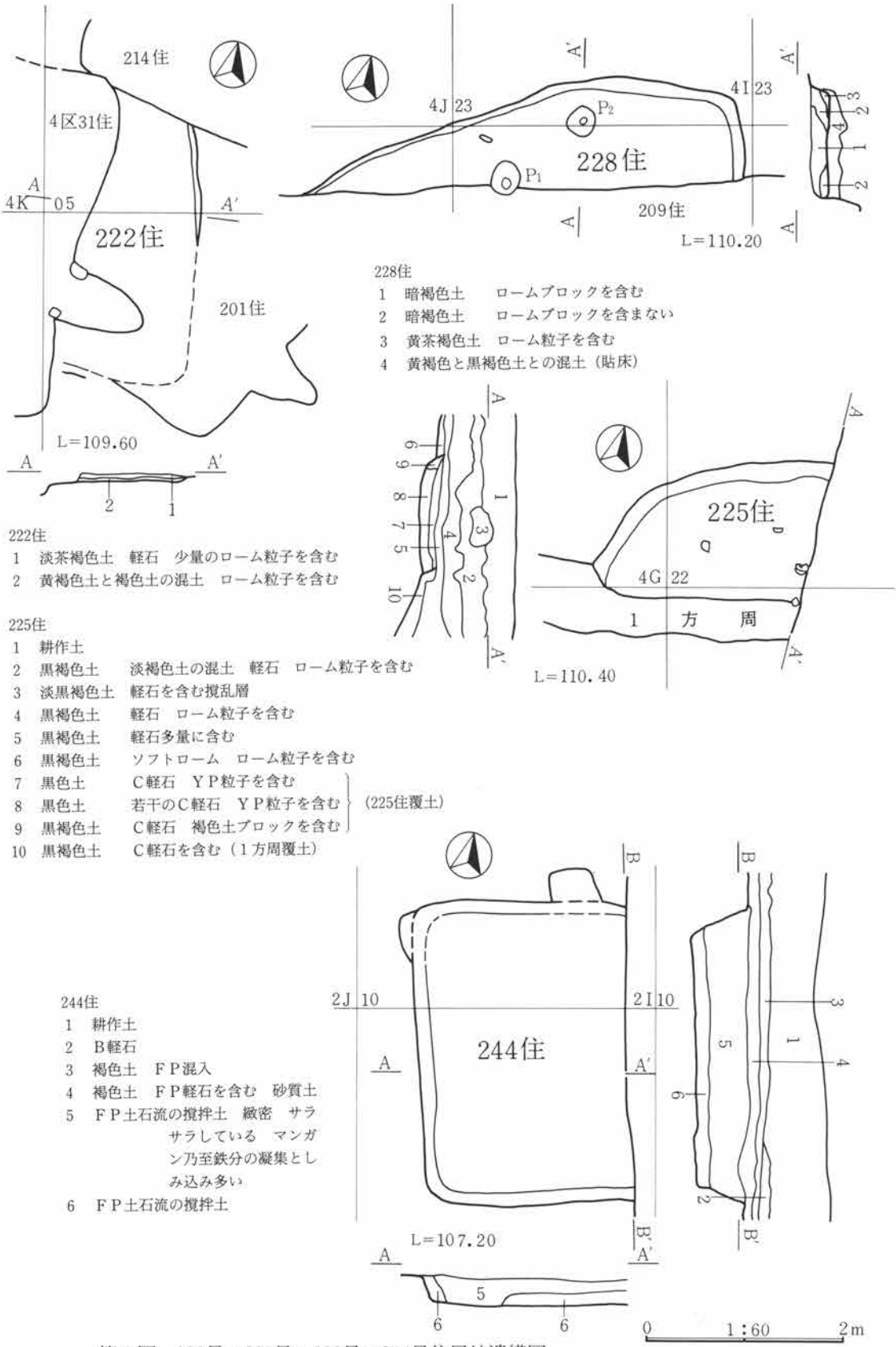
192住
1　耕作土
2　褐色土　大粒のC軽石を多量に含む
3　暗褐色土　細かいC軽石　ローム粒を含む
4　暗褐色土　ローム粒　ロームブロックを含む
5　暗褐色土　ローム粒を含む
6　黄褐色土　ロームブロック　YPを多量に含む
7　明褐色土　YP粒　C軽石　大粒のローム粒を含む
8　暗褐色土　ロームブロックを多く含む
9　暗褐色土　ロームブロック　YPを含む
10　炭化物ブロック

0　1:60　2m

第６図　190号・191号・192号住居址遺構図



第7図　193号・207号・208号・212号・216号住居址遺構図



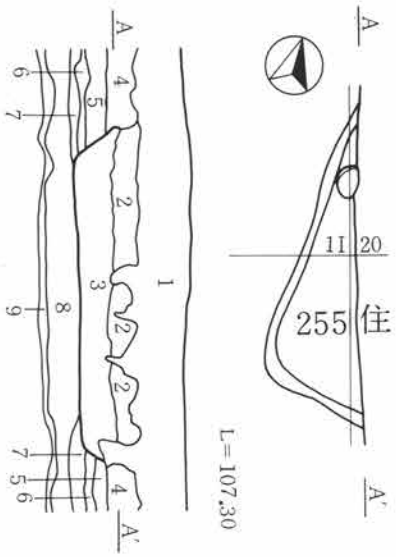
228住
1　暗褐色土　ロームブロックを含む
2　暗褐色土　ロームブロックを含まない
3　黄茶褐色土　ローム粒子を含む
4　黄褐色と黒褐色土との混土（貼床）

222住
1　淡茶褐色土　軽石　少量のローム粒子を含む
2　黄褐色土と褐色土の混土　ローム粒子を含む

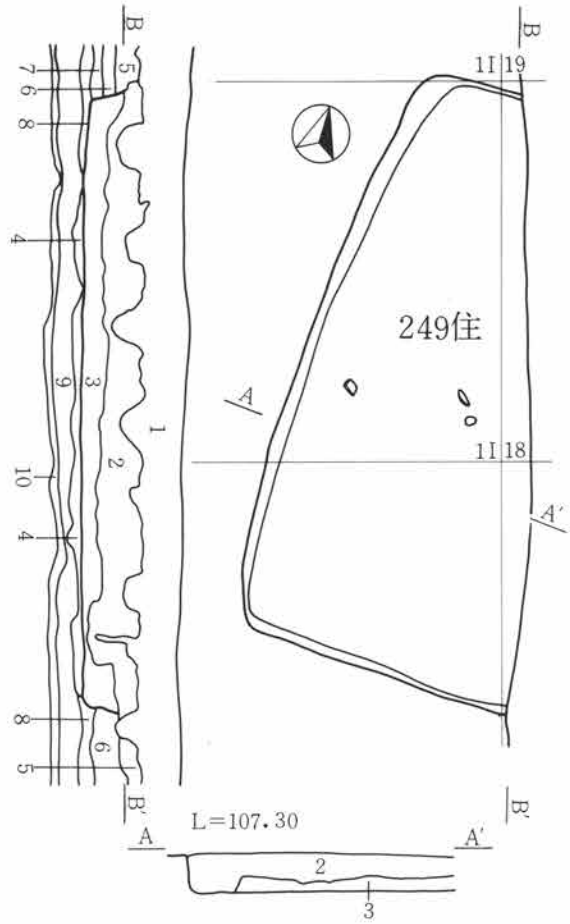
225住
1　耕作土
2　黒褐色土　淡褐色土の混土　軽石　ローム粒子を含む
3　淡黒褐色土　軽石を含む撹乱層
4　黒褐色土　軽石　ローム粒子を含む
5　黒褐色土　軽石多量に含む
6　黒褐色土　ソフトローム　ローム粒子を含む
7　黒色土　Ｃ軽石　ＹＰ粒子を含む
8　黒色土　若干のＣ軽石　ＹＰ粒子を含む　（225住覆土）
9　黒褐色土　Ｃ軽石　褐色土ブロックを含む
10　黒褐色土　Ｃ軽石を含む（１方周覆土）

244住
1　耕作土
2　Ｂ軽石
3　褐色土　ＦＰ混入
4　褐色土　ＦＰ軽石を含む　砂質土
5　ＦＰ土石流の撹拌土　緻密　サラサラしている　マンガン乃至鉄分の凝集としみ込み多い
6　ＦＰ土石流の撹拌土

第８図　222号・225号・228号・244号住居址遺構図



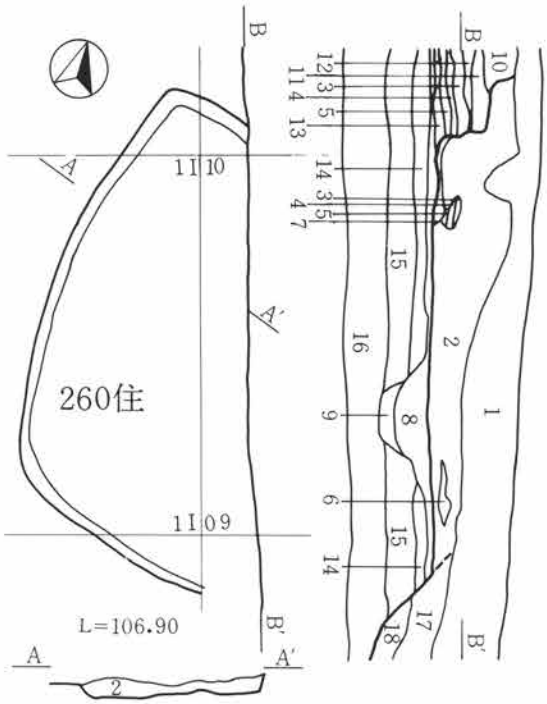
255住
1　表土
2　褐色土　粘質
3　褐色土　粘質　ＦＰの攪拌土を径１cm位の大きさで含む
4　ＦＰ期土石流
5　ＦＰ
6　ＦＰ　　黒褐色粘土の薄い部分
7　ＦＡ土石流　細粒砂層部分
8　ＦＡ土石流
9　ＦＡ

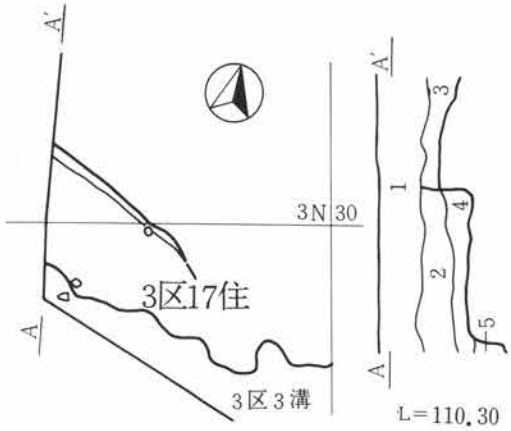


249住
1　耕作土（Ａ、Ｂ軽石を多く含む）
2　褐色土　粘性
3　褐色土　粘質　ＦＰの小粒子をまばらに含む
4　褐色土　粘性　ＦＰの小粒子が全体に多い
5　ＦＰ期土石流
6　ＦＰ
7　ＦＰ　　黒褐色粘土の薄い部分
8　ＦＡ土石流　細粒砂層部分
9　ＦＡ土石流
10　ＦＡ

258住
1　褐色微粒砂土　　径１～３cm位の軽石をまばらに含む
2　褐色微粒砂土　　軽石を含まず
3　褐色微粒砂土　　川砂をレンズ状に含む
4　褐色微粒砂土　　３層に炭をまばらに含む
5　褐色微粒砂土　　３層に軽石　炭をまばらに含む
6　淡褐色微粒砂土
7　淡褐色微粒砂土　川砂　軽石を少量含む

第９図　249号・255号・258号住居址遺構図





3区17住

1　耕作土　Ｂ軽石を多量に含みざらざらしている
2　暗褐色土　ＹＰをところどころに含む　やや軟らかい
3　暗褐色土　ＹＰを含むが少なくしまっており　やや暗い
4　明褐色土　ＹＰを含むが少なく　ロームブロック（親指大）をところどころに含む
5　暗褐色土　やや赤味がかっており　ＹＰを少量含む　やや軟らかい

260住

1　耕作土
2　灰黒褐色土　軽石　炭化物　だいだい色粒子を含む
3　ＦＡ土石流
4　ＦＡ
5　ＦＡ水田耕作土
6　３、４、５層の混土
7　注記なし
8　Ｃ軽石期水田耕作土
9　８層の鉄分凝集部
10　褐色土　軽石をまばらに含む
11　黒褐色土　粘土の薄い部分
12　ＦＡ土石流　細粒砂層部分
13　Ｃ軽石層
14　Ｃ水田耕作土下部の黒色土
15　灰黄色粘性土
16　８層の亜層
17　褐色土
18　17層に近い土　下位に鉄分層を含む

0　1：60　2m

第10図　260号・３区17号住居址遺構図

第5章　資　料　集　成

第1節　特殊遺物集成

本遺跡は、縄文時代から中・近世までの様々な遺構や遺物が確認された。その中では、弥生時代中期から平安時代にかけての住居跡や水田、畠などが主体となり、本遺跡を特色付けるものである。しかし、遺跡は、調査の経緯を異にする3つの地区からなる上に、第II地区の様に調査が都合6次にも及び、遺構番号などを始めとして不統一で繁雑になっている。その番号は、報告書の作成段階でも混乱を避ける意味で、あえて時代別に分けることなく調査時のままとした。

出土遺物については、第3分冊の遺物編で遺構毎に観察説明を行った。本編では、3つの地区での同じ種類の遺物をまとめて概観できるようにし、各種の集計・統計的処理を行えるようなデータベース作成の基礎資料として、稀少な出土遺物を中心に集成図と若干のデータ表を掲載した。

集成掲載した資料は、弥生時代の磨製石鏃に関する資料や土製品、古墳時代の滑石製模造品（紡錘車を含む）や土製模造品、埴輪、主に奈良から平安時代の鉄器、墨書土器、瓦、碁石、こも編み石である。

磨製石鏃は、後期樽式のもので僅少な資料ではあるが、第II地区の5軒の住居で製作され、『素材→分割→研磨→穿孔→仕上げ』の製作工程が復元される。県内では、甘楽町白倉下原遺跡と合わせて2例目の資料である。白倉下原遺跡では、主に粘板岩を素材に使用しているとのことであるが、2つの住居群の一方にのみ工房がある点で共通する。供給は、集落内での自給的なものと推定されるが、工具とした礫器の付着物や砕く・擦るなどの工程の類似から、第I地区で出土したベンガラも合わせて生産していた可能性がある。工程は、第6章第1節にのべる。

土製品は、第13図に合計31点集成したが、弥生時代後期樽式から平安時代のものまでを含んでいる。弥生時代のものとしては、手づくねの甕や台付甕、鉢などのほかに勾玉や土玉、円盤がある。古墳時代のものとしては、手づくねの甕や壺、勾玉、丸玉がある。

滑石製模造品は、第14・15図に集成したうち、線刻紡錘車3点を除く61点がある。時期別には、5世紀から6世紀代の住居で出土したもので、剣形品、勾玉、管玉、臼玉、有孔円板、紡錘車のほかに滑石の原石や剝片がある。遺構での出土頻度は、特定の住居で多量かつ組成を持った出土状態にはなく、大半が数点内外である。しかし、第II地区の168号住居や185号住居、4区14号住居など数軒にまとまりが見られ、手づくね土器と共伴して剣形品、勾玉、臼玉、有孔円板の組成がある。供献具のあり方では、本来、第II地区の170号住居に見られる様に長甕・杯・高杯の土器を主要な組成とした中に滑石製模造品が共伴する、というのが一般的なあり方であろう。隣接する井出村東遺跡などと比較すると、5世紀代の住居から出土することや量がやや多いことが特徴といえる。その背後には、北2kmにある三ッ寺I遺跡の『古墳時代豪族居館』との関係があろうが、集落の規模や継続性からすると、居館に集約されるものとは別の集落内で完結する祭祀の体系化があろう。また、4区26号住居から出土した滑石の原石や未報告となったが、第I地区東の畑から表採された紡錘車の研磨前段階の未製品

の存在などからすると、隣接区域での工房も推定される。

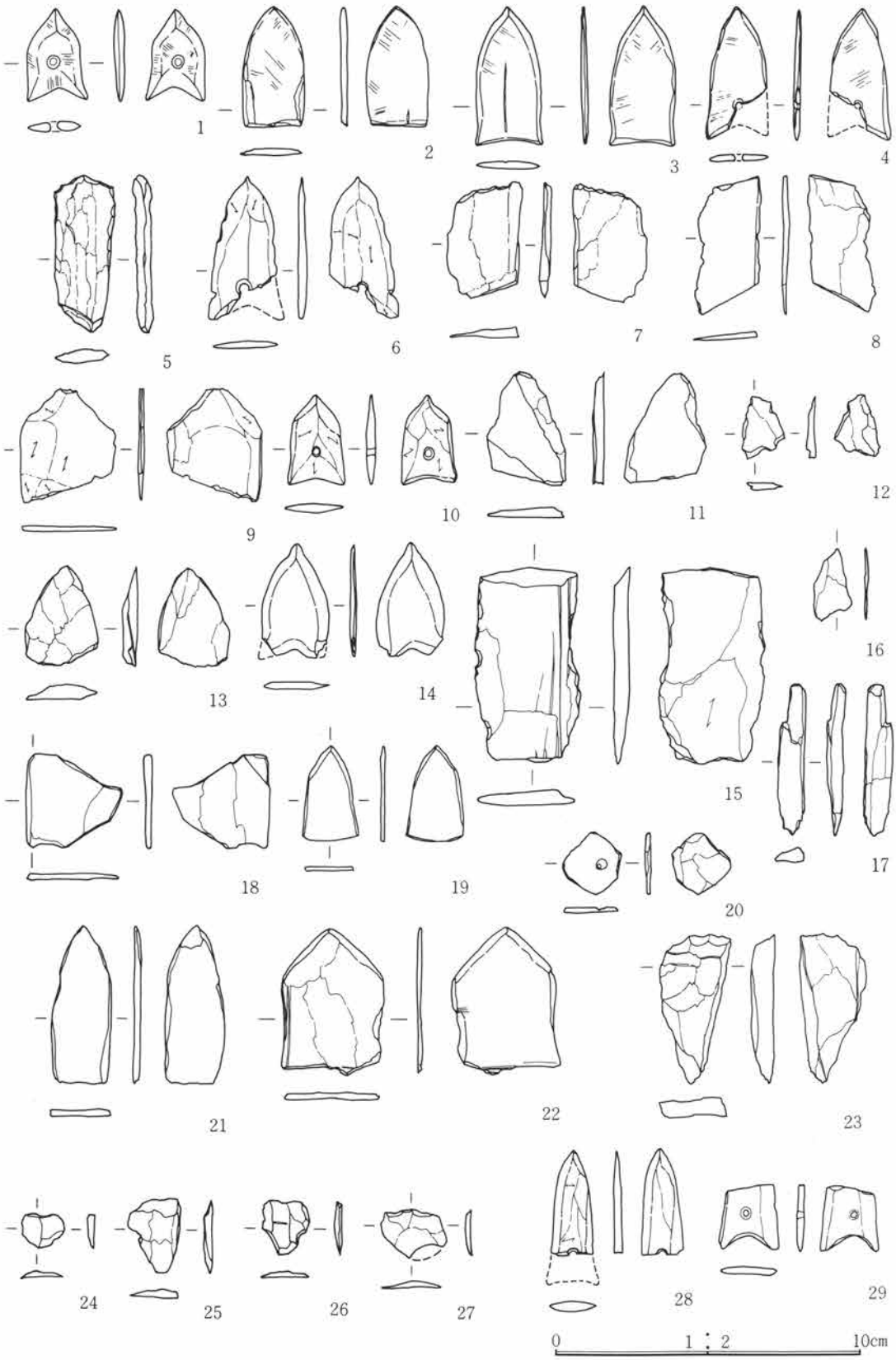
埴輪は、第12図に集成をした。遺物としては、６世紀代の年代観があたえられるが10世紀以降の住居で瓦とともにカマドの袖補強材として出土している。10点と少量ではあるが、周辺の古墳との関係やその破壊時期を間接的に示している。瓦とともに、10世紀以降という一線を画した遺構からの出土は、破壊と裏腹の関係にある台地上で面の開墾が進んだことを意味し、前代との画期を示す遺物といえる。周辺の古墳としては、北の群馬町井出から保渡田地区にかけて５～７世紀のものが知られ、中でも井出二子山・八幡塚・薬師塚の『保渡田三古墳』は代表的な存在である。６世紀以降の円墳からなる一群としては、井野川下流２km付近には高崎市『旧中川村』の古墳群、東１kmには群馬町『菅谷古墳群』がある。

鉄器は、第16～20図に集成をした。鎌、鋤先、刀子、鉄鏃、釘、紡錘車、留め金具など101点がある。全体に出土頻度は高く、中でも鎌や刀子、釘にその傾向が見られる。このほかに、埋没土中に混入したものまで含めて20軒を超す住居から合計12kg近い鉄滓が出土している。第II地区の10世紀から11世紀の22号住居や55号住居では、床面での炭化物や鉄滓の集中が見られ小鍛冶とも推定される。また、同じく第II地区の10世紀前半の184号住居では、型枠らしい痕跡を持つ鋳こぼれらしい銅滓が出土しており同様な可能性を持っている。

墨書土器は、第21図に集成した９世紀から11世紀までの17点がある。器種は杯と椀で、破片での出土が多いことに特徴がある。時期別には、底部から体部の外面に施書部位が変化している。字数は、殆どが１文字で記号としての意味が強いと考えられる。このほかの文字資料に、『大・上・万』を線刻した紡錘車３例と第II地区97号住居で『田』の字を刻んだ砥石があり、記号の中でも使用者としての集団や人名を特定する可能性がある。また、第II地区84号住居では風字硯が出土しており、集落内での施書と文字の普及を読み取ることがてきる。

瓦は、第22～27図に集成をした109点がある。その殆どは、埴輪と同様にカマドの補強材として転用されたものである。平瓦が殆どで、未使用に近い状態のものまであり、建物との関係が注目される。個別には、第６章第６節で軒丸瓦が『熊野堂技法』と仮称できる特徴を持ち、上野国の終末段階の様相を考える上で意味を持つとされた。同様な出土傾向は、井野川をはさんだ南にある融通寺遺跡でもみられ、調査範囲内では確認できなかったが２つの遺跡を含めた周辺地域に寺院あるいは瓦を葺いた建物を推定する資料として位置付けられる。

こも編み石は、まとまって出土した75号住居と197号住居を例として第29図～34図に集成をした。形状は、法量で近似値を示しているが、スクリーントーンで表現した部分に『擦る・敲く』などの痕跡がみられ、こも編みだけと用途を特定するのはむずかしい。むしろ、住居内で多い、工作用の台らしい大形の石と組み合わせた万能具としての機能を持つと考えたい。



第11図　弥生時代石鏃・未製品集成図

第１表　熊野堂遺跡　弥生時代石製品一覧表

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
1	I	16住	28	磨製石鏃	4.5 × 2.1 × 0.2	緑色凝灰岩	熊１　P－38
2	I	16住	29	磨製石鏃	3.8 × 2.0 × 0.2	緑色凝灰岩	熊１　P－38
3	I	16住	30	磨製石鏃	3.0 × 2.0 × 0.3	緑色凝灰岩	熊１　P－38
4	I	67住	2	磨製石鏃	4.3 × 2.0 × 0.2	結晶片岩　基部に直径２㎜孔	熊１　P－62
5	II	96住	7	剥　片	7.5 × 2.6 × 0.7	輝石片岩　石鏃素材剥片か	熊２　P－70
6	II	115住	8	磨製石鏃	4.6 × 2.3 × 0.3	珪質凝灰岩　孔径0.3cm	熊２　P－81
7	II	115住	9	剥　片	3.8 × 2.5 × 0.4	緑色片岩	熊２　P－81
8	II	115住	10	剥　片	0.5 × 2.2 × 0.3	緑色片岩	熊２　P－81
9	II	115住	11	磨製石鏃	3.7 × 3.1 × 0.2	緑色片岩	熊２　P－81
10	II	171住	12	磨製石鏃	2.9 × 1.7 × 0.3	珪質頁岩　孔径0.2cm	熊２　P－127
11	II	197住	2	剥　片	3.7 × 2.4 × 0.5	珪質凝灰岩	熊２　P－147
12	II	218住	6	剥　片	2.0 × 1.4 × 0.3	珪質凝灰岩	熊２　P－153
13	II	218住	5	未製品	3.2 × 2.3 × 0.5	珪質凝灰岩	熊２　P－153
14	II	238住	6	磨製石鏃	3.6 × 2.2 × 0.2	珪質凝灰岩	熊２　P－173
15	II	238住	7	剥　片	6.2 × 3.2 × 0.5	珪質凝灰岩	熊２　P－173
16	II	240住	26	剥　片	2.3 × 1.3 × 0.2	珪質凝灰岩	熊２　P－178
17	II	240住	27	剥　片	4.9 × 0.9 × 0.6	珪質凝灰岩	熊２　P－178
18	II	240住	28	剥　片	3.0 × 3.1 × 0.3	珪質凝灰岩	熊２　P－178
19	II	４区12住	14	磨製石鏃	3.1 × 1.9 × 0.3	珪質凝灰岩	熊２　P－228
20	II	４区19住	17	平　玉	2.0 × 2.0 × 0.2	珪質凝灰岩	熊２　P－245
21	II	４区19住	18	磨製石鏃	5.2 × 2.0 × 0.3	珪質凝灰岩	熊２　P－245
22	II	４区19住	19	磨製石鏃	4.8 × 3.1 × 0.2	珪質凝灰岩	熊２　P－245
23	II	４区19住	20	剥　片	4.9 × 2.4 × 0.9	珪質凝灰岩	熊２　P－245
24	II	185住		剥　片	1.5 × 1.4 × 0.3		未報告
25	II	185住		剥　片	2.4 × 1.7 × 0.4		未報告
26	II	185住		剥　片	1.8 × 1.6 × 0.3		未報告
27	II	185住		剥　片	1.6 × 2.2 × 0.2		未報告

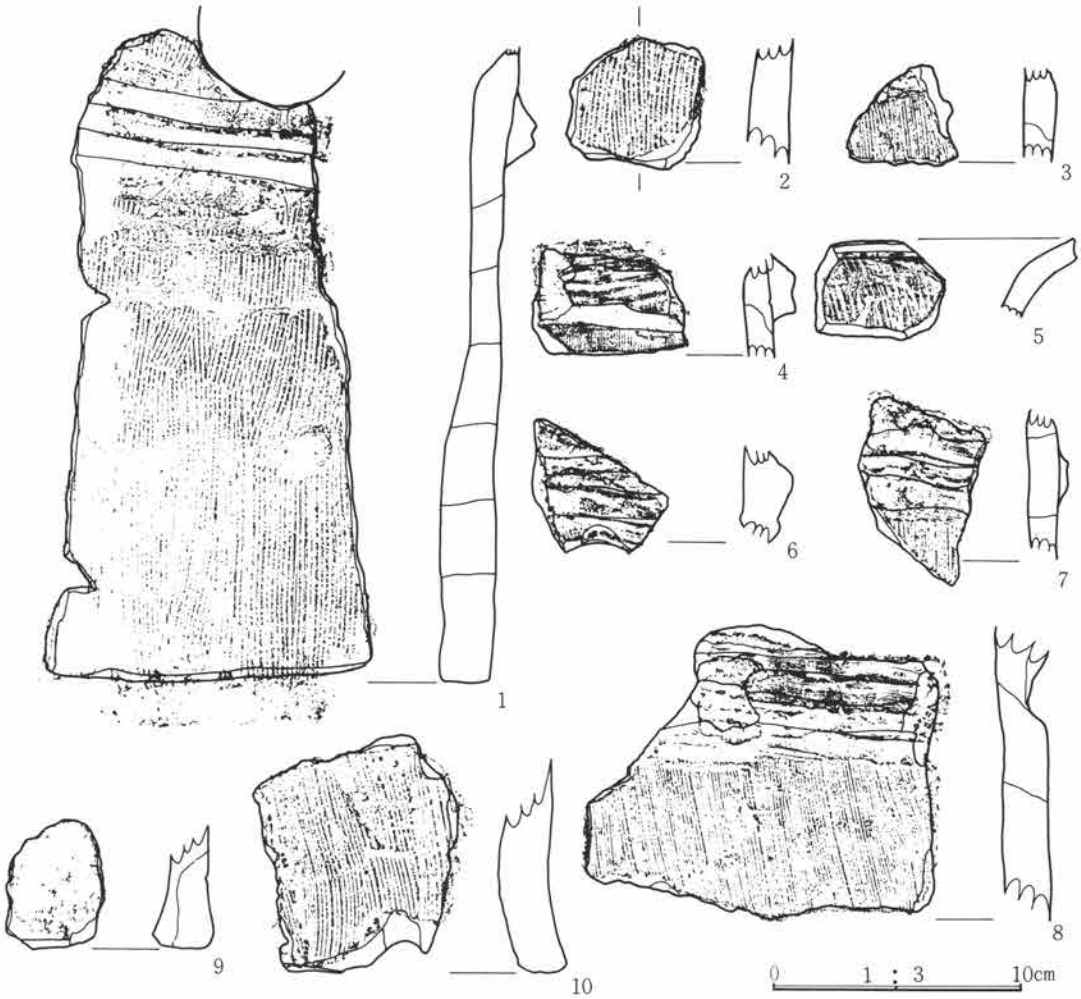
No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
28	II	4区28住	10	磨製石鏃	3.4 × 1.5 × 0.3	蛇紋岩　孔径0.2cm	熊2　P—256
29	II	4区28住	11	磨製石鏃	2.2 × 1.9 × 0.3	珪質準片岩　孔径0.2cm	熊2　P—256

註1　地区名は以下の略称である。Iとしたものは第I地区、IIが第II地区である。
2　法量の単位はセンチメートル（cm）で、実測図から計測した。各計測値は、最大値か形状の特徴を示す箇所のものである。
3　報告書掲載頁は以下のことを示す。
熊1　熊野堂遺跡（1）財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか　1984
熊2　熊野堂遺跡（2）第3分冊　遺物編　　同　上　　1991

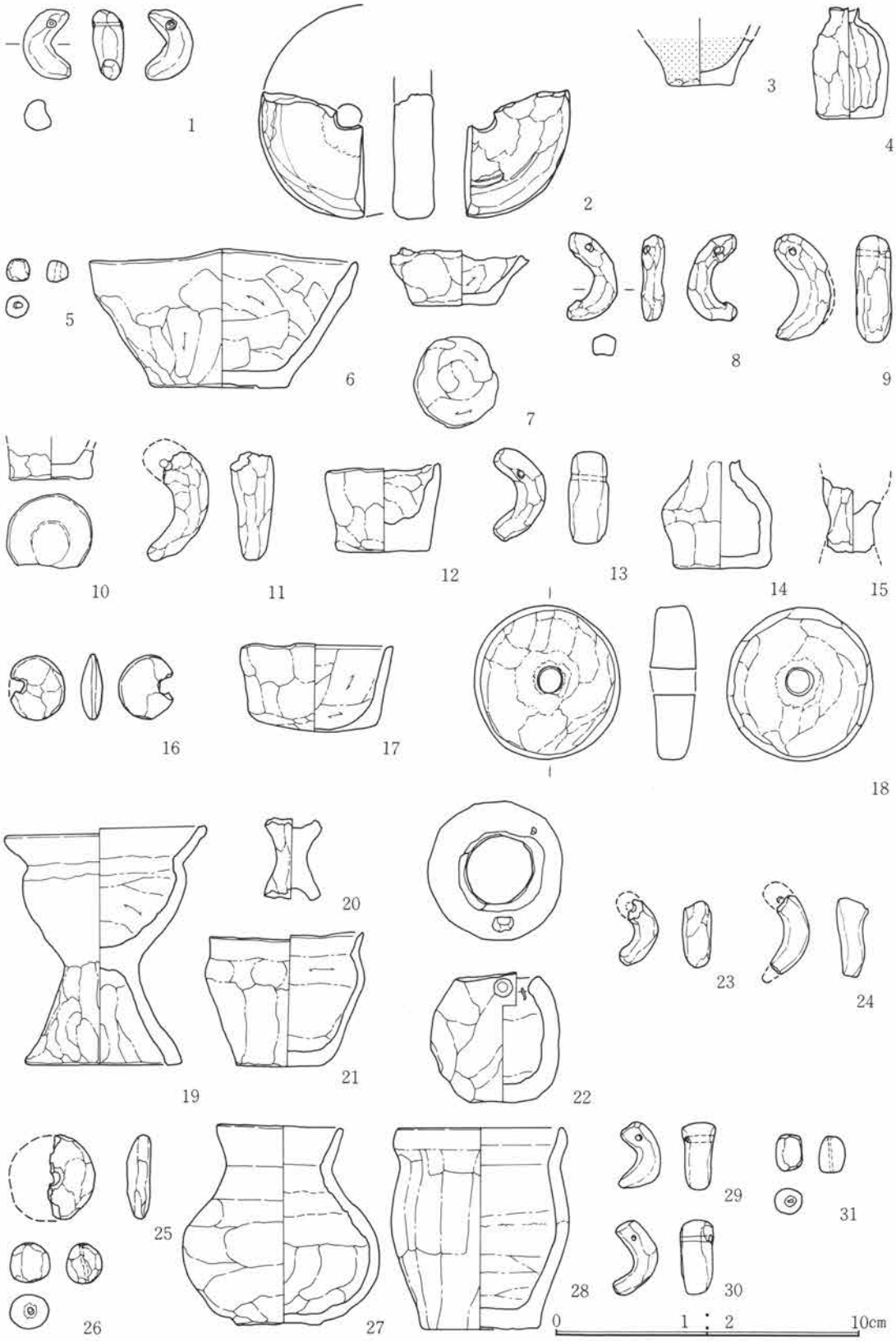
第2表　熊野堂遺跡　埴輪一覧表

法量の単位：cm

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
1	II	4住	3	円　筒	25.7 × 13.2 × 2.4	カマド袖補強材に使用	熊2　P—3
2	II	22住		円　筒	5.2 × 5.4 × 1.9		未報告
3	II	13住		円　筒	4.0 × 4.4 × 1.3		未報告
4	II	13住		円　筒	4.2 × 6.1 × 1.1		未報告
5	II	15住		円　筒	3.9 × 5.1 × 0.9		未報告
6	II	15住		円　筒	5.3 × 5.5 × 2.1		未報告
7	II	22住		円　筒	7.4 × 5.1 × 1.6		未報告
8	II	22住		円　筒	11.6 × 14.1 × 2.2		未報告
9	II	34住		円　筒	5.2 × 4.0 × 2.4		未報告
10	II	2区表採		円　筒	9.4 × 8.2 × 2.0		未報告



第12図　埴輪集成図



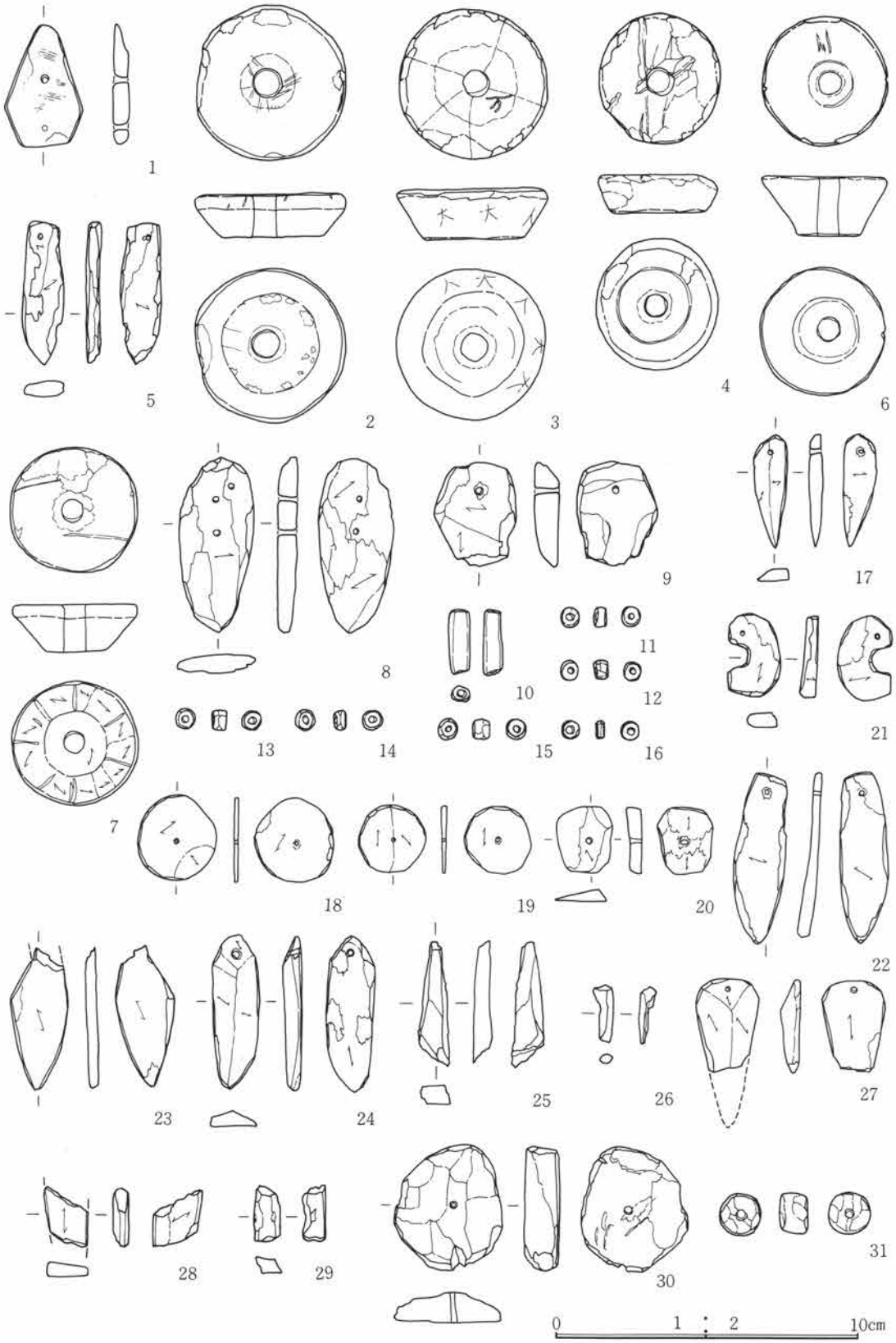
第13図　土製模造品集成図

第３表　熊野堂遺跡　土製模造品一覧表

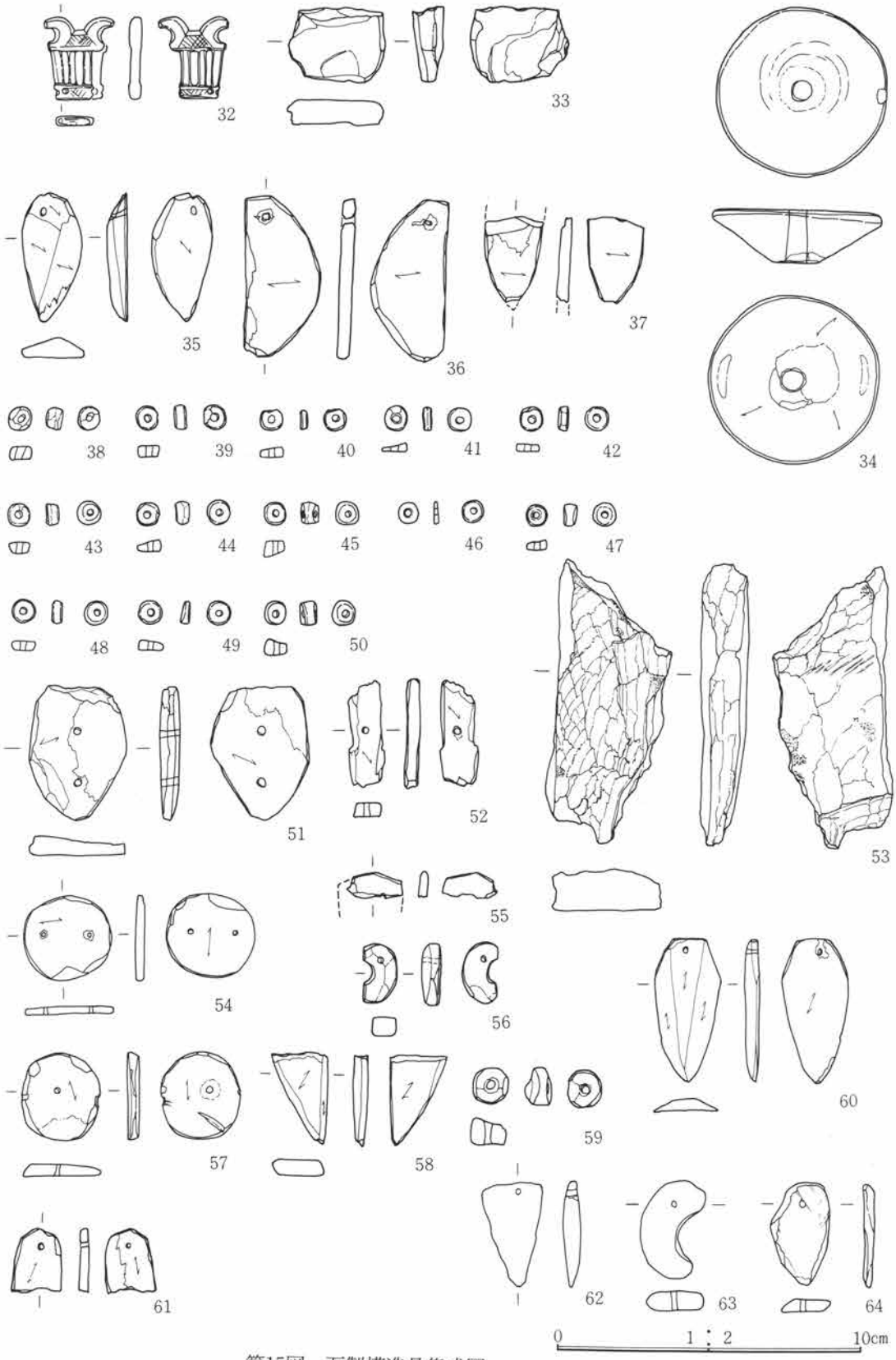
No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
1	I	36住	12	勾　玉	2.6 × 1.1 × 1.0	焼成良好、にぶい橙色	熊１　P－31
2	II	66住	6	紡錘車	(6.0)×(6.0)× 1.3	高台付椀の底部使用	熊２　P－41
3	II	164住	3	手づくね	(2.3)× 3.2	内外面赤色塗彩	熊２　P－117
4	II	172住	1	手づくね	1.2 × 3.6 × 2.3		熊２　P－127
5	II	178住	2	土　玉	0.7 × 0.7 × 0.6	孔径0.29	熊２　P－129
6	II	185住	13	手づくね	8.7 × 4.5 × 4.5		熊２　P－139
7	II	185住	14	手づくね	4.6 × 1.9 × 2.9	赤褐色	熊２　P－139
8	II	185住	15	勾　玉	2.8 × 0.8 × 0.7		熊２　P－139
9	II	197住	1	勾　玉	3.4 × 1.2 × 1.2		熊２　P－146
10	II	208住	1	手づくね	2.6 × 1.1 × 1.7		熊２　P－147
11	II	215住	5	勾　玉	(3.6)× 1.3 × 1.4		熊２　P－153
12	II	218住	4	手づくね	3.8 × 2.9 × 3.1		熊２　P－153
13	II	240住	25	勾　玉	3.0 × 0.9 × 1.3		熊２　P－178
14	II	３区５住	11	手づくね	(1.6)×(3.5)× 3.2		熊２　P－206
15	II	３区５住	12	手づくね	(2.4)×(2.5)－		熊２　P－206
16	II	４区２住	8	土　玉	2.1 ×(1.9)× 0.7	橙色	熊２　P－216
17	II	４区５住	2	手づくね	5.0 × 2.9 × 4.3		熊２　P－218
18	II	４区18住	12	紡錘車	5.0 × 4.8 × 1.4	孔径0.81×0.75	熊２　P－242
19	II	４区19住	14	手づくね	6.6 × 7.7 × 5.1		熊２　P－245
20	II	４区19住	15	手づくね	(2.7)		熊２　P－245
21	II	４区19住	16	手づくね	5.1 × 4.3 × 3.1		熊２　P－245
22	II	４区25住	3	手づくね	3.0 × 4.2 × 2.3		熊２　P－250
23	II	４区27住	3	勾　玉	(2.2)× 0.8 × 0.9		熊２　P－254
24	II	４溝	4	勾　玉	(2.5)× 1.0 × 0.9		熊２　P－268
25	II	33溝	1	紡錘車	2.8 × 1.6 × 0.8	孔径0.3	熊２　P－271
26	II	３区３溝	10	土　玉	1.3 × 1.2 × 1.1	孔径0.2	熊２　P－273
27	II	４区１方周	31	手づくね	4.2 × 6.5 × 2.7		熊２　P－291

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
28	II	4区1方周	32	手づくね	5.4 × 6.6 × 3.9	丹彩が一部残る	熊2　P－291
29	II	4区1方周	34	勾　玉	2.1 × 0.8 × 0.9		熊2　P－291
30	II	4区1方周	35	勾　玉	2.4 × 0.8 × 1.0		熊2　P－291
31	II	遺構外	104	土　玉	1.2 × 0.9 × 0.9	孔径0.18	熊2　P－306

註1　地区名は以下の略称である。Iとしたものは第I地区、IIが第II地区である。
2　法量の長さ、幅、厚さ、径は、実測図から計測したもので最大値を示す。各々の端数については四捨五入、単位cmである。
3　報告書掲載頁は以下のことを示す。
熊1　熊野堂遺跡（1）財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか　1984
熊2　熊野堂遺跡（2）　第3分冊　遺物編　　同　上　　1991



第14図　石製模造品集成図



第15図　石製模造品集成図

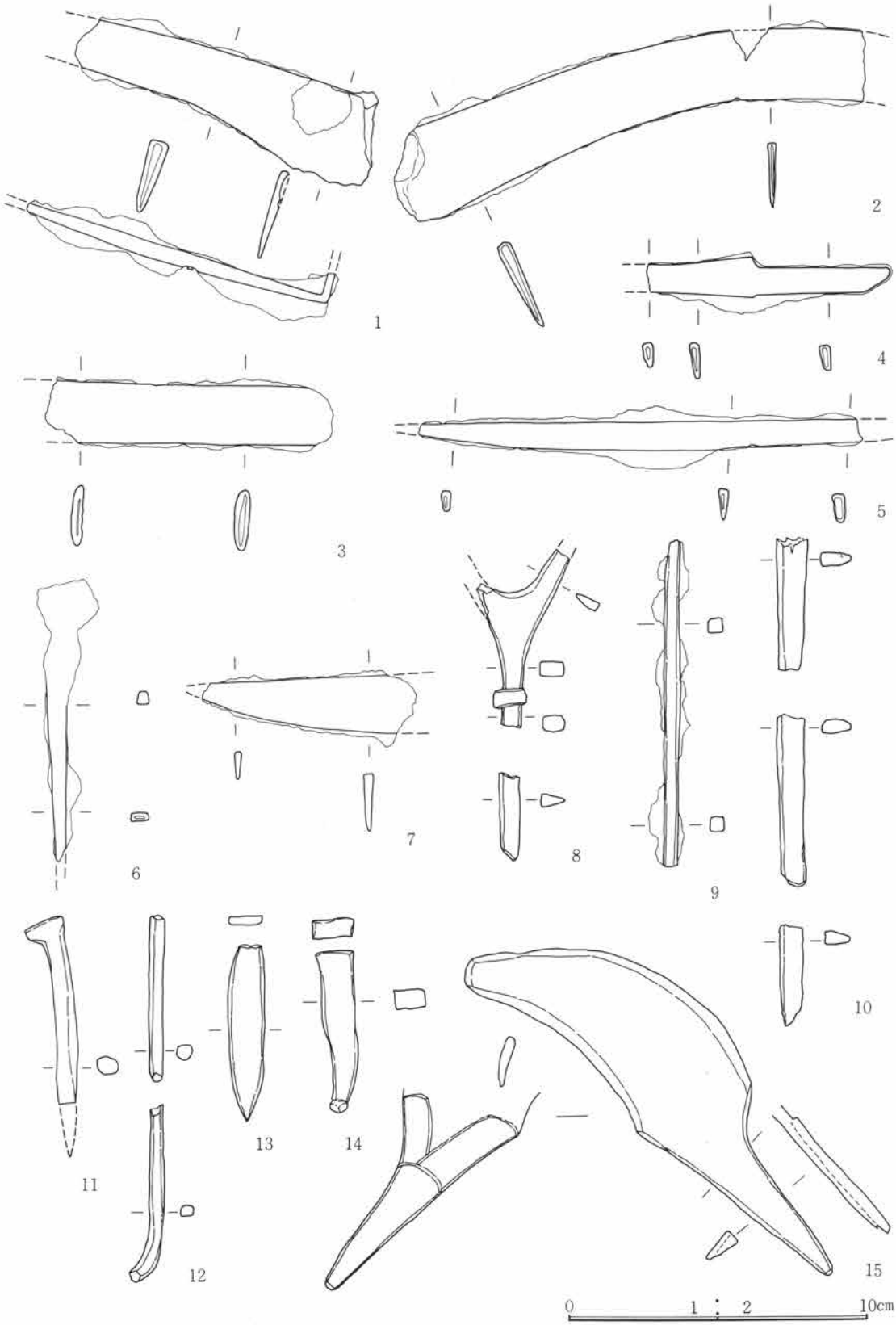
第４表　熊野堂遺跡　滑石製模造品一覧表

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
1	I	１特殊井戸	42	剣　形	3.8 × 2.4 × 0.4	中央に直径２㎜の穿孔あり	熊１　P－234
2	II	47住	4	紡錘車	5.0 × 5.0 × 1.3	孔径0.85×0.83　青灰色	熊２　P－29
3	II	81住	10	紡錘車	4.8 × 4.8 × 1.5	青灰色　万、大の線刻あり	熊２　P－59
4	II	81住	11	紡錘車	4.1 × 4.2 × 1.2	青灰色　上の線刻あり	熊２　P－59
5	II	89住	1	剣　形	4.6 × 1.4 × 0.5	孔径0.15、0.12、0.12	熊２　P－66
6	II	145住	16	紡錘車	4.1 × 4.1 × 1.8	孔径0.72×0.72　淡青灰色	熊２　P－101
7	II	168住	9	紡錘車	4.0 × 4.2 × 1.5	孔径0.72×0.65	熊２　P－122
8	II	168住	10	剣　形	5.7 × 2.5 × 0.6	孔径0.19、0.22、0.22	熊２　P－122
9	II	168住	11	勾　玉	3.4 × 2.7 × 0.9	孔径0.22	熊２　P－122
10	II	168住	12	管　玉	2.1 × 0.7 × 0.6	孔径0.3　紐づれ痕	熊２　P－122
11	II	168住	13	臼　玉	0.7 × 0.6 × 0.4	孔径0.25×0.2　紐づれ痕	熊２　P－122
12	II	168住	14	臼　玉	0.6 × 0.6 × 0.5	孔径0.22×0.2	熊２　P－122
13	II	168住	15	臼　玉	0.7 × 0.7 × 0.5	孔径0.25	熊２　P－122
14	II	168住	16	臼　玉	0.7 × 0.7 × 0.4	孔径0.2×0.27	熊２　P－122
15	II	168住	17	臼　玉	0.7 × 0.7 × 0.6	孔径0.22×0.22	熊２　P－122
16	II	168住	18	臼　玉	0.6 × 0.6 × 0.3	孔径0.28×0.25	熊２　P－122
17	II	181住	17	剣　形	3.7 × 1.2 × 0.4	孔径0.15×0.15	熊２　P－134
18	II	185住	16	有孔円板	2.8 × 2.6 × 0.2	孔径0.15×0.15	熊２　P－139
19	II	185住	17	有孔円板	2.3 × 2.2 × 0.2	孔径0.1×0.15	熊２　P－139
20	II	185住	18	有孔円板	2.2 × 1.9 × 0.5	孔径0.2×0.22	熊２　P－139
21	II	188住	4	勾　玉	2.7 × 1.8 × 0.6	孔径0.12×0.15　未貫通	熊２　P－141
22	II	200住	1	剣　形	5.6 × 1.7 × 0.9	孔径0.15×0.15	熊２　P－147
23	II	214住	3	剣　形	4.6 × 1.9 × 0.4		熊２　P－151
24	II	219住	7	剣　形	0.5 × 1.6 × 0.6	孔径0.2×0.18	熊２　P－155
25	II	219住	8	剝　片	4.0 × 1.0 × 0.6		熊２　P－155
26	II	219住	9	剝　片	1.9 × 0.7 × 0.3	滑石	熊２　P－155
27	II	231住	6	剣　形	3.0 × 2.1 × 0.7	孔径0.15×0.15	熊２　P－168

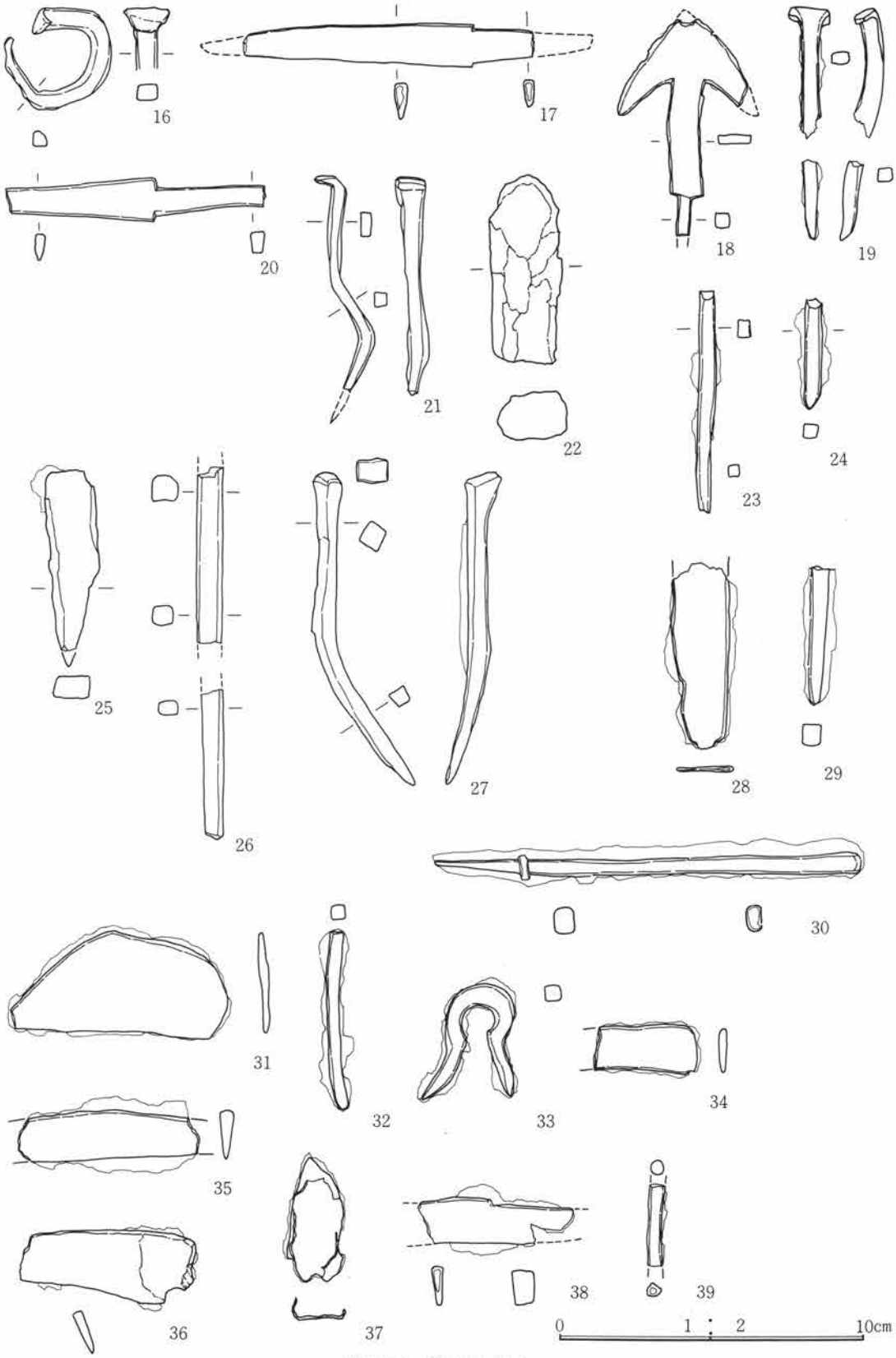
No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
28	II	234住	2	剣　形	1.9 × 1.5 × 0.5		熊2　P—170
29	II	259住		不　明	1.8 × 0.9 × 0.6		未報告
30	II	259住	6	有孔円板	4.1 × 3.5 × 1.2	孔径0.21×0.28	熊2　P—199
31	II	259住	7	臼　玉	1.4 × 1.5 × 1.0	孔径0.3×0.3	熊2　P—199
32	II	3区8住	2	琴柱状	2.7 × 2.3 × 0.4	灰緑色	熊2　P—208
33	II	3区8住	3	不　明	2.4 × 3.1 × 1.1	勾玉か	熊2　P—208
34	II	4区2住	7	紡錘車	5.4 × 5.5 × 1.5	孔径0.6×0.63　暗灰色	熊2　P—216
35	II	4区10住	5	剣　形	4.5 × 2.0 × 0.7	孔径0.18×0.18	熊2　P—224
36	II	4区11住	11	勾　玉	5.2 × 2.5 × 0.5	孔径0.22×0.25　銀灰色	熊2　P—226
37	II	4区11住	12	剣　形	2.8 × 2.0× 0.5	灰緑色	熊2　P—226
38	II	4区14住	42	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.6	孔径0.25×0.2	熊2　P—239
39	II	4区14住	43	臼　玉	0.8 × 0.7 × 0.4	孔径0.21×0.28	熊2　P—239
40	II	4区14住	44	臼　玉	0.7 × 0.8 × 0.3	孔径0.2×0.25	熊2　P—239
41	II	4区14住	45	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.4	孔径0.28×0.29	熊2　P—239
42	II	4区14住	46	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.3	孔径0.25×0.28	熊2　P—239
43	II	4区14住	47	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.5	孔径0.25×0.22	熊2　P—239
44	II	4区14住	48	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.5	孔径0.25×0.21	熊2　P—239
45	II	4区14住	49	臼　玉	0.8 × 0.7 × 0.6	孔径0.21×0.2	熊2　P—239
46	II	4区14住	50	臼　玉	0.8 × 0.7 × 0.2	孔径0.22×0.22	熊2　P—239
47	II	4区14住	51	臼　玉	0.7 × 0.7 × 0.5	孔径0.22×0.22	熊2　P—239
48	II	4区14住	52	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.4	孔径0.25×0.22	熊2　P—239
49	II	4区14住	53	臼　玉	0.8 × 0.8 × 0.4	孔径0.22×0.22	熊2　P—239
50	II	4区14住	54	臼　玉	0.8 × 0.7 × 0.6	灰白色	熊2　P—239
51	II	4区14住	55	剣　形	4.3 × 3.2 × 0.7	孔径0.25	熊2　P—239
52	II	4区14住	56	勾　玉	3.5 × 1.3 × 0.5	孔径0.22	熊2　P—239
53	II	4区26住	17	滑石原石	13.5 × 5.3 × 2.3	長さ、厚さを調整してある	熊2　P—254
54	II	4区26住	18	有孔円板	2.7 × 2.9 × 0.3	孔径0.13、0.15	熊2　P—254
55	II	4区28住	12	剣　形	0.9 × 1.9 × 0.3	灰緑色	熊2　P—256

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
56	II	４区28住	13	勾　玉	2.0 × 1.1 × 0.6	孔径0.2×0.2	熊２　P－256
57	II	70土坑	2	有孔円板	2.9 × 2.6 × 0.4	孔径0.2×0.22	熊２　P－277
58	II	149土坑	1	剣　形	3.0 × 1.9 × 0.5		熊２　P－280
59	II	205土坑	5	臼　玉	1.2 × 1.2 × 1.9	孔径0.28×0.3	熊２　P－280
60	II	４区１方周	33	勾　玉	4.7 × 2.2 × 0.5	孔径0.18×0.17	熊２　P－191
61	II	遺構外	105	勾　玉	2.1 × 1.7 × 0.4	孔径0.2×0.18	熊２　P－306
62	III	19住	5	剣　形	3.4 × 2.0 × 1.1	片面穿孔１	熊３　P－43
63	III	19住	6	勾　玉	3.2 × 1.9 × 0.7	上位に片面穿孔１	熊３　P－43
64	III	遺構外	105	剣　形	3.3 × 2.0 × 0.4	基部に径２㎜の小孔あり	熊３　P－104

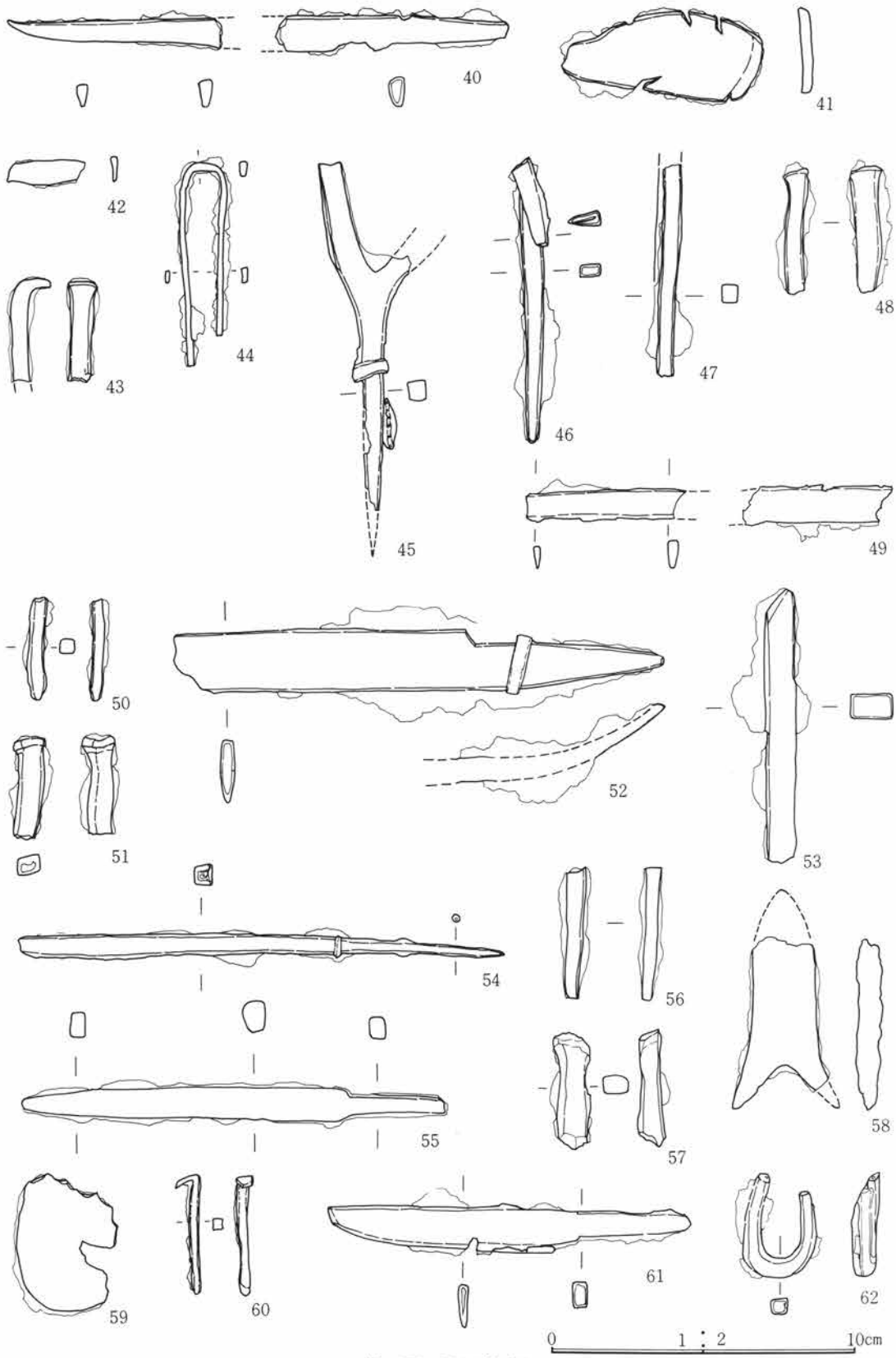
註１　地区名は以下の略称である。Ｉとしたものは第Ｉ地区、IIが第II地区、IIIが第III地区である。
　２　法量の長さ、幅、厚さは、実測図から計測したもので最大値を示す。各々の端数については四捨五入、単位㎝である。
　３　報告書掲載頁は以下のことを示す。
　　熊１　熊野堂遺跡（１）財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか　1984
　　熊２　熊野堂遺跡（２）第３分冊　遺物編　　同　上　　1991
　　熊３　熊野堂遺跡　第III地区・雨壺遺跡　　同　上　　1984



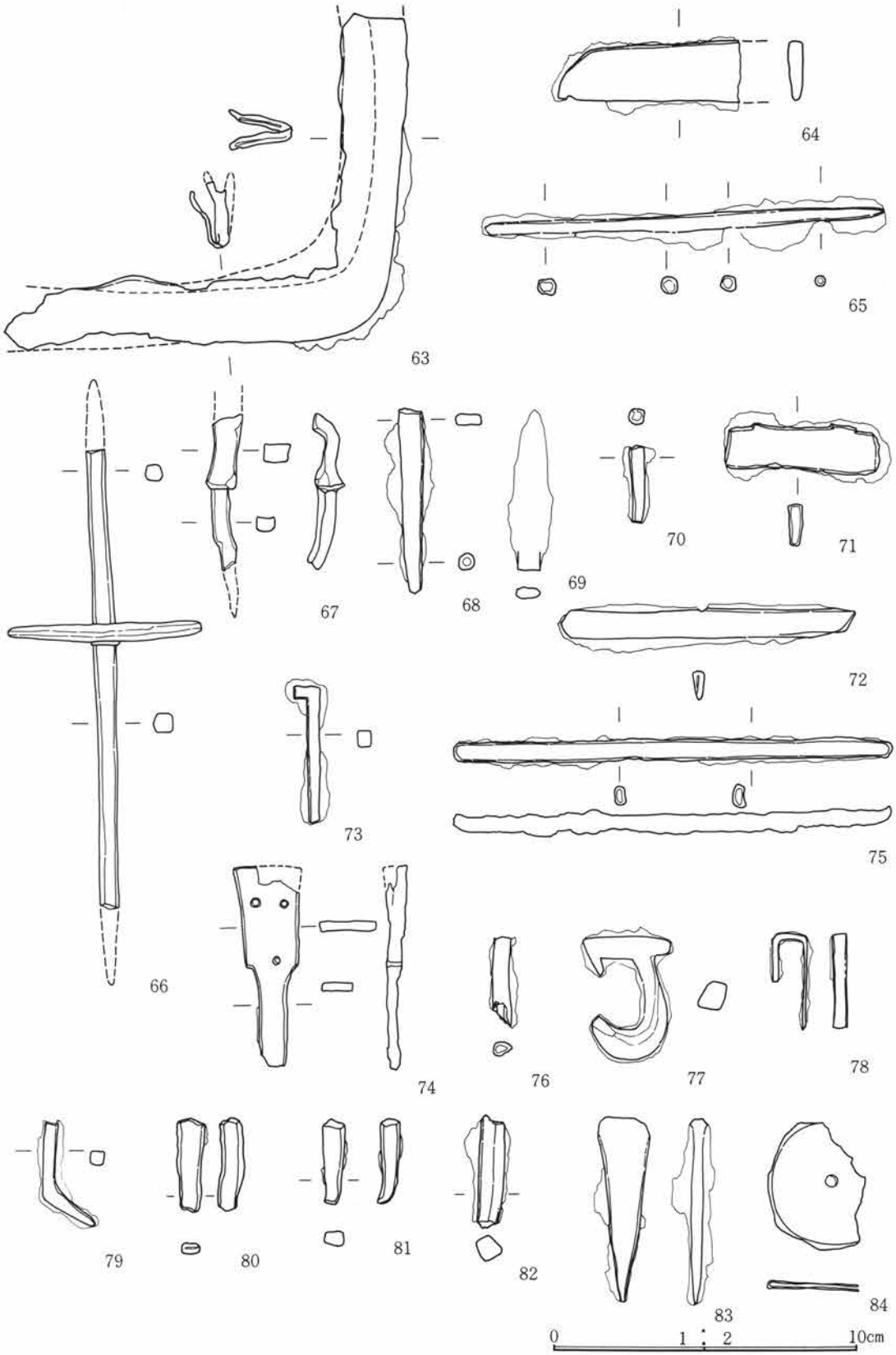
第16図　鉄器集成図


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
1
2
10cm

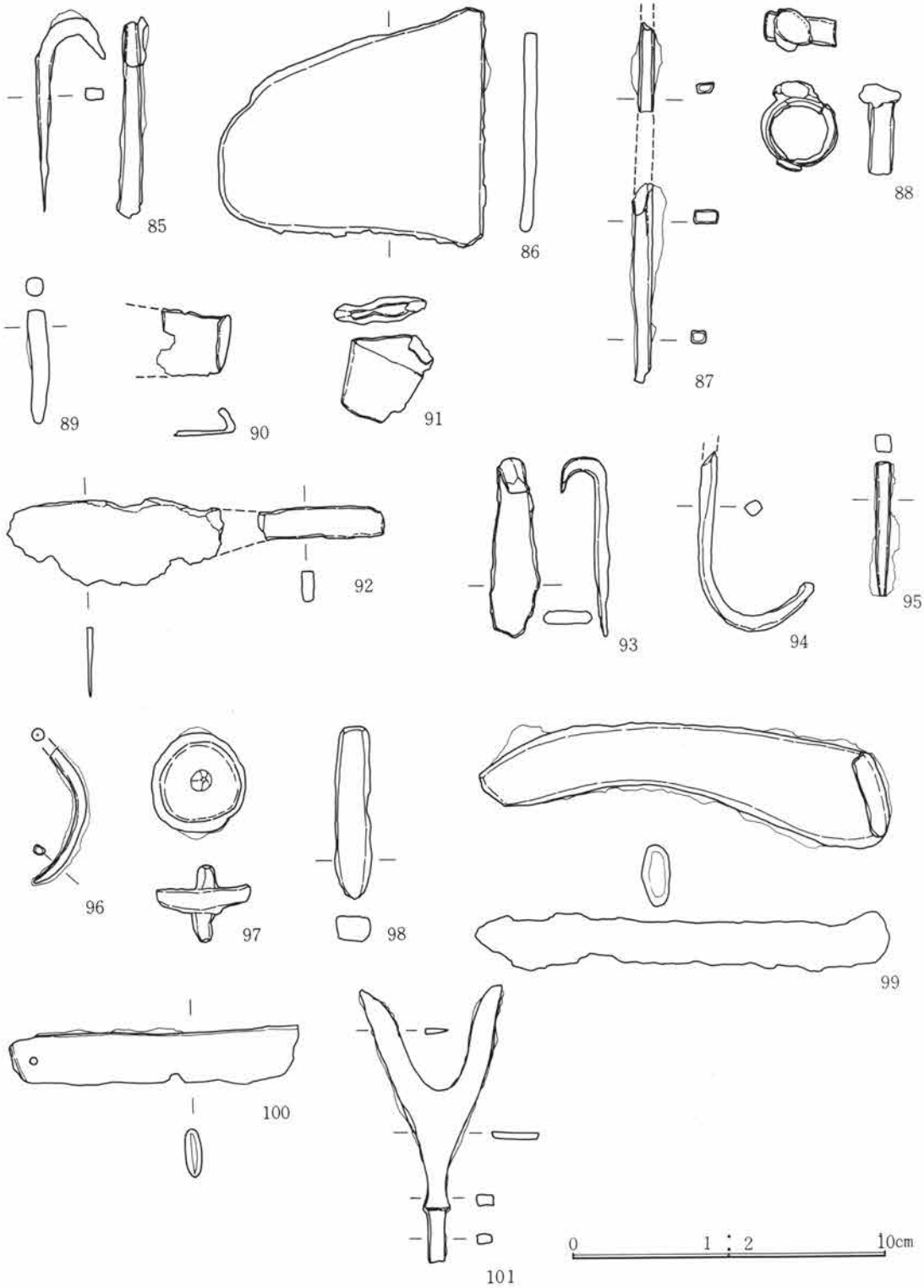
第17図　鉄器集成図


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0
1 : 2
10cm

第18図　鉄器集成図


63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
0
1 : 2
10cm

第19図　鉄器集成図



第20図　鉄器集成図

第５表　熊野堂遺跡　鉄製品一覧表

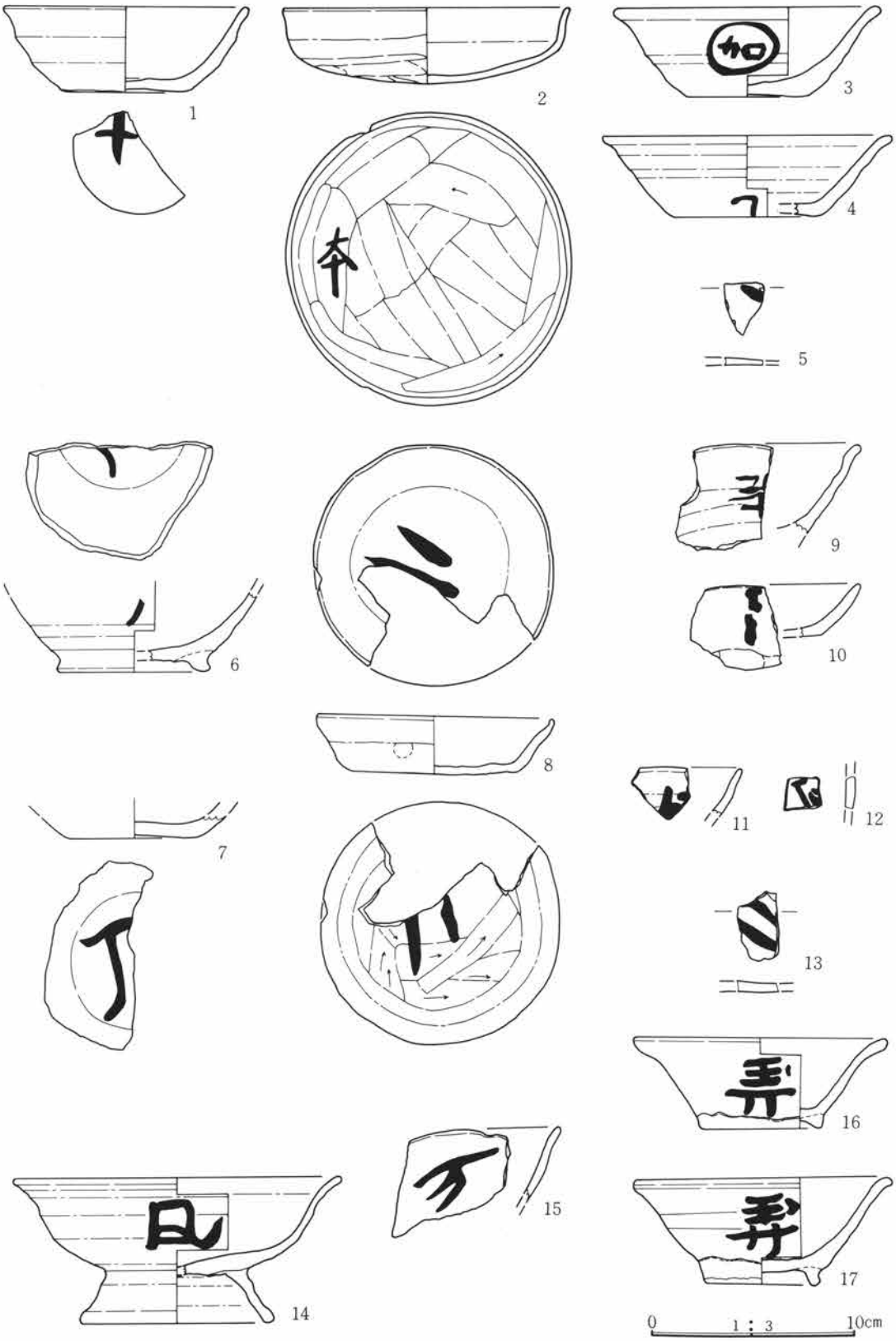
No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
1	I	27住	4	鎌	10.8 × 3.3 × 1.6		熊１　P－110
2	I	31住	16	鎌	16.3 × 3.3 × 1.9		熊１　P－116
3	I	32住	16	不　明	9.5 × 2.2 × 1.0		熊１　P－120
4	I	64住	8	刀　子	8.2 × 2.0 × 0.8		熊１　P－154
5	I	64住	9	刀　子	14.9 × 1.9 × 1.5		熊１　P－154
6	I	68住	8	釘	9.3 × 2.0 × 1.8		熊１　P－164
7	I	道路状遺構	13	刀　子	7.0 × 2.5 × 0.5		熊１　P－207
8	II	２住	2	鉄　鏃	(8.7)× 3.1 × 0.6		熊２　P－３
9	II	８・９住	9	釘	10.7 × 5.5 × 5.0		熊２　P－９
10	II	８・９住	10	刀　子	(13.2)× 0.9 × 0.5		熊２　P－９
11	II	19住	1	釘	6.1 × 0.7 × 0.7	頭1.7×1.5	熊２　P－16
12	II	21住	3	丸　棒	(11.1)× 0.5× 0.5	紡錘車の軸部の可能性あり	熊２　P－18
13	II	25住	3	鉄　鏃	5.8 × 1.3 × 0.2		熊２　P－21
14	II	25住	4	釘	5.3 × 1.1 × 0.6		熊２　P－21
15	II	26住	5	鎌	15.8 × 4.5 × 0.4	刃長7.9、茎長7.9	熊２　P－21
16	II	27住	2	釘	7.5 × 0.7 × 0.5		熊２　P－21
17	II	29住	2	刀　子	9.5 × 1.3 × 0.4	刃長7.5、茎長2.0	熊２　P－23
18	II	49住	5	鉄　鏃	7.0 × 4.3 × 0.5	刃幅4.3、茎長4.9	熊２　P－31
19	II	49住	6	釘	6.8 × 0.6 × 0.4		熊２　P－31
20	II	51住	4	刀　子	8.4 × 1.5 × 0.4	刃長4.7、茎長3.6	熊２　P－34
21	II	55住	3	釘	7.3 × 0.5 × 0.8		熊２　P－34
22	II	57住	11	鉄　塊	6.1 × 2.3 × 1.5		熊２　P－36
23	II	64住	6	釘	7.2 × 0.5 × 0.6		熊２　P－40
24	II	64住	7	釘	3.5 × 0.6 × 0.5		熊２　P－40
25	II	70住	9	釘	6.5 × 1.2 × 0.7		熊２　P－47
26	II	70住	10	釘	(10.6)× 0.9 × 0.7		熊２　P－47
27	II	73住	5	釘	11.0 × 0.7 × 1.0		熊２　P－49

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
28	II	75住	4	不　明	6.0 × 1.8 × 0.2		熊2　P—52
29	II	75住	5	釘	4.5 × 0.6 × 0.7		熊2　P—52
30	II	75住	6	紡錘車	14.0 × 0.7 × 0.6		熊2　P—52
31	II	83住	3	不　明	7.3 × 3.2 × 0.3		熊2　P—59
32	II	84住	12	釘	5.8 × 0.6 × 0.5		熊2　P—63
33	II	100住	6	留金具	8.0 × 0.5 × 0.5		熊2　P—72
34	II	103住	3	刀　子	3.5 × 1.4 × 0.3		熊2　P—72
35	II	105住	5	刀　子	6.0 × 1.6 × 0.5		熊2　P—74
36	II	127住	4	鎌	5.7 × 1.5 × 0.3		熊2　P—86
37	II	145住	18	不　明	4.2 × 1.8 × 0.1		熊2　P—101
38	II	149住	6	刀　子	5.1 × 1.3 × 0.1		熊2　P—101
39	II	153住	13	釘	2.7 × 0.5 × 0.1		熊2　P—106
40	II	159住	10	刀　子	14.7 × 1.0 × 0.1		熊2　P—111
41	II	159住	11	不　明	6.6 × 2.8 × 0.3		熊2　P—111
42	II	164住	23	不　明	2.6 × 0.8 × 0.2		熊2　P—119
43	II	167住	7	釘	3.3 × 0.7 × 0.7		熊2　P—120
44	II	182住	5	金　具	12.6 × 0.2 × 0.5		熊2　P—134
45	II	188住	5	鉄　鏃	11.3 × 2.8 × 0.6		熊2　P—141
46	II	200住	2	釘	9.2 × 0.7 × 0.1		熊2　P—147
47	II	200住	3	釘	6.8 × 0.6 × 0.6		熊2　P—147
48	II	223住	5	釘	4.3 × 1.1 × 0.5		熊2　P—157
49	II	202住	3	刀　子	(10.1)× 1.0 × 0.3		熊2　P—147
50	II	230住	8	釘	3.3 × 0.5 × 0.5		熊2　P—166
51	II	231住	7	釘	3.3 × 0.8 × 0.2		熊2　P—168
52	II	231住	8	刀　子	16.0 × 2.0 × 0.1		熊2　P—168
53	II	231住	9	釘	8.9 × 1.0 × 0.1		熊2　P—168
54	II	241住	10	鉄　鏃	15.8 × 0.7 × 0.8		熊2　P—182
55	II	241住	11	刀　子	13.8 × 1.0 × 0.5		熊2　P—182

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
56	II	241住	12	釘	4.3 × 0.7 × 0.4		熊２　P－182
57	II	250住	13	釘	3.8 × 0.8 × 0.6		熊２　P－192
58	II	247住	1	鉄　鏃	5.5 × 3.5 × 0.7		熊２　P－186
59	II	256住	9	鉄　滓	4.5 × 0.3 × 0.4		熊２　P－197
60	II	３区３住	3	釘	4.4 × 0.6 × 0.4		熊２　P－204
61	II	３区８住	4	刀　子	11.8 × 1.4 × 0.5	刃長8.2、茎長3.7	熊２　P－208
62	II	３区８住	5	釘	6.5 × 0.5 × 0.1		熊２　P－208
63	II	３区15住	2	鋤　先	19.8 × 2.4 × 1.0		熊２　P－214
64	II	４区16住	4	鎌	6.0 × 2.0 × 0.5		熊２　P－239
65	II	４区21住	2	丸　棒	13.1 × 0.5 × 0.1		熊２　P－247
66	II	４区10住	6	紡錘車の軸	14.8 × 0.8 × 0.6		熊２　P－224
67	II	４区２井	13	釘	5.0 × 0.8 × 0.6		熊２　P－265
68	II	４溝	1	釘	6.0 × 5.2 × 0.4		熊２　P－268
69	II	４溝	2	不　明	5.2 × 1.5 × 0.4		熊２　P－268
70	II	４溝	3	釘	2.5 × 0.6 × 0.5		熊２　P－268
71	II	37溝	2	不　明	5.4 × 1.3 × 0.1		熊２　P－271
72	II	３区３溝	9	刀　子	9.7 × 1.0 × 0.2		熊２　P－273
73	II	３区28溝	1	釘	4.4 × 0.4 × 0.5		熊２　P－274
74	II	175土坑	1	留金具	6.4 × 2.2 × 0.3		熊２　P－280
75	II	189土坑	1	釘	14.3 × 0.7 × 0.4		熊２　P－280
76	II	４区９土坑	1	釘	2.9 × 0.6 × 0.1		熊２　P－283
77	II	ＫＴ－１住	4	釘	5.7 × 1.0 × 0.9		熊２　P－258
78	II	ＫＴ－１住	5	釘	5.2 × 0.5 × 0.5		熊２　P－258
79	II	ＫＴ－１住	6	釘	4.1 × 0.4 × 0.4		熊２　P－258
80	II	ＫＴ－２住	2	釘	3.0 × 0.8 × 0.4		熊２　P－260
81	II	ＫＴ－２住	3	釘	2.8 × 0.7 × 0.5		熊２　P－260
82	II	ＫＴ－２住	4	釘	3.6 × 0.8 × 0.9		熊２　P－260
83	II	ＫＴ－４住	7	不　明	6.0 × 1.7 × 0.4		熊２　P－262

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
84	II	KT-2土坑	1	有孔円盤	4.1 × 3.0 × 0.1		熊2　P−283
85	II	遺構外	117	釘	6.3 × 0.4 × 0.4		熊2　P−309
86	II	遺構外	118	不　明	8.4 × 6.2 × 0.4		熊2　P−309
87	II	遺構外	119	紡錘車	(9.0)× 0.6 × 0.1		熊2　P−309
88	II	遺構外	120	丸金具	2.8 × 2.5 × 0.6		熊2　P−309
89	II	遺構外	121	釘	3.5 × 0.6 × 0.6		熊2　P−309
90	II	遺構外	122	鎌	2.2 × 2.1 × 0.2		熊2　P−309
91	II	遺構外	123	不　明	2.6 × 2.7 × 0.8		熊2　P−309
92	II	遺構外	124	刀子か	10.9 × 2.7 × 1.0		熊2　P−309
93	II	遺構外	125	釘	5.7 × 1.5 × 0.5		熊2　P−309
94	II	遺構外	126	釘	7.9 × 0.5 × 0.5		熊2　P−309
95	II	遺構外	127	釘	4.2 × 0.5 × 0.5		熊2　P−309
96	II	遺構外	128	釘	5.0 × 0.3 × 0.1		熊2　P−309
97	II	遺構外	129	不　明	2.4 × 3.0 × 0.6		熊2　P−309
98	II	遺構外	130	釘	5.4 × 0.8 × 0.8		熊2　P−390
99	II	遺構外	131	鎌	13.2 × 2.0 × 0.2		熊2　P−390
100	II	遺構外	132	不　明	9.2 × 1.6 × 0.2		熊2　P−390
101	III	遺構外	50	鉄　鏃	8.6 × 4.6 × 0.3		熊3　P−108

註1　地区名は以下の略称である。Ⅰは第Ⅰ地区、IIが第II地区、IIIが第III地区を示す。
2　法量の長さ、幅、厚さは、実測図から計測したもので、最大値か器形の特徴を示す箇所のもの、単位cmである。
3　報告書掲載頁は以下のことを示す。
熊1　熊野堂遺跡（1）財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか　1984
熊2　熊野堂遺跡（2）第3分冊　遺物編　同　上　1991
熊3　熊野堂遺跡　第III地区・雨壺遺跡　同　上　1984



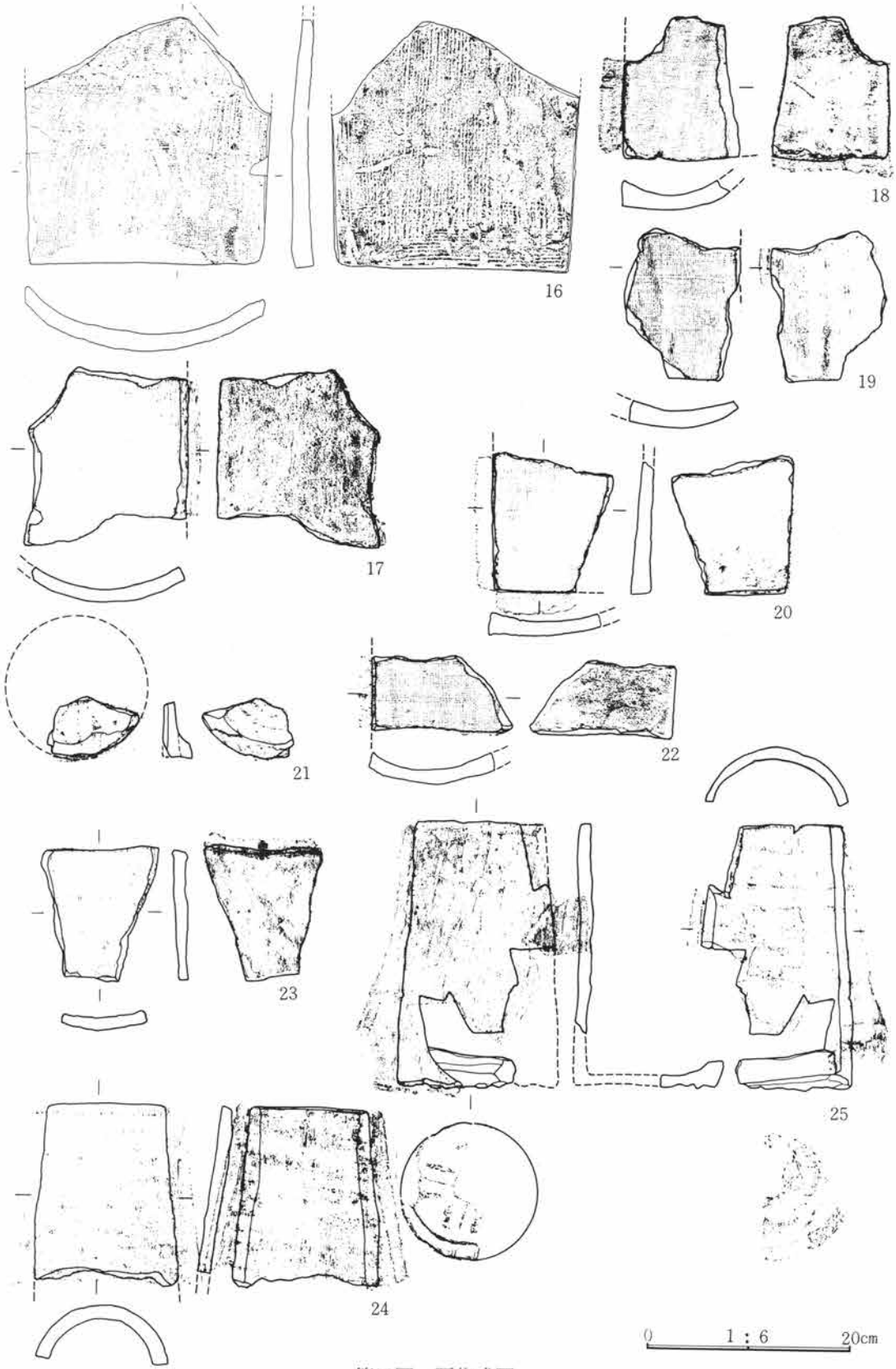
第21図　墨書土器集成図

第6表　熊野堂遺跡　墨書土器一覧表

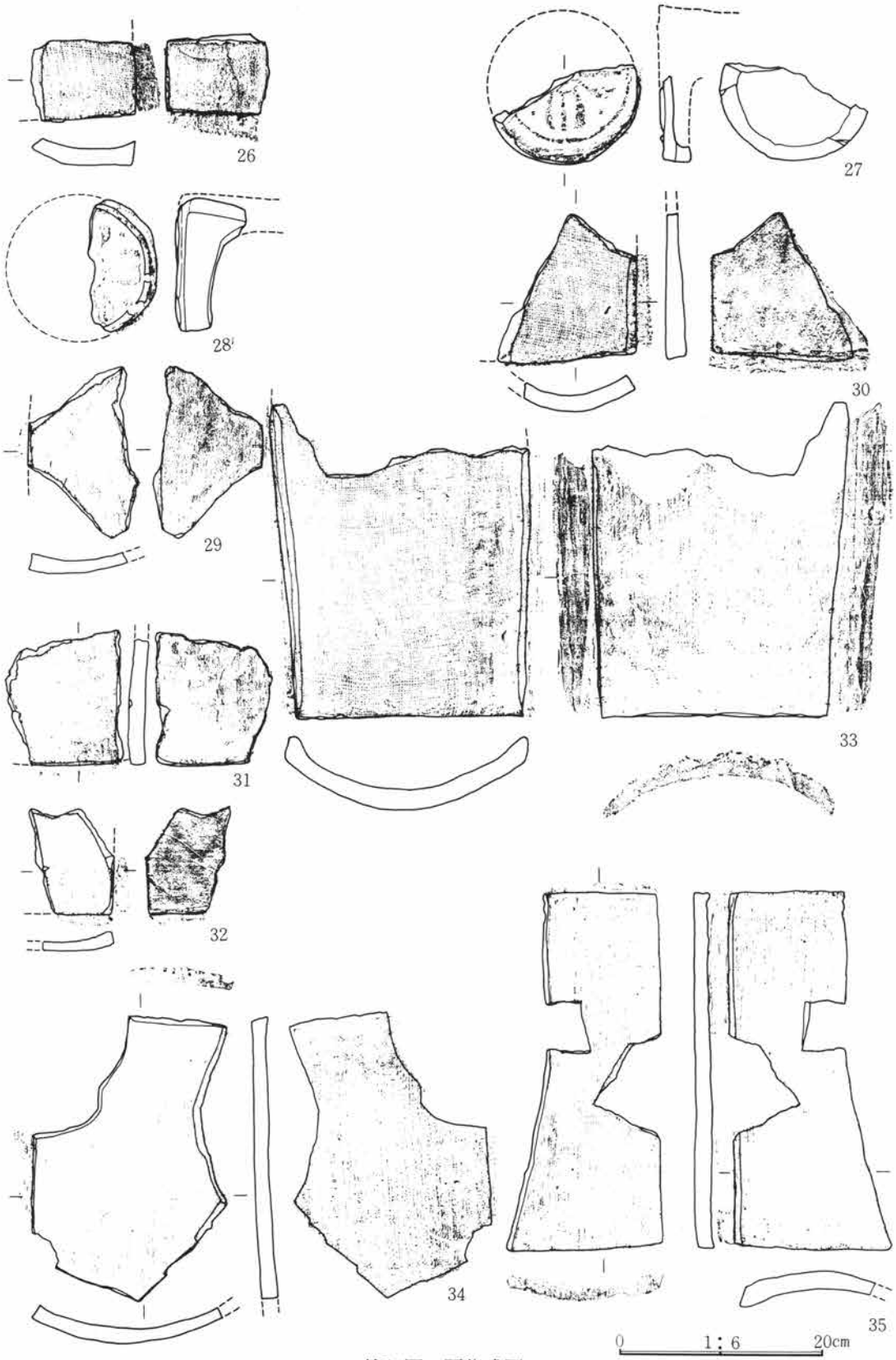
No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	口径×器高×底径	備　考	報告書掲載頁
1	II	5住	1	杯	(11.7)×　4.1 ×(6.5)	底部外面施書　字体不明	熊2　P－7
2	II	11住	1	杯	13.8 ×　3.6 ×	底部外面施書　「本」	熊2　P－14
3	II	17住	1	杯	(12.6)×　4.3 ×(5.8)	体部外面施書　「㊙」	熊2　P－16
4	II	17住	3	杯	(14.0)×　3.9 ×(7.0)	底部外面施書　字体不明	熊2　P－16
5	II	81住	9	杯		底部内面施書　字体不明	熊2　P－59
6	II	84住	4	椀	(3.6)×(7.9)	体部、底部施書　字体不明	熊2　P－62
7	II	91住	3	杯	(1.0)×　6.2	底部外面施書　字体不明	熊2　P－68
8	II	159住	9	杯	11.5 ×　2.8 ×　8.0	底部内外面施書　字体不明	熊2　P－111
9	II	168住	7	椀		体部外面施書　字体不明	熊2　P－122
10	II	168住	8	皿	2.5 ×	体部外面施書　字体不明	熊2　P－122
11	II	182住	4	椀		体部外面施書　字体不明	熊2　P－134
12	II	183住	2	椀		底部内面施書　字体不明	熊2　P－134
13	II	3区15住	1	杯		底部内面施書　字体不明	熊2　P－214
14	II	4区17住	3	椀	(16.0)×　7.0 ×(9.4)	体部外面施書　字体不明	熊2　P－239
15	II	29土坑	1	椀		体部外面施書　「万」	熊2　P－277
16	II	123土坑	1	椀	12.2 ×　4.4 ×　5.9	体部外面施書　「弄」	熊2　P－280
17	II	123土坑	2	椀	12.0 ×　5.1 ×　5.1	体部外面施書　「弄」	熊2　P－280

註1　地区名の略称は、IIが第II地区であることを示す。
　2　法量の口径、器高、底径は、実測図から計測したもので単位はcmである。
　3　報告書掲載頁は以下のことを示す。
　　熊2　熊野堂遺跡（2）第3分冊　遺物編　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか　1991

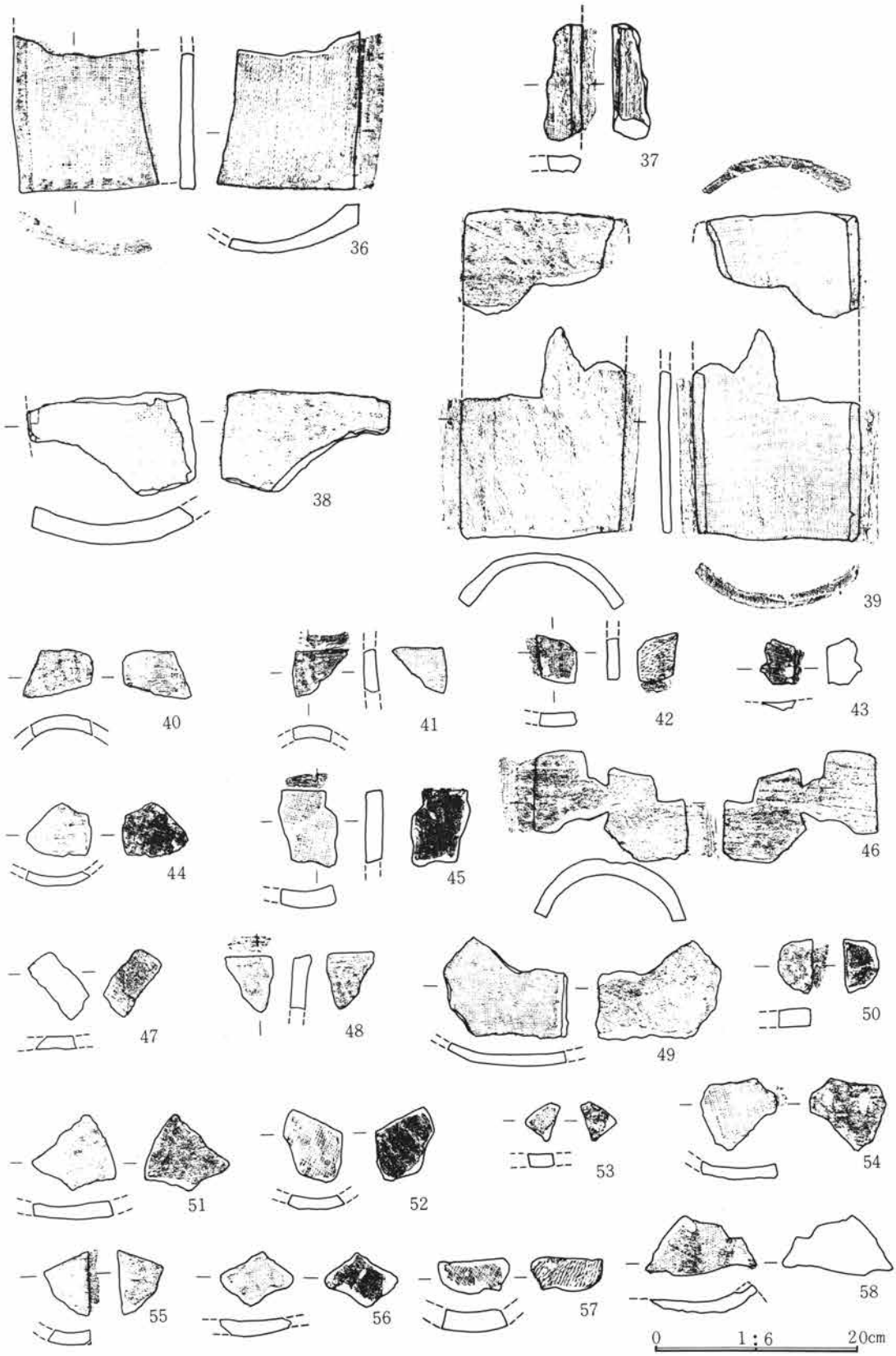
第22図　瓦集成図



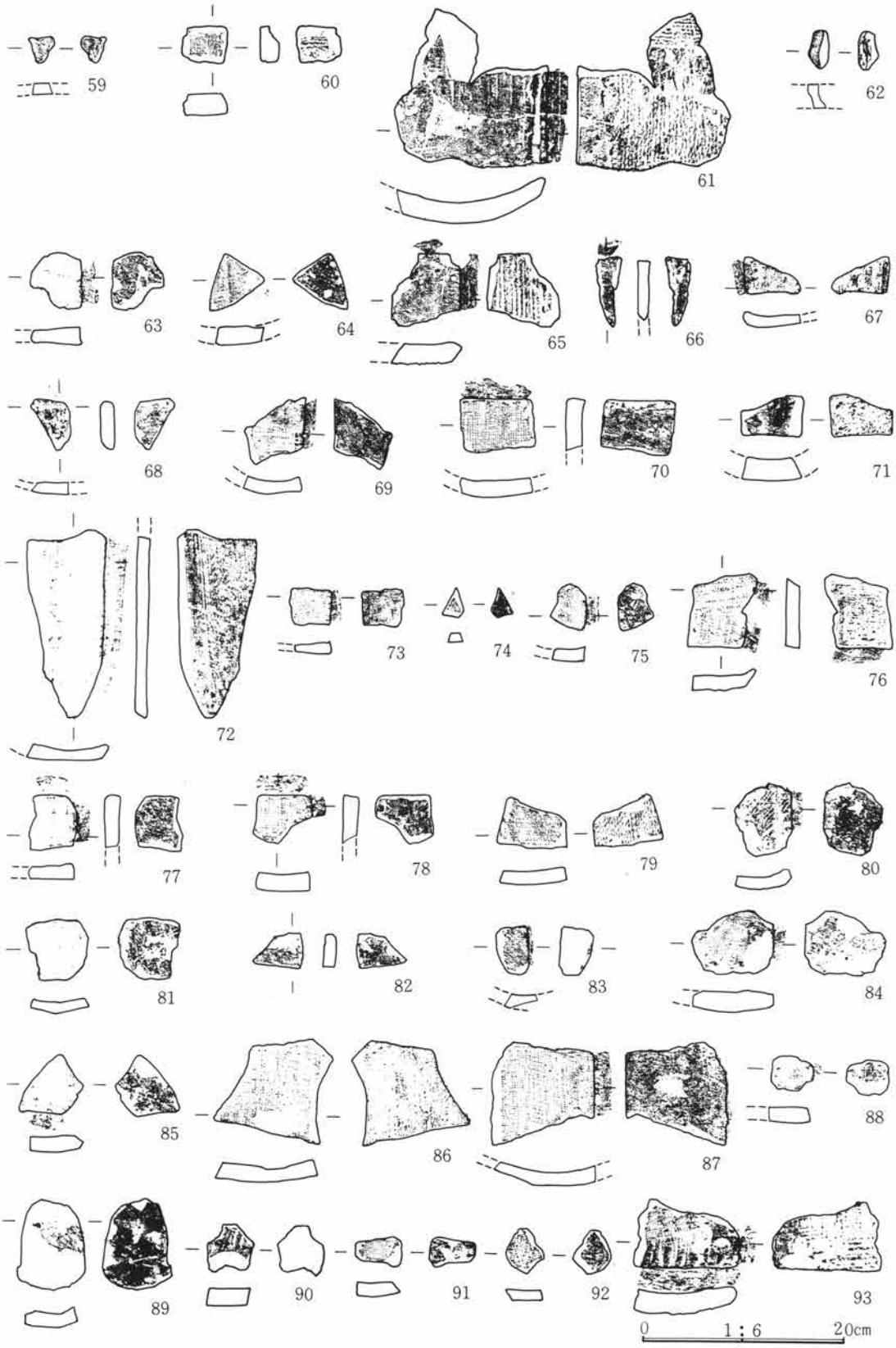
第23図　瓦集成図



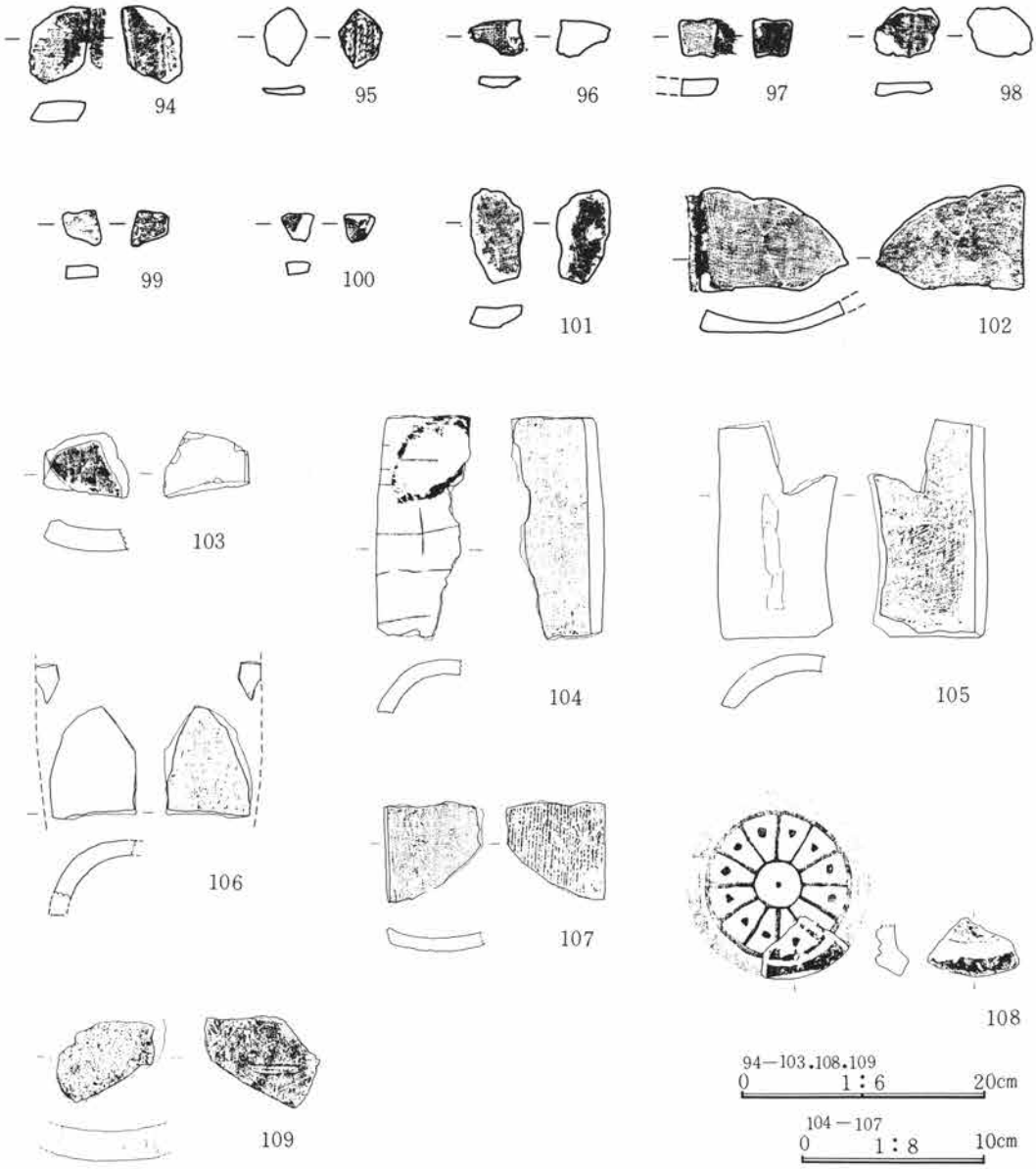
第24図　瓦集成図


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
1:6
20cm

第25図　瓦集成図


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
0
1：6
20cm

第26図　瓦集成図


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
94—103.108.109
0 1:6 20cm
104—107
0 1:8 10cm

第27図　瓦集成図

第７表　熊野堂遺跡　瓦一覧表

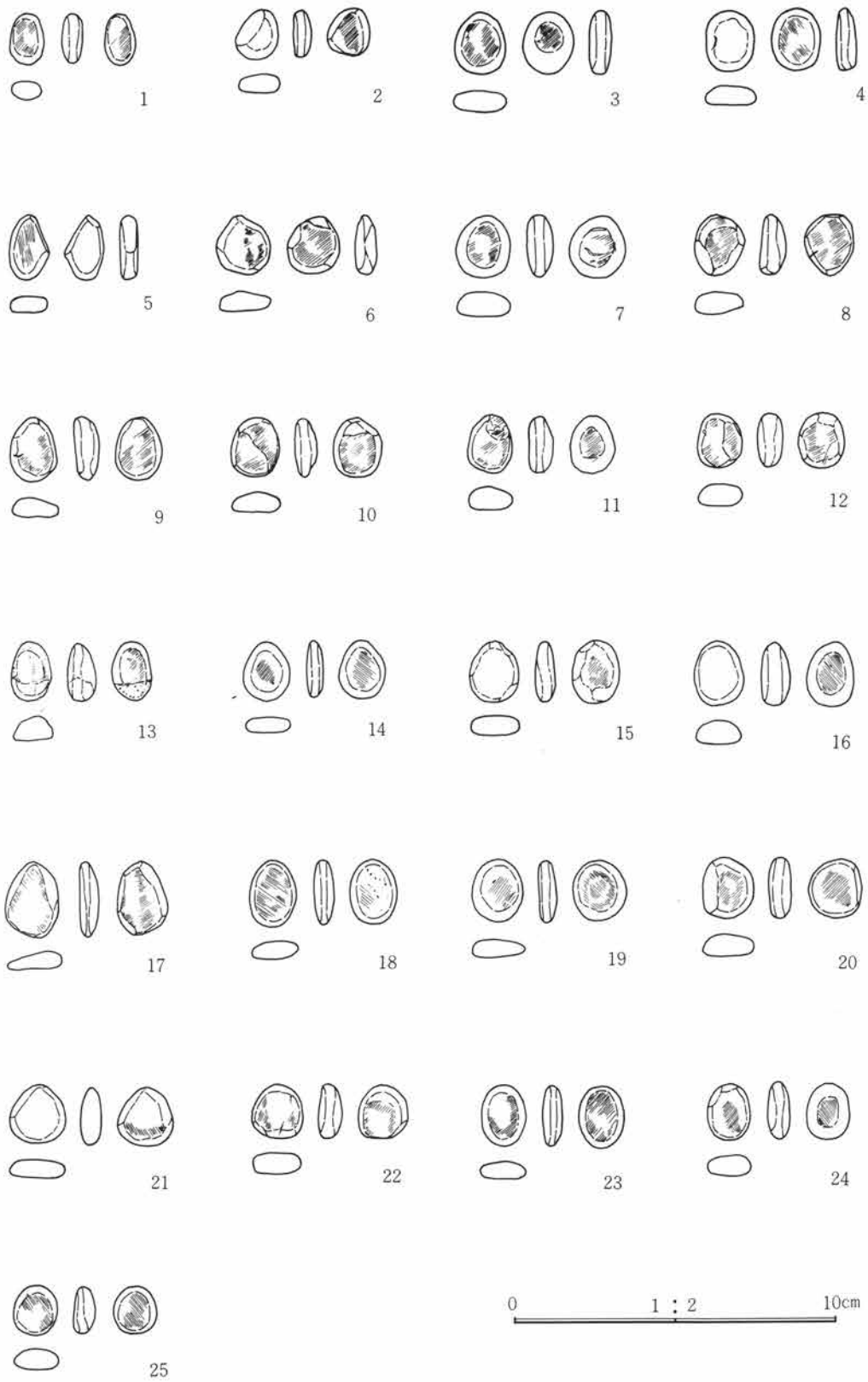
法量の単位：cm

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
1	I	68住	1	軒丸瓦	22.0 × 13.6 × 1.5	瓦当径14.5	熊１　P－163
2	I	68住	2	丸瓦	25.7 × 14.4 × 1.2		熊１　P－164
3	I	68住	3	軒丸瓦	9.6 × 8.3 × 1.4		熊１　P－164
4	I	18溝	5	平瓦	11.3 × 11.0 × 1.8		熊１　P－206
5	I	18溝	6	平瓦	7.2 × 5.5 × 1.5		熊１　P－206
6	I	18溝	7	平瓦	7.9 × 4.9 × 1.8		熊１　P－206
7	I	18溝	8	丸瓦	11.3 × 12.6 × 2.2		熊１　P－207
8	I	21溝	1	平瓦	23.5 × 16.5 × 1.6	側端部幅2.0	熊１　P－216
9	I	21溝	2	平瓦	13.5 × 13.6 × 1.6	側端部幅2.0	熊１　P－216
10	I	11土坑	24	軒丸瓦	16.0 × 9.6 × 1.0		熊１　P－285
11	I	11土坑	25	丸瓦	6.3 × 10.5 × 2.2		熊１　P－285
12	I	11土坑	26	平瓦	12.0 × 11.1 × 1.8		熊１　P－286
13	I	11土坑	27	平瓦	6.0 × 8.7 × 1.9		熊１　P－286
14	I	11土坑	28	平瓦	12.6 × 11.4 × 1.5		熊１　P－286
15	I	11土坑	29	平瓦	8.7 × 7.5 × 1.5		熊１　P－286
16	I	11土坑	30	平瓦	24.0 × 23.2 × 1.5		熊１　P－287
17	II	23住	3	平瓦	17.0 × 16.0 × 1.2		熊２　P－18
18	II	25住	5	平瓦	13.7 × 11.5 × 1.7		熊２　P－29
19	II	40住	1	平瓦	14.5 × 11.3 × 1.8		熊２　P－25
20	II	44住	1	平瓦	13.4 × 11.8 × 1.6		熊２　P－29
21	II	49住	8	軒丸瓦	4.9 × 8.9 × 1.5		熊２　P－31
22	II	49住	9	平瓦	7.2 × 14.0 × 1.3		熊２　P－31
23	II	49住	10	平瓦	13.2 × 11.4 × 1.3		熊２　P－31
24	II	49住	11	丸瓦	17.5 × 14.0 × 1.3		熊２　P－32
25	II	49住	12	軒丸瓦	25.6 × 15.5 × 1.3	幅は推定	熊２　P－32
26	II	52住	1	平瓦	7.7 × 10.1 × 1.4		熊２　P－34
27	II	73住	6	軒丸瓦	9.4 × 14.4 × 1.0		熊２　P－50

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
28	II	73住	7	軒丸瓦	12.6 × 6.7 × 3.5		熊2　P－50
29	II	73住	8	平瓦	16.4 × 10.7 × 1.2		熊2　P－50
30	II	73住	9	平瓦	14.2 × 13.7 × 1.7		熊2　P－50
31	II	73住	10	平瓦	12.7 × 11.3 × 1.5		熊2　P－50
32	II	73住	11	平瓦	10.3 × 8.1 × 1.0		熊2　P－50
33	II	248住	6	平瓦	30.1 × 25.1 × 2.1		熊2　P－188
34	II	248住	7	平瓦	27.3 × 19.1 × 1.5		熊2　P－189
35	II	248住	8	平瓦	34.4 × 15.1 × 1.7		熊2　P－189
36	II	248住	9	平瓦	14.9 × 14.1 × 1.3		熊2　P－190
37	II	248住	10	平瓦	11.2 × 3.7 × 1.5		熊2　P－190
38	II	254住	3	平瓦	9.7 × 16.4 × 2.0		熊2　P－195
39	II	KT－4住	3	丸瓦	(30.7)× 15.9 × 1.1		熊2　P－262
40	II	13住		丸瓦	4.5 × 6.8 × 1.3		未報告
41	II	13住		丸瓦	4.5 × 5.3 × 1.2		未報告
42	II	15住		平瓦	4.6 × 3.9 × 1.3		未報告
43	II	22住		平瓦	4.3 × 3.5 × 0.8		未報告
44	II	31～33住		平瓦	5.2 × 6.4 × 1.0		未報告
45	II	35住		平瓦	7.4 × 5.6 × 1.7		未報告
46	II	49住		平瓦	10.6 × 15.0 × 1.8		未報告
47	II	49住		平瓦	6.5 × 5.8 × 1.3		未報告
48	II	49住		平瓦	5.5 × 4.6 × 1.7		未報告
49	II	49住		平瓦	9.7 × 12.2 × 1.1		未報告
50	II	49住		平瓦	5.2 × 3.4 × 1.8		未報告
51	II	49住		平瓦	7.3 × 8.2 × 1.5		未報告
52	II	49住		平瓦	7.1 × 5.6 × 1.1		未報告
53	II	49住		平瓦	3.6 × 3.3 × 1.3		未報告
54	II	113住		平瓦	6.8 × 7.4 × 1.3		未報告
55	II	113住		平瓦	6.2 × 4.3 × 1.2		未報告

No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	口径×器高×底径	備　考	報告書掲載頁
56	II	115住		平　瓦	5.3 × 7.0 × 1.5		未報告
57	II	115住		平　瓦	3.3 × 7.0 × 2.0		未報告
58	II	129住		平　瓦	5.8 × 10.7 × 1.4		未報告
59	II	130住		平　瓦	2.7 × 2.5 × 1.2		未報告
60	II	145住		平　瓦	3.6 × 4.5 × 2.2		未報告
61	II	224住		平　瓦	15.2 × 15.0 × 2.2		未報告
62	II	224住		平　瓦	3.7 × 2.0 × 2.4		未報告
63	II	3区5住		平　瓦	5.0 × 5.5 × 1.7		未報告
64	II	3区10住		平　瓦	5.4 × 5.3 × 2.0		未報告
65	II	3区15住		平　瓦	7.0 × 6.9 × 2.3		未報告
66	II	3区17住		丸　瓦	6.7 × 2.6 × 1.3		未報告
67	II	4区12住		平　瓦	3.6 × 5.5 × 1.2		未報告
68	II	1号井戸		平　瓦	5.0 × 3.8 × 1.2		未報告
69	II	2号井戸		平　瓦	6.6 × 5.8 × 1.3		未報告
70	II	2号井戸		平　瓦	5.2 × 7.4 × 1.7		未報告
71	II	4号竪穴状		平　瓦	4.1 × 6.0 × 2.2		未報告
72	II	4溝		平　瓦	18.1 × 7.7 × 1.3		未報告
73	II	18溝		平　瓦	3.6 × 4.2 × 1.2		未報告
74	II	3区2溝		平　瓦	2.8 × 2.1 × 0.9		未報告
75	II	3K−22		平　瓦	4.6 × 3.6 × 1.3		未報告
76	II	3K−28		平　瓦	7.0 × 6.6 × 1.4		未報告
77	II	3 P11グリッド		平　瓦	5.4 × 4.6 × 1.6		未報告
78	II	3 P11グリッド		平　瓦	4.7 × 5.7 × 1.9		未報告
79	II	3M−31		平　瓦	5.0 × 6.9 × 1.2		未報告
80	II	3M−31		平　瓦	7.1 × 5.6 × 1.3		未報告
81	II	3M−31		平　瓦	6.0 × 6.1 × 1.1		未報告
82	II	3M−34		平　瓦	3.3 × 4.8 × 1.3		未報告

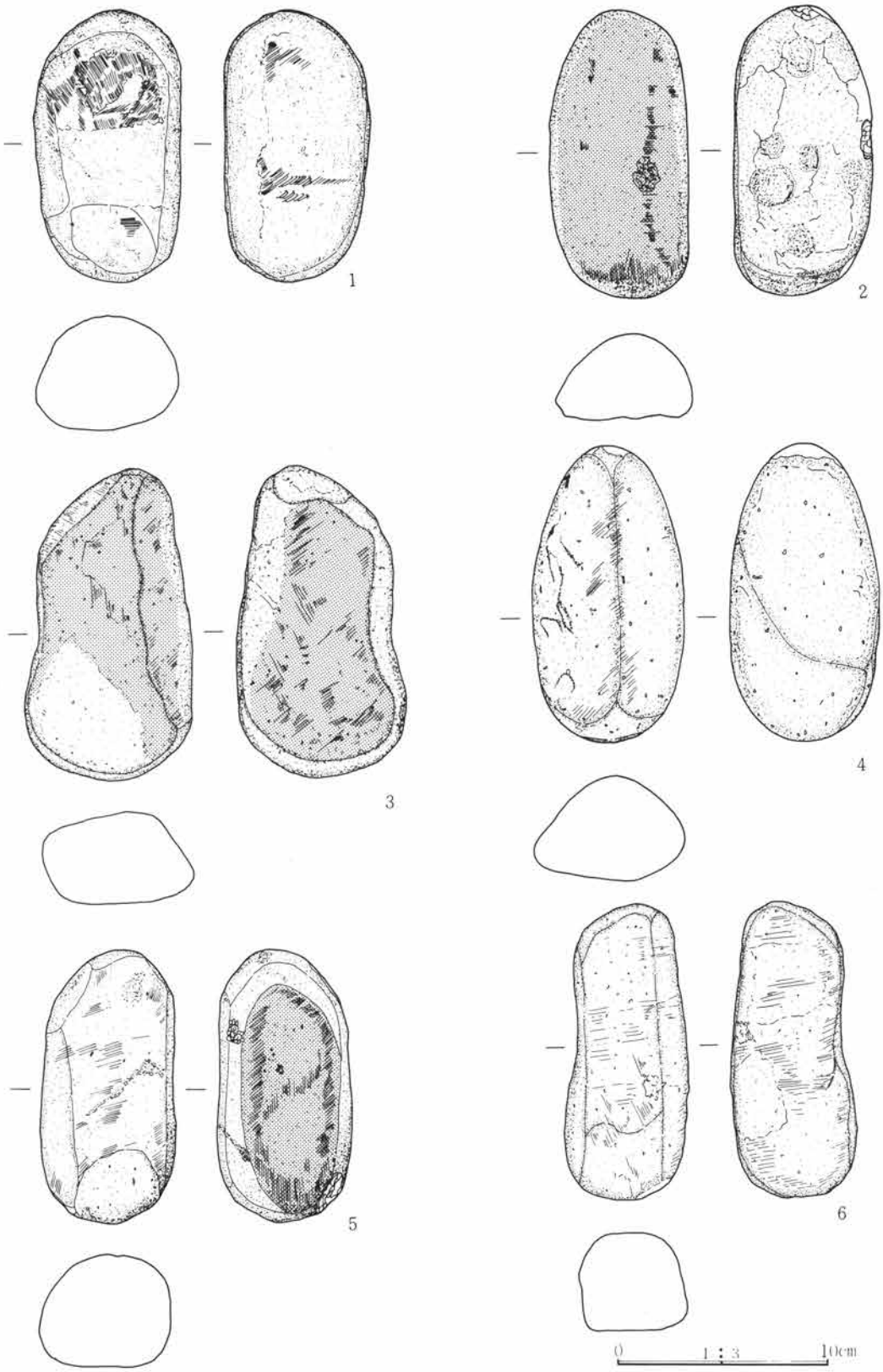
No.	地区名	遺構番号	遺物番号	器　種	長さ×幅・直径×厚さ	備　考	報告書掲載頁
83	II	4 L－06		平　瓦	4.8 × 3.3 × 1.3		未報告
84	II	4 L－08		平　瓦	6.1 × 7.8 × 2.0		未報告
85	II	4 L－30		平　瓦	5.9 × 6.2 × 1.5		未報告
86	II	1区表土		平　瓦	10.1 × 11.6 × 1.6		未報告
87	II	1区表土		平　瓦	10.0 × 10.1 × 1.5		未報告
88	II	1区表土		平　瓦	3.3 × 4.1 × 1.6		未報告
89	II	1区表土		平　瓦	8.8 × 6.7 × 1.5		未報告
90	II	3区表土		平　瓦	4.7 × 4.6 × 1.7		未報告
91	II	3区表土		平　瓦	2.9 × 4.6 × 1.3		未報告
92	II	3区表土		平　瓦	4.4 × 3.7 × 1.0		未報告
93	II	3区表土		平　瓦	6.6 × 10.4 × 2.0		未報告
94	II	3区表土		平　瓦	6.2 × 5.0 × 1.7		未報告
95	II	3区表土		平　瓦	4.7 × 3.5 × 0.8		未報告
96	II	3区表土		平　瓦	2.9 × 4.3 × 0.9		未報告
97	II	表土		平　瓦	3.2 × 3.2 × 1.4		未報告
98	II	3区表土		平　瓦	4.0 × 5.2 × 1.1		未報告
99	II	3区表土		平　瓦	2.9 × 3.1 × 1.1		未報告
100	II	3区表土		平　瓦	2.3 × 2.7 × 1.0		未報告
101	II	4区東拡張		平　瓦	7.5 × 4.3 × 1.9		未報告
102	II	表土		平　瓦	8.2 × 12.2 × 1.6		未報告
103	III	1住	4	平　瓦	5.1 × 7.2 × 1.7		熊3　P－61
104	III	12住	2	丸　瓦	24.4 × 10.4 × 1.7		熊3　P－64
105	III	12住	3	丸　瓦	23.6 × 13.2 × 2.0		熊3　P－64
106	III	12住	4	平　瓦	(16.8)×(10.4)× 1.9		熊3　P－64
107	III	15溝	1	平　瓦	11.0 × 11.0 × 1.4		熊3　P－74
108	III	遺構外	42	軒丸瓦	5.1 × 7.2 × 2.7	推定瓦当径14.0	熊3　P－105
109	III	遺構外	43	平　瓦	7.5 × 9.6 × 2.4		熊3　P－105



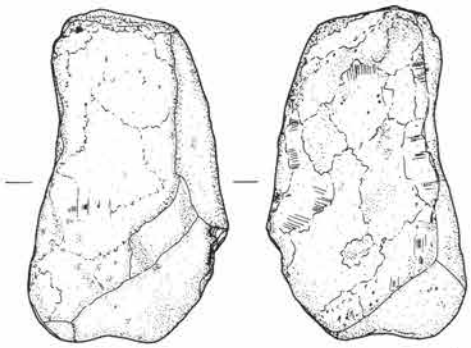
第28図　碁石集成図

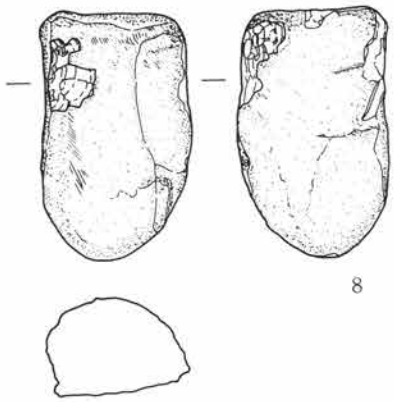
第8表　熊野堂遺跡　碁石一覧表

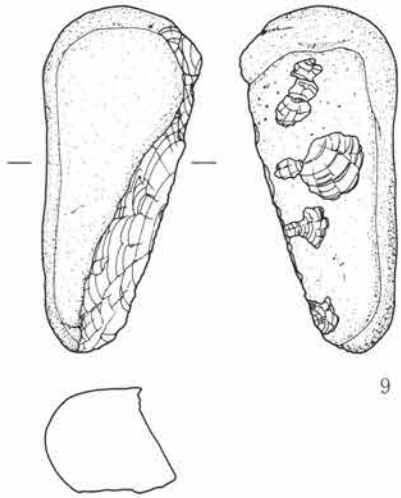
器　種	番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材　　質	特　　徴	出土位置・写真図
碁　石	1	1.6	1.1	0.6	1.6	石英	白石。やや楕円。	P106
碁　石	2	1.6	1.3	0.6	2.2	細粒安山岩	黒石。三角に近い楕円。	
碁　石	3	1.9	1.6	0.7	3.66	石英	白石。	P 3
碁　石	4	1.9	1.5	0.6	3.28	石英	白石。	P 8
碁　石	5	2.0	1.25	0.5	2.37	石英	白石。長楕円形。	フク土
碁　石	6	1.8	1.7	0.7	3.51	石英	白石。	
碁　石	7	1.9	1.7	0.8	4.73	石英	白石。	
碁　石	8	1.9	1.6	0.8	4.16	石英	白石。	
碁　石	9	2.0	1.0	0.7	3.72	石英	白石。	
碁　石	10	1.8	1.5	0.7	3.34	石英	白石。	
碁　石	11	1.8	1.4	0.8	3.50	石英	白石。	
碁　石	12	1.7	1.4	0.8	3.46	石英	白石。	
碁　石	13	1.8	1.3	0.9	2.95	石英	白石。長楕円形。	
碁　石	14	1.8	1.5	0.5	2.58	珪質頁岩	黒石。	P 7
碁　石	15	1.8	1.5	0.6	3.22	チャート	黒石。	P30
碁　石	16	2.0	1.5	0.9	4.57	チャート	黒石。	P31
碁　石	17	2.3	1.7	0.6	3.86	蛇紋岩	黒石。	
碁　石	18	2.0	1.5	0.6	3.09	蛇紋岩	黒石。	
碁　石	19	1.9	1.6	0.5	3.30	黒色安山岩	黒石。	
碁　石	20	1.9	1.6	0.7	3.71	頁岩	黒石。	
碁　石	21	1.8	1.7	0.6	3.66	蛇紋岩	黒石。	
碁　石	22	1.7	1.6	0.7	3.18	チャート	黒石。	
碁　石	23	1.9	1.4	0.6	2.87	ホルンフェルス	黒石。	
碁　石	24	1.7	1.3	0.7	2.93	チャート	黒石。	
碁　石	25	1.5	1.4	0.7	2.61	珪質頁岩	黒石。	

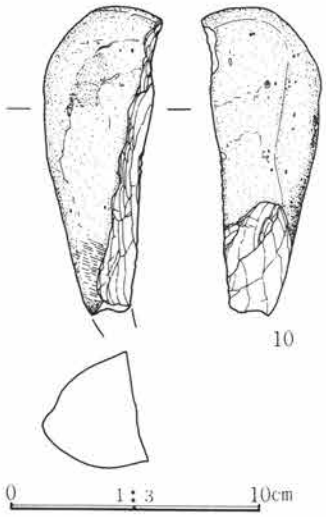


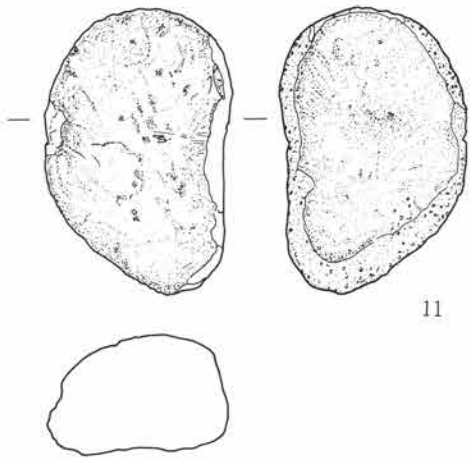
第29図　こも編み石集成図

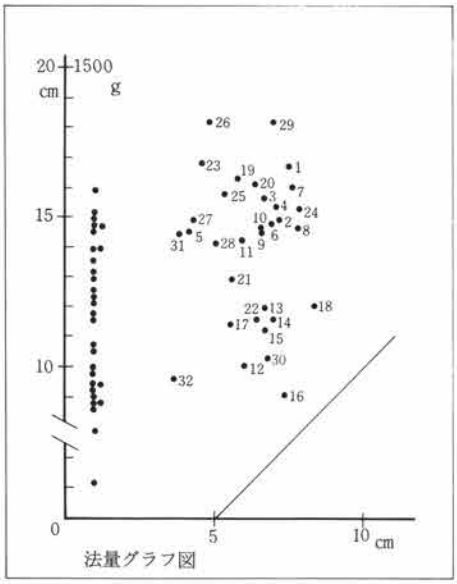




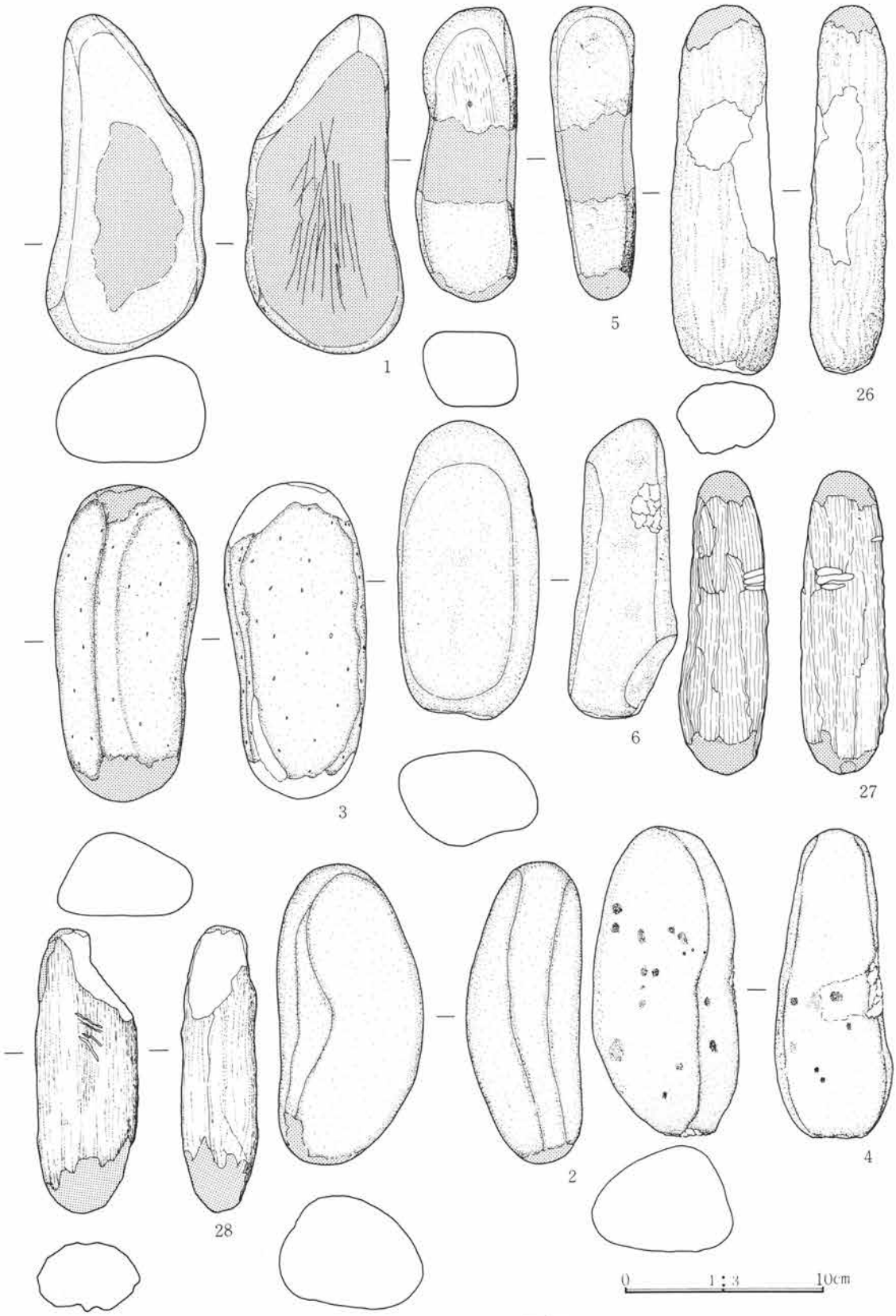




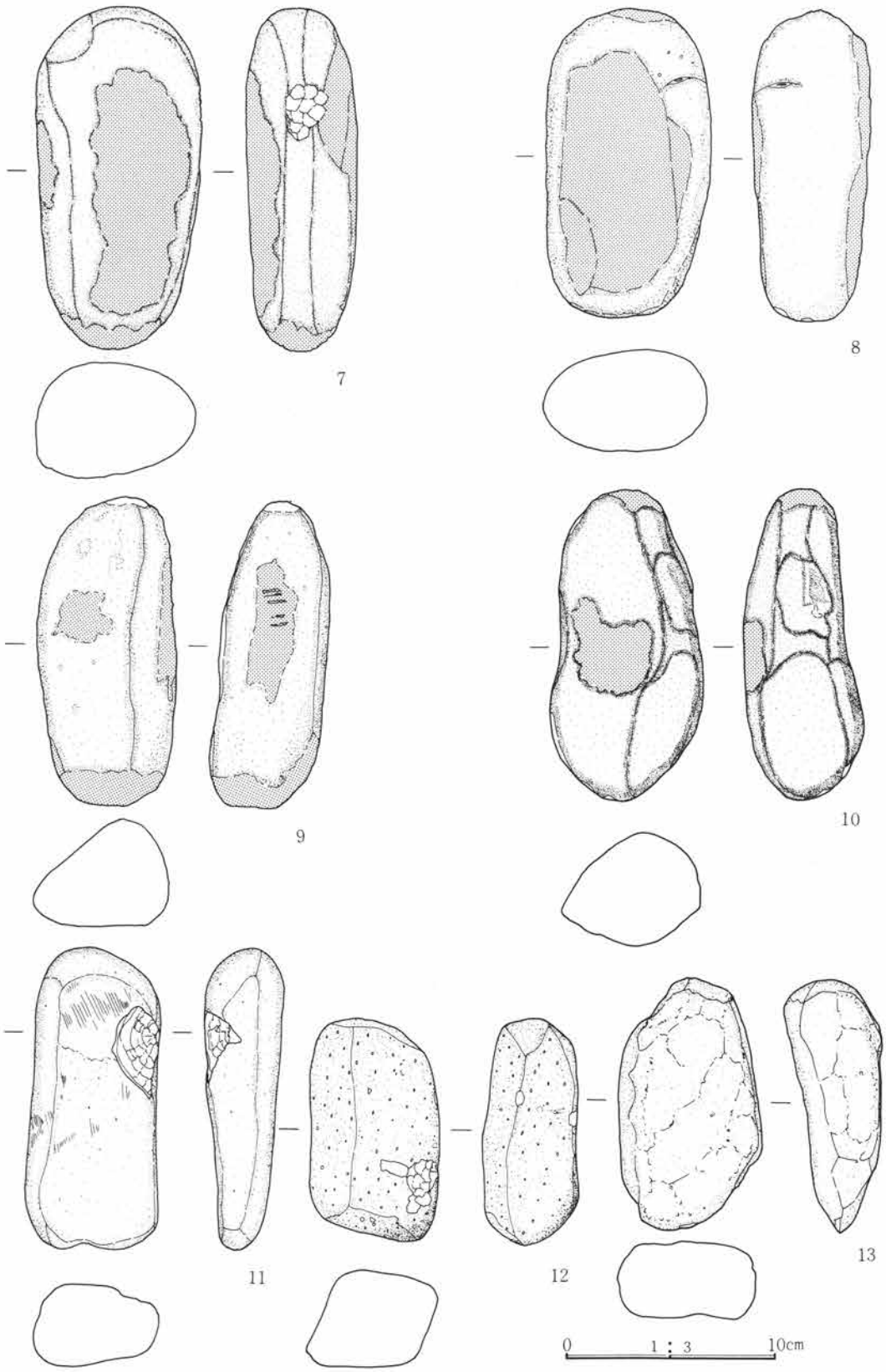




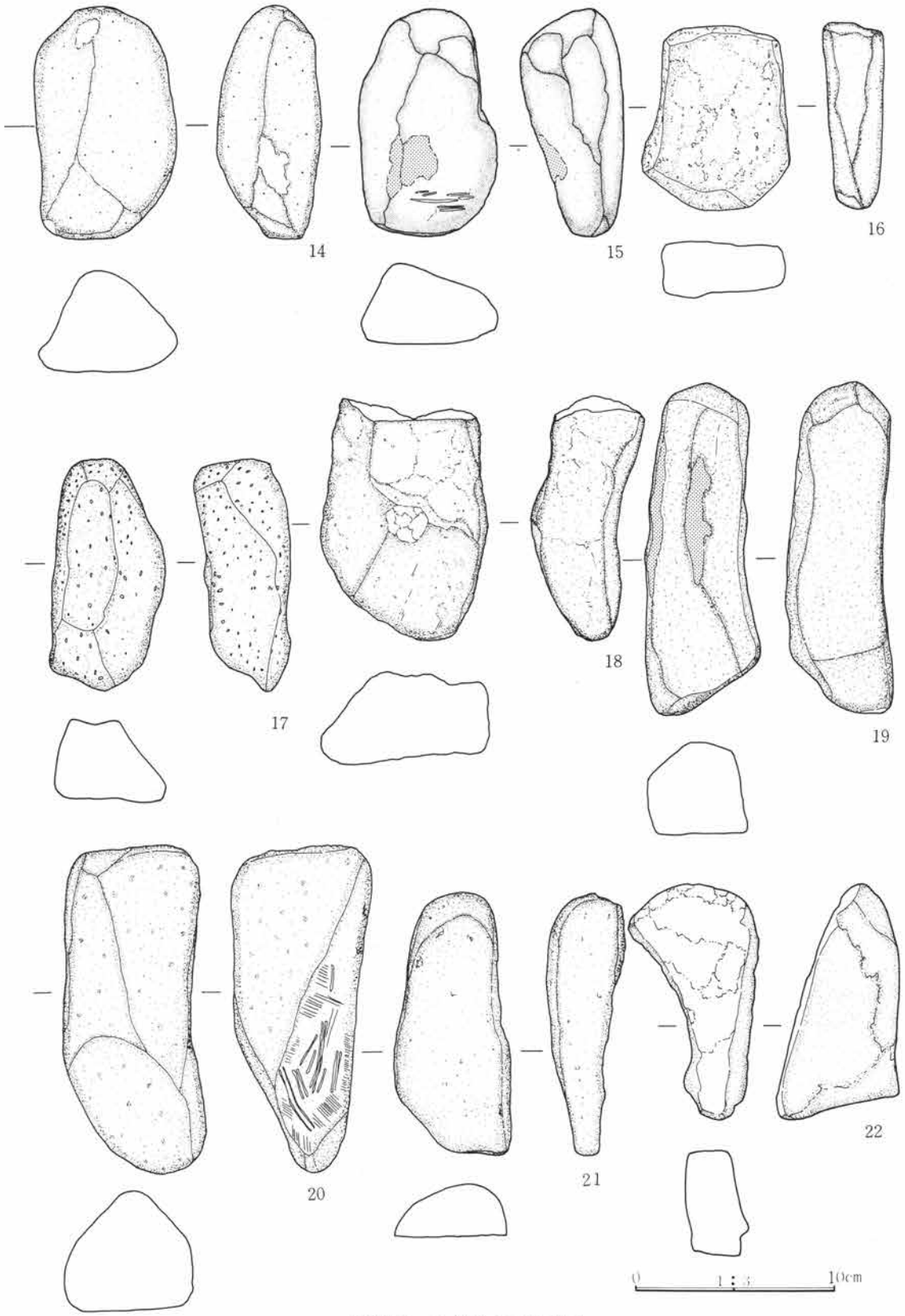
第30図　こも編み石集成図



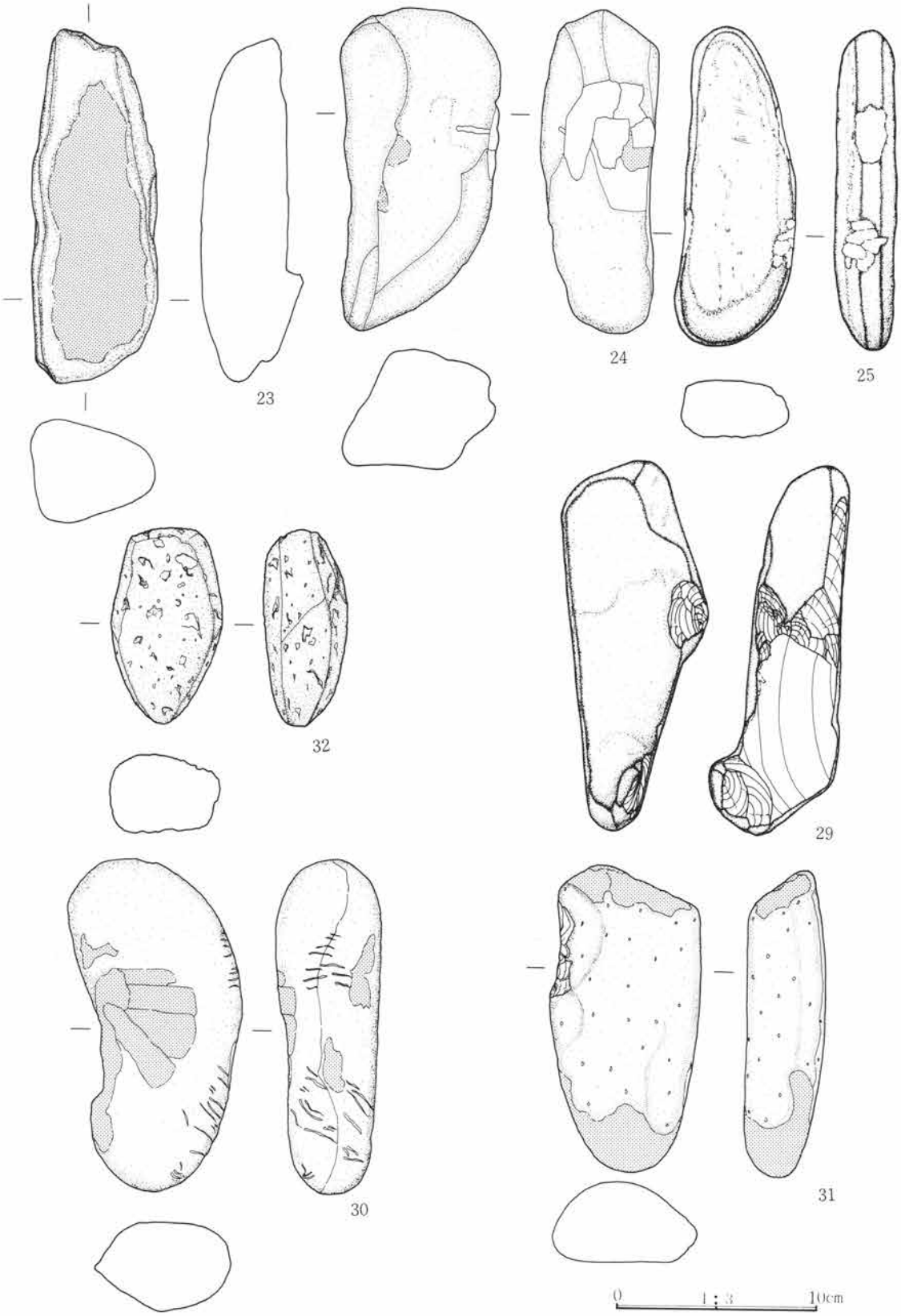
第31図　こも編み石集成図



第32図　こも編み石集成図



第33図　こも編み石集成図



第34図　こも編み石集成図

第9表　熊野堂遺跡第II地区　75号住居址出土　こも編み石計測表

遺物番号	長さ×幅×厚さ	重量	石質	使用痕の状態
1	12.5 × 6.8 × 5.3cm	670g	粗粒安山岩	全体に磨耗、表裏平坦面に擦痕を持つ、すり石の用途
2	13.4 × 6.5 × 4.1	580	〃	凸面にすり面、上端敲打痕、側面うち欠きがある
3	14.3 × 7.2 × 4.3	750	〃	全体に磨耗、斜交する線条痕がわずかにある
4	13.8 × 7.1 × 4.9	670	〃	全体に磨耗、側稜に斜交する擦痕がある
5	12.7 × 6.2 × 5.2	700	〃	裏面をすり面とする。側稜に敲打痕を持つ
6	13.8 × 5.2 × 4.6	570	〃	下端面に敲打部、側稜に固定用うち欠きを持つ
7	12.6 × 6.8 × 6.8	560	〃	一部に擦痕、側稜凸部に敲打痕を持つ
8	9.8 × 5.7 × 4.0	330	〃	下端と両側稜に敲打部を持つ
9	13.6 × 6.2 × 4.1	450	砂岩	10と接合する、裏面に敲打痕を持つ
10	12.1 × 4.7 × 4.7	280	〃	9と接合する
11	11.3 × 7.3 × 4.7	320	粗粒安山岩	表裏両面が磨耗する、側稜をうち欠いている

第10表　熊野堂遺跡第II地区　197号住居址出土　こも編み石計測表

遺物番号	長さ×幅×厚さ	重量	石質	使用痕の状態
1	16.7 × 7.5 × 5.3cm	1,020g	粗粒安山岩	表裏面にすり面と長軸方向の細く浅い条痕がある
2	14.9 × 7.3 × 5.7	890	〃	下端部全体が磨耗、すり石の用途
3	15.7 × 6.8 × 4.1	740	〃	上端部は磨耗と敲打痕、下端部は磨耗している
4	15.3 × 7.1 × 5.2	990	〃	下端部に敲打痕、側面中央に敲打によるうち欠きを持つ
5	14.5 × 4.7 × 3.7	550	〃	上端敲打、下端すり面、中央全体磨耗している
6	14.5 × 7.0 × 4.7	780	〃	下端部全体と側稜上方に敲打痕を持つ
7	16.1 × 7.7 × 5.5	1,090	〃	表裏のすり面は長軸方向で複数の単位、砥石の用途
8	14.6 × 7.9 × 4.8	990	〃	表裏平坦面にすり面を持つ、すり石の用途
9	14.5 × 6.6 × 5.0	720	〃	上端敲打痕、側面のすり面は長軸に直交する筋状
10	14.7 × 6.7 × 5.3	730	〃	側稜全体にすり面、下端に敲打痕を持つ
11	14.2 × 6.0 × 3.8	480	〃	側稜にうち欠き、部分的に弱い擦痕と帯状のすり面がある
12	10.4 × 6.1 × 4.5	440	〃	側稜に軽い敲打痕がある
13	11.9 × 6.7 × 3.7	490	〃	下端部に敲打痕、側稜は着柄用の敲打痕を持つ

遺物番号	長さ× 幅 ×厚さ	重量	石質	使用痕の状態
14	11.5 × 7.0 × 5.0	540	〃	上下両端頂部、側稜頂部に敲打痕を持つ
15	11.1 × 6.8 × 4.0	380	〃	表面の側稜と平坦面に長軸と直交する筋状のすり面がある
16	9.1 × 6.3 × 2.8	290	〃	明瞭な敲打やすり痕はない
17	11.4 × 5.5 × 4.1	380	〃	上端側稜頂部に軽い敲打痕がある
18	12.0 × 8.4 × 4.3	590	〃	表面稜線頂部に強い敲打集中箇所がある、台石の用途
19	16.3 × 5.7 × 4.5	650	〃	下端に敲打痕、側稜全体に着柄用の強い磨耗がある
20	16.1 × 6.3 × 5.8	1,000	〃	側稜が磨耗、裏面の凹面に刃物痕らしい条痕がある
21	12.8 × 5.8 × 2.6	340	〃	割れ口は軽く敲打されている、23と接合
22	11.6 × 3.2 × 5.2	390	〃	表面平坦部に軽い敲打痕がある
23	16.8 × 6.2 × 5.0	810	〃	21と接合　表面平坦部にすり面がある
24	15.8 × 7.6 × 5.9	950	〃	側面はうち欠かれ、すり面と紐かけ条痕を持つ
25	15.7 × 5.4 × 2.8	440	雲母石英片岩	全体に磨耗、両側面に2対の紐かけ痕を持つ
26	18.2 × 4.9 × 3.5	600	〃	上下両端にすり面と敲打痕、側面敲打による紐かけ調整
27	14.9 × 4.1 × —	410	黒色　片岩	上下両端にすり面、側面に紐しばり痕を持つ、赤色顔料付着
28	14.1 × 5.2 × 3.4	370	〃	上下両端にすり面、側面に紐しばり痕を持つ
29	18.2 × 6.7 × —	850	黒色　頁岩	割れ口の頂部に敲打痕がある
30	16.3 × 6.8 × 4.4	890	粗粒安山岩	全体に磨耗、すり面は帯状で複数方向、すり石と砥石で併用
31	14.4 × 7.2 × 4.0	670	〃	上下両端にすり面、側面凹部にうち欠きを持つ
32	9.6 × 5.5 × 3.8	110	軽石(二ツ岳)	亀甲状の軽石製品、砥石の用途

まとめ・分析編

第6章　ま　と　め

第１節　熊野堂遺跡の集落変遷について

1　はじめに

熊野堂遺跡は、第Ⅰ地区から第Ⅲ地区までの３つの地区からなり、縄文時代から平安時代の住居総数396軒を始めとして数多くの遺構が確認された、中世にも及ぶ集落跡である。遺構の内訳は、下記である（ここで遺構編第１節Ｐ―24に掲載した数字を訂正する）。

縄文時代　住居１軒、土坑７基

弥生時代　住居66軒、土坑10基、井戸６基、溝８条

古墳時代　住居89軒、井戸３基、溝15条、方形周溝墓１基、水田２面、畠１箇所

奈良時代　住居47軒、掘立柱建物29棟、溝５条

平安時代　住居179軒、土坑12基、溝22条、井戸６基、墓坑２基、竪穴状遺構７基、道路状遺構２箇所、水田１面、畠２箇所

中　　世　館１、土坑２基、溝４条、竪穴遺構４基

近　　世　土坑、溝、畠

時代不明　住居14軒、土坑、溝などに特定できないものが多い。

この内容は、この地域にあって本遺跡のみが卓越したものではなく、周辺に位置する融通寺遺跡や三ッ寺Ⅱ遺跡などでも住居総数が300軒を越しており地域全体での遺構密度の高さを示しているといえる。その中にあって、集落としての特徴をあげると以下になる。

1　集落の形成は、縄文時代にもみられるが弥生時代中期以降、平安時代11世紀代までほぼ継続的に推移した伝統的な集落である。

2　集落は、居住域と生産域とが確認され、同一占地の中での時代別の変遷をたどることができる。その様相は、稲作受容で安定を増したであろうこの地域の集落の典型例といえる。

ここでは、付図３などに示した住居群の時代別推移を基にして、集落の変遷と特徴をのべる。

2　旧地形の復元と遺跡範囲

遺跡は、榛名山中麓に水源を持つ井野川左岸、標高108～115mの台地上にある。付近は、山麓を下り井野川に合流する猿府川、唐沢川、天王川などの支流が南北走向の台地を開析し、台地と低地とで起伏に富んだ地形を形成している。その各台地上には、本遺跡に匹敵する内容を持つ雨壺、若浦北、若浦南、融通寺などの遺跡が接する様に並んでおり、特に弥生時代以降の遺跡密度が高い地域を形成している（付図１参照）。

地形は、井野川の両岸では対称的な景観を持っている。東は、標高120～125m付近で『前橋台地』上に『相馬ケ原扇状地形』が接し、陣場泥流末端の残丘や扇端で開析された低い崖線と『日高遺跡』に代表される、弥生時代以降に開墾される小さな谷地形とが、地形変換帯として若干の起伏を持って続

いている。西側一帯は、井野川と榛名白川との間に主に二ッ岳泥流で形成された『白川扇状地形』が、左岸と対称的な景観をもって一面に広がっている。この中では、平安時代の水田跡が広域に調査されたり、箕郷町の『上芝古墳』や『下芝谷ッ古墳』などの古墳が泥流下に埋没していることも知られ、左岸に対応する様な起伏に富んだ地形が埋没していると推定される。

第1分冊遺構編の第2図は、井野川両岸の地形を『洪積低台地、旧氾濫原、自然堤防』で区分したもので、井野川を中心とした河床や河道自身の変化が、周辺の地形や遺跡の形成に大きな影響を与えたとした（第1分冊『第2節遺跡の立地と周辺遺跡』参照）。すなわち、山麓の末端を形成する洪積低台地が、井野川やその支流によって開析されて、『テラス状地形』や『自然堤防』が形成されていく過程が考えられる。この『テラス状地形』や『自然堤防』は、井野川沿いで調査された芦田貝戸、御布呂、同道といった各遺跡の遺構実態からすると、弥生時代以降集落を形成、維持した水田可耕地になったと考えられる。

最近では、これらの遺跡実態を踏まえて流域での水田開発プロセスの視点から、5世紀代には井野川支流の唐沢川河道をつけ替えて水田耕地の拡大をはかったとし、開発上の画期を提起している。そして、三ッ寺Ⅰ遺跡の『豪族居館』をその開発拠点として性格付けている（能登　健「三ッ寺Ⅰ遺跡の成立とその背景」『古代文化』第42巻第2号　1990）。

遺跡内の微地形は、現在一面に見える台地部分も第Ⅱ地区の2～3区を横断する井野川と推定される『河道跡』や第Ⅰ地区南端の小さな『谷地形』といった起伏があり、遺構占地との関係を窺わせる。河道跡は、現地形で約1mの段差を持ち、トレンチによる確認では南北の幅約30m、深さ現地表下4m以上にも及ぶ規模と北西から東南へ向かう方向が推定される。

遺構が確認された範囲は、南北で約900mあり、なお北へ広がる様相がある。東西は、第Ⅲ地区の内容からすると、現在の台地幅約250mに及ぶと推定される。この範囲は、付図3で示した様に時代別の動きが特徴的に見られるが、自然地形である南の河道と北の谷地とにはさまれた一帯が弥生時代以来絶えず集落の中心にあることがわかる。全体の変遷では、この河道と谷地の埋没と平坦化が居住域と生産域を拡大あるいは再編成させ、遺構の占地を大きく左右している。

3　縄文時代

遺構は、第Ⅰ地区で前期後半諸磯b式期の17号住居、第Ⅱ地区4区付近で時期不明の土坑7基がある。このほかに、第3分冊遺物編の第149～154図に集成した草創期から後期までの遺物がある。この中には、この地域では報告例が少ない第Ⅱ地区117号住居掘り方で出土した回転縄文や同じく3～4区の遺構埋没土で出土した撚糸文、条痕文土器がある。これら出土した遺物の量や状態からすると、遺構が存在したとしても台地先端部の小規模な集落であろう。

『群馬町の遺跡』（1986）では、この地域の遺跡について下記の特徴を指摘している。

1　標高150m以低では、八幡川・牛池川・染谷川沿岸流域と並んで遺跡の分布密度が高い。

2　時期は、中期の中でも加曽利E式期が圧倒的に多い。

3　この背景には、相馬ケ原扇状地縁辺の谷地形の埋没と平坦化が画期となって、居住の場が大きく下流方向へ拡大したことがあげられている。

周辺では、上記の特徴に合致する様に雨壺遺跡で阿玉台式期の住居や土坑、大八木箱田池遺跡で勝坂式と加曽利Ｅ式期の住居と土坑、若浦北遺跡・若浦南遺跡でも同様な内容が知られている。

4　弥生時代

確認された遺構は、中期後半から後期末葉までの住居66軒、土坑10基、井戸６基、溝８状がある。時期区分では、『新保遺跡II』（1988）の中で示された佐藤明人氏の編年に従うと、住居では中期第１期が６軒、中期第２期が１軒、後期第１期が８軒、後期第２期が28軒、後期第３期が11軒の内訳となる。これを遺構分布でみると次の様になる。

1　集落は、中期後半から後期まで継続しているが、大きく第Ｉ地区付近の北群と第II・III地区にまたがる南群とに分けられる。

2　集落の変遷は、南群では中期後半に集落形成が開始され、後期をへて古墳時代まで移行している。その継続性から、南群が集落内の主導的な位置を占めていたと考えられる。その一例には、磨製石鏃やベンガラの生産・製作があげられる。北群は、後期第１期になって居住域となったもので南群から発展分化したと考えられる。しかし、浅間Ｃ層降下時には生産域としての畠に転換し、居住域としては６世紀前後まで断絶をしている。

3　集落の構成は、中期段階では、住居の規模、方位、重複関係から少なくとも２つの小群があり、４棟前後の数で１小群を構成すると推定される。後期段階では、南群を例にとると同じく住居の規模、形状、方位、重複関係から、中期を踏襲した２群がみられる（第１分冊第７図参照）。

4　住居の特徴は、中期が一辺５m前後の方形から方台形、４本主柱穴で中央に炉を持つ、方位はN20～30°Wから東へふれていくのが時期変化としてみられる。後期は、３×４m前後と５×７m前後の大小２形態の長方形か隅丸長方形に発展分化する。大型のものは、主柱穴のほかに入り口施設が明瞭になり、炉が中央だけでなく複数になるなど構造上の変化が見られる。しかし、後期後半では、方形に近ずき古墳時代へのつながりをみせる。方位は、N33°W～N14°Ｅと大きく幅を持つが微差ではあるが西から東への時期変化が見られる。

5　集落全体の最盛期は、数の上から後期第２期に求められる。この後期第２期に遺構数が多いのは、隣接する雨壺遺跡や井出村東遺跡でも同様であるが、中期から継続する本遺跡や雨壺遺跡と後期のみの井出村東遺跡などに分類される。しかし、古墳時代４世紀代の遺構とは、北群で示される様に数、占地の上で明瞭な画期が見られる。これは、広範囲にわたる生産域の出現や方形周溝墓の築造からみれば集落の末期的な展開ではなく、むしろ次代への組織的で急速な転換がはかられたものと見るべきであろう。ただし、画期の背景は、若狭　徹氏が指摘するうちで、この地域での樽式期の遺跡の多さが外来系要素の導入を容易にした、と現状では考えたい（「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』１　1990）。

5　古墳時代（4世紀）

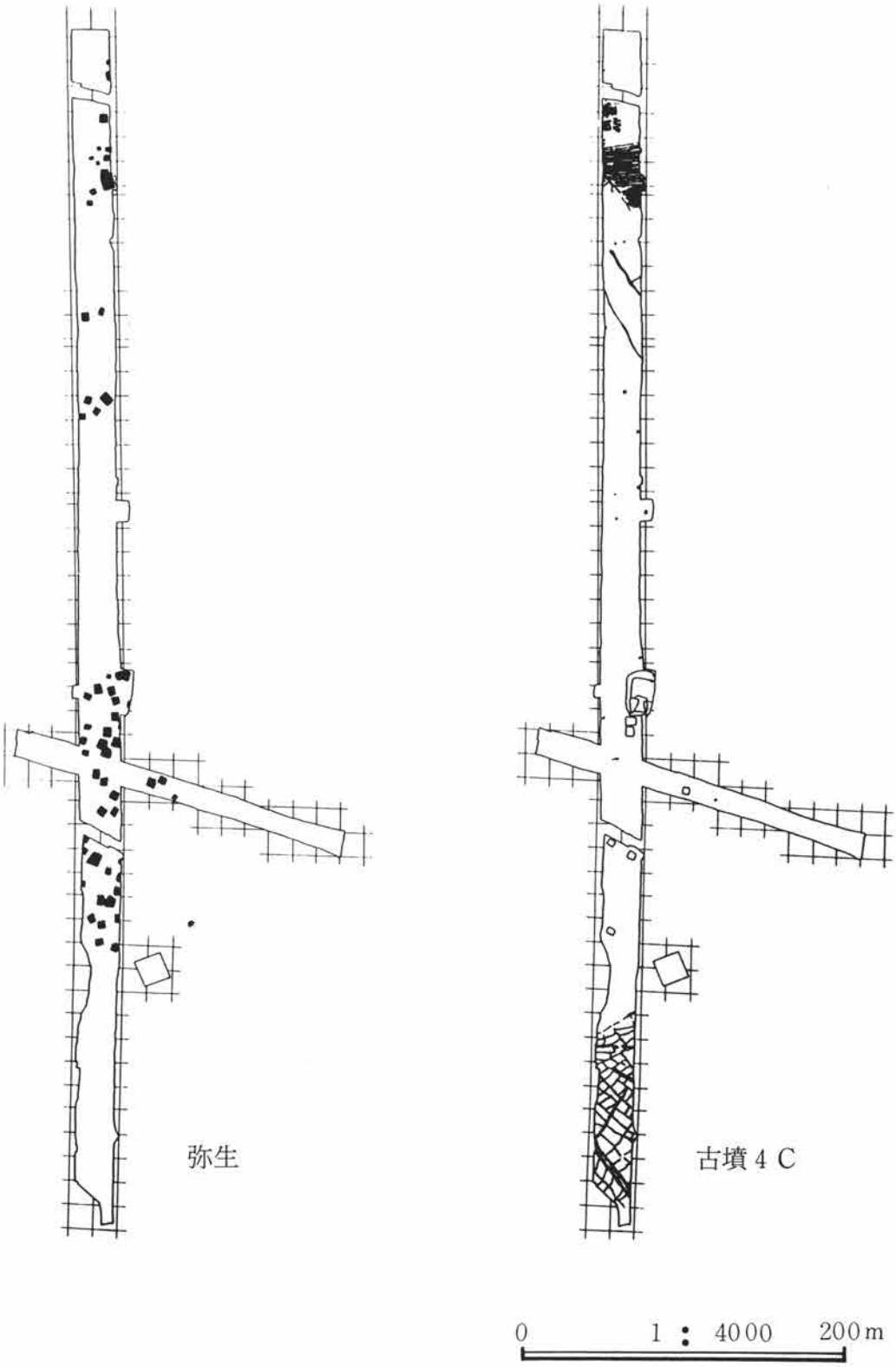
時期は、浅間C層の降下前後をさしている。遺構は、住居6軒、方形周溝墓1基、水田、畠、溝があげられる。集落としては、居住域・生産域・墓が一体的にとらえられるが、浅間C層を鍵層にすると、遺構の構築と廃絶は時間的に微差の中でめまぐるしく行われていることがわかる。前代の弥生時代集落とは画期を持つが、外来要素の導入で急速に再編成され、広範囲におよぶ生産域の形成と第II地区北端の最高所には前方後方型周溝墓が築造されている。その変遷は下記である。

土器の特徴	居住域	生産域	墓　域
外来系土器	136住・173住 209住・4区15住 4区18住・III区8住	水田・畠	1号方形周溝墓
	↓ （浅　間　C　層　の　降　下） ↓		
石田川式土器	136住・3区8住		

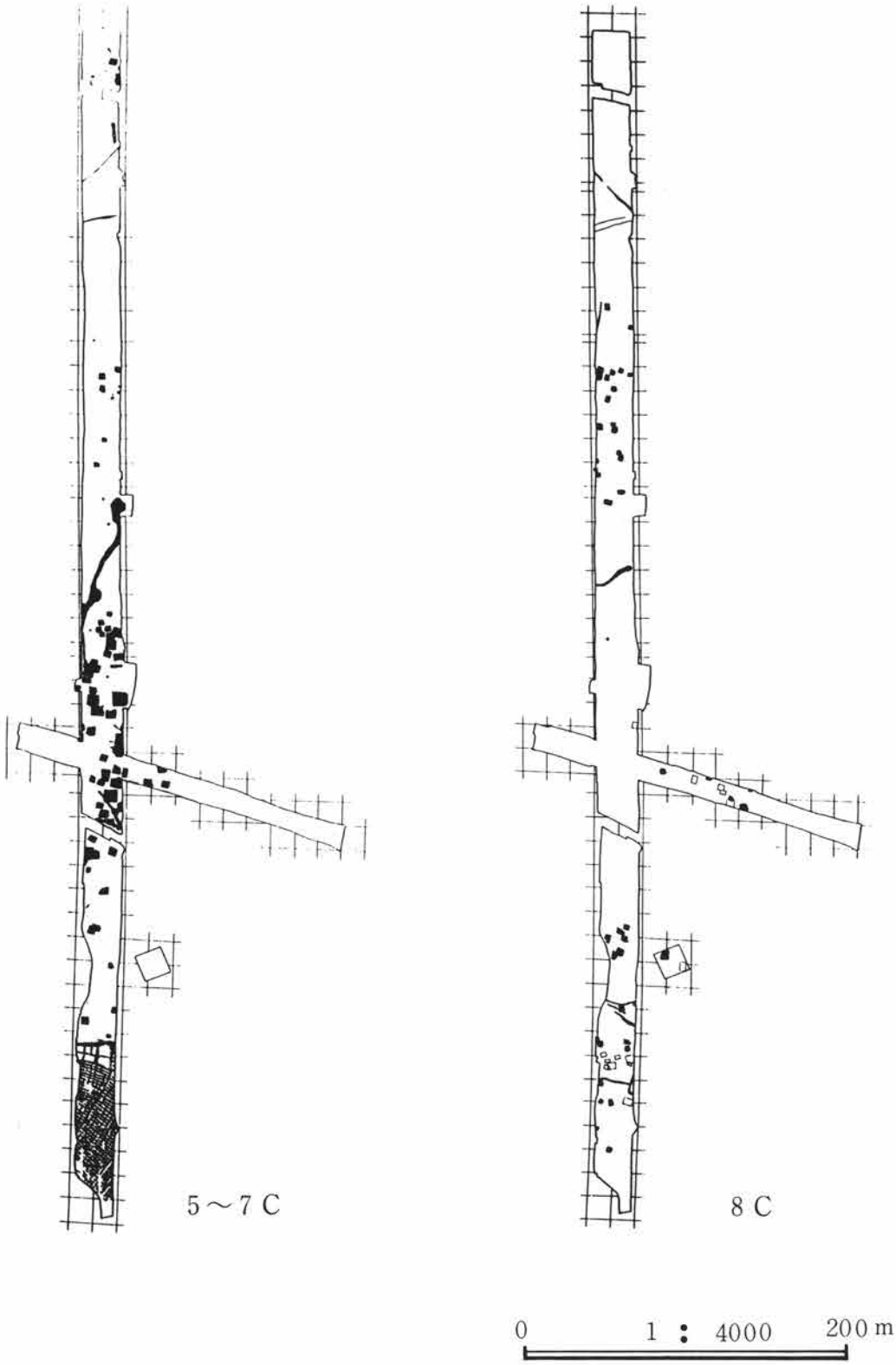
上記の中での特徴は、これまでの集落内で確認できなかった墓の出現である。その築造に際しては、弥生時代後期の住居7軒をこわし、しかも土器の上での型式差が見られない209住を人為的に埋め戻して前方部を作っている。居住域から墓域への転換例は、弥生時代後期ではあるが東対岸にある若浦南遺跡1号方形周溝墓がある（『西裏南遺跡』群馬町教育委員会1988）。地形の上で、ともに居住域から転換した最高所を占地しており、造墓に対して強い規制のあり方を反映したといえる。また、墓の築造後は、南約50m付近で3軒の住居が確認されているが、時期差だけでなく方位や形状にも差異が見られ、墓を意識した居住域の設定がされている。

生産域は、埋没河道跡の低地に区画された水田と集落北方の台地上の畠とがある。その年代観は、第I地区の畠での弥生時代後期の住居との重複関係、第II地区での水田下の弥生土器の出土状態、あるいは同道遺跡での水田形成からすると、弥生時代末から古墳時代初頭とみることができる。本遺跡の例は、水田と畠がセットとして確認されたことに意義があり、遺構としての差異は先にのべた地形区分の占地との関係を示している。基本的に、水田は、同道、御布呂、芦田貝戸の各遺跡の様に河川に面する低地での耕作形態であり、水に乏しい台地上から小河川沿いは本遺跡や三ッ寺I遺跡などの例から畠作地帯と考えられる。

付図4には、C水田について既報のものと今報告のものを並べて掲載した。今報告では、調査時の所見と、静岡県長崎遺跡、宮城県富沢遺跡での重層した水田で確認された『泥炭層の圧密化現象』を参考事例（『長崎遺跡』財・静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988）にして、FA水田の痕跡としたものを取り除いた図を新しく報告した。区画は、大畦と基幹導水路を基準とした中に等高線に沿って、一辺が4～6mの長方形を基調としたやや大きいものがみられた。水田は、浅間C層の降下堆積で復旧されてはいないが、大畦の位置は次のFA水田まで踏襲されており、継続性を示すものとされる。



第35図　熊野堂遺跡住居址変遷図弥生・古墳時代



第36図　熊野堂遺跡住居址変遷図古墳・奈良時代

6　古墳時代（５世紀）

５世紀前半の遺構は、４世紀前半の浅間Ｃ層の降下による影響で占地を転換したのか、遺構は稀薄になっている。重層・継続する水田からは、集落の継続も暗示されている。この空白後に確認されるのが、５世紀後半の集落である。この地域では、特にこの時期北２㎞にある三ッ寺Ｉ遺跡の『豪族居館』が築造され、その性格と地域全体との関連が注目されている（能登「前掲」、坂口　一「５世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』第42巻第２号　1990）。

遺構は、住居11軒と１号方形周溝墓の周溝に投棄された土器溜まりがある。これに、ＦＡで埋没した水田が加えられよう。これらは、『豪族居館』の築造から存続期間に対応するもので、居館を支える周縁の基盤集落の一つとして位置付けられる。住居は、第II地区の１号方形周溝墓を取り囲む様に見られ、方位は差があるものの重複をさけ規則性が窺える。

7　古墳時代（６・７世紀）

集落は、６世紀初頭のＦＡと６世紀中頃のＦＰの降下堆積で画期を持っているが、５世紀にみられた居住域・生産域を継続、発展させている。時期とすれば、豪族居館の廃絶後を占う資料である。

遺構は、住居72軒、土坑、溝、溜井２基、水田、畠などがある。その特徴は、下記である。

１　分布は、第II地区３～４区一帯が中心で５世紀からの居住域を継続している。さらに第Ｉ地区でも８世紀代に継続する２つの住居群が出現し、再度居住域へと転換する。

２　北にあった谷地は、５世紀後半頃からＦＡ水田の潅漑を目的に溜井が築かれ、集落内を画していた自然地形から施設へと変化し、７世紀前後には埋没している。

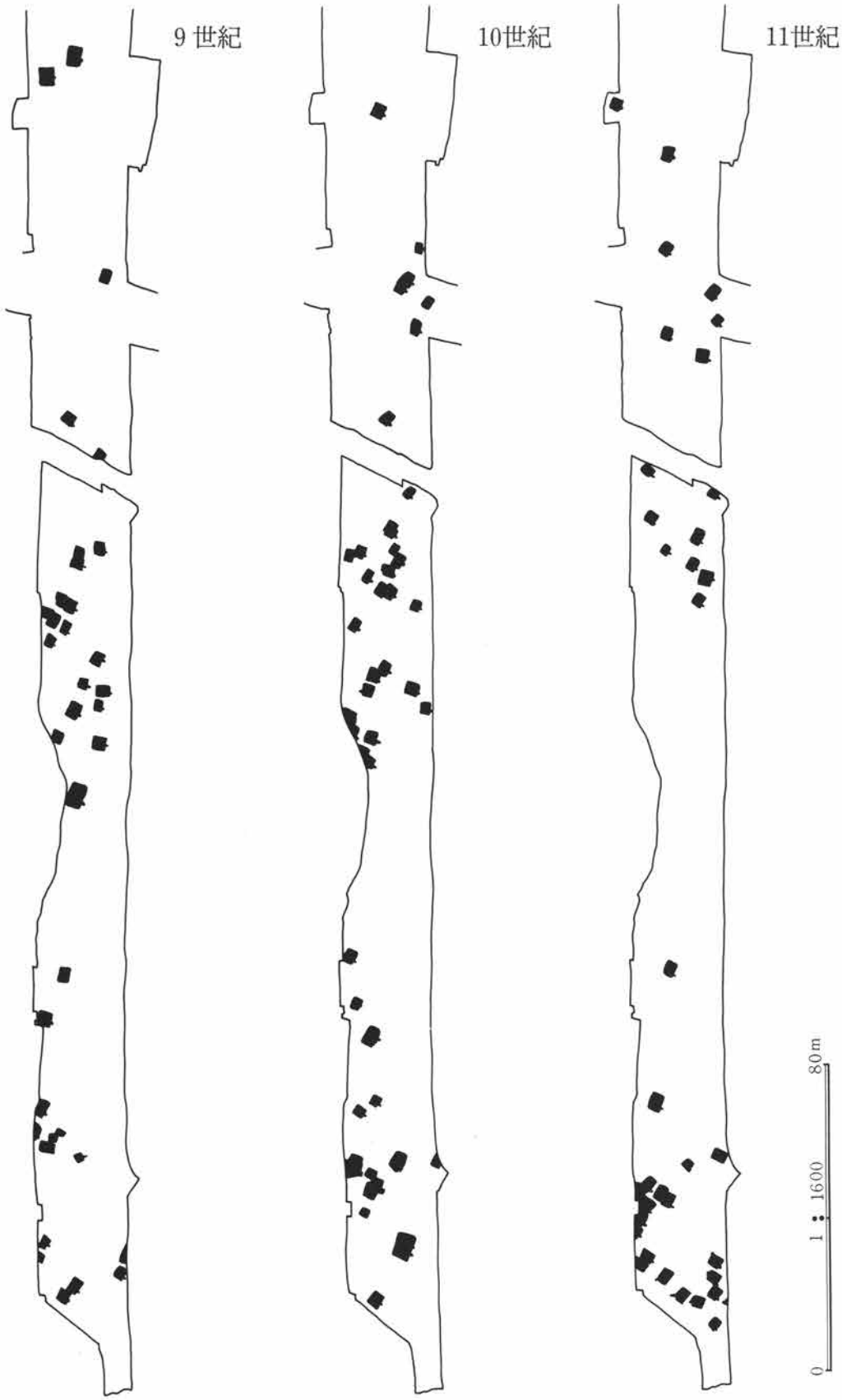
３　北への居住域の拡大は、前代までの畠地を消失させた。それに代わってか、住居群に付設されたミニ畠が推定される。これは、第II地区４区付近でのＦＡで埋没した小溝をさし、群馬県渋川市中筋遺跡や子持村黒井峯遺跡に類似した景観を復元する。第II地区の２区や３区では、部分的に畠が確認されている。時期は、９世紀以降であるがその先駆形態と考えられる。

４　水田は、Ｃ水田の大畦を踏襲しながら重複する。区画の特徴は、小畦で碁盤目状に整然と配置された点にあり、Ｃ水田の等高線を強く意識した配置との間に潅漑技術の向上と乏水土壌に対する工夫の跡が見られる。しかし、水田は、ＦＡの降下後は復旧されず、さらにＦＰ泥流の２m近い堆積で生産域としても廃絶される。

５　そして早くも６世紀末から７世紀にかけては、河道跡南の低地部分への住居の進出がはじまり、新たに居住域へと転換している。これまでの変遷が、台地を居住域、低地を生産域として二分してきたものが、始めて置換もしくは大幅な転換をはかり集落の画期となっている。

8　奈良時代（８世紀）

遺構は、住居47軒、掘立柱建物29棟、溝５条などがある。この時期は、『推定東山道』に象徴される様な律令体制と無縁ではなく、上記の遺構もそれを背景とした特徴を持っている。北の三ッ寺II遺跡の井戸からは、この時期の習書木簡や墨書土器が出土しており、『道』で結ばれた国府や国分寺などとも往来が可能な周辺集落としての性格も考えられる。それが、『和同開珎』や『碁石』といった特殊な



第37図　熊野堂遺跡II地区住居変遷図平安時代

遺物の出土背景にもあろう。

分布は、７世紀の胎動をうけて居住域と生産域の大幅な転換が見られる。これまで居住域の中心であった第II地区３～４区付近は、あたかも『広場』のごとく遺構が極端に稀薄になっている。その反対に稀薄であった調査区の南北で住居群が出現する。この背景には、この時期での存在を確定できないが『推定東山道』の本遺跡内の通過とそれに伴う集落全体にわたる再編成があったものと考えられる。その動きは、掘立柱建物が群構成を持って出現したこと、その中でも外周を区画したと推定される溝を付設した建物群の存在が顕著なものである。掘立柱建物は、分布からすると竪穴住居群とセットをなし、機能上の使い分けをしていたと考えられる。区画溝を持つ一群は、南北約50mの規模を持ち、重複関係から８世紀中頃から９世紀前後の時期と軸方向から２時期にわたる変遷がある。その一画は、９世紀代の遺構占地でもしばらく空白域として意識されていることから、集落機能全体をあずかる中枢施設としての性格を持つものであろう。しかし、公的な背景に依存するあまり、集落本来の変遷の中では長期にわたって維持されずに、８世紀代の一時的な存続である。その関連で注目されるものに、ほぼ磁北で縦断する道路状遺構がある。これは、既報の『雨壺古道』（『熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡』財・群馬県埋蔵文化財調査事業団　1984）と平行するもので、この地域一帯の基準として設けられ、集落の占地に対しても規制であった可能性がある。

９　平安時代（９～11世紀）

遺構は、住居 179軒、土坑12基、溝22条、井戸６基、墓坑２基、竪穴状遺構７基、道路状遺構２箇所、水田１面、畠２箇所などがある。

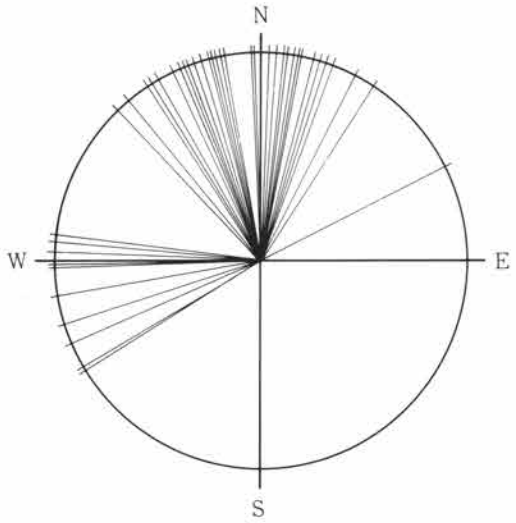
分布は、北の第Ｉ地区での遺構数が極端に減少するのにたいして、それまで稀薄であった第II地区３～４区への集中が再開される。これは、８世紀にみられた律令体制にかかわる村が、その体制が衰退していく中で、本遺跡本来の居住域へ回帰していったことを示している。この背景には、井野川の河床が大きく変化し、新たな水田可耕地の出現と耕地の整理を余儀なくされたことが大きな理由として一方にあったと考えられる。居住域の移動は、それに連動したもので河川寄りの耕作地との位置関係でもある。また、10世紀後半以降の住居で出土する瓦や埴輪は、それ以前での遺構を周辺に暗示するものであるが、耕地の拡大と集落の編成が大規模かつ革新的であったことも示している。その遺構は、瓦や飾り金具、奈良三彩などの特徴的な遺物からすると『寺院』と推定され、９世紀代の時期である。住居の時期別変遷では、７世紀後半から８世紀後半、９世紀後半から10世紀後半、11世紀後半、の３つ時期に増加傾向が指摘されているが（第６章第４節参照）、先の遺物の出土背景や推定される遺構からみて集落としての画期に相当する。

10　中世・近世（12～18世紀）

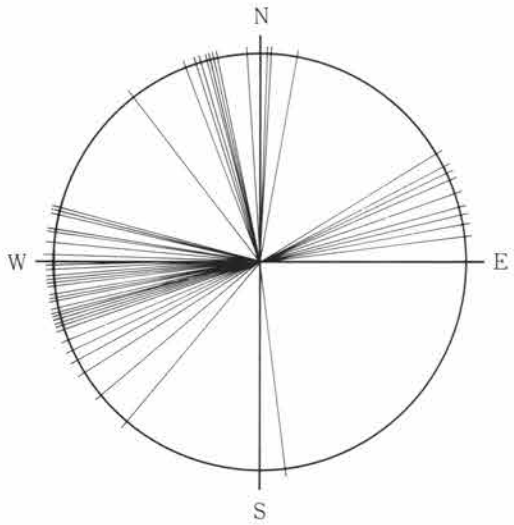
遺構は、第III地区の唐沢川沿いに中世の『熊野堂館』がある。第II地区南端の平行する溝は、館の広がりを示す関連遺構と推定される。この時期は、井野川沿いに『長野氏』に関する館が集中しており南対岸の融通寺遺跡でも同時期頃の『融通寺館』が確認されている。

近世の遺構は、畠、区画の溝、イモ穴らしい土坑などがある。景観は、陶磁器などの遺物の出土量や分布を見ても、住まいに関する遺構は推定できず、江戸時代以来耕地が一面に広がっている。

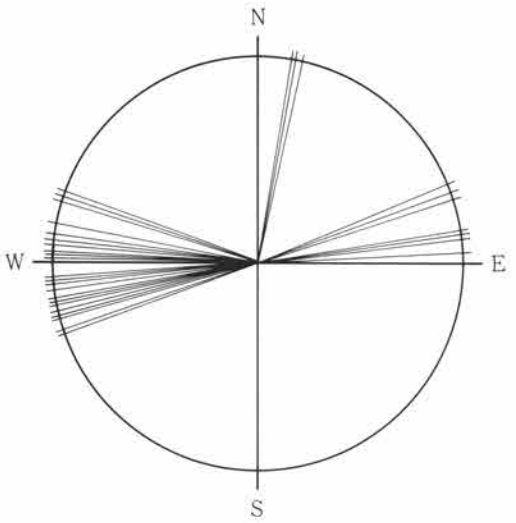
弥生時代



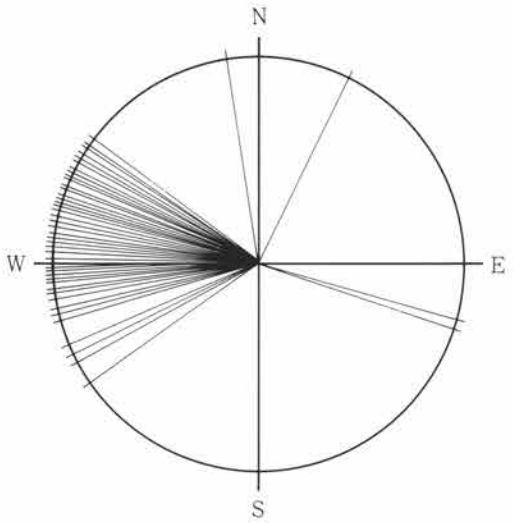
古墳時代



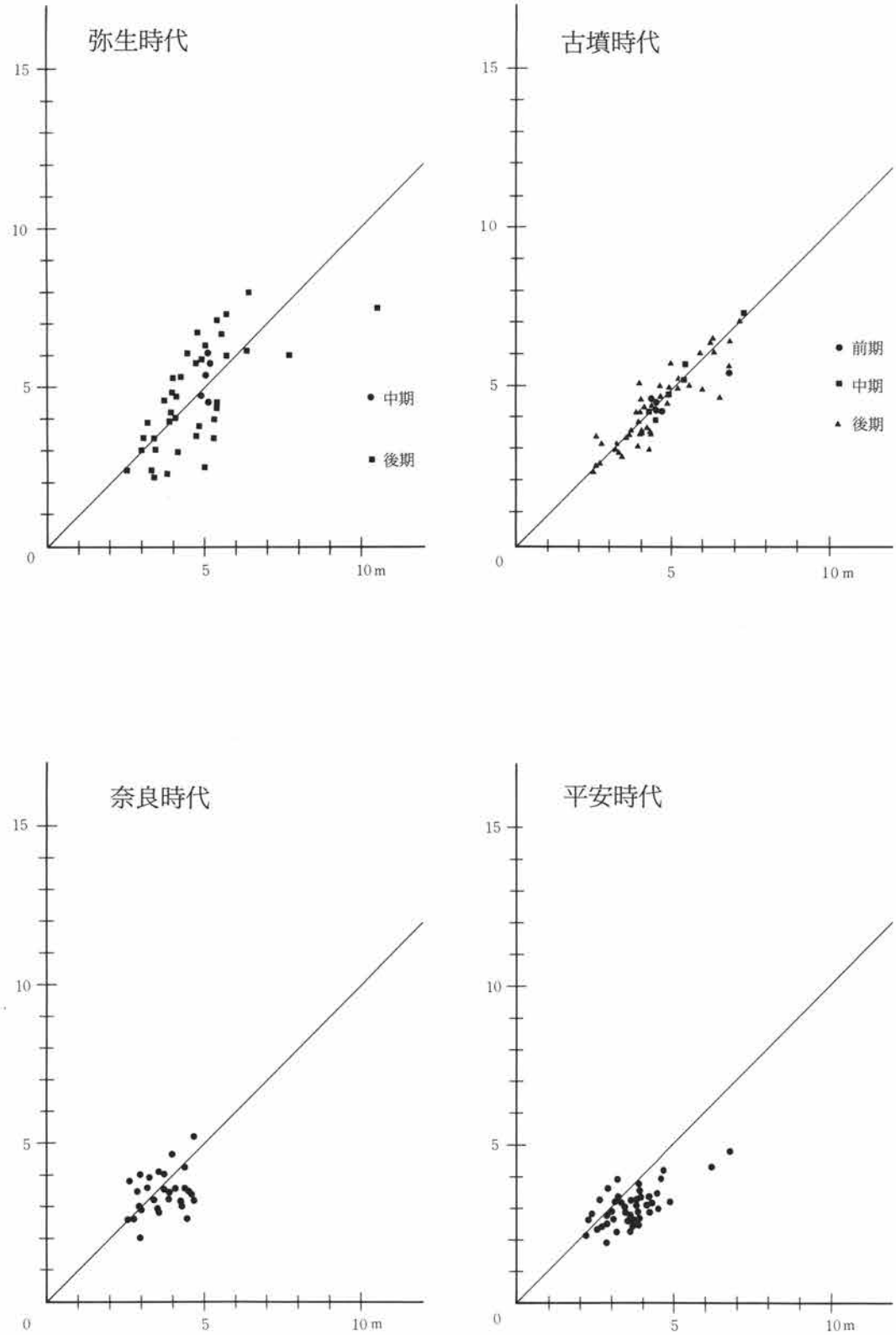
奈良時代



平安時代



第38図　熊野堂遺跡II地区時代別住居方位図



第39図　熊野堂遺跡時代別住居規模

第11表　熊野堂遺跡弥生時代住居一覧表

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 4住	隅丸長方形	250×500	N 32°W	無	2	北西柱穴のやや東側	—	後期	東側半分は調査区域外
I地区 7住	隅丸方形か	300×不明	N 25°W	無	0	中央やや北寄り	—	後期	東側半分は調査区域外 床面に焼土と炭化物分布
I地区 8住	隅丸方形	600×570	N 10°W	無	4	無	—	後期	西壁近くで炭化物層検出
I地区 9住	隅丸方形	390×390	N 19°W	無	—	中央北寄り	無	後期	中央西側の床面で赤色顔料が出土
I地区 10住	不整隅丸方形	300×300	N 16°W	無	0	中央北寄り	無	後期	南西隅の床面で赤色顔料が出土
I地区 11住	不整隅丸長方形	330×240	N 23°W	無	0	中央やや北寄り	—	後期	炉内北側に厚さ2～3cmの焼土層確認
I地区 12住	隅丸方形	380×330	N 10°W	有	0	ほぼ床の中央	—	後期	北壁周溝上面と埋没土中から赤色顔料が出土
I地区 13住	略正方形	250×240	N 30°W	無	0	中央やや北寄り	無	後期	3ケ所焼土堆積、北壁際中央の床面には粘土堆積
I地区 14住	不明	不明×200	N 62°E	無	0	無	無	後期	12住の東南隅下面で北壁側の一部だけを確認する
I地区 15住	長方形	400×480	N 15°W	無	4	ほぼ中央	無	後期	北壁東側の床面が一段高い
I地区 16住	不整長方形	1050×750	N 22°W	全周	6	2基	無	後期	赤色顔料が柱穴や埋没土中から出土
I地区 18住	長方形	320×390	N 40°W	無	4	中央北の柱間	無	後期	
I地区 19住	方形	400×400	N 17°W	無	0	ほぼ中央	無	後期	床面近くまで削平され炉の位置から推定する
I地区 21住	長方形	490×590	N 25°W	無	4	中央東の柱間	—	後期	中央北の柱穴間に焼土と灰、炭化物が分布
I地区 22住	隅丸長方形	530×340	N 4°E	無	0	中央やや北寄り	無	後期	
I地区 36住	隅丸長方形	770×600	N 33°E	無	4	北西やや中央寄り	無	後期	48住の改築住居か
I地区 37住	隅丸長方形	480×380	N 9°E	無	4	北東やや中央寄り	無	後期	
I地区 39住	隅丸長方形	530×400	N 88°W	無	4	北西やや中央寄り	無	後期	南東側に38住が重複し削平される

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
Ⅰ地区 48 住	隅丸長方形	540× 450	N 27°E	有	4	北西側主柱穴の中間	—	後　期	36住床下で確認、東南側に入口施設
Ⅰ地区 67 住	長方形	不明× 350	N 11°W	—	4	住居中央東寄り	北西中央	後　期	西壁側は調査区域外
Ⅱ地区 96 住	台　形	510× 455	N 44°W	無	4	中央	東壁寄り	中　期	96→98→88住→14溝
Ⅱ地区 114 住	方形か	—× 408 東側½	N 92°W	有 全周	—	—	—	後　期	
Ⅱ地区 115 住	長方形	470× 350	N 30°W	—	4	中央ほぼ北寄り	—	後　期	115→112、87→99住
Ⅱ地区 117 住	方　形	490× 476	N 32°W	無	4	中央	無	中　期	117→110→85→86住　焼失住居か
Ⅱ地区 137 住	—	—	N 85°W	無	無	—	無	後　期	137→136→135住
Ⅱ地区 144 住	長方形	370× 460	N 0°W	無	3 (4)	中央北寄り	無	後　期	3区12、144→3区10→145→3区9住
Ⅱ地区 147 住	方　形	345× 306	N 91°W	無	無	—	無	後　期	160→151→147→89住
Ⅱ地区 151 住	方　形	—× 462	N 85°W	無	無	—	無	後　期	162→155→151→147→89住
Ⅱ地区 155 住	隅丸長方形	445× 605	N 2°W	無	4	中央北と中央の2基	無	後　期	162→155→151→237住
Ⅱ地区 160 住	長方形	415× 295	N113°W	無	—	—	無	後　期	160→151→147→134→6堅穴
Ⅱ地区 162 住	—	—	N 80°W	—	—	—	—	中　期	162→155→132住
Ⅱ地区 164 住	隅丸長方形	410× 470	N 2°W	有 全周	4	中央北寄り	南壁中央東	後　期	164→163→161→158、159、142住
Ⅱ地区 171 住	隅丸長方形	340× 440	N 2°E	無	4	北の柱間	無	後　期	171→4区9住→106、107土坑
Ⅱ地区 172 住	隅丸方　形	304× 340	N 4°E	無	2	中央北寄り	無	後　期	172→4区14住→112土坑
Ⅱ地区 173 住	隅丸方　形	396× 414	N 4°W	無	2	中央	無	後　期	119、120土坑→173住→114土坑
Ⅱ地区 175 住	長方形	—× 295	N 90°W	—	(2)	—	無	後　期	175住→22溝
Ⅱ地区 177 住	方形か	—	—	無	4	中央北寄り	無	後　期	177→4区16→174、176住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 186住	隅丸長方形	—× 312	N 83°W	無	2	中央北寄り	無	後　期	186→191→185住
II地区 192住	—	西辺のみ	—	無	1	—	—	後　期	192→193住
II地区 193住	—	南西隅のみ	N 20°E	無	1	—	—	後　期	194→192→193住
II地区 194住	方　形	506× 540	N 13°W	無	4	ほぼ中央	無	中　期	194→193→4区15住→1方周
II地区 210住	長方形	—	N 33°W	有	3	中央北側	—	後　期	210住→1方周
II地区 211住	不　明	不　明	—	無	2	焼土あり	—	後　期	211住→1方周
II地区 212住	方形か	— 北東隅のみ	N100°W	無	2	中央に地床炉2基	—	後　期	155土坑→212住→1方周
II地区 213住	長方形	518× 630	N 4°E	有	3	中央北	—	後　期	213住→1方周
II地区 218住	隅丸長方形	360× — —	N 10°E	無	2	—	—	後　期	218→4区28→219→200住
II地区 220住	長方形	400× 530	N 11°E	無	4	中央北柱間	無	後　期	220→4区28→215→221住
II地区 224住	不整方形	—× 355 西辺側のみ	N121°W	無	—	—	—	後　期	
II地区 225住	不　明	不　明 北西隅のみ	不明	無	無	—	—	後　期	225住→1方周
II地区 228住	隅丸長方形か	— 北辺の一部	N122°W	—	(1)	—	—	後　期	228→209住→1方周
II地区 229住	長方形	—× 576 西側 ½	N108°W	無	2	中央	—	中　期	229住→160土坑
II地区 232住	方　形	—× 474	N 21°W	無	4	中央部	無	中　期	236→232住
II地区 236住	方台形	462× —	N 18°E	無	4	中央部	—	中　期	236→232住→174土坑
II地区 238住	隅丸長方形	422× 532	N 3°W	無	4	中央部2基	無	後　期	238→237→235→158土坑
II地区 240住	隅丸長方形	—× 606	N 6°E	無	3	中央北寄り	無	後　期	240住→3区2溝→182土坑
II地区 3-6住	隅丸長方形	540× 710	N 14°E	有	4	中央部	無	後　期	3区6→4区28→3区1→3区5→3区2、7住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 3-12住	隅丸 長方形	640× 800	N 7°E	有	6	中央部と北中柱間	不明	後　期	3区12→3区10→145→3区9住
II地区 4-6住	隅丸 長方形	512× 634	N 22°W	無	6	中央北	無	後　期	4区6→4区8→4区7住
II地区 4-12住	隅丸 長方形	570× 730	N 12°W	無	6	中央北 中央西	無	後　期	
II地区 4-18住	隅丸 方台形	635× 615	N 6°W	無	無	中央部	南壁中央か	後　期	4区19→4区18→199→198住
II地区 4-19住	隅丸 長方形	558× 670	N 2°E	無	6	中央北と中央西の２基	無	後　期	4区19→4区18→4区17住
II地区 4-23住	隅丸 長方形	472× 672	N 14°W	無	4	中央北と中央西の３基	不明	後　期	
II地区 4-29住	長方形	478× 578	N 17°W	無	3 (4)	中央部か	無	後　期	4区29→4区26→4区24→4区30→31住→27住
III地区 5　住	隅丸 長方形	520× 580	N 2°E	無	4	中央地床炉		中　期	5→6→4住
III地区 8　住	隅丸 長方形	340× 220	N 16°E	無	無	北東側 地床炉	—	後　期	8住→16溝→4掘立
III地区 21　住	内反 長方形	540× 440	N 83°W	—	4	中央地床炉	—	後　期	21→19住→7溝→16溝→3土坑

第12表　熊野堂遺跡古墳時代住居一覧表

No	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
Ⅰ地区 1　住	方　形	490× 490	N 81°W	全周	無	北壁中央	南西隅 楕円形	後　期	7→1住
Ⅰ地区 2　住	方　形	320× 300	N 12°W	有	—	北壁やや東寄り	—	後　期	4→2→5住　東側は調査区域外
Ⅰ地区 3　住	方　形	260× 250	N 21°W	有	有	東壁やや南側	—	後　期	4→3住　東側は調査区域外
Ⅰ地区 5　住	不　明	270× 250	N 12°W	—	—	北壁中央やや東寄り	—	後　期	4→2→5住　東側は調査区域外
Ⅰ地区 6　住	不　明	300×不明	N 38°W	有	—	東壁中央やや南寄り	—	後　期	4→6住　北西隅付近を確認
Ⅰ地区 28　住	隅　丸 長方形	390× 310	N 80°E	—	無	東壁	無	7世紀後半	29→28住
Ⅰ地区 32　住	隅　丸 長方形	400× 360	N 80°E	無	無	東壁	—	7世紀後半	32→31住
Ⅰ地区 35　住	長方形	410× 370	N 88°W	—	—	東壁南寄り	—	7世紀後半	35→34住
Ⅰ地区 42　住	隅　丸 方　形	270× 320	N 67°E	無	無	東壁やや南寄り	—	7世紀後半	4号掘立・5号掘立→42住
Ⅰ地区 45　住	隅　丸 方　形	320× 320	N 77°E	無	無	東壁中央部分	—	7世紀後半	
Ⅰ地区 51　住	長方形	390× 350	N 65°E	—	—	東壁やや南寄り	南東隅	後　期	52→51住　埋没土中に多量の焼土と灰を含む
Ⅰ地区 52　住	長方形	330× 290	N 18°W	—	—	北壁中央	—	後　期	52→51住
Ⅰ地区 53　住	長方形	430× 360	N 63°E	—	—	東壁南寄り	南東隅	後　期	
Ⅰ地区 54　住	長方形	630× 610	N 75°E	—	4	東壁南寄り	—	後　期	55→54住
Ⅰ地区 55　住	長方形	480× 450	N 71°E	全周	4	炉があるかもしれない	—	後　期	55→54住
Ⅰ地区 56　住	長方形	不明× 600	N 15°W	—	(4)	東壁中央南寄り	南東隅	後　期	
Ⅰ地区 57　住	長方形	400× 350	N 59°E	—	—	東壁南寄り	南東隅	後　期	埋没土中に多量の焼土と灰を含む
Ⅰ地区 58　住	不　整 方　形	350× 340	N 83°E	—	—	東壁中央やや南寄り	南東隅	後　期	上面にＦＰで埋没した畠跡がある

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
Ⅰ地区 59 住	隅丸長方形	430× 350	N 14°W	無	無	南東隅	無	後期	埋没土上面にＦＡが堆積する
Ⅰ地区 60 住	不明	不明	N 14°W	—	—	有	—	後期	カマド確認のみ
Ⅰ地区 61 住	—	不明× 450	N 12°W	—	1	東壁中央やや南寄り	—	後期	住居址全体の約⅔調査区域外で上面にＦＡが堆積
Ⅰ地区 70 住	不整方形	360× 350	N 83°E	無	無	東壁中央やや南側と隅	南東隅	7世紀後半	
Ⅰ地区 72 住	不明	不明	N 3°E	—	—	東壁	—	7世紀後半	カマド及び周辺部のみの検出
Ⅱ地区 6Ｃ住	長方形	495× 576	N140°W	無	3	東壁南寄り	南西隅	7世紀	6Ｃ→12→6Ａ→7、6Ｂ住
Ⅱ地区 10 住	長方形	423× 305	N 76°W	無	—	東壁中央南寄り	北西隅か	7世紀第4	10→8・9→5住
Ⅱ地区 57 住	長方形	650× 463	N 97°W	有 全周か	4	東壁中央	南東隅 北東隅	7世紀第4	61→57→63→50→51→45住
Ⅱ地区 60 住	方形か	340× — 東壁側確認	N 76°W	—	—	東壁	—	7世紀中頃	60→61→59、43→49住
Ⅱ地区 61 住	方形か	325× —	N 96°W	無	無	—	—	7世紀第3	61→57→63→50→51→45住
Ⅱ地区 67 住	方形	520× 525	N122°W	有 全周	4	東壁ほぼ中央	無	7世紀第2	67住→4溝
Ⅱ地区 68 住	隅丸方形	—× 455	N104°W	—	—	東壁南寄り	—	7世紀後半	68→79住→7竪穴
Ⅱ地区 75 住	方形	460× 505	N101°W	無	無	東壁南寄り	東南隅外	7世紀末	
Ⅱ地区 116 住	方形	515× 495	N 94°W	無	4	東壁中央	東南隅	7世紀第4	119→118→116→112、86→88、98住
Ⅱ地区 118 住	方形	× 520	N 2°E	無	無	—	無	中期 5世紀後半	96→119→118→116→86住
Ⅱ地区 119 住	方形	465× 425	N 3°E	有 全周	4	無	無	前期 4世紀後半	118住に同様
Ⅱ地区 134 住	方形	540× 515	N 93°W	有 全周	4	東壁南寄り	—	7世紀第3	160→134→129→143→127住
Ⅱ地区 136 住	方形	450× 455	N 82°W	無	4	ほぼ中央	南西隅	前期 4世紀後半	137→136→135住
Ⅱ地区 145 住	方形	—× 690	N 13°W	有 全周	4	北壁中央	南壁中央	後期 6世紀前半	3区12、144→3区10→145→3区9住

No	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 146 住	方形か	—× 410	N 85°W	無	不明	東壁南寄り	無	後期 6世紀	145→146住
II地区 153 住	方形	423× 424	N 94°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀後半	153→152→120住
II地区 166 住	方形	430× 432	N 96°W	有 全周	4	東壁中央	東南隅と北東隅の2基	後期 6世紀前半	4区4→166→4区5→167住
II地区 168 住	方形	590× 600	N91°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀前半	170→4区5→168→167住→17溝
II地区 170 住	方形	590× —	N 95°W	無	2	北カマドの可能性	南西隅	後期 6世紀前半	170→168→169住→17溝
II地区 174 住	方形	—× 424 ½確認	N101°W	有 全周か	2	東壁中央	東南隅	後期 6世紀前半	177→174住
II地区 176 住	方形	—× 472 ½確認	N109°W	有	(2)	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀前半	177→176住
II地区 178 住	方形	336× 280	N 3°E	無	3	北壁中央	北東隅	後期 6世紀前半	
II地区 179 住	方形か	—× 350 西壁のみ	N110°W	—	—	—	—	後期 6世紀	180→179住
II地区 180 住	方形か	—× 408 ½確認	N107°W	有 全周か	2	—	—	後期 6世紀前半	181→180→179住
II地区 181 住	方形	484× 476	N118°W	有 全周	4	東壁中央	東南隅	中期 5世紀後半	145土坑→181→180→179住
II地区 185 住	方形	—× 620 西側½	N100°W	無	2	北壁に推定	南壁中央	中期 5世紀後半	186→185→197→184→190住
II地区 191 住	—	—× 250 西辺のみ	—	有 全周か	—	—	—	中期 5世紀後半	186→191住
II地区 197 住	方形	—× 540	N 81°W	有 全周か	3 (4)	—	—	後期 6世紀前半	185→199→197→190→198→184住
II地区 199 住	方形	626× 654	N106°W	有 全周か	4	—	東南隅	後期 6世紀前半	4区18→199→197→198→188住
II地区 208 住	方形	—× 550 西辺側のみ	N 95°W	無	2	—	—	後期 6世紀	208住→3区1、3溝
II地区 209 住	隅丸長方形	—× 433	N 75°E	有 全周か	4	中央部 中央北	北東隅	前期 4世紀中頃	228→209住→1方周
II地区 214 住	方形	620× 640	N 88°W	無	4	不明	北東隅	後期 6世紀初頭	214→202→189→182、196、187、195、201住
II地区 215 住	方形	—× 578	N112°W	有	2	東壁側	—	後期 6世紀前半	220→215→221住→32、33溝

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 219 住	方形	710× 710	N 90°W	無	4	東壁南寄り	—	後期 6世紀後半	218→219→195、200～203住
II地区 221 住	方形	362× 359	N 95°W	有 全周か	4	東壁中央か	東南隅	後期 6世紀後半	220→215→221住
II地区 234 住	長方形	257× 346	N 97°W	無	1	東壁南寄り	東南隅	7世紀第3	
II地区 241 住	方形か	—× 382	N108°W	無	無	不明	不明	7世紀第4	241→247住→7溝→2区畠跡
II地区 242 住	方形	246× 233	N106°W	無	無	東壁中央	東南隅	7世紀第4	
II地区 244 住	長方形か	—× 304 西側½	N104°W	無	無	不明	不明	7世紀前半	244住→7掘立
II地区 246 住	方形	395× 424	N130°W	無	無	東壁南寄り	無	7世紀第4	3井戸→246→243、245住
II地区 259 住	長方形	592× 496	N 54°W	無	無	不明	不明	7世紀第3	202土坑→261→259→258住→37溝
II地区 261 住	長方形		N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	7世紀後半	261→259→258住→1溝
II地区 3-1 住	方形	552× 505	N 99°W	無	2	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀	3区6→3区1→3区2住
II地区 3-3	方形	402× 436	N 88°W	有 全周	3	東壁中央	東南隅	後期 6世紀前半	4区28→3区3住
II地区 3-4 住	方形	443× 422	N107°W	有	3	東壁南寄り	東南隅	後期 6世紀前半	206→3区4住→3溝 二ツ岳ＦＡ埋没
II地区 3-5 住	方形	390× 390	N103°W	有 全周	4	東壁やや南寄り	東南隅	後期 6世紀後半	3区6→3区5→3区7住
II地区 3-8 住	方形	435× 460	N 10°E	有	(4)	ほぼ中央部	南西隅	前期 4世紀後半	3区8→239住→3区2溝　石製模造品出土
II地区 3-10住	方形	—× 478	N108°W	有 全周か	3 (4)	東壁中央	東南隅	中期 5世紀後半	3区12→3区10→145→3区9住
II地区 4-2 住	不整方形	448× 396	N 92°W	有 全周	無	東壁中央	東南隅	中期 5世紀後半	
II地区 4-4 住	方形	—	N100°W	無	(4)	東壁側か	—	中期 5世紀後半	4区4→4区5→166→4区3→167住
II地区 4-5 住	方形	460× 478	N187°W	有 全周	1	北壁中央	北東隅	後期 6世紀後半	4区4→168—4区5→167、4区3住
II地区 4-9 住	長方形	394× 466	N 99°W	無	無	東壁中央	東南隅	後期 6世紀後半	171→4区9住→171土坑

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 4-11住	方　形	682× 666	N107°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	後　期 6世紀前半	4区14、4区11→4区10住
II地区 4-14住	方　形	675× 644	N106°W	有 全周か	4	東壁南寄り	南東隅	後　期 6世紀前半	172→4区11、4区14住 二ツ岳FA埋没
II地区 4-15住	長方形	680× 542	N106°W	有 全周	5	中央東寄り 中央	不明	前　期 4世紀中頃	194→4区15住→132土坑
II地区 4-16住	方　形	542× 512	N108°W	無	4	東壁南寄り	東南隅か	中　期 5世紀後半	177住→4区7土坑→4区16住
II地区 4-22住	方　形	425× 423	N 93°W	有	4	東壁南寄り	東南隅	中　期 5世紀後半	
II地区 4-24住	方　形	413× —	N 93°W	有	無	東壁南寄り	東南隅	後　期 6世紀前半	4区29→26→24→30→31→4区27住
II地区 4-25住	方形か	—	N 77°W	有 全周か	2	東壁南寄り	—	後　期 6世紀前半	11、12土坑→25住→2井戸
II地区 4-26住	方　形	540× 570	N105°W	有	4	東壁南寄りに推定	北東隅寄り	中　期 5世紀後半	4区29→4区26→4区24→30→31→4区27住
II地区 4-28住	方　形	726× 732	N115°W	有 全周	4	東壁南寄り	東南隅	中　期 5世紀後半	218→4区28→3区3住
II地区 4-30住	方台形	380× 420	N 17°W	有	3 (4)	北壁中央	不明	後　期 6世紀後半	4区29→4区26→4区24→4区30→4区31→4区27住
III地区 2　住	推　定 方　形	500×不明	N105°W	—	2	東壁南側 粘土袖	東南隅	後　期	2→II地区24→II地区196住
III地区 3　住	不　明	不明× 610	N 4°W	—	—	北壁東側 粘土袖	無	後　期 6世紀後半	北壁だけを確認
III地区 6　住	推　定 長方形	不明× 500	N106°W	—	4	東壁南側 粘土袖	東南隅	後　期	5→6住　南壁は調査区域外
III地区 9　住	不　整 方　形	430× 460	N 3°E	無	4	中央西側 地床炉	—	前　期	9→10住→7溝
III地区 19　住	隅　丸 長方形	390× 510	N109°W	有	—	北壁か	無	後　期	21住→16溝→19住 北側は調査区域外

第13表　熊野堂遺跡奈良時代住居一覧表

No	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
Ⅰ地区 20 住	長方形	470× 320	N 95°W	無	無	—	—	8世紀後半	20住→11土坑
Ⅰ地区 27 住	隅丸長方形	280× 260	N 88°W	無	無	東壁中央やや南寄り	—	8世紀第2	27→26住
Ⅰ地区 29 住	隅丸方形	300× 200	N 87°W	無	無	東壁	—	8世紀第2	29→28住
Ⅰ地区 30 住	隅丸長方形	350× 290	N 9°E	無	無	東壁	無	8世紀第1	
Ⅰ地区 31 住	隅丸長方形	380× 350	N 10°E	無	無	東壁	無	8世紀後半	32→31住
Ⅰ地区 33 住	隅丸長方形	430× 300	N 84°W	無	無	東壁	東南隅	8世紀第1	
Ⅰ地区 34 住	正方形	300× 300	N 87°E	—	—	東壁中央やや南寄り	—	8世紀第2	35→34住
Ⅰ地区 38 住	隅丸長方形	450× 350	N 88°W	無	無	東壁	無	8世紀第1	39住・21溝→38住
Ⅰ地区 40 住	隅丸長方形	290× 300	N 70°E	無	無	東壁中央	—	8世紀第2	41→40住　北東隅に張出部を持つ
Ⅰ地区 41 住	長方形	450× 260	N 81°E	無	無	東南中央	—	8世紀第1	41→40住　焚口前に床下土坑がある
Ⅰ地区 43 住	隅丸長方形	390× 320	N 82°E	無	無	東壁中央	—	8世紀第2	44→43住
Ⅰ地区 44 住	長方形	410× 350	N 73°W	無	無	東壁南寄り	カマド左側南東隅	8世紀第1	44→43住→12井戸
Ⅰ地区 49 住	長方形	430× 310	N 67°E	無	無	東壁	—	8世紀第2	北東隅全体が張り出す
Ⅰ地区 50 住	長方形	440× 320	N 89°W	無	無	東壁中央やや右寄り	東南隅	8世紀第2	50住→28土坑　北東隅が張り出す
Ⅰ地区 63 住	隅丸方形	350× 300	N 84°W	—	無	東壁南寄り	東南隅	8世紀第2	南西隅は調査区域外
Ⅰ地区 64 住	長方形	440× 350	N 87°E	全周	無	東壁南寄り	東南隅	8世紀第2	
Ⅰ地区 65 住	方形	370× 400	N 82°E	無	無	東壁中央やや南寄り	—	8世紀第2	65→66住
Ⅰ地区 66 住	隅丸長方形	400× 460	N 79°W	—	—	東壁中央やや南側	東南隅	8世紀後半	65→66住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
I地区 71 住	やや隅丸	不明	N 83°E	—	—	東壁	南中央	8世紀第1	72→71住　東壁カマド付近だけを確認
I地区 73 住	隅丸	不明× 320	N 72°E	無	無	東壁南寄り	—	8世紀第1	72→71→73→74住　西側は調査区域外
I地区 74 住	—	—	—	—	—	調査区域外	—	8世紀後半	72→71→73→74住　カマド部分だけを確認
II地区 11 住	方形	320× 352	N 90°W	有 全周	無	東壁中央南寄り	南東隅	8世紀第2	
II地区 42 住	長方形	265× 380	N110°W	無	無	東壁南寄り	東南隅の隅か	8世紀第2	
II地区 58 住	不明	—	N 95°W	無	無	東壁	無	8世紀後半	58→53→44→26、40住
II地区 63 住	方形か	325× —	N101°W	無	無	無	無	8世紀	60→61→57→63→47→59住
II地区 71 住	方形	330× 390	N101°W	有	無	東壁南寄り	無	8世紀第3	77→71住
II地区 77 住	方形か	365× —	N105°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀第2	77→71→78住
II地区 79 住	方形か	—× 438	N102°W	無	—	東壁南寄り	東南隅か	8世紀第1	68→79住→7堅穴
II地区 80 住	隅丸長方形	300× 440	N103°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀第1	80住→6、7溝
II地区 82 住	方形	445× 425	N 88°W	有 全周	無	東壁中央	無	8世紀	111→109→101→82→100→83住
II地区 85 住	方形	390× 340	N 85°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀中頃	117→85、110→86住
II地区 101 住	長方形	—× 347	N 72°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀	82住に同様
II地区 105 住	方形か	—× 367	N 88°W	有	無	東壁	東南隅	8世紀末	106→105→104→103住 和同開珎出土
II地区 106 住	不明	—	N109°W	無	—	不明	不明	8世紀	106→105→104→103住
II地区 108 住	方形	360× 408	N100°W	無	—	東壁中央	無	8世紀第4	108→87、102→203住
II地区 109 住	長方形	330× —	N 70°W	有	無	東壁南寄り	無	8世紀	111→109→101→82→100→83住
II地区 110 住	長方形	460× 345	N 87°W	有 全周	6	東壁やや南寄り	—	8世紀第3	117→110→86、102住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 111 住	長方形か	60× — 北壁のみ	N 75°W	—	不明	—	不明	8 世 紀	109住に同様
II地区 243 住	長 方 形	283× 343	N 98°W	無	無	東壁南寄り	無	8世紀第１	３井戸→246→243、245住
II地区 245 住	長 方 形	—× 294 東側½	N 94°W	無	無	—	無	8世紀後半	３井戸→246→243、245住
II地区 247 住	方 形 か	—× 256 西辺側のみ	N 82°W	無	無	不明	不明	8 世 紀	241→247住→７溝→２区畠
II地区 KT-3 住	方　形	470× 520	N104°W	無	4	東壁南寄り	無	8 世 紀	３住→１溝
III地区 4 住	正 方 形	300× 300	N103°W	無	無	東壁南側	無	8世紀後半	５→４住　埋没土中から鉄滓約40点出土
III地区 13 住	推　定 方　形	不明× 330	N 96°W	—	—	東壁南側	無	8世紀後半	18→13→12住　北側は調査区域外
III地区 14 住	正 方 形	260× 260	N 12°E	無	無	—	—	8 世 紀	17住→４掘立→14住
III地区 15 住	推　定 方　形	不明× 400	N105°W	—	—	東壁南側	無	8 世 紀	15住→14溝
III地区 16 住	隅　丸 正 方 形	不明	N106°W	有	—	東壁南側	—	8 世 紀	16住→14溝

第14表　熊野堂遺跡平安時代住居一覧表

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区23住	長方形	330×260	N 82°E	無	無	東壁中央やや南寄り	東南隅	9世紀前半	
I地区26住	隅丸方形	340×不明	N 0°W	無	—	調査区域外	—	9世紀前半	
I地区68住	不明	不明	N 9°W	有	—	東壁南寄り	—	10世紀前半	
I地区69住	—	—	—	—	—	東壁	—	9世紀前半	
II地区1住	方形	325×310	N 90°E	無	無	西壁南寄り	—	11世紀	
II地区2住	長方形	295×385	N108°E	無	無	南西隅	無	11世紀	17→2住
II地区3住	長方形	335×390	N 72°W	—	無	東壁南寄り	無	9世紀第4	3→4住
II地区4住	長方形	290×415	N105°E	無	無	南西隅	無	11世紀第2	3→4住
II地区5住	方形	380×390	N 85°W	無	無	東南隅	無	平安時代	10→5住→無名土坑
II地区6A住	方形	425×465	N 26°E	無	無	東壁南隅	—	平安時代	6C→6A→6B住
II地区6B住	長方形か	—×470	N 75°W	無	有	東壁南寄り	東南隅	11世紀	6C→6A→6B住
II地区7住	不整方形	340×315	N 76°W	—	—	東壁南寄り	—	11世紀前半	6C→12→6A→7、6B住
II地区8住	長方形	480×680	N 85°W	無	4	東壁中央北より	南東隅2基	10世紀第1	10→8住、三彩小壺出土 9住は8住と同一住居
II地区12住	方形か	—×345	N 77°W	無	無	東壁南寄り	無	9～10世紀	12→6B、7住
II地区13住	長方形	270×385	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀	21→13住
II地区14住	方形か	—×335	N 69°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀	19→14住
II地区15住	方形	395×320	N 78°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	30→23→15住
II地区16住	方形	315×330	N 73°W	無	5	東壁中央南寄り	—	9末～10初	17→16住

No	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 17 住	方　形	324× 360	N 68°W	無	無	東壁中央	東南隅	10 世 紀	17→16住
II地区 18 住	方形か	—× 200	—	—	—	—	—	平安時代	北東隅から約２mの範囲を確認
II地区 19 住	方形か	—× 340	N 66°W	無	無	東壁中央北寄り	無	9～10世紀	19→14住
II地区 20 住	方形か	—× 335	N 71°W	無	無	東壁南寄り	無	11 世 紀	38→30→20住
II地区 21 住	長方形	265× 368	N 78°W	無	無	東南隅	無	11 世 紀	55→52→25→21→13住
II地区 22 住	長方形	275× 385	N 60°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	39→34A・B→22住
II地区 23 住	長方形	—× 340	N 59°W	—	—	東壁南寄り	カマド右下か	11世紀第２	30→23→15住
II地区 24 住	方　形	215× 215	N125°W	無	無	東壁中央	無	9～10世紀	
II地区 25 住	長方形	345× 420	N 82°W	無	無	東壁南寄り	北東隅	10世紀第４	55→52→25→21→13住
II地区 26 住	長方形	295× 355	N 89°W	有 全周	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	56→53→44→26住
II地区 27 住	方　形	325× 315	N 79°W	無	無	無	無	11世紀第１	55→48→41→27住
II地区 28 住	不　明	195× 150 北東隅のみ	不明	無	有	—	無	平安時代	全体図で位置だけを報告
II地区 29 住	方　形	285× 240	N 93°W	無	無	無	無	9世紀第３	57→50→46→36、35→29住
II地区 30 住	隅丸長方形	—× 375	N 89°W	無	無	東南隅	無	11 世 紀	30→20、23→15住
II地区 31 住	方形か	235× 255	N 53°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀後半	33→32→31住
II地区 32 住	不　明	不明 南壁の一部	不明	—	—	—	—	平安時代	33→32→31住
II地区 33 住	長方形	320× 490	N 81°W	無	無	東南隅	南西隅 円形	10 世 紀	33→32→31住
II地区 34 住	方形か	290× —	N 80°W	無	無	—	無	11世紀第１	39→34→22、15住
II地区 35 住	方　形	270× 280	N 83°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第４	57→46→35、36→29住

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区36住	方形	255×230	N 92°W	無	無	無	無	平安時代	57→50→46→36→29住
II地区37住	長方形	315×425	N 85°W	不明	不明	無	不明	10世紀前半	54→37→20、23→15住
II地区39住	不明	—	不明	無	無	東壁南寄り痕跡あり	無	平安時代	54→39→34住
II地区40住	方形か	100×100	—	—	—	—	—	平安時代	58→53→44→40住
II地区41住	長方形	260×—	N 76°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第4	55→48→41→27住
II地区43住	長方形	255×305	N 76°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀	60→47→59、43→49住
II地区44住	方形か	—×320	N116°W	無	無	東壁	無	10世紀か	58、56→53→44→26、40住
II地区45住	方形か	—×265 東壁側確認	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀中頃	57→51→45住
II地区46住	長方形	255×350	N 68°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀後半	57→50→46→35、36→29住
II地区47住	長方形	300×450	N 80°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀後半	60→47→59、43→49住
II地区48住	長方形	395×455	N 66°W	無	無	不明	無	平安時代	55→48→41→26、27住
II地区49住	長方形	345×445	N 80°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	60→59→49住 金銅製飾金具出土
II地区50住	長方形か	425×—	N 92°W	無	無	無	無	9世紀第2	57→50→36、35→29住
II地区51住	—	— 東壁側確認	N 75°W	—	—	東壁中央	—	9世紀中頃	57→51→45住
II地区52住	長方形	250×385	N 81°W	無	無	東壁南寄り	南西隅	10世紀	52→25住
II地区53住	長方形か	—	N 71°W	無	無	—	東南隅	10世紀か	56→53→44→26、40住
II地区54住	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	平安時代	54→39→38→25→23→21→15→13住
II地区55住	不明	不明 北東隅のみ	N 95°W	無	無	—	無	10世紀第2	55→25→48→41住
II地区56住	長方形か	310×	N 86°W	無	無	—	無	10世紀初頭	56→53→44→26住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 59 住	方　形	290× 300	N 77°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀前半	60→61→47→59、43→49住
II地区 64 住	方　形	265× 300	N 90°W	無	4	東壁南寄り	東南隅 楕円形	10世紀第1	66→65→64住
II地区 65 住	長方形	255× 375	N 91°W	有 全周	無	無	—	10 世 紀	66→65→64住
II地区 66 住	長方形	325× 380	N 78°W	不明	不明	東壁南寄り	不明	10世紀第1	66→65→64住
II地区 69 住	長方形	305× 415	N118°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀前半	
II地区 70 住	方　形	255× 305	N 79°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 円形	10世紀前半	76→70住
II地区 72 住	長方形	305×385	N 80°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 円形	10世紀第2	
II地区 73 住	長方形	255× 360	N 81°W	有 全周	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	74→73住、規模は周溝基部で計測
II地区 74 住	長方形	280× 390	N 92°W	無	無	無	無	9世紀第2	74→73住
II地区 76 住	方　形	360× 390	N 90°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 楕円形	9世紀後半	76→70住
II地区 78 住	方形か	—× 320 カマドのみ	N105°W	—	—	—	—	9世紀前半	77→71→78住
II地区 81 住	長方形	430× 620	N 87°W	有	無	東壁南寄り	東南隅	9世紀後半	
II地区 83 住	長方形か	不明	N 90°W	無	無	東壁南寄りか	無	10世紀第2	111→109→101→82→100→83住
II地区 84 住	方　形	290× 340	N 93°W	有 全周	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀前半	硯出土
II地区 86 住	長方形	345× 415	N 81°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀前半	117→119→118→116→110→86住
II地区 87 住	長方形	360× 290	N106°W	無	無	東壁南寄り	東南隅 方形	9世紀前半	115→87住 銅滓出土
II地区 88 住	長方形	250× 375	N 90°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀前半	96→116→90→98、88住→52土坑
II地区 89 住	長方形	245× 375	N 84°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	151→147→89住
II地区 90 住	長方形	225× 355	N 81°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第4	

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 91 住	長方形	270× 350	N 78°W	—	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀前半	113→93、94→91住
II地区 92 住	不　明	310× 350	不明	—	—	東壁	—	9世紀か	カマドのみ残存
II地区 93 住	長方形	265× 350	N 76°W	無	無	不明	無	9世紀第3	91住に同様
II地区 94 住	方　形	250× 285	N 79°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	9　世　紀	91住に同様
II地区 95 住	方　形	320× 380	N 79°W	不明	不明	東壁中央	不明	9世紀後半	95住→14溝
II地区 97 住	方　形	305× 345	N 91°E	無	無	西壁南寄り	無	10世紀第2	119→118→116→86→97住
II地区 98 住	方形か	× 250	N 74°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第1	116→112→98→88住
II地区 99 住	長方形	275× 355	N 79°W	無	無	東壁中央	東南隅	10世紀後半	115→112→98→88→99住
II地区 100 住	長方形	274× 360	N 85°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第1	111→109→101→82→100→83住
II地区 102 住	長方形	225× 317	N 94°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀か	110→108→87、102住
II地区 103 住	方形か	—	N 80°W	無	無	東壁	無	10世紀第2	106→105→104→103住
II地区 104 住	方形か	350× —	N 89°W	無	無	—	無	10　世　紀	103住に同様
II地区 107 住	不　明	—	N 83°W	無	無	—	無	9世紀第2	106→105→107→103住
II地区 112 住	方　形	245× 272	N 90°W	無	無	東壁中央	東南隅	9世紀第1	115→116→112→87→98 88→99住
II地区 113 住	長方形	× 270	N 85°W	無	無	東壁中央	無	9世紀後半	113→93、94→91住→51土坑
II地区 120 住	長方形	258× 334	N 82°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀第2	153→152→120住
II地区 121 住	長方形	270× 435	N 75°W	無	無	東壁中央	無	10世紀第2	121～126、165住の中で最も新しい
II地区 122 住	方　形	248× 258	N 81°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	123→122→121住
II地区 123 住	長方形	298× 377	N 98°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	123→122→121住

No	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
II地区 124住	長方形	283× 342	N116°W	無	無	東壁中央	無	平安時代	126→125→124→123→122→121住
II地区 125住	長方形か	190× —	N 60°W	不明	不明	不明	不明	平安時代	124住に同様
II地区 127住	長方形	280× 337	N 69°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第4	134→129→143→127住
II地区 129住	長方形	295× 330	N 81°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	9世紀第4	160→134→131→130→129→143→127住
II地区 130住	方形	377× 400	N 80°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	129住に同様
II地区 131住	長方形	250× 365	N 72°W	無	無	無	無	9世紀	129住に同様
II地区 132住	長方形	270× 347	N 74°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀第1	237→132住
II地区 135住	長方形	330× 245	N 64°W	無	無	東壁南隅寄り	無	11世紀第2	137→136→135住
II地区 138住	長方形	221× 283	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀第1	150→149→138住
II地区 139住	方形	278× 276	N 88°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀	148→139住→58→57土坑
II地区 140住	方形か	—	N103°W	無	無	—	無	平安時代	140→131→130→123、129→143住
II地区 141住	長方形	285× 330	N 70°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第3	164→142→141住
II地区 142住	方形	287× 290	N 71°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀前半	141住に同様
II地区 143住	長方形	250× 373	N 71°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第3	134→129→143→127住
II地区 148住	長方形	337× 230	N 85°W	不明	不明	—	不明	10世紀	148→139住
II地区 149住	長方形	332× 265	N 85°W	—	—	東壁南寄り	東南隅	9世紀第3	150→149→138住
II地区 150住	長方形	270× —	N 96°W	無	無	—	無	9世紀前半	149住に同様
II地区 152住	長方形	247× 336	N 93°W	無	無	東壁中央	無	10世紀第1	153→152→120住
II地区 156住	長方形	257× 375	N 70°W	無	無	東壁南寄り	東南隅か	11世紀第1	157→148→156住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 157 住	長方形	—× 405	N 73°W	無	無	—	無	10世紀前半	161→158→157 →148 → 156 住
II地区 158 住	方　形	328× 330	N 80°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀第3	164→163→161→158→157住
II地区 159 住	長方形	285× 403	N 69°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前半	164→163→159住
II地区 161 住	長方形	328× 370	N 80°W	無	無	東壁中央	東南隅	平安時代	164→163→161→158→157住
II地区 163 住	長方形	295× 335	N 93°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第2	164→163→161→158、159住
II地区 167 住	長方形	400× 525	N104°W	無	無	東壁中央	東南隅	9世紀第3	4区4 →166、168→ 4区5 →167住
II地区 169 住	方　形	290× 340	N 81°W	無	2	東壁南寄り	東南隅	11　世　紀	170→169住→118土坑
II地区 182 住	長方形	290× 406	N 61°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	11世紀第1	31溝→147土坑→182住
II地区 183 住	方　形	—× 306 西側½	N102°W	無	無	不明	東南隅	平安時代	
II地区 184 住	方　形	198× 296	N 91°W	無	有	東壁中央	東南隅	10世紀前半	186→185→197→184住
II地区 187 住	方　形	180× 248	N 85°W	有	無	東壁南寄り	東南隅	平安時代	214→187住
II地区 188 住	隅丸長方形	294× 372	N 73°W	有 全周か	—	東壁南寄り	東南隅	10　世　紀	197→198→ 4 区21→188住
II地区 189 住	長方形	240× 330	N 65°W	無	無	東壁南寄り	—	10世紀第3	214→189住
II地区 190 住	長方形か	—× 380 西辺のみ	—	—	—	—	—	平安時代	185→197→190住
II地区 195 住	長方形	264× 204	N 89°W	無	無	東南隅	無	11世紀前半	214→202→201→195住
II地区 196 住	方　形	238×260	N 63°W	無	2	東壁南寄り	南西隅	11世紀前半	214→196住
II地区 198 住	長方形	288× 352	N 79°W	無	無	東壁南寄り	無	9世紀第3	199→197→198→ 4 区21→188住
II地区 200 住	方　形	333× 380	N 91°W	無	1	東壁南寄り	東南隅	11世紀前半	218→ 4 区28→219→200住
II地区 201 住	長方形	270× 360	N 70°W	無	無	東壁南寄り	無	平安時代	219→202→ 4 区31→201→195住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 202 住	長方形	282× 394	N 86°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀前半	201住に同様
II地区 203 住	不　明	—	N100°W	—	—	東壁	—	平安時代	カマドのみ確認 219→203→202住
II地区 205 住	不　明	— カマドのみ	N110°W	—	—	東壁	—	平安時代	206→205→３区15住
II地区 222 住	不　明	— 東南隅のみ	—	—	—	—	—	平安時代	
II地区 223 住	方　形	285× —	N 75°W	無	無	東壁南寄り	西南隅	11世紀第２	227→226→223住
II地区 226 住	方　形	300× 300 西辺隅のみ	N 69°W	無	無	不明	不明	平安時代	227→226→223住
II地区 227 住	方形か	— 西辺側のみ	N 73°W	無	無	—	—	平安時代	227→226、239→223住
II地区 230 住	方　形	—× 350	N 91°W	無	(2)	東壁南寄り	東南隅	10世紀第３	108→87→230住
II地区 231 住	方　形	260× 340	N102°W	有 全周	3	東壁南寄り	東南隅	10世紀第２	
II地区 233 住	長方形か	—× 325 東側½	N 83°W	無	無	東壁中央	無	平安時代	
II地区 235 住	方　形	376× 392	N 83°W	無	無	東壁中央寄り	無	11世紀前後	238→235住→158土坑
II地区 237 住	方　形	250× 295	N 91°W	無	無	東壁南寄り	南西隅	10 世 紀	155、238→237→132住
II地区 239 住	長方形	212× 306	N 65°W	有 全周か	無	東壁南寄り	無	10世紀第４	３区８→227→239住→３区２溝
II地区 248 住	長方形	396× 316	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀第１	257→248住→39溝→206土坑
II地区 249 住	長方形か	—× 450 西辺側のみ	N 84°W	—	無	—	無	９末～10初	256→249→250住
II地区 250 住	長方形	342× 288	N 63°W	無	無	東壁南寄り	東南隅	11世紀第１	256→249→250住
II地区 251 住	方形か	— 南西隅のみ	N 65°W	無	無	南西隅	不明	11世紀前半	259→251住
II地区 252 住	方形か	—× 370 西辺側のみ	N 68°W	不明	不明	南西隅	不明	平安時代	252→256→249→250住→１溝
II地区 253 住	長方形	336× 302	N 73°W	無	無	東南隅	南壁カマド寄り	11世紀第２	252→256→250→253住

No	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 254 住	長方形	273× 320	N 66°W	無	無	東壁南寄り	不明	11 世 紀	38溝→254住→1溝
II地区 255 住	長方形か	― 南西隅のみ	N 80°W	不明	不明	不明	不明	10世紀後半以降	255住→198土坑
II地区 256 住	長方形	242× 283	N 72°W	無	無	東壁南寄り	不明	9世紀第4	252→256→250→253住
II地区 257 住	長方形	264× 328	N 74°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀第2	257→248住→39溝→206土坑
II地区 258 住	長方形	―× 318	N 60°W	無	無	不明	不明	11世紀第1	261→259→258住→37溝
II地区 260 住	方形か	―× 336 西辺側のみ	N 70°W	無	不明	不明	不明	平安時代	260住→40溝
II地区 262 住	不整長方形	―× 310	N 55°W	無	無	―	―	平安時代	262住→40溝
II地区 3-2 住	長方形	260× 320	N 56°W	無	無	東壁南隅 新旧2基	南西隅	10 世 紀	3区6→3区1→3区2住
II地区 3-7 住	方　形	290× 305	N 74°W	無	4	東壁南隅	無	9末～10初	3区6→3区5→3区7住
II地区 3-9 住	長方形	342× 304	N 72°W	無	無	東壁南寄り	無	11世紀前後	3区12→3区10→145→3区9住
II地区 3-15住	長方形	273× ―	N 58°W	有 全周か	不明	不明	不明	9世紀か	206、3区4住→3区3溝、3区16→3区15住
II地区 3-16住	方形か	― 北西隅のみ	N 58°W	―	―	―	―	平安時代	206、3区4住→3区3溝→3区16→3区15住
II地区 3-17住	不　明	― 北西隅のみ	N 73°W	―	―	―	―	平安時代	3区3溝→3区17住→2溝
II地区 4-3 住	長方形	367× 498	N 95°W	無	2	東壁南寄り	東南隅	9世紀第3	4区4→4区5→4区3住
II地区 4-7 住	長方形	293× 387	N 83°W	有 全周	無	東壁南寄り	東南隅	10世紀第3	4区6住→1方周墓→4区8→4区7住
II地区 4-8 住	隅丸方形	235× 259	N113°W	無	3	無	北東隅	平安時代	4区6→4区8→4区7住
II地区 4-10住	長方形	295× 428	N 95°W	無	2	東壁南寄り	無	11世紀第1	4区14、4区11→4区10住
II地区 4-17住	長方形	255× 395	N 84°W	無	無	東南隅寄り	東南隅	11世紀前半	4区19→4区18→4区17住
II地区 4-21住	長方形	246× 394	N 75°W	無	無	東壁南寄り	無	10世紀後半	199→4区21→188住

No.	形　状	規模(cm)	方　位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時　期	備　考
II地区 4-27住	長方形	265× 348	N 97°W	有 全周	無	東壁南寄り	南西隅	11世紀前半	4区29→4区26→4区24→4区27住
II地区 4-31住	方台形	390× 420	N 90°W	無	1	東壁中央	無	10世紀第4	4区29→4区26→4区24→4区30→4区31→4区27住
II地区 KT-1住	方　形	395× 365	N 92°W	無	無	無	無	10世紀前半	KT-3住→1溝→KT-1→KT-2住
II地区 KT-2住	長方形	320× 245	N 85°W	無	無	東南隅	東南隅	10世紀後半	KT-3→KT-2住→2溝→5土坑
II地区 KT-4住	方　形	310× 272	N 73°W	無	2	東壁南寄り	北西隅	10世紀後半	
III地区 1　住	不　整 長方形	240× 330	N 89°W	無	無	東壁南側	無	10世紀後半	
III地区 10　住	推　定 長方形	不明× 280	N 97°W	—	—	東壁北側 袖無、石組	無	10世紀後半	
III地区 11　住	不　明	不　明	N 82°E	—	—	—	—	10　世　紀	
III地区 12　住	推　定 方　形	不明× 280	N 83°W	—	—	東壁南側 粘土袖、瓦石による補強	—	10世紀後半	

第15表　熊野堂遺跡時代不明住居一覧表

No.	形状	規模(cm)	方位	周溝	柱穴	炉・カマド	貯蔵穴	時期	備考
I地区 24住	不整隅丸長方形	320× 225	N 22°E	無	無	東壁中央にピットあり	無		ピット内に炭化物と焼土灰が堆積する
I地区 25住	隅丸方形	× 310	N 65°E	—	—	—	—		27→26→25住　東側は調査区域外
I地区 46住	隅丸長方形	390× 310	N 20°E	—	—	東壁南寄り	東南隅か		
I地区 47住	—	318× 300	N 82°E	無	1	東壁中央	—		
I地区 62住	—	—	—	—	—	—	—		62住→2号特殊井戸、カマド先端部のみ確認
II地区 126住	—	東壁一部確認	—	—	—	—	—		126→125→124→123→122→121住
II地区 165住	—	—	N110°W	—	—	—	—		165→126→125→124→123→122住
II地区 206住	—	— 東壁のみ	—	—	—	—	—		206→205→3区15住
II地区 207住	—	北西隅のみ	—	—	—	—	—		3区3溝→207住
II地区 216住	—	南壁の一部	—	—	—	—	—		218→216→219住
III地区 17住	推定長方形	290× 230	N 8°E	—	—	南壁中央に焼土がある	—		17住→5掘立→14住
III地区 18住	推定方形	不明× 480	N105°W	—	—	推定東壁南寄り	—		18→13→12住　北側は調査区域外
III地区 20住	—	不明	—	—	—	—	—		20住→3井戸　南西隅を確認
III地区 22住	—	—	N 89°W	有	—	—	—		北東隅付近だけを確認

第２節　弥生時代磨製石鏃の製作工程について

女屋和志雄

１　はじめに

熊野堂遺跡からは、弥生時代中期から後期の住居跡が66軒確認されている。今回報告したII地区では中期７軒、後期36軒の合わせて43軒があり、集落の中で南の一群を構成している。

II地区の弥生時代の遺構からは、磨製石鏃の製作に関する未製品や素材となりうる剝片、加工の跡を示す微細な剝片類が合わせて約40点出土している。出土状態は、５軒の住居で製品や剝片がみられ工房と判断したが、製作した場を示す加工台や敲打具、砥石などを必ずしも共伴するものではない。また、その数は、砥石や礫器だけの住居を含めると10軒を超す可能性が高い。製作は、資料や道具組成からみて専業とする程ではなく、住居数軒の小群単位で集落内への供給を目的としたものと考えられる。ここでは、関連した資料を集成して製作工程を復元する。

２　製作工程について

製作工程は、遺跡への素材搬入後、『１、分割→２、研磨→３、穿孔･仕上げ』の大別３つの工程に復元される（第40図）。以下、工程別にその特徴をのべる。

『素材』は群馬県西南部を東西に横断する古生代末から中生代の地質構造線である『三波川帯』中に産出する緑色～灰緑色を基調とした緑色片岩や珪質準片岩が使用されている。この石材は、該期の高崎市新保遺跡・前橋市清里庚申塚遺跡・甘楽町白倉下原遺跡（註１）にてらしても、ほぼ同様であることから凡その時代性、地域性として理解される。選材の理由は、『結晶質片岩特有の簡単に剝離しやすく板状に割ることができ、軟質であるために加工が容易なこと』にある。その供給は、遺跡内の砥石や礫器の中でも、同じ三波川帯から産出する『緑色片岩類』が多く用いられていることからすると、石器自身の素材と合わせた供給ルートを通じて搬入されたものである。

搬入時の形状は、加工等の痕跡からすると『板状に剝離された手のひら大のもの』で、既に加工意図を持ってある程度の成形をされていたと考えられる。大きさは、最大例が、238住－９（第40図１）の6.2×3.4cmの長方形、厚さ0.6cmで、この半分程で両端に折断痕を持つものが150住、34溝（第40図２～４）で出土している。色調や肉眼観察では、製品を含めて少なくとも３種類の石質が認められる。

１　灰緑色系で堆積方向に縦縞がみられるもの

115住－９・10・11、136住－４、150住－１、238住－10、４区12住－14

２　銀灰緑色系

238住、４区19住－17・18

３　青灰色系

115住－８、171住－12、197住－２、218住－４、４区19住－16・19、４区28住－10・11

以上が代表的なものである。上記の観察からわかることは、『遺構毎に素材が特定されず、製品と剝片との関係が一致しないこと、青灰色系のものに有孔の製品が多いこと』がわかる。前者は、115住や４

区19住のように混在した例からすると、分業の可能性よりは限られた素材を有効に利用した結果と考えられる。後者は、製品とした中でも孔の有無により製作段階が異なるか、無孔のものは側面や端部の成形が不十分なことからすると未製品とも考えられる。

『分割』は、素材を割って基本的な剝片をえる工程１から、その剝片の形状を整える工程２の順序で行われる。基本的には、片岩特有の板状に剝離しやすい性質を利用して行われるが『折断技法』と『施溝折断技法』の２つの方法がある。

『折断技法』は、工具や工作台などの角に押し当てて折り取るもので、敲打や分割用の溝を伴う例もあるが石の堆積による目がそのまま利用されている。工程では、主に研磨前段階の基本的な形状を得るための荒割りにみられ、第40図の３～７が該当する。18～20は、その折断された一方の剝片である。

『施溝折断技法』は、本遺跡の製作上の特徴で前者を効率よく確実にしたもので、折断する箇所にあらかじめ溝や筋を施すものである。工程では、主に板状に荒割された剝片の成形を目的とし、第40図の１や２、特に11にはよく痕跡を残している。施溝は、３種類がある。

1　『擦切様の直線的で幅広ろなもの』238住－９（第40図１）を例にとると、端部の厚さ１㎜強で直線的な刃部を持つ工具が使用され、針め方向から素材の半ばまで擦り切る様に施溝することで折断をより確実、容易にしている。

2　『長さ１㎝前後の部分的で分割用の目印痕と考えられるもの』４区19住－７（第40図11）では、両側端と下端部の表裏に深さを異にした筋が施されている。類例は、製品の中にも見られるが概して研磨により消失する。

3　『幅１㎜以下の細い条痕状のもの』これは、金属の刃先で直線や斜交して切り付けたような状態をさすが、敲打による表面の剝落を防ぐ意図であろうか。

工具は、第41図の９に示した石庖丁の様なものも考えられるが鋭利な痕跡からすると金属器であろう。

『研磨』は、成形と仕上げを目的として全面に施される。第40図８～13資料としたが、８・12・13は製品の可能性がある。順序は、表裏両面を板状に磨き出した後に周縁をめぐる。表裏は、稜線を消すことと厚さを一定にすることが目的で、方向は主に長軸に対して直交から斜交である。周縁は、側面から先端のとぎ出し、さらに下端面への順序が一般的である。研磨痕は、太くて粗い条痕様のもの（研磨Ａ）と細くて密に平行線状のもの（研磨Ｂ）があり、砥石の精粗と工程の違いを示している。

砥石は、第41図の１～５・７などが相当する。石質は、２～４が砂岩、１・５・７は粗粒安山岩である。砂岩系は、研磨Ａ・Ｂに相当する工具で全体に平滑な研磨痕がみられ、手持ち用でも３と４は長方形に成形されている。安山岩系は、痕跡からすると敲打具の機能が主体の万能具で住居内の道具組成の一つである。

『穿孔』は、片面と両面の双方があり一定はしていない。４区19住―18（第40図25）は、平玉の穿孔途中のものであるが、痕跡からすると径１㎜弱の棒錐を使用している。

『工具』本遺跡の住居では、敲打痕や擦痕を持つ礫器の出土頻度が高く、道具組成の特徴といえる。工具は、その中に含まれて機能を共有したと考えられ、区別はむずかしいが第41図に集成したものが

ある。１～５・７は先述した様に砥石、８と９も擦り面を持ち砥石の機能を持っていた可能性がある。６は、下瑞面に敲打痕と赤色顔料の付着物があり、その生産工具で砕くか擦り潰す用途である。赤色顔料の付着物は、８の擦り面にもみられる。10は、安山岩の工作台で、図示した面に固定のための３ヶ所以上の打ち欠きと表裏に対の凹み穴がある。この穴は、１や８にもみられ、特に８の周縁には敲いた跡が明瞭に残っている。

『製品』の特徴は次のとおりである。

1　製作された器種は、鉄鏃か銅鏃を模倣した石鏃と平玉がある。製作工程の復元では、主体は石鏃にあり、平玉はその分割時の剝片を利用している。

2　石鏃の形態は、孔の有無と作りの精粗で分類した。

　Ａ類　有孔・柳葉形で断面が紡錘状の細身のもの（第40図14～16）

　Ｂ類　有孔・変五角形で先端に尖りをもつもの（　〃　17）

　Ｃ類　Ｂ類に近い形状で無孔のもの（　〃　8）

　Ｄ類　無孔・変五角形で下端にえぐりをもたないもの（　〃　13）

Ｃ・Ｄ類は、穿孔もなく作り方も粗雑なことから未製品とも考えられるが、11と12は同じ４区19住から出土し、Ｉ地区16住やその他の遺跡出土例（註２）からみても製品での形態差であろう。

3　遺構について

工房と判断したのは、未製品や剝片の出土を理由とした。明確に遺物が伴う住居は、115住、218住、238住、240住、４区19住、の５軒がある。このほかにも、道具組成の特徴では155住や164住など数軒に可能性がある。時期は、いずれも後期樽式の後半である。この時期は、谷頭をはさんで南北２つの住居群が形成され、中期後半から継続する集落が北へと発展した最盛期といえる。５軒は、工房としての製作の場や特定の道具の出土状態は認められず、形状や規模、内部の様子の点でほかの住居と共通している。遺構分布の上で、南の住居群に限定される点に特徴がある。

115 住　長方形　470×350cm　石鏃のＡ・Ｂ類と折断された剝片の各２点が壷・甕・台付甕・高杯などとともに出土。北東主柱穴と脇にあるピット周囲で集中する。

218 住　長方形　360×480cm以上　石鏃の研摩工程と剝片が礫器と出土。

238 住　隅丸長方形　422×532cm　石鏃Ｃ類と施溝折断痕を持つ剝片が第40図４・７・８・10と出土。道具組成にまとまりがみられるが、４を除いて２号炉内から出土したもので８の付着物からすると赤色顔料の生産工具とも推定される。

240 住　隅丸長方形　360以上×606cm　折断された剝片と礫器が出土。甕が10個体以上と注口土器、土製匂玉、磨製石斧などが共伴する。

４区19住　隅丸長方形　558×670cm　石鏃Ａ・Ｂ類製品と折断された剝片に平玉未製品が砥石とともに出土。高杯が多く、甕などを模倣したミニチュア土器が共伴する。工作の場は南西隅と推定される。

4　まとめ

本遺跡での磨製石鏃の製作は、次の特徴がある。

1　製作は、専業とする程ではないが集落の南の住居群だけに限定され、集落内部での供給を目的とした小規模なものである。

2　時期は、集落の最盛期である後期樽式後半に限定される。

3　工程は、『分割→研磨→穿孔、仕上げ』の3つに分けられる。分割には『折断』と『施溝折断』の2つの技法があり、中でも『溝や筋をほどこすこと』に特徴がある。素材は、搬入時にある程度成形された『珪質準片岩や緑色片岩』の結晶質片岩類を選材し、剝片の一部では平玉が製作され、素材の有効利用がはかられている。

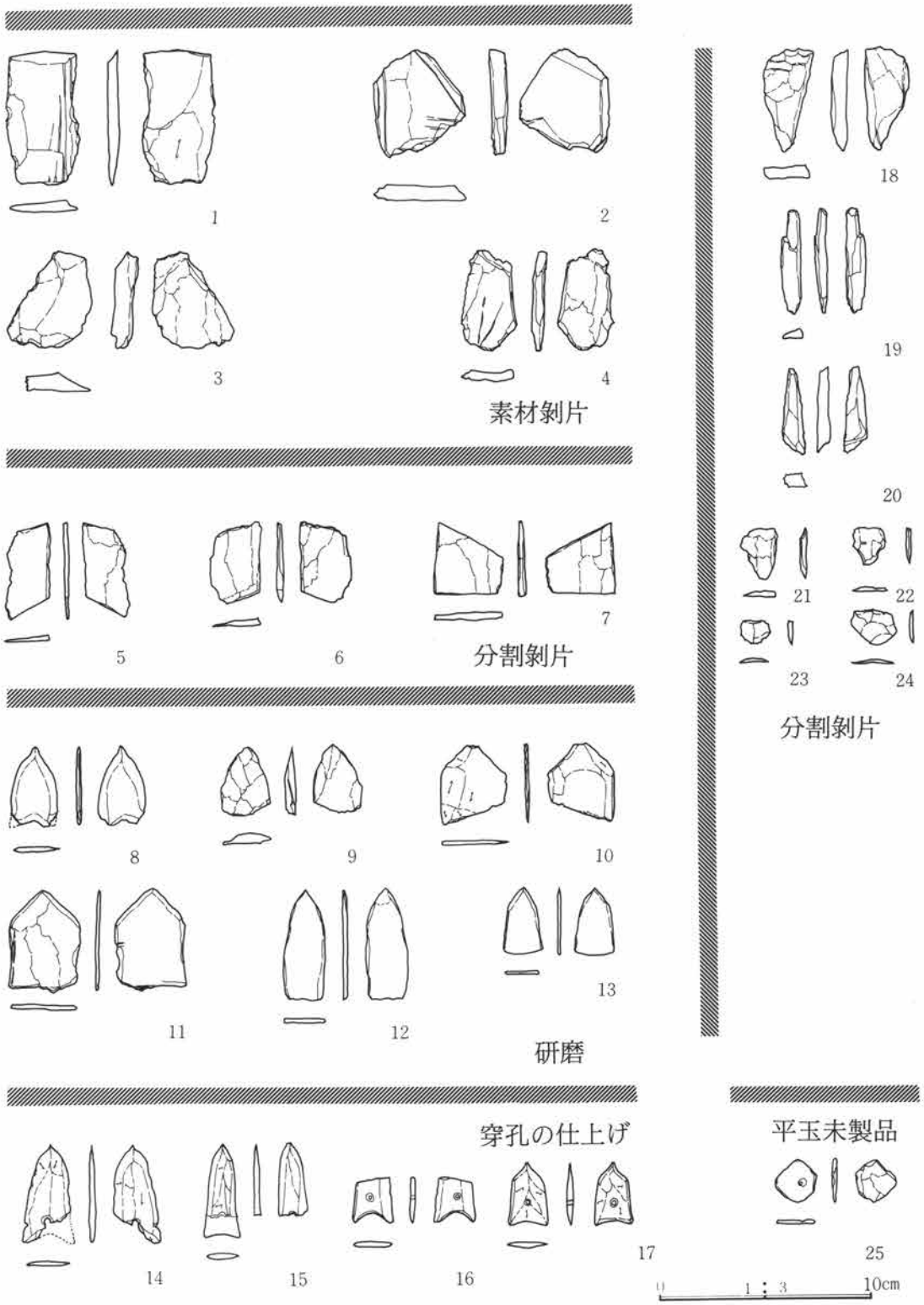
4　道具組成は、住居内で多くみられる砥石や礫器があり、工具はその中に含まれて機能を共有して製作したと考えられる。同時に、類似した工程や礫器の付着痕からすると、赤色顔料の生産が行われていた可能性がある（註3）。

註1　新保遺跡は、中期後半から後期まで継続する集落で『珪質準片岩や緑色片岩』を使用した磨製石鏃が166・173・289住などで出土している（財・群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『新保遺跡II』1988）。清里・庚申塚遺跡』1981）。白倉下原遺跡は、珪質片岩などを使った磨製石鏃の工房跡が調査されている。熊野堂遺跡と同様に2群のうち、一方の住居群に工房があるという。

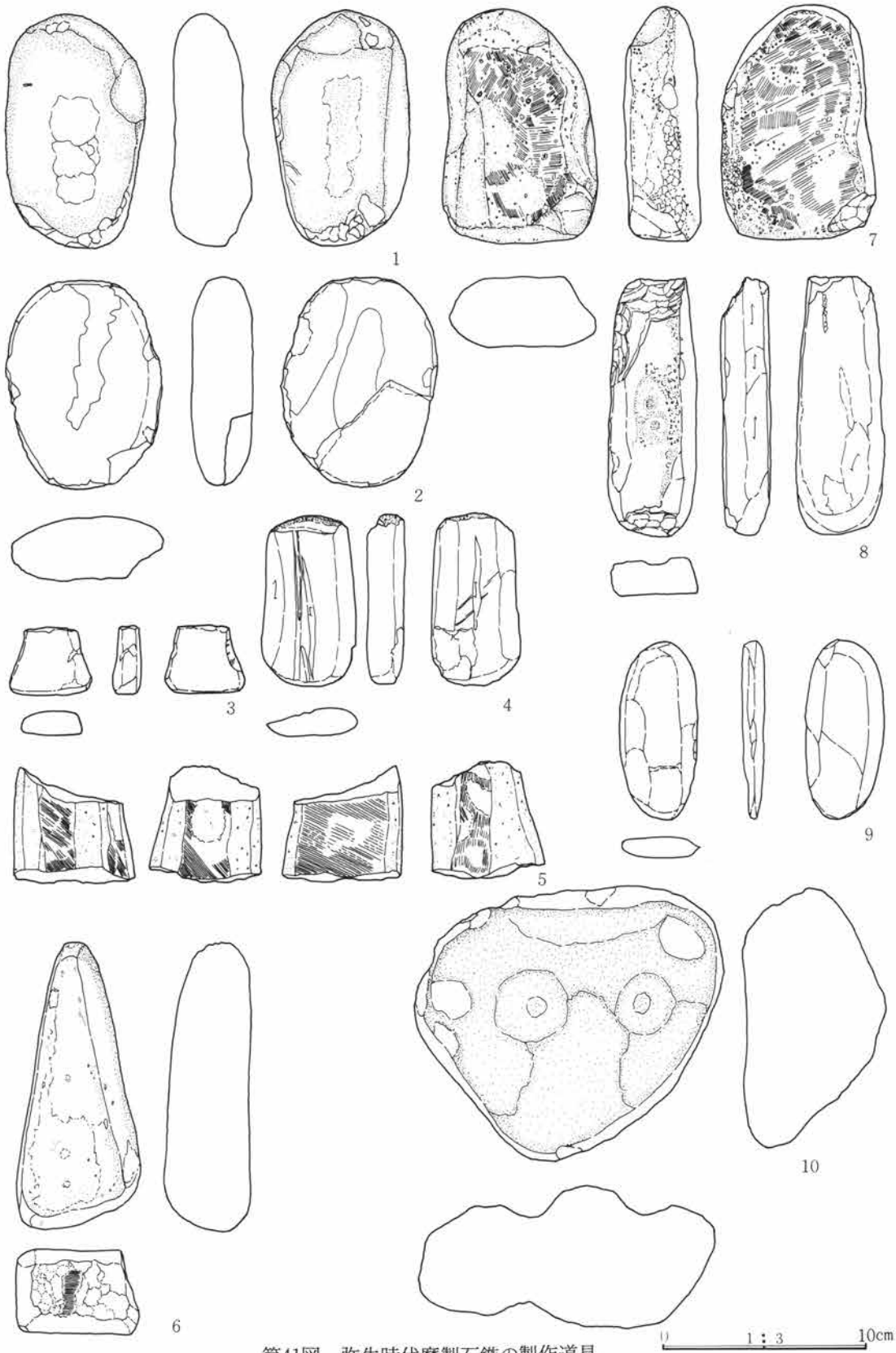
註2　I地区の16号住ではB類とD類が出土し、新保遺跡173住ではC類が出土している。

註3　本遺跡のI地区では、9・10・13・15・16号の各住居で赤色顔料が出土し、その生産と赤色塗彩土器の製作が遺跡内で推定されていた。II地区では、5軒の住居で磨製石鏃が製作され、礫器の付着物や類似した製作工程から、赤色顔料の生産も行なっていた可能性がある。これら遺物の生産や製作は、集落内の供給を目的とし集落が南北に発展する後期段階での南の居住域の卓越性と中期後半以来の継続性を背景にして行われたものであろう。

○ 素材の遺跡内搬入



第40図　弥生時代磨製石鏃の制作工程図



第41図　弥生時代磨製石鏃の製作道具

第３節　古墳時代前期の土器について

友廣　哲也

はじめに

群馬県では古墳時代前期の土器として弥生時代後期樽式土器と全く異なった系譜をもつ土器として石田川式土器という土師器の一群がある。この土師器は東海伊勢地域に祖形をもつ土器群であり、石田川遺跡出土遺物をもって命名された土師器である。[(1)] この外来土師器と在地弥生時代樽式土器の接点はほとんど認められないことが多かった。しかし、近年の発掘事例により樽式土器と土師器の共伴する事実が増加してきた。熊野堂遺跡もこの例に漏れず土師器と樽式土器の共伴例が認められた。本文では周辺の遺跡を含めた中で出土土師器の位置づけを試みたい。

遺構出土事例（第42図・43図）

熊野堂遺跡では外来土師器が多数検出されている。このうちその系譜が認められる遺構を取り上げてみたい。

熊野堂遺跡Ⅲ地区[(2)]８号住居址

№１在地樽式土器、№８伊勢地域に系譜が求められるＳ字状口縁台付甕が共伴している。№１Ｓ字状口縁台付甕の特徴は口縁部は直立ぎみで上段・下段とも外反し上段は短く先端はやや尖る、口縁部下段には刺突文が認められる。肩部には横線が施されている。赤塚次郎氏伊勢地域のＳ字状口縁台付甕編年ではＡ類に比定されよう。[(3)]

熊野堂遺跡Ⅲ地区９号住居址

本住居址からは樽式土器は共伴せず土師器の一群である。№４パレス壺の破片であり文様の特徴は平行線文、ヘラ描山形文が施される。口縁部は欠損しているが文様構成の特徴は浅井和宏氏分類のＥ段階にあたる。[(4)] №11高坏は坏外面下部に弱い稜線をもつ伊勢地域元屋敷式にその系譜を求めることができる。

熊野堂遺跡９号住居址

№１樽式土器は頸部に３連止めの簾状文が巡る。樽式土器終末期にあたる。

４区15号住居址

№６は伊勢地域では直口壺、№７、８は小型の高坏№４は単口縁台付き甕の脚部である。

４区18号住居址

№６は樽式土器台付甕と土師器が共伴している。

209号住居址

№１は畿内系二重口縁壺の系譜が認められる。№５は樽式土器高坏である。

以上熊野堂遺跡出土遺構を取り上げてみた。県内では樽式土器から変化する土器は認められるものの、大部分は外来に系譜を求められる土師器である。さらに周辺の遺跡をみたい。

熊野堂遺跡の南方烏川沿いに下佐野遺跡[(5)]がある。

Ⅰ地区、Ｂ区16号住居址

№1、2Ｓ字状口縁台付甕、№3長頸坩が共伴し、小型高坏が出土し、№4は口縁部が直線上に外傾し下部には疑凹線が巡る、頸部は強くくびれ北陸地方月影式に系譜を求めることができる。共伴するＳ字状口縁台付甕は赤塚氏のＢ類に比定されよう。

下佐野遺跡Ｉ地区Ｃ区10号住居址

№1、2、3、4、5のＳ字状口縁台付甕、№6小型坩、№7は口縁部の特徴が北陸月影式に求めることができる。

熊野堂遺跡の土師器は8号住居址出土Ｓ字状口縁台付甕は赤塚Ａ類、9号住居址高坏は各々元屋敷式段階に比定される。北陸地方では月影式は畿内庄内式に並行するか、やや先行するとされており、東海、北陸それぞれの出自の地域での並行の関係を指摘することができる。つまり熊野堂遺跡、下佐野遺跡出土土師器は畿内地域庄内式段階との並行が位置づけられる。

次に県内他遺跡での外来土器との共伴関係を比較してみたい。前橋市荒砥島原遺跡[6]Ａ区1号周溝墓から畿内庄内式系布留式の壺が出土している。荒砥北原遺跡[7]1号周溝墓からは二重口縁壺が多数検出されこの中には元屋敷式に系譜の求められる高坏が共伴している。熊野堂遺跡Ⅲ地区9号住居跡出土高坏と並行が認められる。渋川市有馬遺跡[8]82号住居跡、同211号住居跡からは北陸月影式土器が樽式土器と共伴している。再度月影式の年代観を見るまでもなく樽式土器後期段階は月影式土器を媒介として庄内式の段階を当てる事ができる。また庄内式の段階には群馬県に外来の土師器が搬入したことを示している。

上記以外の月影式の土器が検出された遺跡は前橋市内堀遺跡[9]H15号住居跡、高崎市新保遺跡[10]70・125号住居跡があり樽式土器と共伴している。内堀遺跡に隣接する上縄引遺跡[11]周溝墓からは月影式甕の5の字口縁部に樽式土器の文様である波状文が施された土器が検出されている。

筆者は群馬県古墳時代前期の土器群を3期に分けている。詳細は別稿[12]に譲るが略述すると第1期は庄内新段階布留式古段階式に並行する前掲の遺構の土師器である。第2期は小型坩の出現を画期としている。第3期は小型坩を主流とし樽式土器の系譜が消失していく段階を想定している。

下佐野Ｉ地区Ｃ区10号住居址では月影式壺と小型坩の共伴が見られ第1期終末第2期への過渡期にある。県内を見ても月影、元屋敷、庄内式の並行関係が認められ樽式土器後期の段階に外来土師器が搬入したことが理解される。

このように熊野堂遺跡では外来土師器の搬入後樽式土器の系譜の消失が早いことが理解される。では他の地域での樽式土器の変化を見てみたい。赤城村見立溜井遺跡[13]には樽式土器の系譜を色濃く残しながら土師器化の過程上にある一群の土器が認められる。樽式土器が土師器へと変質する過程の中では土師器の影響を受けることが前提にある。井野川流域では樽式土器の系譜が消失した段階にあたり下佐野遺跡では土師器が盛行する段階にあることが理解される。同様に前橋市堤東遺跡[14]1号周溝墓出土遺物にも樽式土器の系譜が強く残る土器が認められる。このように県内では地域を異にして樽式土器の系譜が残る地域と早く消える地域が認められるが、並行関係は堤東遺跡1・2号周溝墓を始めここに上げた遺跡は小型坩の出現以前の段階にある。

Ｓ字状口縁台付甕

古墳時代前期に比定される石田川式土器の特徴としてこの器種が上げられ、石田川式土器を特徴づ

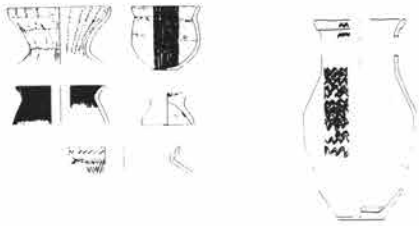
けている。Ｓ字状口縁台付甕が古墳時代前期の甕の主体をなしてはいる。田口一郎氏は元島名将軍塚古墳報告書考察[15]のなかでＳ字状口縁台付甕と伊勢型壺の検討の上に伊勢地方に母集団をもつ入植説を提唱された。熊野堂遺跡の土師器には単口縁台付甕も出土しており、同様な例は新保遺跡ではＳ字状口縁台付甕を出土する住居跡と並行する形で155号住居跡での甕はＳ字状口縁台付甕ではなく単口縁台付甕が主体をなしている。また月影、庄内、元屋敷式に並行する初期段階には量的にはＳ字状口縁台付甕は勝ってはいない。また石田川遺跡出土土師器にも単口縁台付甕は共伴しており、特にＳ字状口縁台付甕をもつ人間のみが移動して来たこととも理解できない。しかし、群馬県内ではＳ字状口縁台付甕が比較的長い時間幅をもって使われた事と理解される。ではＳ字状口縁台付甕の変化を見たい。田口氏はＳ字状口縁台付甕の肩部の横線の有無に着目され横線の消失する段階を４世紀中葉に設定された。熊野堂遺跡では氏の１類（赤塚氏のＡ類）Ｓ字状口縁台付甕が樽式土器と共伴している。また下佐野遺跡10・16号住居址では月影式と共伴するＳ字状口縁台付甕が認められ肩部の横線をもつものとともに横線の消失したＳ字状口縁台付甕が既に共伴出土している。肩部に横線が消える段階は月影式との並行関係の結果では更にさかのぼることが理解される。熊野堂遺跡８号住居址出土Ｓ字状口縁台付甕は赤塚氏Ａ類、他のＳ字状口縁台付甕は高坏等の共伴例から元屋敷式の年代観に並行するものと思われる。さらに、横線の消失の事実は単口縁台付甕と並行して使用しながらも量的にややまさるＳ字状口縁台付甕が搬入後早い時期、搬入と同時と言えるほど早く変質を始めたことになる。これは伊勢地域の母集団を意識した伝統を維持しているとは解釈できない。Ｓ字状口縁台付甕は群馬の地に伝播され、ここで独自の変質をはじめるのである。これは在地の弥生時代の人々の土師器の取り込みの過程の結果生じるものであろう。

まとめ

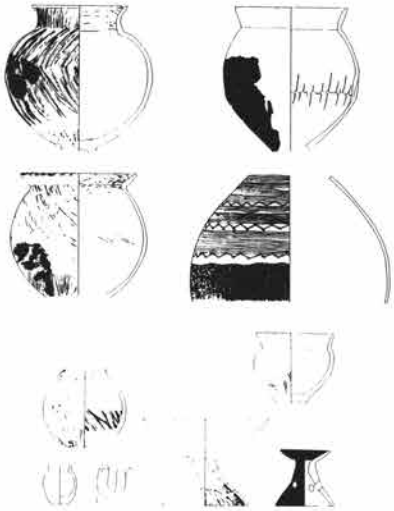
熊野堂遺跡出土土器の位置づけを行ってきたが井野川を中心とした地域では土師器のとりこみが早いことが理解できた。またＳ字状口縁台付甕の年代観にも触れた。８号住居跡出土Ｓ字状口縁台付甕は赤塚Ａ類、横線消失のＳ字状口縁台付甕の一部は元屋敷、月影式に並行し、従来の編年観はさらにさかのぼることが理解され、この結果熊野堂遺跡出土土師器は庄内新段階、布留古段階、元屋敷、月影式に並行することが妥当であるとしておく。

註

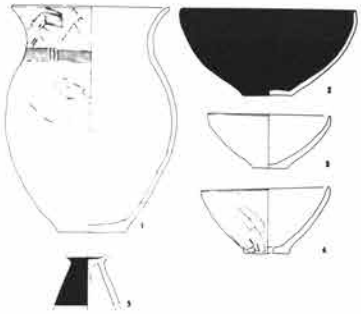
(1) 尾崎喜左雄 今井新次 松島栄治 「石田川」 石田川刊行会 1968
(2) 坂井隆 「熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
(3) 赤塚次郎「 『S字甕』覚書85」 年報 昭和60年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1986
(4) 浅井和宏 「〈宮廷式土器〉について」シンポジウム欠山式土器とその前後
第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
(5) 飯塚卓二 井川達雄 「下佐野遺跡」 群馬県教育委員会 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 東日本旅客鉄道株式会社 1990
(6) 徳江秀夫 「荒砥島原遺跡」 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
(7) 石坂茂 「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」 群馬県教育委員会 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
(8) 佐藤明人 「有馬遺跡II」 群馬県教育委員会 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
(9) 園部守央 加部二生 「内堀遺跡II」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1989
(10) 佐藤明人 「新保遺跡II」 群馬県教育委員会 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
(11) 上縄引遺跡 第三回三縣彌生時代シンポジウム彌生終末期の土器 4世紀の土器
群馬県考古学談話会 1982
(12) 友廣哲也 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」 群馬考古学手帳 Vol. 2 群馬土器観会 1991 (5月発刊予定)
(13) 都丸肇、茂木允視 「見立溜井遺跡・見立大久保遺跡」 赤城村教育委員会、群馬県教育委員会 1985
(14) 松田猛 「堤東遺跡」 群馬県教育委員会 1985
(15) 飯塚恵子 田口一郎 「元島名将軍塚古墳」 高崎市教育委員会 1981



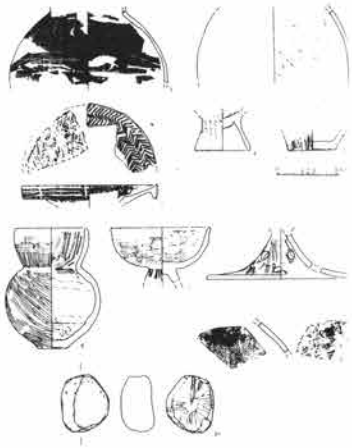
熊野堂遺跡III地区８号住居址



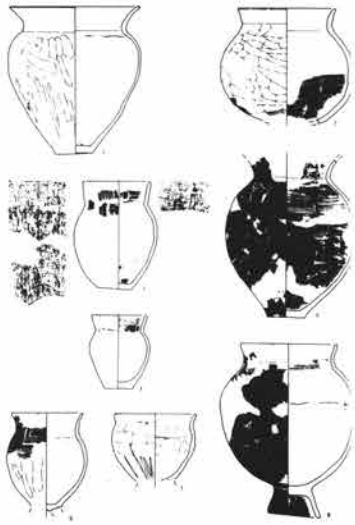
熊野堂遺跡III地区９号住居址



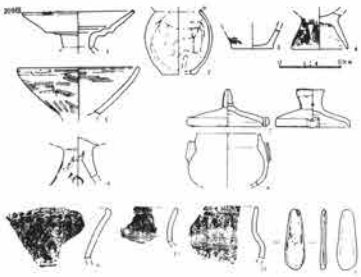
熊野堂遺跡Ｉ地区９号住居址



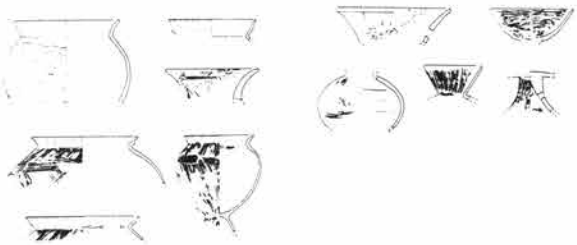
熊野堂遺跡II地区４区15号住居址



熊野堂遺跡II地区４区18号住居址

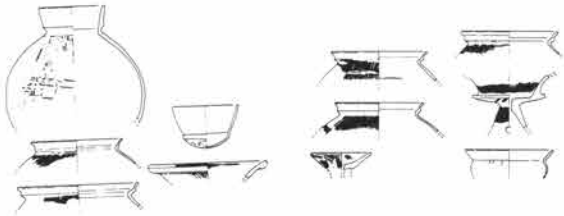


熊野堂遺跡II地区209号住居址



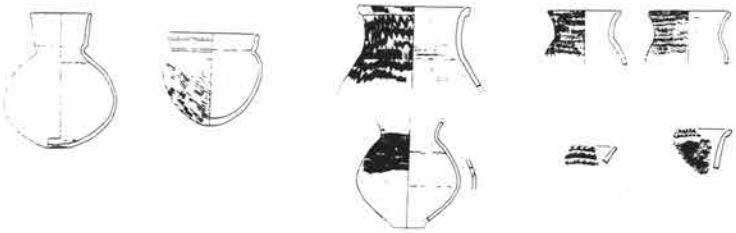
下佐野遺跡Ｉ地区Ｂ区16号住居址

第42図　古墳時代前期の土器

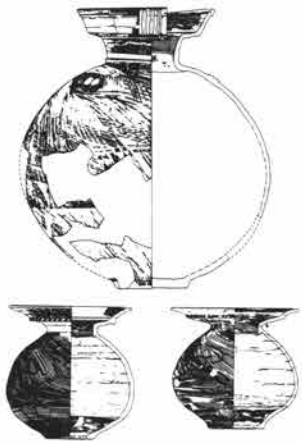


下佐野遺跡Ⅰ地区Ｃ区10号住居址

荒砥島原遺跡Ａ区１号周溝墓



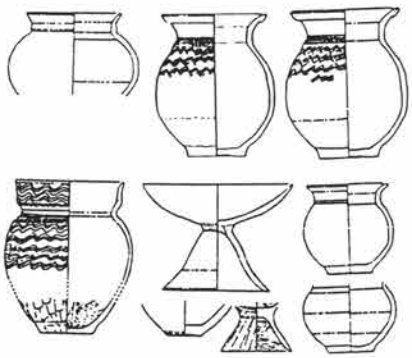
有馬遺跡211号住居跡



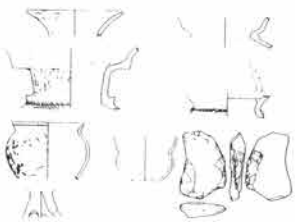
荒砥北原遺跡１号周溝墓

有馬遺跡82号住居跡

堤東１号周溝墓



上縄引遺跡



新保遺跡70号住居跡

第43図　古墳時代前期の土器

第4節　奈良・平安時代の土器

シン航空写真株式会社　三浦京子

本項では、7世紀から11世紀に属する住居跡出土の土器群を中心として考察を行う。当該期に属するものは225軒を数えるが、そのうちほとんど遺物の出土がなく、時期の不明なものが99軒ある。しかし、このうち60軒ほどは、調査所見から9～11世紀に属すると思われる。時期の確定できる遺構の時期別の粗密をみても9～11世紀に集中している傾向は窺える。

また、住居間の重複は多く全体の50％にあたる。そのうち時期の近接した重複は少なく以下の18例であり、全体に土器の出土量も少なく、重複住居間での同一器種の出土があまりないため編年の資料として使えるのはさらに限られる。

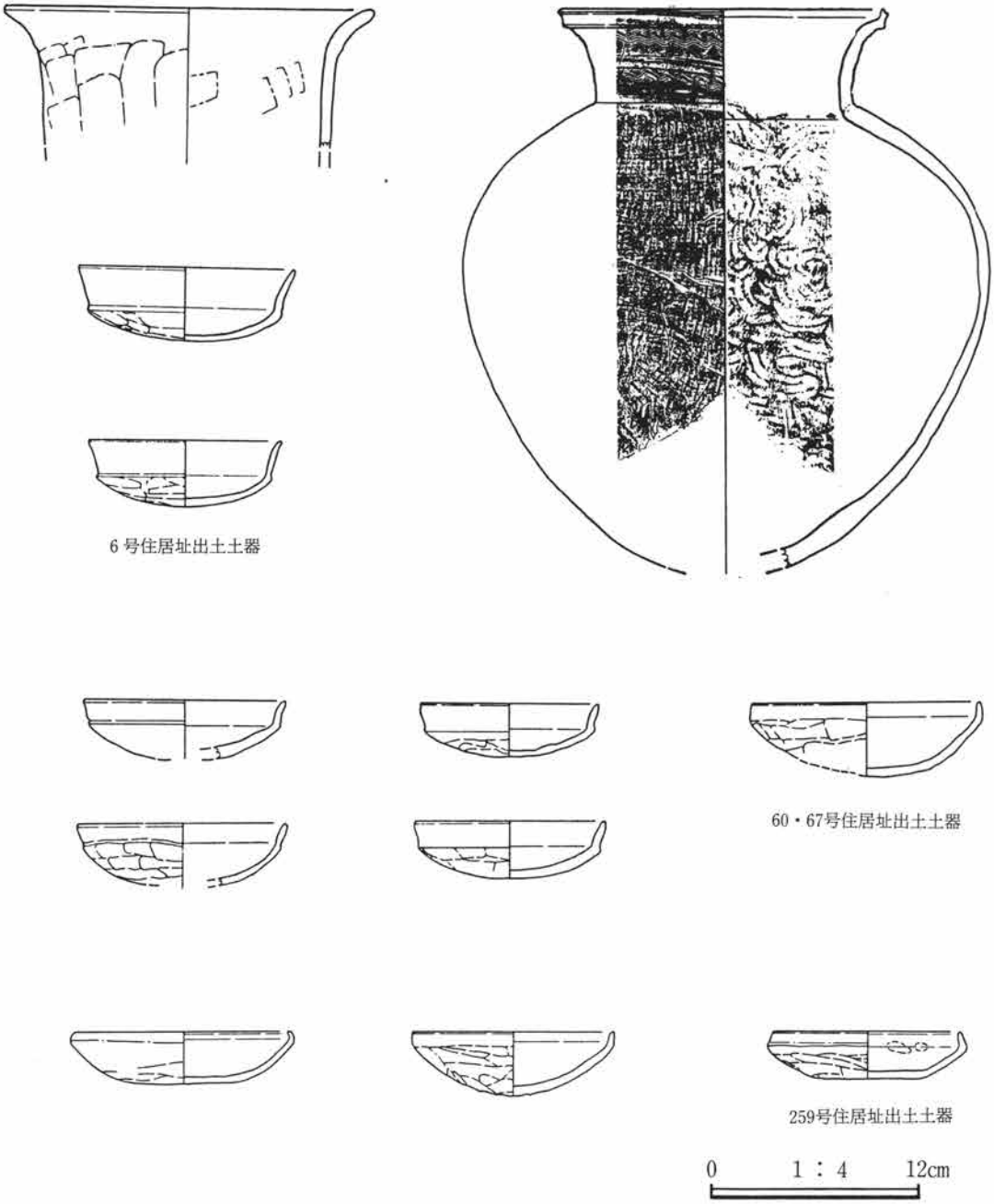
152→120住	134→143→127住	142→141住	189→182住
246→243住	257→248住	256→250・253住	55→52→25→21→13住
48→41→27住	57→50→46→29→35住	39→34→22住	57→51→45住
59→47住	55→48→41・26→27住	61→57→46→29→35住	60→61→57住
100→83住	108・112→87→230住	152→120住	134→143→127住
142→141住	189→182住	246→243住	257→248住
256→250・253住			

7世紀に属する遺構は18軒検出されているが、この中で10・57・68・75・82・116・342・241・246住の9軒は7世紀第4四半期に相当すると考えられ、残りの9軒では出土量も少なく細分にはやや資料不足である。7世紀代の唯一の重複として60・61・57住が見られるが、60住は土師器坏のみ61住には甕、57住は土師器甕・坏、須恵器坏などが出土しており、60・57住の土師器坏ではまったく形態が異なり、57住と61住の甕では、頸部のくびれやヘラケズリ調整など57住－2に後出的要素が見られる。長胴タイプの甕は、県央部の多くの遺跡がそうであるように、当遺跡でも8世紀になるとほとんど1種類になってしまうが、7世紀の段階では大きくわけて2つの形式が存在する。まず胴部が直線的で頸部があまりくびれず口縁部が外反するものは、古墳時代中期からの系統にあるもので数種類みられる。もう一方のやや薄手で、胴部に若干ふくらみを持ち、胴部のヘラケズリが斜めとなる甕は比較的斉一性が高い。

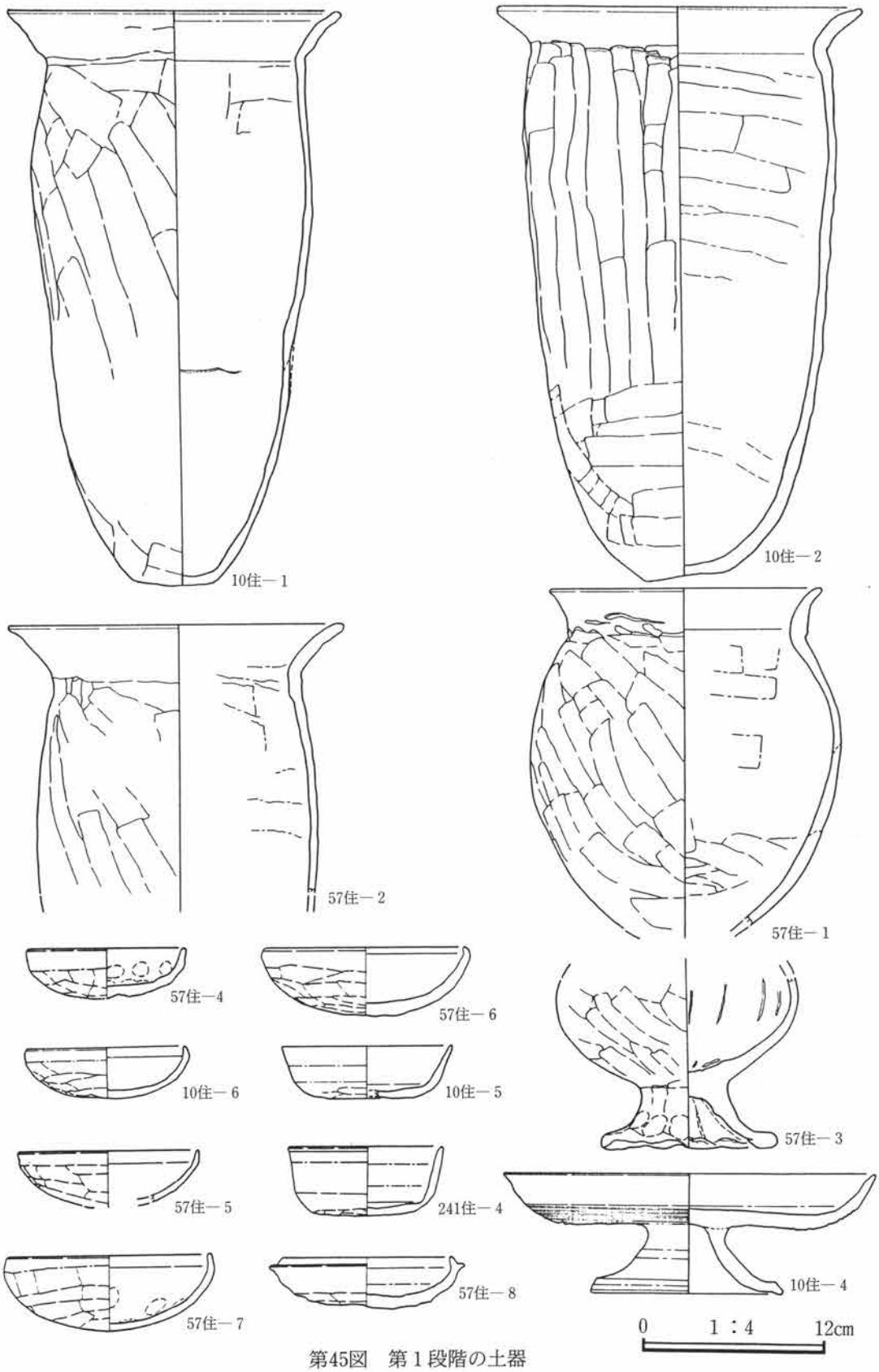
以下に資料の増える7世紀末葉から11世紀中頃までを15段階に分け、各段階の様相を記す。

第1段階（第45図）

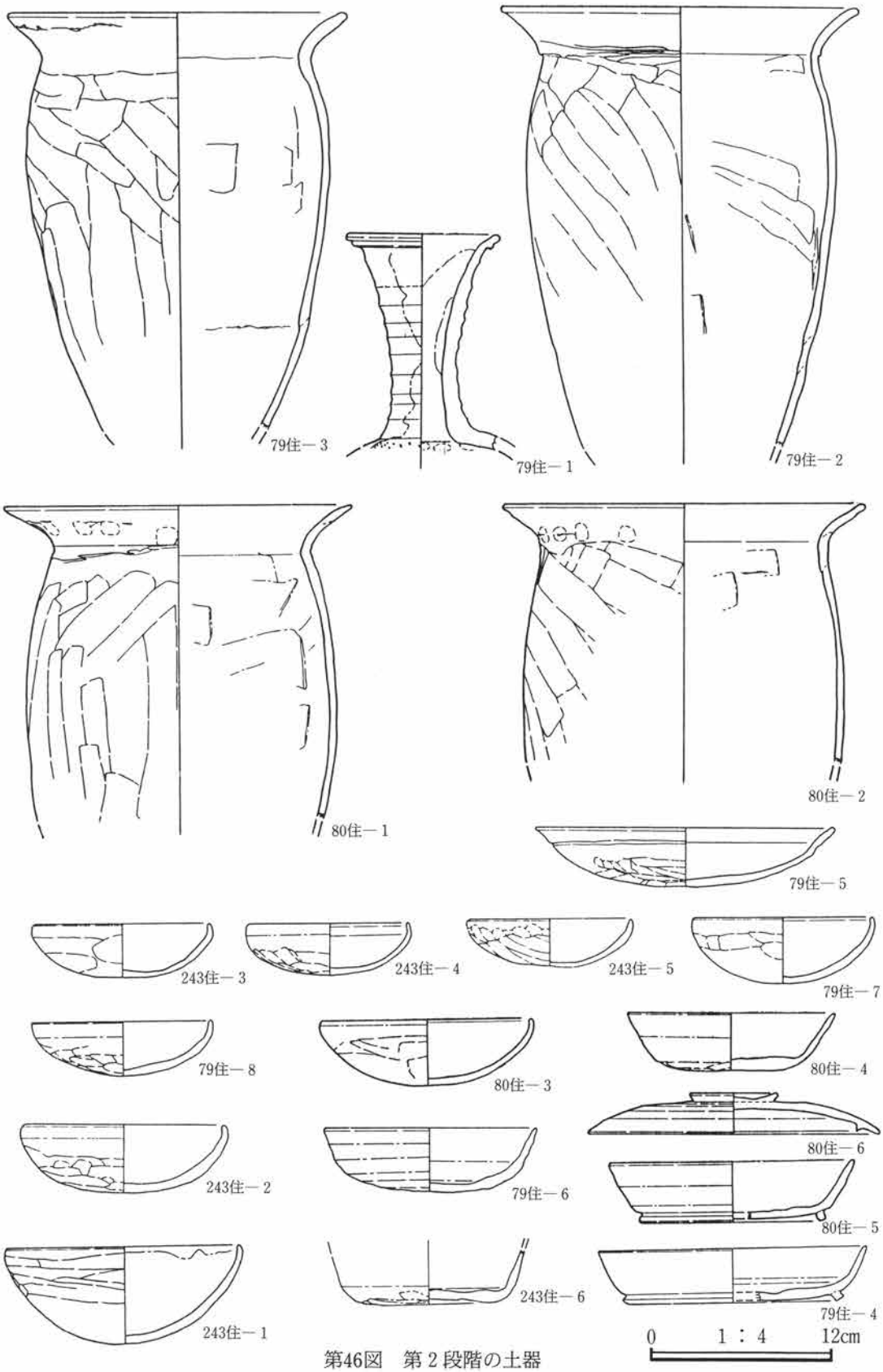
この段階に属する住居は前に述べたように9軒であるが、出土している器種は土師器甕・坏・小形甕、須恵器蓋・坏・台付皿である。土師器甕は長胴タイプと胴部の張るものとあり、前者には胴部が僅かに膨らみを持ち頸部が「くの字」状にくびれ、口縁部が直線的に開くものと、胴部が直線的で器肉が厚く、頸部はあまりしまらず口縁部の外反する10住－6、68住－1などがある。後者は246住で2点出土しており、形態は双方とも良く類似している。小形甕はこの段階までバラエティーがあり、246住－5・6、57住－8と3点とも形態が異なる。しかし、8世紀以降小形甕・小形台付甕も、口縁部



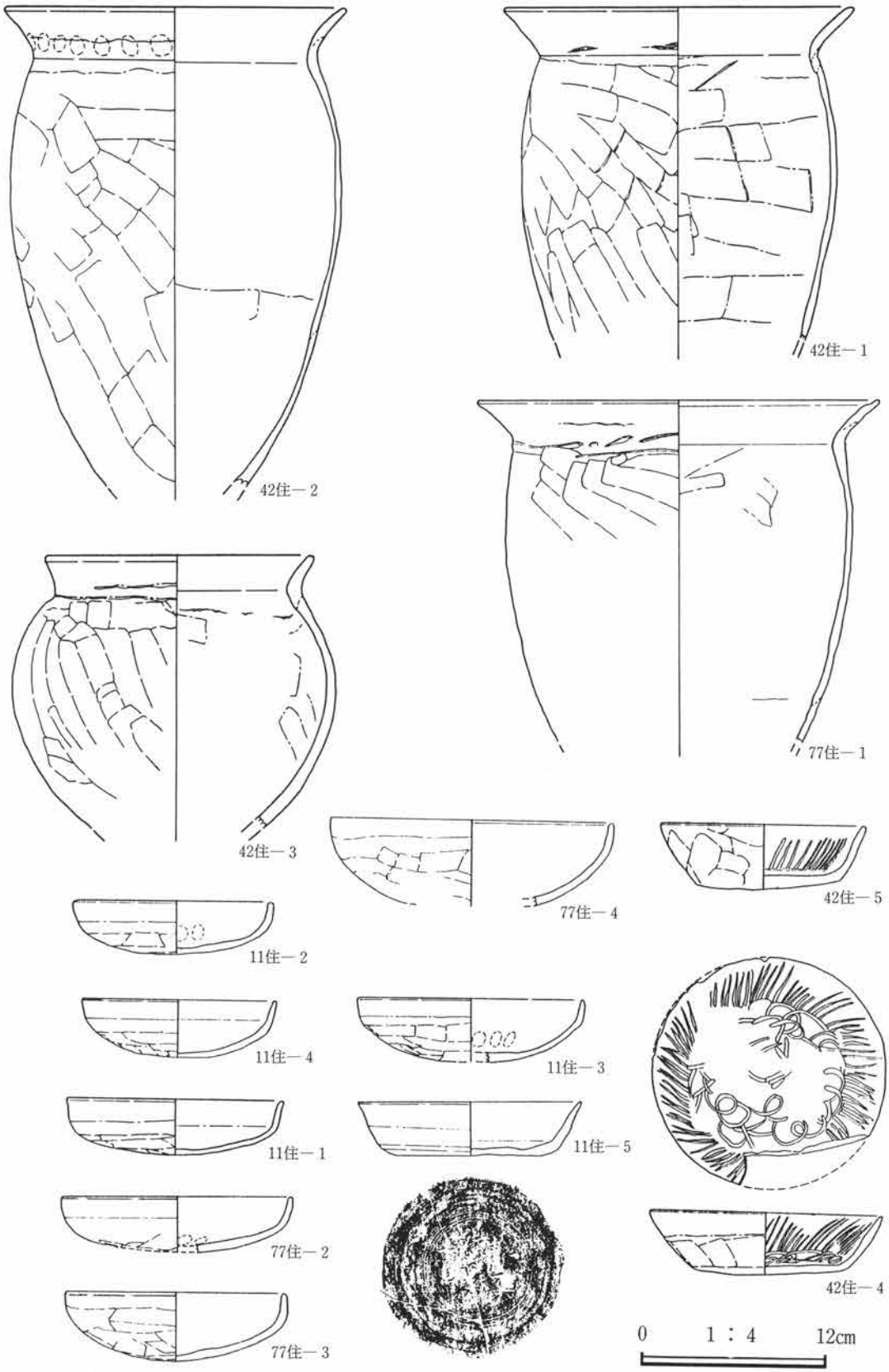
第44図　7世紀代の土器



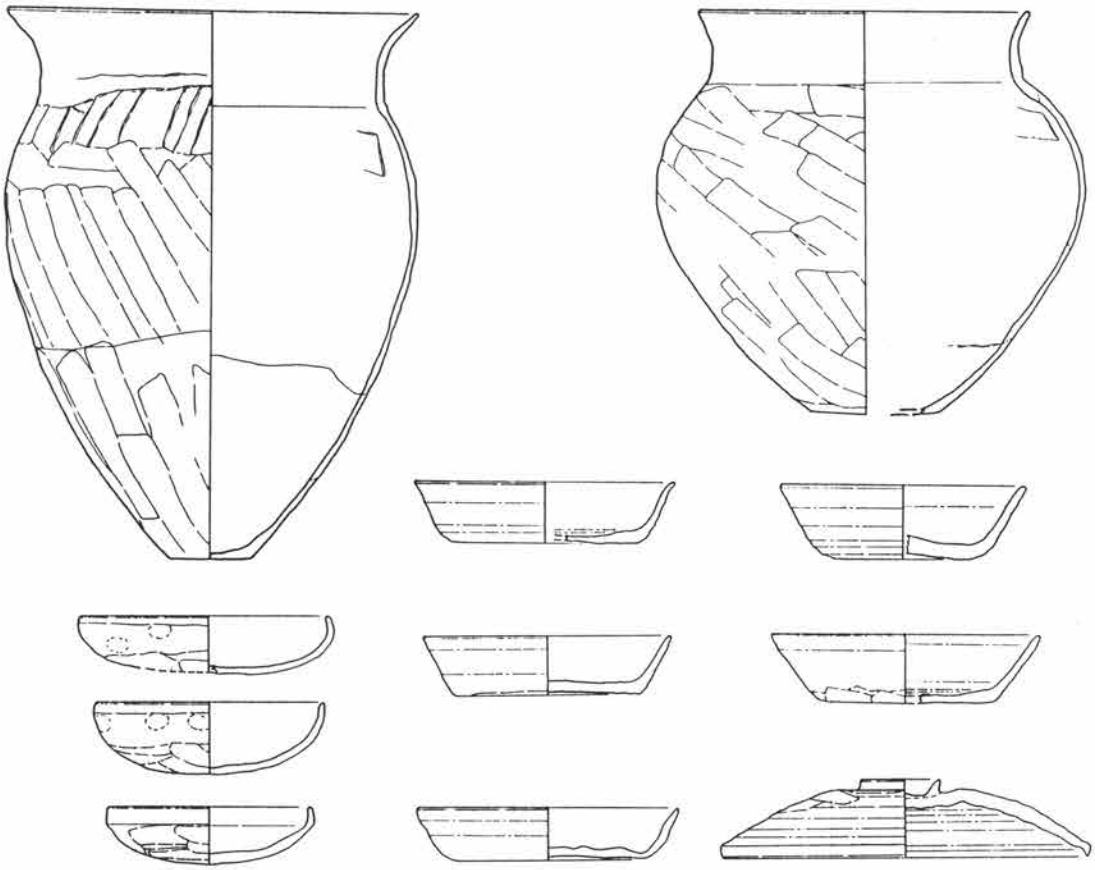
第45図　第１段階の土器



第46図　第2段階の土器

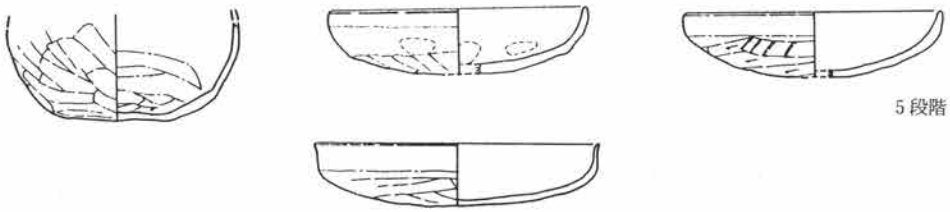


第47図　第３段階の土器



71・110号住居址出土土器

4段階

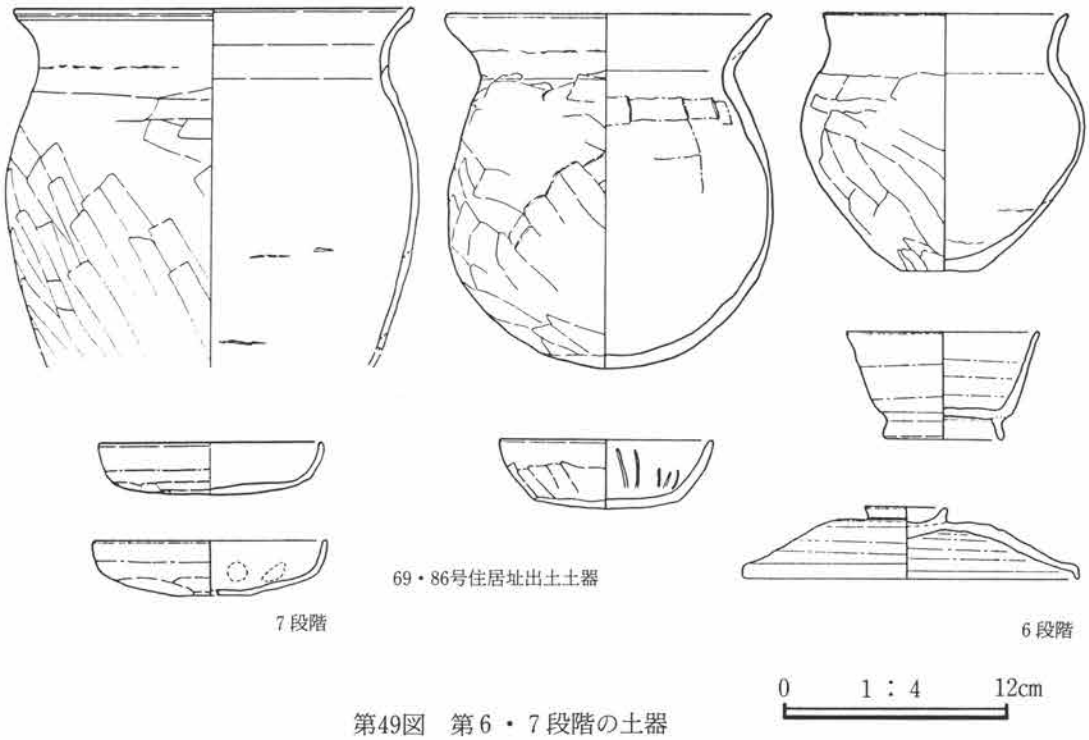


5段階

108号住居址出土土器

0　1：4　12cm

第48図　第4・5段階の土器



第49図　第6・7段階の土器

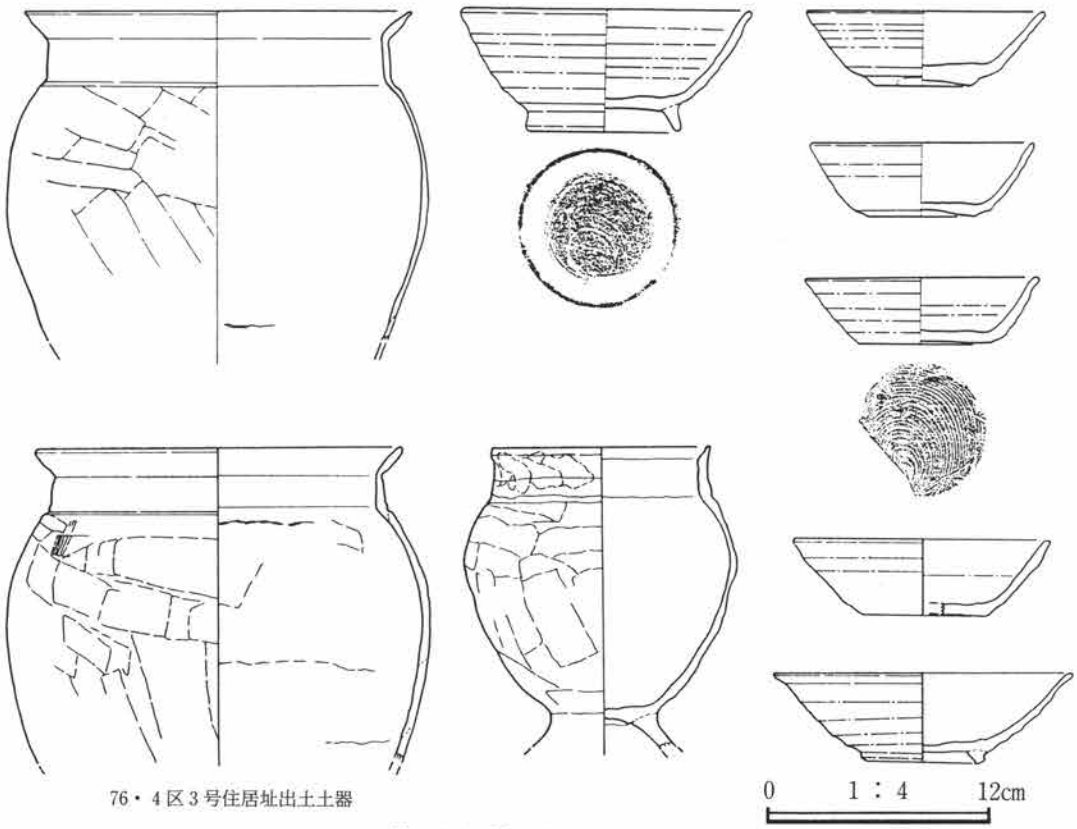
の形態変化が甕に対応する器肉の薄手な斉一的なものの出土が圧倒的となる。坏は底部から口縁部まで内湾するもので、法量は口径13cm前後、11.5cm前後、10cm前後の3種類が存在する。須恵器坏で、57住出土のものは口縁部に蓋受けを持ち、鳥羽遺跡k37住に同様の坏が出土しており、共伴している土師器甕もよく似ている。10住には口縁部の直線的な坏が出土しており、口径10.5cmと小形である。他に脚付盤が出土している。最近出土例が増してきており、口唇部の形態には丸く納めるもの、平坦面をもつもの、平坦面に沈線の巡るものなどがある。

第2段階（第46図）

器種のある程度揃っている住居は79・80住のみであるが、その他85・243住がこの段階として挙げられる。土師器甕は4点出土し、前段階よりも胴部の膨らみが若干増す傾向にあり、共に良く類似している。坏は深めで丸底でも底部の中心が張り出すような形態（79住―4・5、80住―3、85住―1、243住―1）と、底部から口縁部まで湾曲するタイプがある。皿は79住で1点出土しており、口径19.5cmの大形品で外面の稜は弱い。須恵器は蓋・坏・高台付坏などが出土している。坏は3点とも形態の異なるもので79住―6は底部丸底で回転ヘラケズリ、体部は直線的に開く。80住―4は底部の器肉が厚く平底、体部は薄手で直線的に開く。蓋は80住―6の1点だが口径は19.0cmと大きく、つまみも扁平な大形でかえりが付く。高台付坏は79・80住に2点出土しており、類似するタイプだが79住のほうが器高がやや低く高台のつくりはシャープである。

第3段階（第47図）

この段階では、11・42・77住が挙げられる。土師器甕は前段階と同系列にある甕と、小形甕（42住―3）が1点出土しており、口縁部は短く開き胴部は球形状を呈する。坏は11・77住に見られ、前段



第50図　第8段階の土器

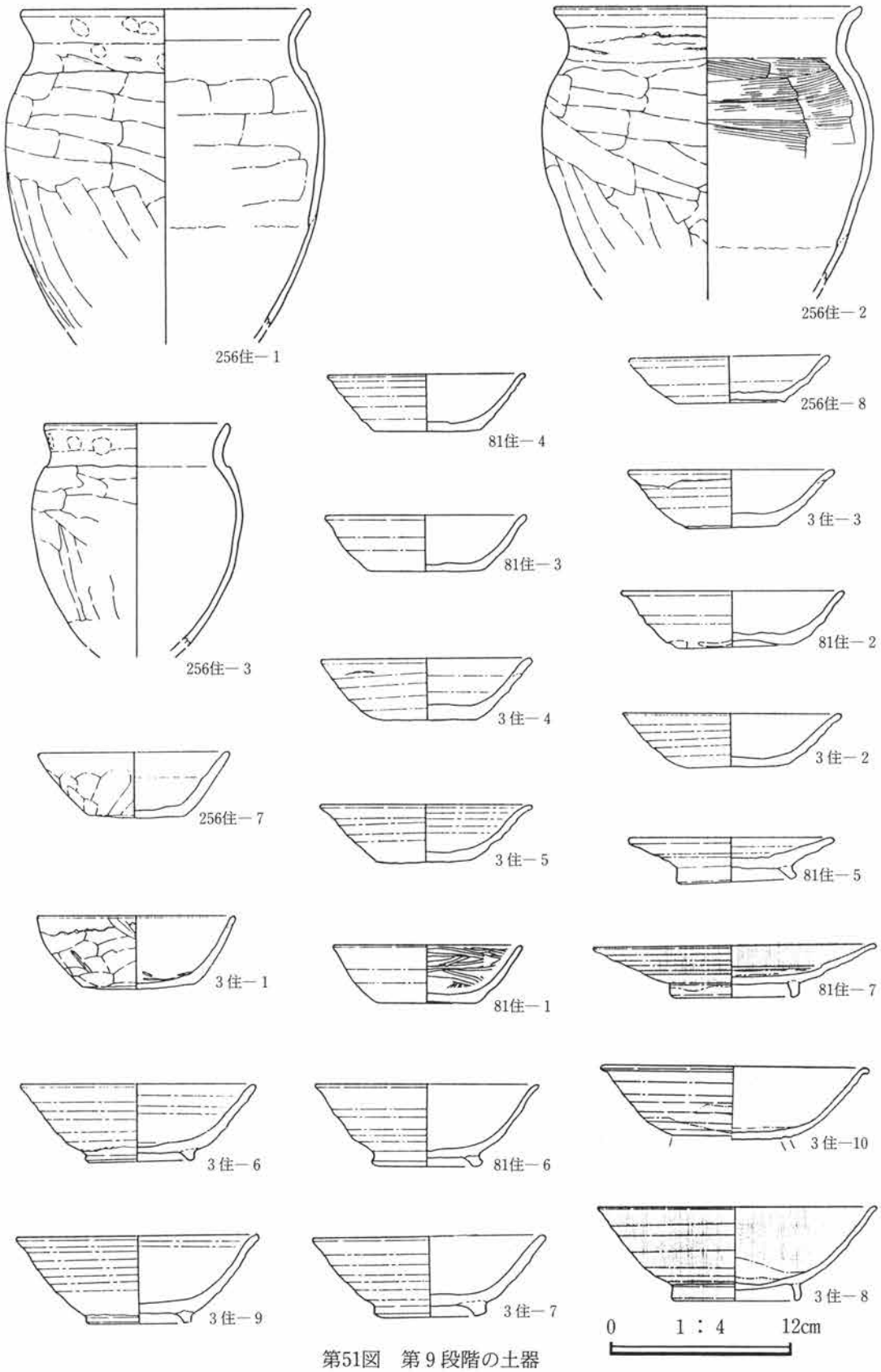
階のように底部中央の出る形態は少なく底部から体部に丸みを持ち、口縁部は外側が若干丸みを持つが内湾しないものが主である。42住には暗文土器が出土しており、1段階82住の暗文土器に比べると平底となり器肉も薄手である。須恵器坏は11住の1点のみであり、底部は回転ヘラケズリ底径は大きく器高は低い。

第4段階（第48図）

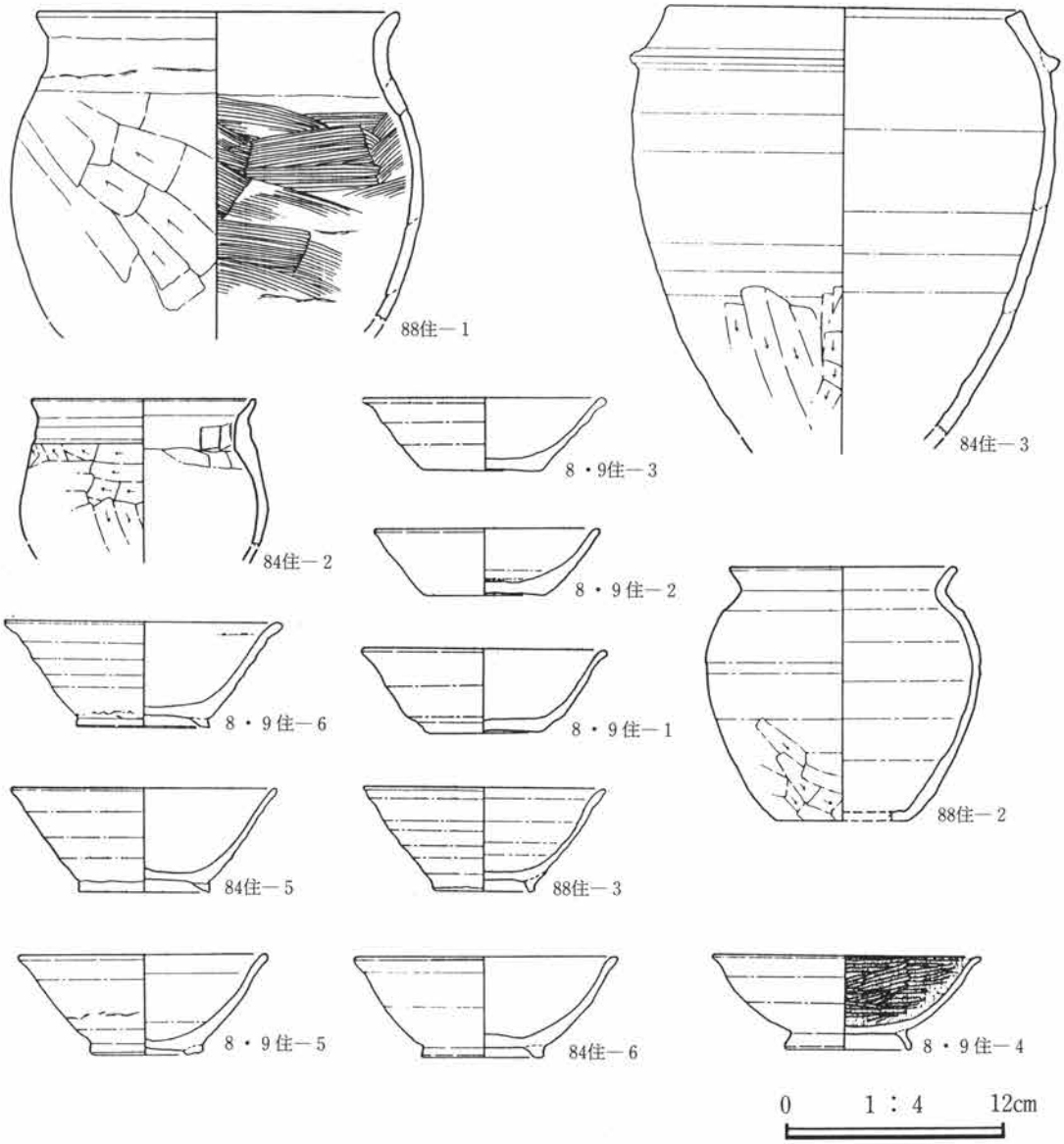
この段階と考えられるものは58・71・110住である。土師器甕は110住のみであるが、前段階に比べ器高が低く胴部の器肉も薄手になっている。また小形甕もあり、胴上位に大きく張りを持ち器肉も薄手胎土や調整など長胴タイプの甕に良く類似している。土師器坏は丸底、口縁部も丸みを持つが器肉が薄手となる。須恵器坏は3種類見られ、器高が低く体部のあまり開かない（71住－4、110住－2・4）やや器高が高く体部の直線的に開くタイプ（110住－5）、体部立ち上がりに丸みを持ち器高が高いタイプである。他に須恵器椀が58住にあるが、高台の断面三角形の細長いタイプでこのような椀は4段階以前から出土しているが出土量が少ないことや、良好なセット関係で捉えられるものが少なくその変遷は不明瞭である。また、5・6段階には同様の高台で器高の高いもの（50住－1・59住－2）が多く出土するようになるが、この58住の椀との関連は不明瞭である。71住－5の蓋はこのような椀に付くものと思われる。

第5段階（第48図）

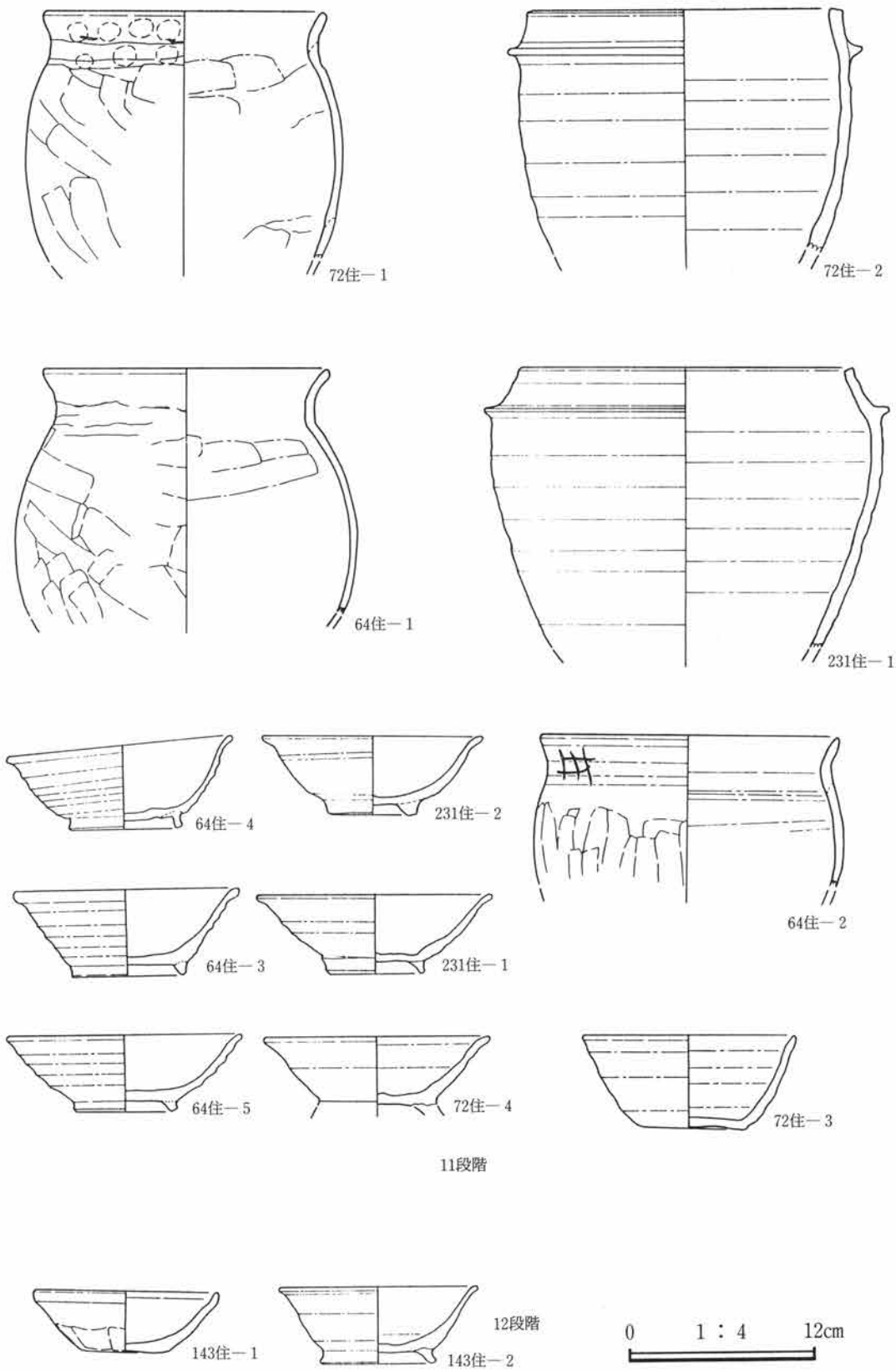
この段階に属するものはほとんど見られない。基準となる土師器甕の出土がなく、坏の形態でこの



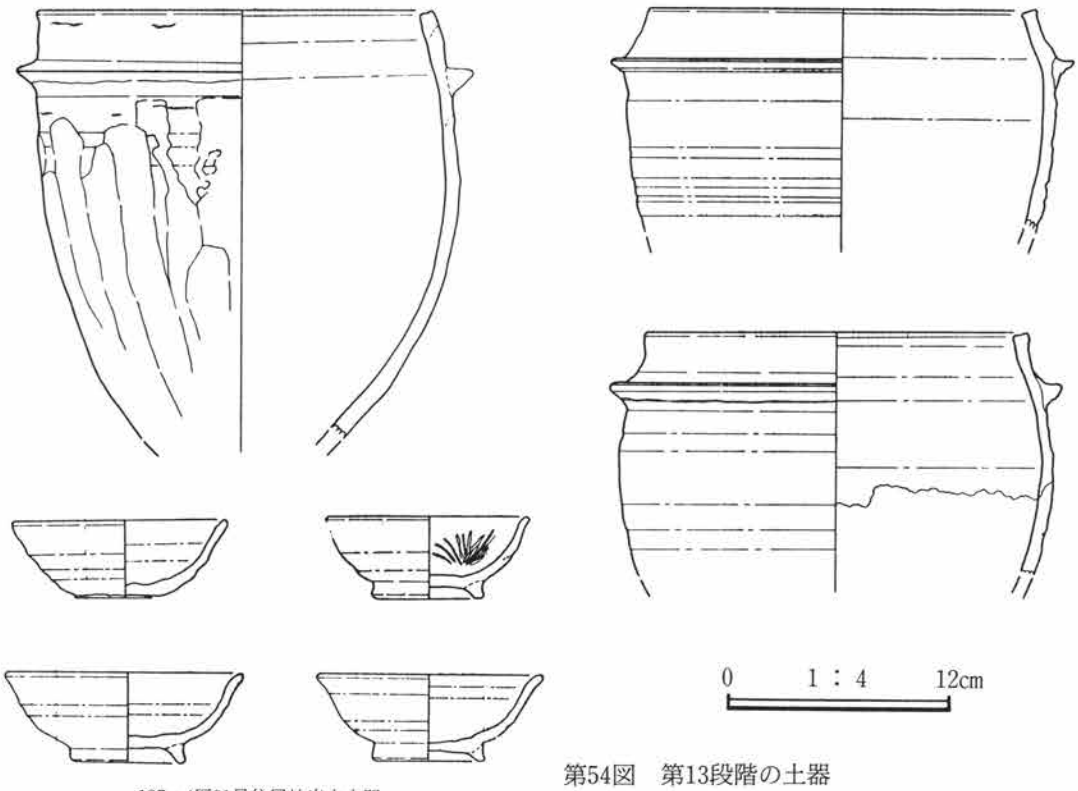
第51図　第9段階の土器



第52図　第10段階の土器



第53図　第11・12段階の土器



127・4区31号住居址出土土器

第54図　第13段階の土器

段階に該当すると思われるのに108住がある。

第6段階（第49図）

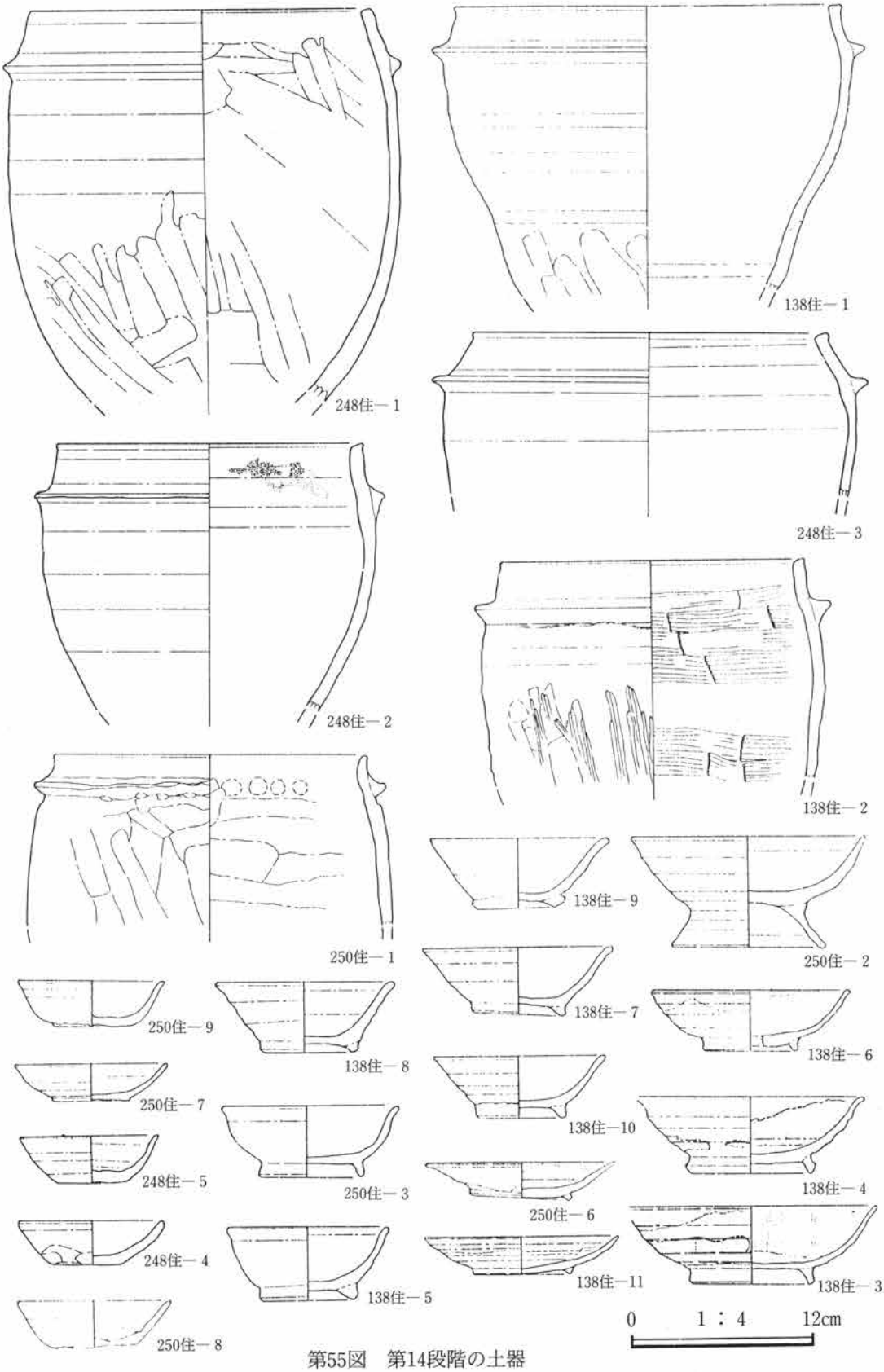
この段階も少なく、器種の揃った住居は見られず69住がこの段階を示すと考えられる。土師器甕はなく、小形甕が2種類存在する。一点は多出するタイプであり、1の甕は胴下半にふくらみを持つあまり見られない形態であるが調整方法は前者と同様である。土師器坏は平底で器高が低く、若干外側は丸みを持つ。暗文土器が一点出土しており3段階のものよりも小形化し、暗文の間隔も広くなっている。須恵器蓋は大形の椀にセットされると思われるが、伴出しているのは小形の椀である。

第7段階（第49図）

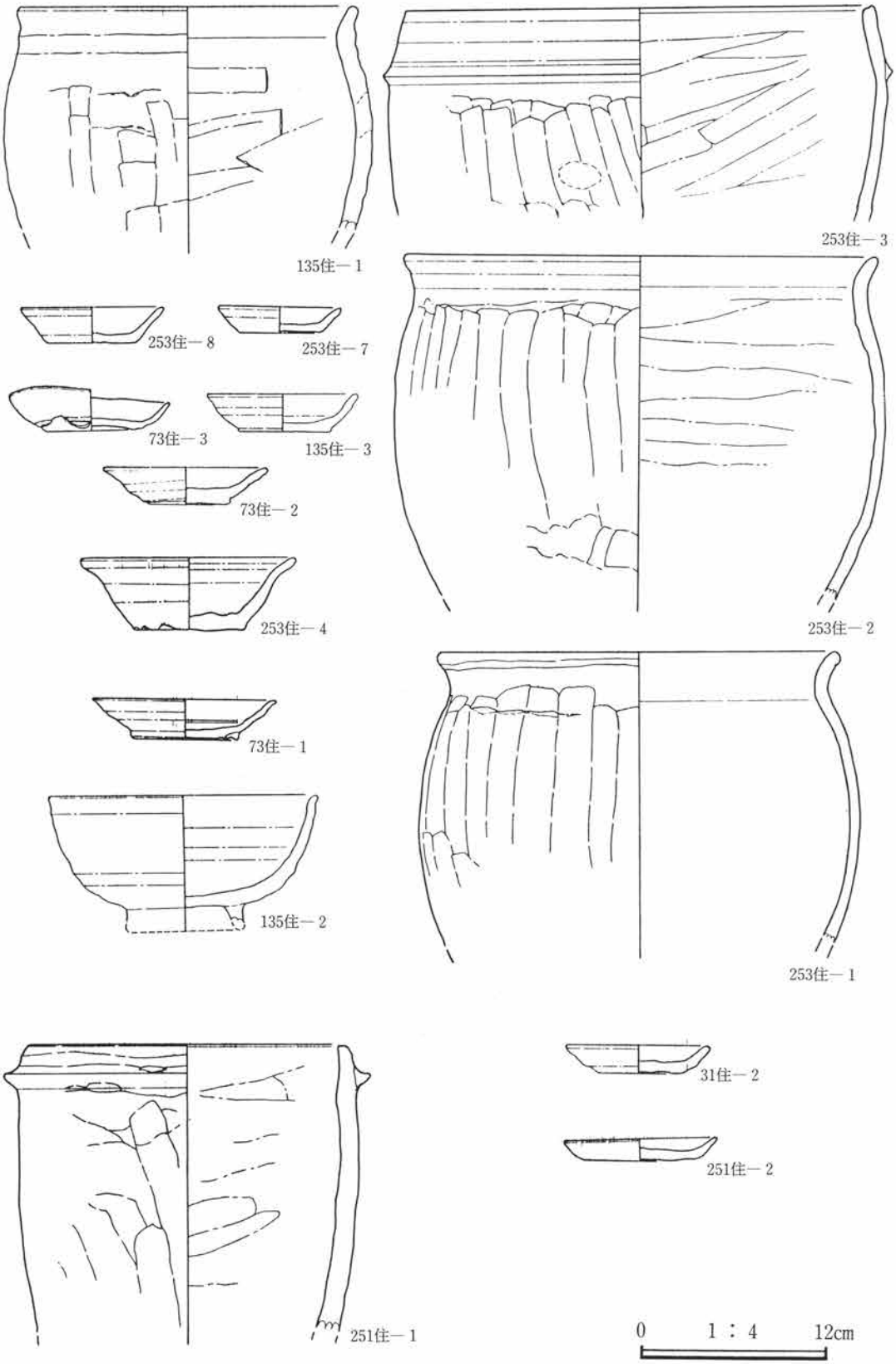
この段階も少なく、86住ほか50・149住が該当すると考えられる。86住の土師器甕がこの段階の代表的なものであり、口縁部が直立気味に立ち上位に変換点を持って外反する「コの字」状口縁に近い形態となっている。伴出している土師器坏は平底で立ち上がり丸みを持ち体部は直線的になってきている。50住は須恵器椀が一点、口径16.2cmで体部は深く内底径の広い大形品である。

第8段階（第50図）

土師器甕を出土する住居には76・93・4区3住があり、他にこの段階に属すると思われるものに29・35・78・81・90・167・198住がある。土師器甕は口縁部が完全な「コの字」状である。76住には小形台付甕が出土しているが口縁部の形態は「コの字」のやや崩れた状態で、胴部は上位に張りがあるが前段階よりふくらみが少なくなっている。須恵器坏では4区3住－3・4は形態が類似している。体部下半が底部に向かって絞り込まれ、糸切り径が内底径より狭く体部の直線的に開くものである。



第55図　第14段階の土器



第56図　第15段階の土器

9世紀の時期の近接した重複は50→46→29→35住・51→45住・59→47住の3例あるが出土量が少ないうえに、共通してみられる器種は須恵器椀のみである。形態・法量にはある程度相違はみられる。同一組列として捉えられるかはまた疑問のあるところだが、器高が低く底径の小さくなる傾向は窺える。

第9段階（第51図）

この段階に属するおもなものは3・16・95・98・256住であり土師器甕が崩れた「コの字」状口縁部を呈するようになった段階である。3・256住に土師器坏が出土しているが、これは従来の坏と異なり体部が直線的に開きヘラケズリが施され、器肉が厚いものである。須恵器の坏は焼成に軟質なものが増えてくる。形態は3住の坏のように体部立ち上がりに丸みを持ち、また内面底・体部の変換点もなだらかに立ち上がるものが多くなる。椀は256住―7のように器肉がやや薄く、口縁部の外反する灰釉的な器形のものと、3住―6・7・8のように体部に僅かに丸みを持つが、直線的で器肉の厚手なものがある。98住は次段階に属する88住に壊されており、須恵器椀からも98住の方が古い様相を持つと思われるが、この住居からは足釜が出土しており須恵器の中で煮沸土器の生産が始まる頃の資料として注目される。灰釉陶器は3住に椀が2点出土しており、口径17cm以上の大形品で口唇部が外反し高台は弱い三日月高台、施釉は内外面に刷毛塗りである。

第10段階（第52図）

66・88・152住に出土している土師器甕は、前段階よりも器肉に厚みを増し、口縁部の作りも雑である。他にこの段階と考えられるものに8・37・56・84・100・187住などが挙げられる。土師器坏はほとんど出土しなくなるが、37住に1点体部ヘラケズリのもので、前段階より若干器高の低くなったものが見られる。小形甕は84住に出土しており、口縁部は崩れた「コの字」状で口縁部下半から頸部は器肉が厚く内傾し、上半が小さく開く形態となり、184住にも同様のものが出土している。須恵器坏・椀は器形的にはあまり大差がなく、若干小形になる傾向はある。また焼成には軟質、酸化焔焼成気味のものが多くなる。他の器種として須恵器羽釜・小形甕も見られる。

第11段階（第53図）

土師器甕は口縁部が若干「コの字」の形骸を残し、胴部から続いて内湾していき上半部が外反する。器肉は全体的に厚手である。この甕の出土している住居は72・83・97・103・230住であり、他にこの段階に属すると思われるものに55・99・121・231住などがある。土師器では甕以外の器種はほとんど見ることはできないが、坏は僅かに続くようであり、10段階と考えられる37住―1よりも底径が小さく後出する要素を持つ坏が46・104住で出土している。須恵器坏は230住に出土しているものは、前段階より器高がやや高いものである。椀は前段階よりも体部が浅く、底径が小さいものが多い。羽釜はロクロ調整であるが形態にバラエティーがあり、胴部から口縁部まで内湾気味のものも、鍔の部分を変換点にして内傾するものなどが出土している。

第12段階（第53図）

この段階以降土師器甕の出土が見られず、確実に編年の基準となるものに乏しいが、坏・椀類の法量の変化が目安となる可能性があり、それに準じて段階設定を行った。しかしこの段階に属すると考えられる住居は少なく、143住のみである。土師器坏が出土しており、前段階よりも小形で底径が小さ

くなっている傾向にある。須恵器椀は口径12.4cmとかなり小形になってきている。

第13段階（第54図）

前段階の143住と重複しこれを切っている住居に127住があるが、須恵器椀を比較すると、127住の方が新しい様相を持つと考えこの段階とした。他に４区31住がこの段階と思われる。

第14住段階（第55図）

この段階には土師器はすでにほとんどなく、酸化焔焼成の須恵器と少量の灰釉陶器によって構成される。器種には須恵器坏・椀・羽釜・土釜、灰釉陶器椀・皿などが出土している。煮炊の土器としては羽釜が主体を占めており、その形態にはかなりバラエティーがある。ある程度の器種が揃って出土している住居には、132・138・248・250住があり、他はこれらの住居の土器に類似するものが出ている27・34・156・182・258・４区10住などが挙げられ、この段階には再び住居数が増える傾向にある。250住の坏は口径9.5～10.0cm、器高2.4～3.0cmを測り、形態は体部立ち上がりにやや丸みを持つものと、立ち上がりは比較的直線的に開くもの、上位に僅かに丸みを持って開くタイプとがある。138住は椀が多く出土しており、口径11.0～12.2cm、器高4.0～4.6cmを測り、高台は断面角形で低く貼付の雑なタイプである。132住は坏・椀・羽釜が１点づつ出土し、椀は138住、坏は250住の法量に類似しているが、坏の形態は異なり体部の直線的なものである。248住は坏が２点出土しており、法量・形態とも250住に類似する。27住は坏が１点、この坏は248・250住の坏に法量が一致している。羽釜は口径19.5cm、22.0cm、25.2cmと３種類あるが、形態には底部に向かってすぼまるものや、下半部まで丸みを持っているものなどあり、容量は必ずしも口径の大きさに一致するものではない。調整方法にはロクロによるナデとヘラナデ、指ナデのものがある。

第15段階（第56図）

この段階に属する住居も比較的多く、４・14・23・26・73・135・159・223・253・４区27住などが挙げられる。器種としては、須恵器坏・椀・羽釜・土釜・小形甕、灰釉陶器椀・皿など前段階と同様である。坏は小形品が口径8.0～10.1cm、器高1.7～2.5cm、大形品は口径12.2～14.0cm、器高4.5～4.6cmを測り双方とも前段階より口径が小さく、器高が低くなる傾向にあるが、また前段階には見られないような口径16cm以上で器高も高い大形の椀（135住－２）も出土している。羽釜・土釜ではこの段階に口径30cm近い大形品が多く見られる。調整は大半のものがヘラナデにより、縦方向が多い。

以上、検出されたすべての奈良・平安時代の遺構に時期を与えることはできないが、少なくとも出土している土器全体からは下記のような遺構の消長は窺える。まず７世紀末から再び遺構が増え始め、８世紀後半から９世紀前半は少なく、９世紀後半から増加していき、10世紀後半には減少し、11世紀前半に最後のピークを迎える。土器の様相は県央部の主な遺跡と同様な傾向を示すと言える。

第５節　熊野堂遺跡第49号住居出土の装飾金具

東京国立博物館　加島　勝

熊野堂遺跡第49号住居址から出土した四点の金具は、いずれも鍛造製の銅版に文様を線刻であらわし、鍍金を施したものである。ここでは、これらの金具の製作技法と装飾文様について考えてみたい。まず、それぞれの形状を順に述べることにする。

１．49住－３（第57図）

銅版製、鍍金。長10.1cm（現状）、幅3.7cm。

銅版の先端を花形につくり、周縁に細い縁帯をめぐらし、中に宝相華唐草文を蹴彫りであらわし、地は魚々子打ちとしている。花形は中央を稜形に、両側を弧形とするいわゆる複合稜形につくる。先端部三箇所に鋲留めするための小孔が開けられている。宝相華文は両側にＣ字形の蕨手を伸ばした花形と葉形を交互に配している。二本の蔓でつながる花形と葉形が文様の一単位を成しているものと思われる。花形は中心を円形の花芯とし俯瞰形（斜め上から見た形）にあらわす。先端部に配された花形は五弁で、このうち手前側の四弁には一本の線で葉脈があらわされ、奥の花弁には小細線により縁取りがある。もう一方の花形は四弁で、手前側の花弁は先端部の花形と同様であるが、奥の花弁には水滴形に近い葉脈があらわされ、小細線の縁取りは四弁すべてに施されている。葉形は、小細線で縁取りされ、尖った先端と切れ込みのある輪郭をもち、水滴形を放射状に伸びる線で囲んだ葉脈があらわされている。

２．49住－４（第57図）

銅版製、鍍金。長7.7cm（現状）、幅3.7cm。

銅版の周縁に細い縁帯をめぐらし、内側に宝相華唐草文を蹴彫りであらわし、地は魚々子打ちとしている。現状、両先端部を欠失している。一方の切断部に鋲留めするためと思われる小孔の一部が半円形に残っている。宝相華文は、花形と葉形を交互に配したものである。葉形は、49号住－３にみられたのと同じものを大きくあらわしたもので、一方の葉形の水滴形は蓮蕾状を呈している。周縁との間隙にはＣ字形の蕨手が伸びる。花形は側面形（横からみた形）の三弁で、水滴形の葉脈があらわされ、小細線による縁取りがされている。

３．49住－１（第58図）

銅版製、鍍金。長12.6cm（現状）、幅2.1cm。

４．49住－２（第58図）

銅版製、鍍金。長5.3cm（現状）、幅2.2cm。

49住－１・２ともに、銅版の先端を複合稜形につくり、装飾文様を蹴彫りであらわしている。49住－１では先端部三箇所と現状中程の周縁二箇所に、49住－２では先端部三箇所に鋲留めのための小孔が開けられている。49住－１には三箇所に折り曲げた痕跡が残っている（出土時には中程で折り曲げられていた）が、鋲留めの位置との関係から、この金具が隅金具のように曲げて用いられたものではないことがわかる。装飾文様は水滴形の中を魚々子打ちとし、周囲に、先端に魚々子打ちによる小円

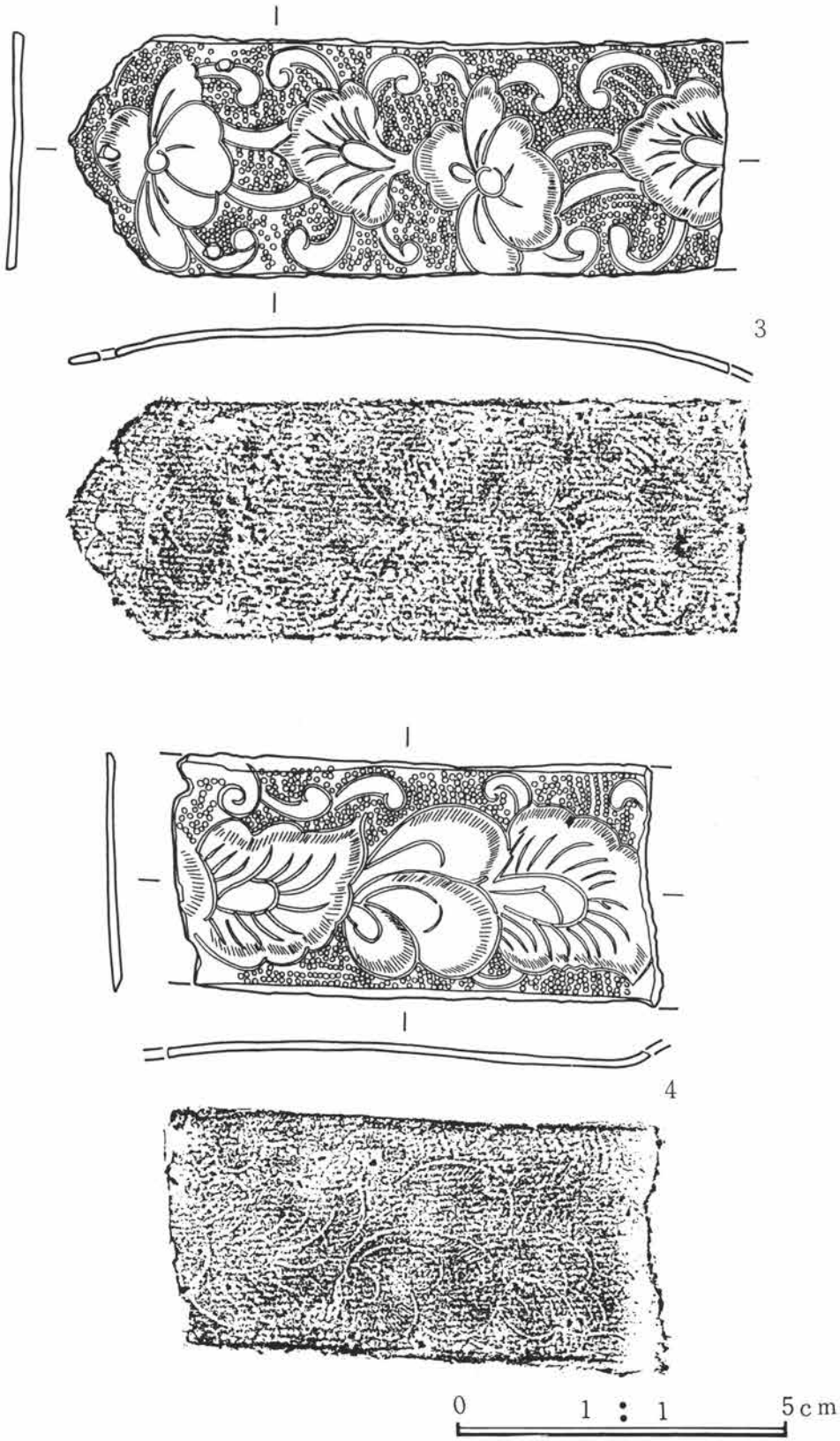
形をもつ放射状線をあらわし、その周囲をさらに小細線で囲んだものを一単位とし、これを連続させ、周縁との間隙にも小円形をもつ放射状線を充塡している。この文様に見られる水滴形と放射状線は、49住―3・4の葉形の葉脈によく似ている。また、魚々子打ちした水滴形は蓮華文に見られるような子房と顆粒形をあらわそうとしたものかも知れない。そうであるなら、小円形をもつ放射状線は雄蕊をあらわしていると解せよう。いずれにしても、この文様は植物文の構成原理から成り立っているといえるが、もはや空想の花葉形ないし花弁をあらわしたものというべきものであろう。

これらの金具は、現状ではいずれも一方の先端部ないし両方の先端部を欠失しているのが、当初は両端を花形につくったものであったと思われる。大きさ（幅）からは、49住―3および49住―4と49住―1および49住―2の二種類に分けることができる。これを文様の面からみると、前者ではその要素が花形、葉形、蕨手からなることや地文を魚々子打ちによっている点では共通しているが、49住―3は縦に、49住―4は横に文様が展開しているという違いがある。後者にはまったく同じ文様があらわされているが、その展開の方向からみて49住―2が49住―1のもう一方の先端ではない。このことからこの四点は三種類の金具の残片であることがわかる。このような形の金具は八双金具と呼ばれ、社寺などの扉や建築部材に打たれ、これを装飾するものであるが、本作例の場合、大きさや厚みからみてむしろ厨子、棚、机、卓といった仏具や調度品の装飾金具であったものと思われる。

この種の金具では、周縁に縁帯を線刻でめぐらし、その内側に文様をあらわすのが一般的であるが、49住―3および49住―4の見られる縁帯は線刻によるものではない。これは銅版を金具の形に切ってゆく際に垂直ではなく、やや斜めに切っていった結果、その断面が縁帯状になったもので、これが、製作時に縁帯を意識してのものかどうかは判然としない。仮にこれを縁帯と認めるにしてもきわめて細いものであり、また49住―1、2の方にはめぐらされておらず、これはこの金具の大きな特徴といえる。文様の線刻は、四例とも毛彫りではなく、鏨をらせながら打ち込み、楔形を連続させて線をあらわす蹴彫りである。49住―3、4の地文の魚々子打ちは、文様の輪郭や周縁に沿って規則的に打っているところと、まばらに打っているところがあって整然としたものではない。これと49住―1、2の水滴形の内部と周囲に放射状線に見られる魚々子打ちは同じ鏨によるものと思われる。

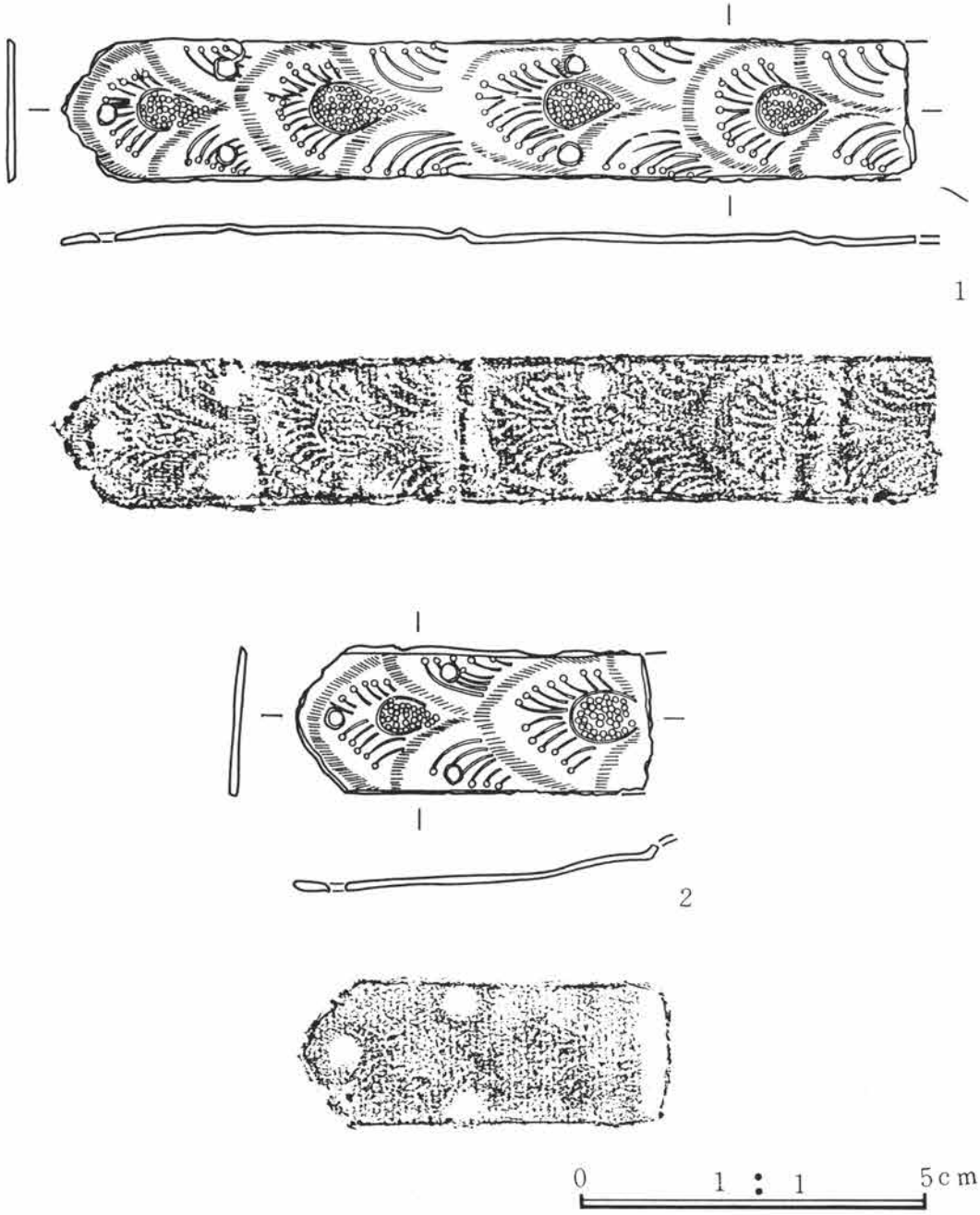
49住―3や49住―4にあらわされているような側面形や俯瞰形の花形と葉脈つきの切れ込みのある葉形からなる宝相華文は唐朝以来の伝統を引き継ぐ文様で、我国においても天平期以降その影響を受けながら多様な展開を示したことが知られている。宝相華文を線刻であらわした金工品で製作年代を微証できるものには、天暦11年（957）銘を有する金銅如意（東京国立博物館保管）、長元4年（1031）の製作と考えられている横川根本如法堂址出土の金銅経箱（延暦寺蔵）、天喜元年（1053）の製作と考えられている平等院鳳凰堂天蓋の八双金具（平等院蔵）などがあげられる。なかでも天暦11年銘金銅如意に刻まれた小細線のある五弁の花形をはじめ蓮蕾状の紡錘形を葉脈で囲む葉形や蕨手は49住―3や49住―4のものに近いものである。これと比べてみると49住―3や49住―4の花形や葉形の水滴形、さらに蕨手の形態は精緻さに欠けているとはいえ、その製作年代は同時期すなわち平安時代半ば頃、10世紀後半から11世紀にかけてとみてよいと思われる。また、49住―1と49住―2製作技法が同じであることからみて、本来これと一具をなしていたものであろう。

平安時代にさかのぼるこの種の金具の出土はきわめて稀なことといえ、またそれが竪穴住居跡から



第57図　装飾金具

出土したことは本来の装飾金具とは違ったものに転用されていたことが窺われて興味深い。こうした意味で本例のもつ資料的価値には高いものがあるといえよう。



第58図　装飾金具

第6節　熊野堂遺跡II地区出土の瓦について

須田　茂

熊野堂遺跡II地区では小量ではあるが、丸瓦・平瓦・軒丸瓦が出土している。以下、瓦類について観察所見をのべたい。

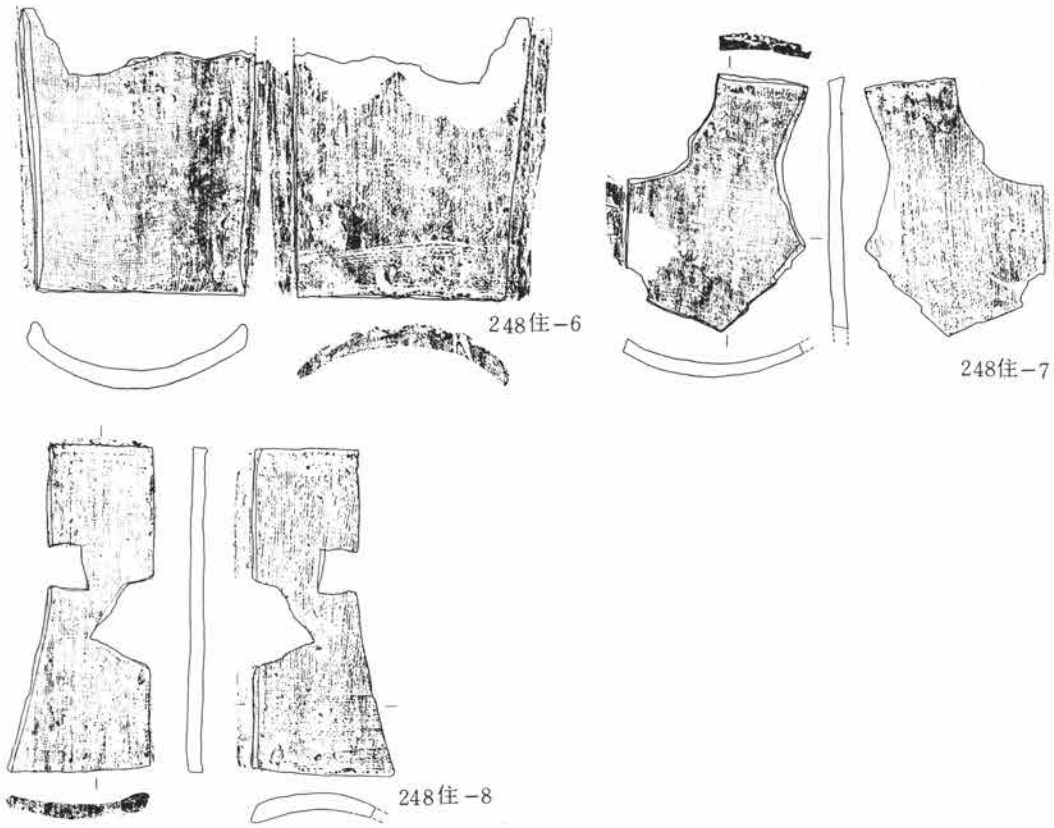
瓦類を分類すると、丸瓦、平瓦、軒丸瓦を通じて2つに分類できる。それをA類、B類と称すことにするが、それぞれの内容は付表のとおりである（第59・60図）。

A類は平瓦のみがあって、半損程度のもの3点のほか破片2点がある。主として248号住居址から出土している。B類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦の3者がある。丸瓦は破片3点、平瓦は破片10点、軒丸瓦は破損品4点があり、それぞれ4号住居址、23号住居址、49号住居址と73号住居址などから出土している。

A類の平瓦は長さ34cm、狭端幅22cm、厚さ1.2～1.7cmをはかる。焼成は還元炎で硬く、明灰色を呈す。形状・規模および焼成は普通の瓦であるが、特徴的な点もいくつかある。まず、凸面の叩きについて全面にタテ方向縄叩きが施され、狭端部付近のみヨコ方向縄叩きが付加されている。また、凸面には人為的とみられる砂粒の付着があるが、これは叩き具の離れを良くするためのものかとみられる。これらの特徴は他の瓦と識別する上で良好な指標になるものである。また、本類の中、具体的には248号住居址№7の資料は側面部に布目痕が付着する部分があり、本瓦が一枚造りによる製作である証左とみなされる。そもそもA類の平瓦は凹面にモコツ痕がないことから一枚造りであろうとみなされるのであるが、それ以外にも両側面の形状（平瓦の一枚造りの場合、カマボコ形状の成形台が使用されたと考えられるが、その場合、側面の整形は垂直方向になされるのが自然である。本平瓦はまさにそのような形を呈している。）あるいは叩き具の叩き方などにもその徴候がうかがわれる。いずれにしても平瓦A類は一枚造りであることが比較的明瞭に認識される資料であろう。ちなみに、本類の瓦は、熊野堂遺跡I地区の平瓦2類、融通寺遺跡のA類と同類である。

B類は丸瓦・平瓦・軒丸瓦ともに酸化炎で焼成され褐色を呈し軟質である。粗質な瓦である。丸瓦・平瓦は厚さが1cm前後と薄手であり、平面形も小規模なものと推測される。ともに凸面はタテ方向のヘラケズリ整形が施されており、薄手の理由はこの整形法に由来するものかもしれない。成形法については、丸瓦・平瓦ともに粘土板を素材とする。そして、一枚造りではないかとみなされる。これは瓦の形態と凸面のタテ方向ヘラケズリという整形法から想定したのであるが、確証はない。この丸瓦・平瓦は融通寺遺跡のF類に対比できるものである。

B類の軒丸瓦は文様が四弁門であって、種類は一種である。その丸瓦部は粘土紐を素材とし、円筒を二分割する技法で作製されている。形態は無段瓦つまり、いわゆる行基瓦である。凸面はタテ方向ユビナデ、凹面はヨコ方向ユビナデであって、凹面に通有の布目痕はない。同類の丸瓦とは全く別個の製作技法である。ここで、本軒丸瓦の製作技法を復元すると、まず軒丸瓦の笵を水平に置き、その上に瓦当部の粘土を置く。ついで瓦当の径に合わせて粘土紐を積みあげる。紐は8単位ほどである。そして粘土紐の接合痕を消すために内外面をユビナデ整形する。さいごに円筒を二分割して仕上げと

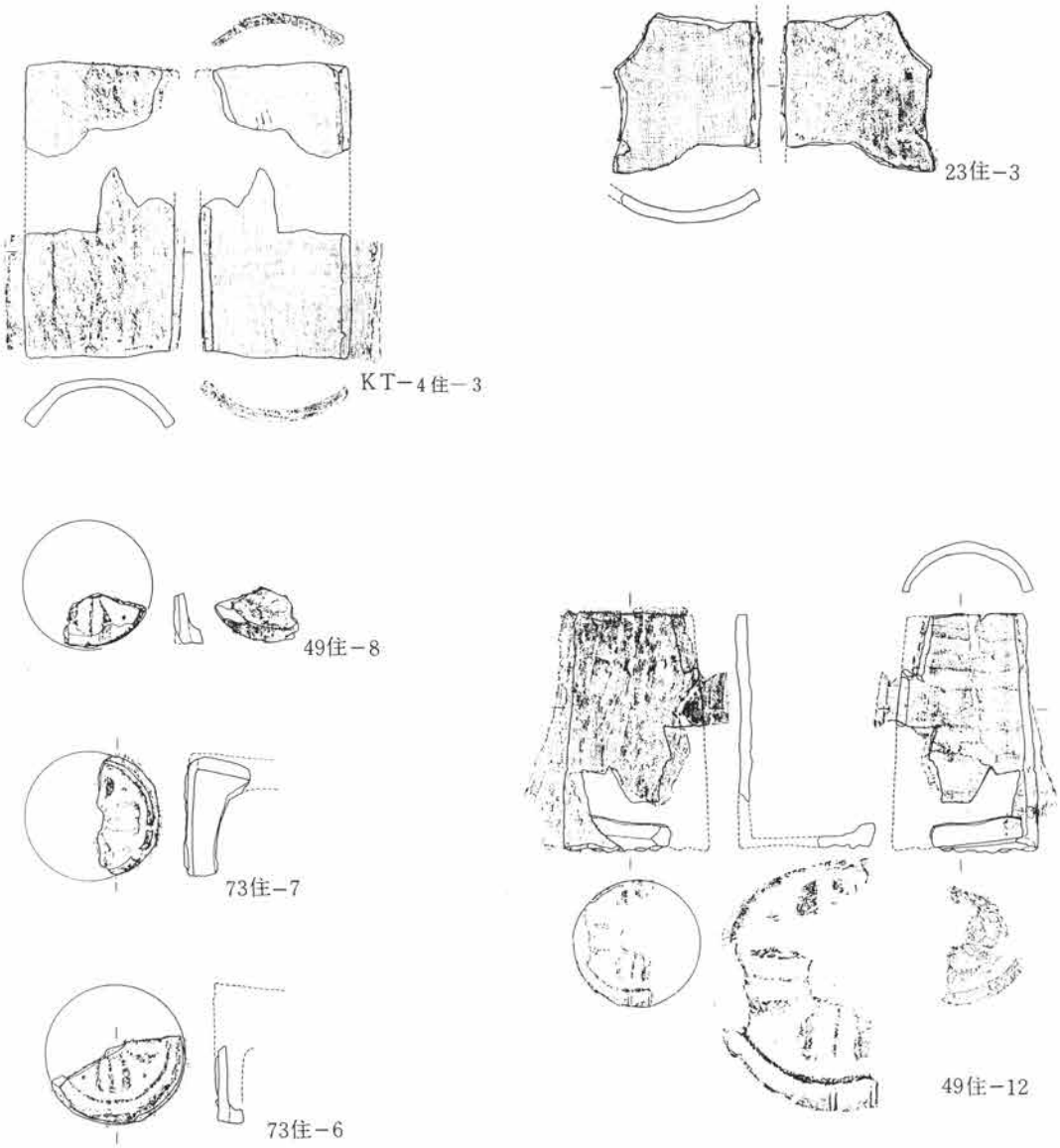


第59図　A類の瓦

なる。なお、丸瓦部の分割は瓦当部までは達せず、そのために瓦当離面の下半部に丸瓦部の残部が土手状にめぐる。一見、いわゆる一本造り法の軒丸瓦のような形状を呈すが、技法的には明らかに相違しており「熊野堂技法」と仮称できそうな技法である。

B類の軒丸瓦は49号住居址と73号住居址から出土し、前者はカマドに転用されている。またその年代は共に11世紀前半に比定されることから、瓦の下限年代を考える手がかりとなっている。仮に瓦と住居跡の間に年代の大きなへだたりがないものとすれば、瓦の年代は10世紀代おそくとも11世紀前半頃とみなせようが、この問題はなお後日の検討と要すものである。

上野国における古代の瓦は生産技術の低下に伴ってしだいに粗悪化・小規模化する傾向がある。そして、熊野堂遺跡II地区のB類瓦は上野国の古瓦の中で終末期に位置づけられるものの一つである。本類の丸瓦・平瓦は同様なものが中西廃寺（吉井町黒熊）にあり、このほかにも国分寺跡など県内にあるかもしれないが、軒丸瓦の分布は今のところ本遺跡のみである。このように、本類の瓦は上野国の終末段階の瓦の様相を考える上で重要な意味をもつものである。



第60図　Ｂ類の瓦

熊野堂遺跡Ⅱ地区出土瓦分類表

種　別		規　模	凸　面	凹 面	側面	端面	胎土	色調	焼成	素材・成形	資料数	図番号
A類	平瓦	長さ　34 狭端幅　22 厚さ　1.2～1.7	タテ方向縄叩き 狭端部付近ヨコ方向縄叩き 表面に砂粒付着	布目痕	二面	一面	細 砂粒含有	明灰色	硬 還元焔	粘土板 一枚造り	半損３ 破片２	248住－６ 248住－７ 248住－８
B類	丸瓦	厚さ　0.8～1.3	タテ方向ヘラケズリ	布目痕	一面	一面	やや粗	茶褐色	軟 酸化炎	粘土板 一枚造りか	破片３	KT ４住－３
	平瓦	厚さ　1.0～1.2	タテ方向ヘラスズリ	布目痕	一面	一面	やや粗	褐色	軟 酸化炎	粘土板 一枚造り	破片10	23住－３
	軒丸瓦 丸瓦部	長さ　25.5 厚さ　1.2	タテ方向ユビナデ	ヨコナデ	一面	一面	粗 砂粒含有	褐色	軟 酸化炎	粘土紐 円筒二分割	４点	49住－12 49住－８ 73住－７ 73住－６

第7章　分　　析

第1節　熊野堂遺跡出土須恵器胎土分析

群馬県工業試験場　花岡紘一
〃　　小沢達樹
シン航空写真株式会社　三浦京子

はじめに

現在では、胎土分析の試料は800点を越え、県内の窯跡群のうち秋間・吉井・乗附・月夜野・笠懸・太田については、その領域をある程度捉えられるようになってきている。当遺跡には、6世紀前半から11世紀までの須恵器が出土しているが、それらすべての時期を対象として供給地を探ることはかなりの点数を分析しなければならず困難である。そこで今回は、比較的出土量の多い9世紀から11世紀の須恵器を中心として分析を行う。

1　分析目的と試料の選択（第61・62図）

9世紀から10世紀にかけては須恵器の焼成が、還元焔焼成から酸化焔焼成気味に変化していく段階にあり、窯跡の存在も不明瞭な状態である。当遺跡の地理的条件などから考えれば秋間・吉井・乗附窯跡群からの供給が考えられるが、それらの窯跡においても10世紀以降の窯は未確認である。9世紀の須恵器胎土の肉眼観察では、秋間・吉井・乗附窯跡群に対応できるものが多いと思われるが、焼成の変化したものも従来の領域に分布してくるのかどうか確認したい。試料の選択にあたっては、時期的に同時性が高いと考えられるため、なるべく同一住居の中で類似する試料を数点づつ選び、また9世紀から11世紀まで連続して見られるように1世紀を前後半に分けて各段階から選んだ。

681・682は9世紀中頃の試料であり、還元焔焼成で黒色鉱物を含み秋間の所産と考えられる。9世紀後半のものは683～691で、酸化焔焼成気味の部分もあるが基本的には還元焔焼成である。肉眼観察では、産地として秋間・吉井・乗附などが推定される。10世紀前半の試料は8・9号住出土の692～694であり、それぞれ焼成が異なる。10世紀後半の試料は695～700であり、大半が酸化焔気味の焼成である。11世紀前半の試料は、701～709の小皿と小椀、710～713の羽釜・土釜である。

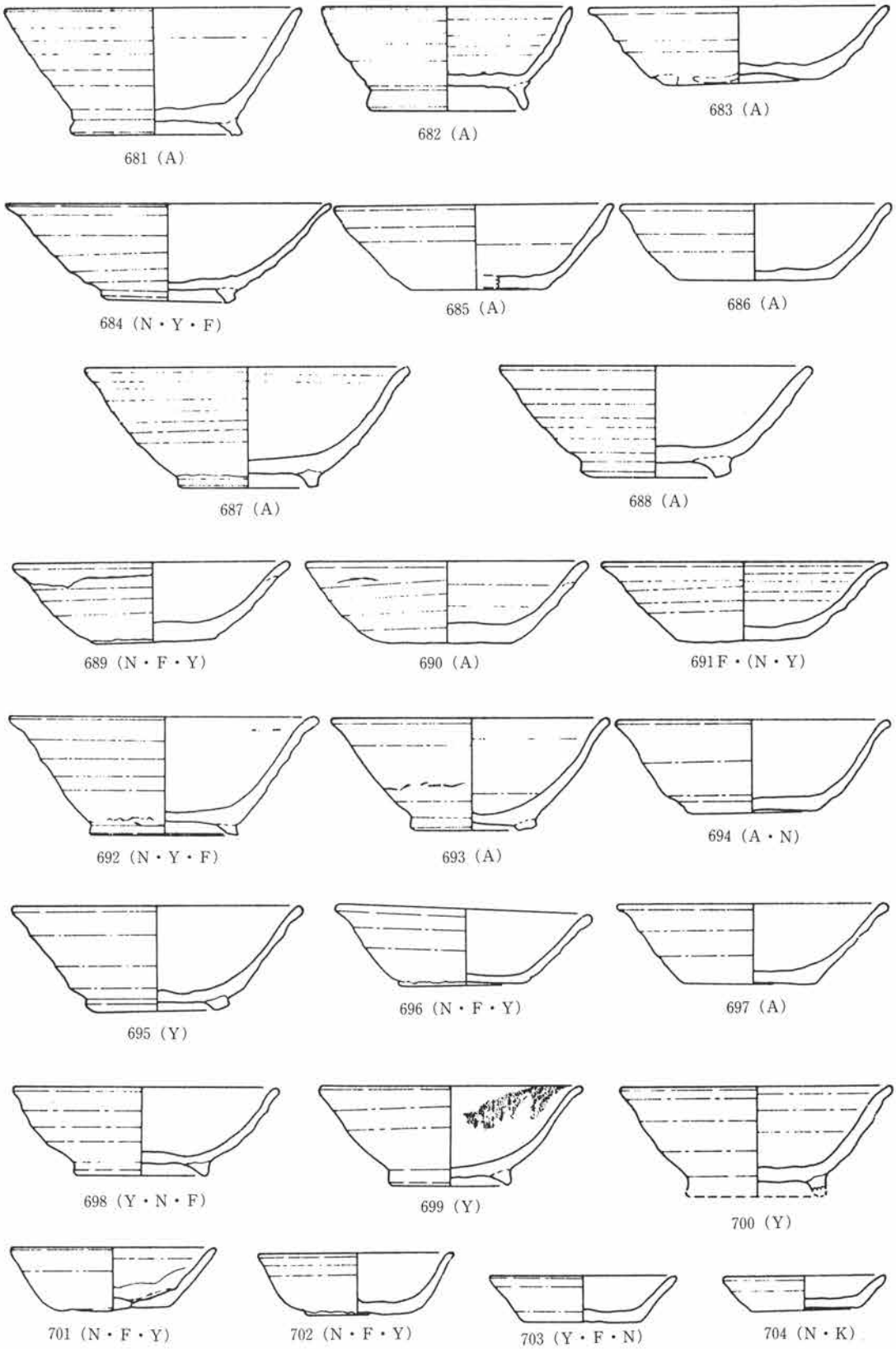
2　分析方法及び測定条件

蛍光X線分析　分析用試料は各試料を10以下に粉砕し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

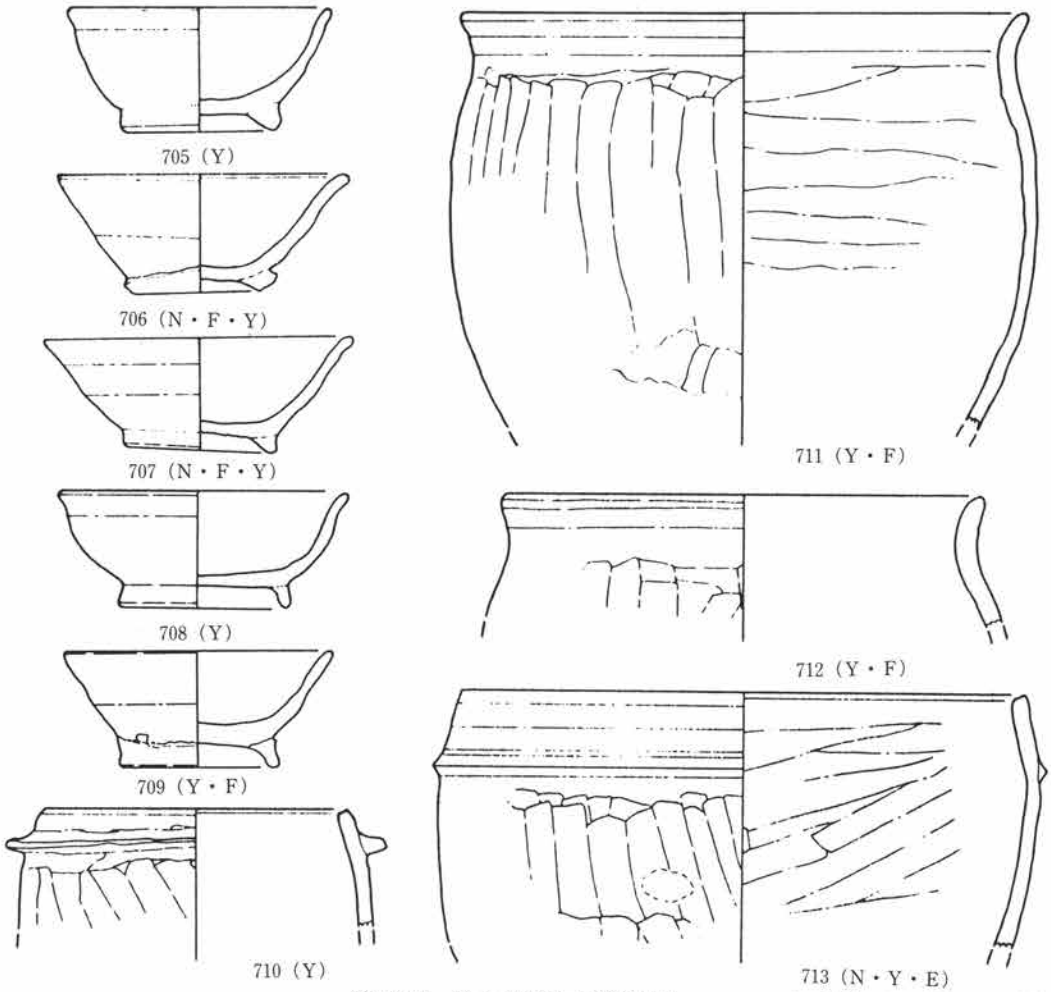
蛍光X線分析装置：理学電気（株）KG－4型

分光結晶：Fe．Sr．RBにはLif（2d＝4.028Å）

Ca．K．Ti．Si．AlにはEDDT（2d＝8.808Å）MgにはADDP（2d＝



第61図　胎土分析土器実測図



第62図　胎土分析土器実測図

A　秋間　N　乗附　Y　吉井
F　藤岡　K　笠懸

10.648Å）

検出器：ＬｉＦを使用したとき、Ｓ・Ｃ，
　　ＥＤＤＴ、ＡＤＰを使用したとき、Ｐ・Ｃ，

時定数：1

計数法：Ｆｅ、Ｃａ、Ｋ、Ｔｉ、Ｓｒ、Ｒｂはチャートにより、Ｓｉ、Ａｌ、Ｍｇは定時計数法によった。なおチャートは、4とした。

波高分析器：積分方式

測定線：ＦｅＫ、ＣａＫ、ＫＫ、ＴｉＫ、ＡｌＫ、ＭｇＫ、ＳｒＫ、ＲｂＫ、の各1次線を使用した。

Ｘ線照射面積：20

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器6点(295、310、336、345、360、380)を化学分析し、標準試料とした。

第16表　熊野堂遺跡第Ⅱ地区胎土分析資料の肉眼観察表

試料番号	遺物番号 推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
681	59住２ 10世紀前	椀 須恵器	少量の白～灰色細砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焔。灰色。	秋間
682	47住１ ９世紀後	椀 須恵器	白～灰色細砂粒を含む。還元。灰白色。	秋間
683	81住２ ９世紀後	杯 須恵器	白～灰色細・粗砂粒と黒色鉱物粒を含む。還元焔。灰色。	秋間
684	76住３ ９世紀後	椀 須恵器	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焔。灰白色。	乗附、吉井 藤岡
685	76住４ ９世紀後	杯 須恵器	白色細・粗砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焔。灰色。	秋間
686	81住３ ９世紀後	杯 須恵器	白色細砂粒、細礫を含む。還元焔。灰白色。	秋間
687	３住９ ９世紀４	椀 須恵器	白色細砂粒、僅かな灰～黒色の細礫。還元焔。灰白色。	秋間
688	３住７ ９世紀４	椀 須恵器	白色細・粗砂粒、２～５㎜の凝灰岩の岩片のような白色礫を含む。還元焔。やや軟質。浅黄色。	秋間
689	３住３ ９世紀４	杯 須恵器	白色細･粗砂粒、僅かな赤褐色細砂粒を含む。還元焔（やや酸化気味）。口縁部灰色、底～体部－明黄褐色。	乗附、藤岡 吉井
690	３住４ ９世紀４	杯 須恵器	白色細砂粒、少量の黒色鉱物粒を含む。還元焔。明褐灰色。	秋間
691	３住５ ９世紀４	杯 須恵器	白色細・粗砂粒・細礫を含む。還元焔。灰色。	藤岡、乗附 吉井
692	８・９住６ 10世紀１	椀 須恵器	白～灰色細・粗砂粒を含む。燻し焼成。黒色、褐灰色、黄灰色。	乗附、吉井 藤岡
693	８・９住５ 10世紀１	椀 須恵器	白～灰色・雲母細砂粒を含む。還元焔。やや軟質。明褐灰色。	秋間
694	８・９住１ 10世紀１	杯 須恵器	白色細砂粒、褐色粗砂粒を含む。還元焔。酸化気味。にぶい褐色。	秋間、乗附
695	70住７ 10世紀前	椀	白色細砂粒と少量の小礫・中燦を含む。酸化焔。橙色。	吉井
696	70住５ 10世紀前	杯 土師器	白～灰色、赤褐色の細・粗砂粒を含む。酸化焔。にぶい褐色。	乗附、藤岡 吉井
697	８・９住３ 10世紀１	杯 須恵器	白～灰色細・粗砂粒を含む。還元。灰色。	秋間
698	3区2住５ 10世紀	椀	細かい砂粒を多く含む。胎土やや緻密。焼成あまり良くない。黒褐色。	吉井、乗附 藤岡

試料番号	遺物番号 推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
699	3区2住2 10世紀	椀	砂粒、φ1～3㎜の小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。酸化焔焼成。黒斑有。明黄褐色。	吉井
700	3区2住4 10世紀	椀	砂粒、φ1～5㎜の小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。酸化焔焼成。黒斑有。褐灰、にぶい黄橙色。	吉井
701	250住8 11世紀1	杯	砂粒、φ1～3㎜の小石を含む。胎土やや緻密。焼成良。酸化焔焼成。にぶい黄橙色。	乗附、藤岡 吉井
702	250住9 11世紀1	杯	砂粒、φ1～5㎜の小石を含む。胎土やや粗密。焼成良くない。酸化焔焼成。(内)黒褐、(外)にぶい橙色。	乗附、藤岡 吉井
703	253住8 11世紀2	皿 土師質	砂粒、黒色粒子、φ1～3㎜の小石を含む。胎土やや緻密。焼成良くなくザラつく。浅黄橙色。	吉井、藤岡 乗附
704	253住7 11世紀2	皿 土師質	砂粒、φ1～2㎜の小石を含む。胎土やや緻密。焼成よくなく磨滅多い。淡黄色	乗附、笠懸
705	138住5 11世紀1	椀 須恵器	φ1～2㎜の小石、砂粒を多く含む。灰白色。	吉井
706	138住9 11世紀1	椀 須恵器	砂粒を多く含む。酸化焔焼成。鈍い橙色。	乗附、藤岡 吉井
707	138住7 11世紀1	椀 須恵器	φ1～2㎜の小石、砂粒を含む。還元焔元焼成。灰白色。	乗附、藤岡 吉井
708	250住3 11世紀1	椀	砂粒、黒色粒子を多く含む。胎土緻密。焼成良。還元焔焼成。淡黄色。	吉井
709	4住－2 11世紀2	椀 須恵器	黒色の軟質な粗砂粒、細礫を多く、白色細・粗砂粒、細礫を多く、白色細・粗砂粒を含む。還元焔。軟質。灰黄色。	吉井、藤岡
710	254住2 11世紀	羽釜	砂粒、雲母、φ1～3㎜の小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。橙色。	吉井
711	253住2 11世紀2	甕 土師器	砂粒、雲母、片岩多く含む。胎土やや粗密。焼成良。明赤褐色。	吉井、藤岡
712	254住1 11世紀	甕 土師器	砂粒、石英、雲母を多く含む。胎土やや緻密。焼成良。橙色。	吉井、藤岡
713	253住3 11世紀2	羽釜	砂粒、雲母、φ1～2㎜の小石を含む。胎土やや粗密。焼成良。酸化焔焼成。明赤褐色。	乗附、吉井 藤岡

3　分析結果（第63図）

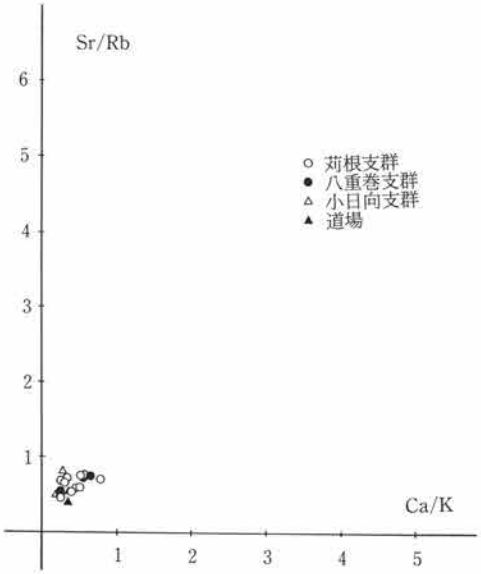
結果は大きく三つのグループと、値の大きく離れて散在する数点に分けることが出来る。681～686は秋間ないし乗附の範囲にまとまりを持ち、肉眼観察でも681～683・685・686は秋間と考えられ、684は乗附の可能性が高い。687～691・693・694・697は吉井もしくは乗附に近い値を示し、9世紀代の試料は大半が、従来の窯跡群試料の分布範囲の中に収まる。しかし、10世紀以降になると既分析の範囲から外れるものが多い。Ｓｒ／Ｒｂ値が２～５、Ｃａ／Ｋ値が1.5～2.5の中に分布する試料のうち

第17表　熊野堂遺跡II地区試料分析値一覧表

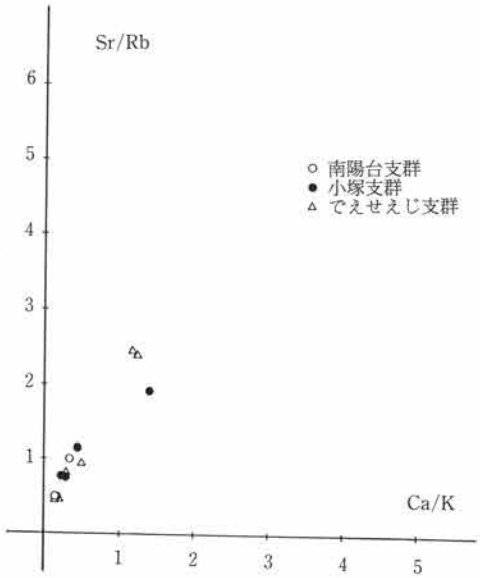
試料＼成分	SiO_2(%)	Al_2O_3(%)	Fe_2O_3(%)	TiD_2(%)	CaO(%)	MgO(%)	K_2O(%)	Ca/K(%)	Sr／Rb(%)
681	69.45	18.55	4.73	0.74	0.51	1.32	1.98	0.53	0.28
682	68.56	18.25	5.48	0.79	0.44	1.41	1.89	0.92	0.24
683	72.38	13.47	6.12	0.88	0.50	1.16	1.84	0.80	0.29
684	69.35	20.16	3.48	0.88	0.61	1.38	1.55	0.77	0.45
685	72.67	16.89	4.20	0.79	0.61	1.15	1.10	0.80	0.61
686	69.35	17.75	4.05	0.79	0.48	1.69	2.22	0.88	0.24
687	67.56	16.59	4.54	0.76	1.05	1.25	1.61	2.45	0.81
688	69.64	16.37	4.27	0.71	1.01	1.42	1.65	1.92	0.76
689	66.34	15.61	6.65	0.78	1.03	1.63	1.60	2.44	0.80
690	70.60	14.41	3.75	0.65	1.15	1.48	1.87	2.46	0.78
691	70.02	16.79	4.42	0.78	1.05	1.37	1.54	2.85	0.87
692	68.34	14.28	5.33	0.69	1.57	1.25	1.45	4.50	1.40
693	61.72	16.93	8.80	0.99	1.50	2.52	1.93	2.20	1.02
694	67.35	15.31	7.41	0.76	0.81	0.99	1.67	1.17	0.59
695	62.47	16.78	6.61	0.89	1.89	2.15	1.51	4.17	1.64
696	62.23	17.64	6.09	0.94	1.56	1.87	1.38	3.13	1.45
697	66.54	20.08	7.11	0.84	1.11	1.75	1.28	2.20	1.07
698	70.02	15.23	4.42	0.78	1.98	1.04	1.80	3.00	1.46
699	63.87	21.88	7.14	0.98	1.24	1.22	0.85	2.00	1.77
700	63.79	19.81	7.33	0.93	1.19	0.98	1.08	3.60	1.36
701	64.92	21.12	4.61	0.94	2.09	2.16	1.69	2.67	1.65
702	65.05	18.40	7.33	0.97	2.45	1.62	0.84	6.00	3.72
703	74.54	14.71	4.12	0.62	2.01	0.83	0.95	6.50	2.70
704	73.58	14.52	3.86	0.65	1.84	0.92	1.17	4.00	2.02
705	64.79	21.79	5.48	0.89	2.68	1.22	0.62	17.50	5.29
706	70.29	13.49	5.90	0.79	0.97	1.04	1.59	4.38	0.75
707	67.68	18.93	5.33	0.90	1.74	1.28	1.11	3.50	2.00
708	71.11	16.57	4.42	0.91	1.97	1.46	1.16	2.20	2.19
709	62.48	20.07	7.44	0.95	2.85	1.74	1.19	9.33	3.16
710	62.22	20.07	5.41	1.17	1.86	1.68	1.32	2.60	1.83
711	63.65	14.32	9.03	1.03	2.79	1.76	0.90	6.25	3.97
712	67.94	15.12	7.14	0.82	1.90	0.92	1.06	5.20	2.27
713	62.85	16.57	6.84	0.81	2.13	1.41	1.47	3.20	1.91

696・698・699・701・708・710・713などは、既分析の中に同じ値を示すものはないが、吉井の範囲を大きく見ればその中に分布するといえ、吉井窯跡の支群の可能性もある。692・695・700・704・706・707は、既分析の試料には見れらないが若干まとまる傾向を見せ、胎土の質感は似ているといえる。

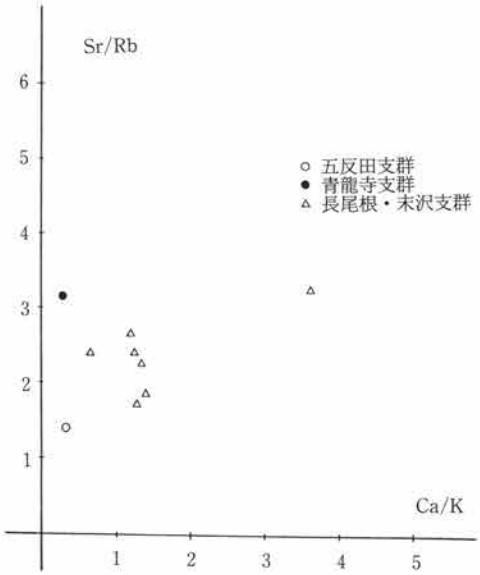
やはり、10世紀以降の須恵器の多くは、分析結果から見ても従来の窯跡で製作されたものではないと考えられるが、ある程度集中する傾向も窺われ、産地同定し得ると思われる。今回は、時期的な分布をみるのに主眼をおいており、同一型式のものを充分に選別出来なかったのだが、今後はさらに10・11世紀を対象に、形態・胎土のグルーピングできるような試料を中心として分析を試みたい。



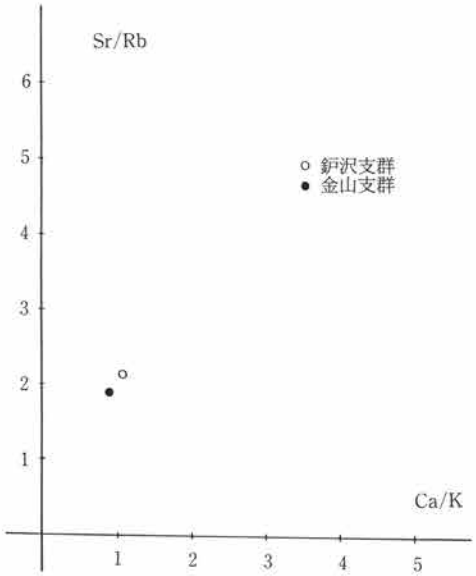
秋間古窯跡群



乗附古窯跡群

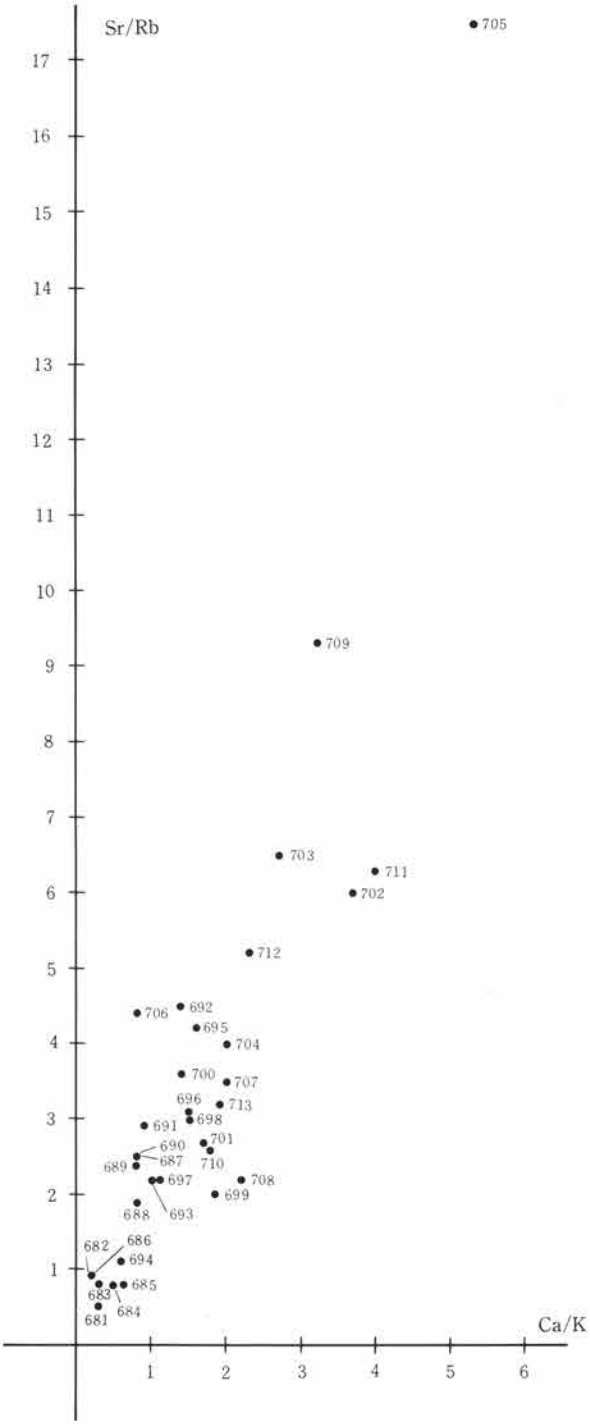


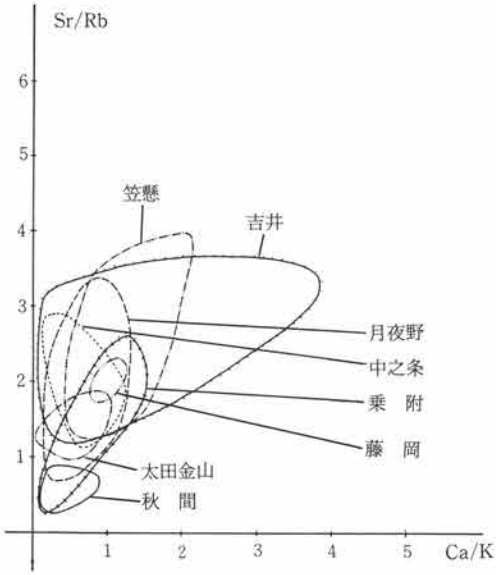
吉井古窯跡群



藤岡古窯跡群

第63図　群馬県内の主な古窯跡のSr／RbとCa／K比率





第64図　熊野堂遺跡のSr／RbとCa／K比率

第2節　熊野堂遺跡II地区出土の馬歯について

群馬県立大間々高等学校　宮崎重雄

I、はじめに

熊野堂遺跡II地区は群馬県高崎市大八木町に所在し、昭和51年～57年に新幹線の建設工事にともなって発掘調査が行われ、弥生時代から平安時代にいたる遺跡であることが判明した。この際、平安時代前期（9世紀前半）の住居址、土坑などから多数の馬歯が出土し、埋存状況は祭祀遺構である可能性の高いことを示している。当時、神聖視されていたとされる馬と人間の関わりを知る上で、重要な遺跡と考えられるので本稿では、個体数、年齢、形態的特徴などを明らかにし、後日の考察の基礎資料としたい。

本報告は、次のような調査方法をもちいてまとめたものである。

①計測器具は主として1／20㎜のノギスを使用した。

②馬歯の計測法は Eisenman etal[1] を主に用いたが、下顎臼歯については、歯冠幅は前葉、後葉それぞれ計測し、下内錘幅は筆者が追加した。また上顎臼歯については、中附錘幅を筆者が追加し、原錘の形は改変した。歯冠高は上顎臼歯、下顎臼歯とも Levin[2]の計測法も追加した。一般的に臼歯は歯根側へ歯冠長、歯冠幅が減少するので、各臼歯とも歯根分岐点から3㎝咬合面よりのところでの計測値も記録した。

③馬の臼歯の咬合面の名称は Simpson（長谷川、原田）[3]によった。

④馬の年齢推定は、切歯については Goubaux[4]に従い、臼歯については、Levin[2]の歯冠高（咬耗度）による年齢推定法を用いてみた。ただし、これはイギリスのポニーを調査対象にしたものであり、これをそのまま応用することには問題があるが、いくつかの日本の古代馬の例で、切歯の咬耗度から得られた推定年齢とこの方法で求めた年齢とも間に大きな隔たりのないことが分かっている。少なくても、幼齢馬、壮齢馬、老齢馬という大区分よりは、有効な推定年齢が得られるといえよう。しかし、第二前臼歯に限っては、他の臼歯で得られた推定年齢より、隔たりが大きすぎ、除外した。また、5才以下の幼齢馬では、この方法より歯の萌出期を基準にしたほうが、精度が高く、ここでは対象外とした。歯の萌出期を基準にした場合は Levin[2]を参考にしている。

⑤日本の在来馬の体高による分類は林田[5]にしたがった。

⑥ウシの臼歯による年齢推定は Ducos[6]の方法を用いてみた。

⑦注は引用文献を意味し、本文、表とも共通して使用した。

II、本文

A、3号竪穴状遺構

3号竪穴からは3本分のウマ（Equss caballus）下顎臼歯片が検出されている。バラバラの破片になっていて歯種の判定に困難を伴うが、歯冠高の差、咬合面の傾斜などから判断して、3本の歯は同一個体に属す第4前臼歯、第一後臼歯、第二後臼歯であるとみられ、それぞれの歯の歯冠高から、7～8才の年齢が推定される。第四前臼歯の歯冠長は28.1㎜と計測でき、もしこの歯種判定が正しいと

すれば、大形の馬であったことが予想される。第四前臼歯、第一後臼歯の舌側面には近縁心方向に溝状の凹みが走っている。歯の形成不全症にかかった可能性も考えられ、あるいは成長期に栄養障害か、重病におかされたことがあったのかも知れない。

Ｂ、36号住居址

歯種の不明の１本分のウマの右下顎臼歯の細片からなる。歯冠高が76.0㎜あることから６才以下の若齢の馬であると推定される。

Ｃ、50号住居址

歯種不明の１個体分のウマの左下顎臼歯からなる。咬耗されている臼歯が１本だけ確認できるが、これ以外の歯は未咬耗である。下後錐谷長や下内錐幅の計測値からして、咬耗されている臼歯は、第一後臼歯の可能性が強い。この歯種判定が正しいとすれば、２～３才というきわめて若い年齢が予想される。

Ｄ、69号住居址

この住居址からは、推定７個体分の馬骨が出土している。ここでは、各馬を１号から７号馬となずける。

１、１号馬

上顎の切歯と左右の各臼歯が残存する。歯槽骨は残存していないものの、上顎骨、切歯骨に植立していた状態を保って、埋存している。もとは頭蓋骨もあったのであろうが、現在は腐蝕してしまって残っていない。四肢骨など、この他の骨はまったく見当たらず、遺構の大きさ、埋存状況からみて、もともと存在していなかったとみられる。咬合面を下に向け、歯列の方向は北から50°西で、前部を北西に向けている。切歯の咬耗度及び臼歯の歯冠高（咬耗度）から推定して、７才前後の個体と考えられる。犬歯が検出されており、オスと判断される。全臼歯列長の大きさから見ると、中型在来馬の木曾馬相当の馬格が予想される。病変を示すような部位は見当たらない。

２、２号馬

下顎の左の全臼歯と、これと対をなすと思われる右側の臼歯からなる。左側は歯槽骨が残っていないものの、下顎骨に植立していた状態を保っている。歯列の方向は、１号馬とほぼ同じで、北50°西である。しかし、１号馬とは反対に前部を北東方向に向けて横たわっており、咬合面が１号馬に接している。右側の臼歯は、完存しているものはなく、個々の歯は散在しているが、全体的に南北方向に配列している。年齢は７才前後と推定されるが、１号馬の上顎臼歯とは、全臼歯列長の計測値が大きく違っており、同一個体のものとは言い難い。全臼歯列長の大きさは、本馬が小型在来馬のトカラ馬より、やや小形のウマであることを示唆している。

３、３号馬

第二前臼歯を除く、右下顎の全臼歯からなる。歯の大きさ、咬耗度及び色調から判断して、１、２号馬とは別個体であることは明らかである。全体的な歯の配列は１、２号馬とは直角の方向を向き、横倒しになっている。一部の歯が、２号馬の最前位（近心）の歯の上に乗っているので、２号馬より後ろで埋められたものであることが分かる。相接して出土したものの、各歯の配列の順序には乱れがあり、歯槽に植立していた状態で埋められたものではない。あるいは二次的に埋めなおされたのかも

知れない。性別は不明である。歯冠高から9～10才程度の年齢が推定される。歯冠長の大きさは、中型在来馬の木曾馬程度の馬格であることを示している。

4、4号馬

第二、第三前臼歯を除く、左下顎の臼歯からなる。歯の大きさ、左・右及び色調からして、3号馬及び後述の各馬とは別個体であることは明らかである。全体的な歯の配列は、東西方向であり、咬合面を北に、前方を東に向けて、横たわっている。歯槽骨は残存していないものの、下顎骨に植立していた状態を保って、埋存していた。性別を判断できる材料はないが、歯冠高は6～7才前後の年齢であることを示している。各歯の歯冠長から、中型在来馬のなかでも大きいほうに相当する馬格であったと推察される。

5、5号馬

第二、第三前臼歯を除く、左下顎の臼歯からなる。歯の大きさ、咬耗度及び色調からして、どの個体とも別のものであることは明らかである。歯冠高は7才前後の年齢であることを示している。第三後臼歯、第二後臼歯は並列していたが、あとの2本の歯は敷石の南北にそれぞれ離れて埋存していた。二次的に動かされた可能性が強い。歯冠長から中型在来馬相当の大きさのウマであることが予想される。

6、6号馬

幾つかの臼歯を欠く複数の上顎の臼歯で、バラバラに埋存していたが、敷石の北側に右側の臼歯が、南側に左の臼歯が存在し、それぞれある程度のまとまりをもって埋存していた。咬耗は第二後臼歯でわずかに始まり、第三前臼歯にも、咬耗し始めた痕跡がみられる。その他の歯は第一後臼歯を除いて咬耗された様子はない。この様な状況から、3～4才の年齢が推測される。犬歯が確認できず、性別は不明である。また、この個体の年齢に見合う下顎の臼歯が見当たらないため、本住居址のどの下顎臼歯の個体とも別個体である。歯の大きさから見ると、小型在来馬程度の大きさの馬であったであろう。

7、7号馬

敷石の下部から出土した左下顎の全臼歯からなる。右側の臼歯の3号馬とは、咬耗度、計測値、色調などから対でないことは明らかで、どの個体とも別の7号馬とした。第二前臼歯だけは少し離れているが、ほぼ東西方向に配列し、咬合面を南に、前方を東に向けて、横たわっている。歯槽骨は残存してないものの、下顎骨に植立していた状態を保って、埋存していた。性別を判断できる材料はないが、歯冠高は7才前後の年齢であることを示している。各歯の歯冠長から、中型在来馬程度の馬格の持主であったと推察される。

8、8号馬

敷石の西南方向の少し離れた位置に、左下顎の第三乳前臼歯が出土しているが、既述のいずれの左下顎臼歯にも未咬耗のものはなく、これらの下顎骨に植立していた乳前臼歯ではない。一つの可能性として、未咬耗の歯をもつ6号馬の下顎の乳前臼歯とも考えられるが、下顎の臼歯が一つも見つかっていない6号馬と同一個体とするには、かなりの無理がある。推定年齢は3～4才である。

9、9号馬

敷石の北西側に、東西方向に配列し、前部を東に、咬合面を南に向けて横たわる。全臼歯の残存した右の下顎臼歯が出土しているが、写真鑑定のみで、詳しい観察が困難である。したがって、他の個体との関係や、年齢(咬耗度)、性別、形態などは明らかでない。4号馬あるいは7号馬の左下顎臼歯と咬耗度がにているようであるから、このどちらかと対をなすのかもしれないが、まったく別個体である可能性もあり、ここで仮に9号馬としておく。

10、69号住居址出土馬骨のまとめ

69住居址からは8～9個体分の馬骨が出土しているが、遺存しているのは歯のみで、歯以外の骨は出土していない。歯がもっとも腐蝕されにくく、最後まで残存されやすいのは事実であるが、四肢骨、体幹骨の痕跡が骨粉すら残っていないという状況や遺構の大きさが一体まるまる納めるには小さすぎることなどから、始めから頭だけしか持ち込まれていなかったと考えるほうが妥当のようである。狭い範囲内に8～9頭ものウマを全身埋めるには、その都度、大きく掘り込まなければならないし、すでに埋存している馬骨は、この時、外に掘り出されるか、骨格の配列を大きく乱されるかしたであろう。しかし、歯槽に植立した状態を保って埋存していた歯が多く、歯列に乱れのあるものでも、遠くへ離れ離れになっているというのでなく、比較的小範囲にまとまっていること、後述のように臼歯列がある規則性のある方向をもって埋存していることなども、頭だけしか持ち込まれなかったことを指示している。

埋存していた馬歯で、確実に、上顎歯・下顎歯が対になるといえるものはなく、下顎歯だけでみても左･右が対になっているものは2号馬にその可能性が強い以外は存在しない。上顎骨と下顎骨は別々に切り離されて、そのどちらかが持ち込まれ、しかも下顎歯の場合は、さらに左・右が切り離され、その片方だけが、持ち込まれるということが行われたようである。また、4号馬、7号馬、9号馬の下顎臼歯の配列が、ほぼ、東西方向を向いているのにも何か意味があるように思える。1号馬の上顎歯列と2号馬の下顎臼歯列が近接して同一方向にならんでいること、3号馬の下顎臼歯列がこれに直角に並んでいることも意味がありそうである。8～9個体の馬のうち、性別の判るのはオスが1頭だけで、あとは不明である。年齢は3～4才から9～10才にいたる比較的若い個体ばかりで、とうてい老衰で死亡する年ではないし、遺存している歯で見るかぎり、重病におかされて死亡したというような様子もうかがえない。古代に神聖視されていたとされる馬骨がこの様な埋葬をされていたことは、当時の祭祀のありかたについて、多くのことを教えているように思える。

E、遺構外

遺構外からは同一個体のものと思われる臼歯が6本分と、歯種不明の、未萌出の臼歯数本と乳臼歯、切歯の破片が出土している。歯種判定の可能な歯の内訳は、第一後臼歯が上顎、下顎とも左右それぞれ2本づつ・計4本と左上顎第二後臼歯、下顎左第三乳前臼歯である。咬耗は、第一後臼歯ではすでに咬合面の全面に及んでいるが第二後臼歯では、前錐、後錐、次錐、原錐にごくわずかの咬耗が始まったばかりであり、前述の6号馬より本馬の方が少し若いことを物語っている。推定年齢はおよそ3才である。性別は不明である。体高は臼歯の大きさから小型在来馬程度と考えられる。

F、129土坑

家牛（Bos tavrs）の下顎骨付きの臼歯6本が咬合面を上に向けて出土している。その内訳は、左･

右の第二後臼歯、第三後臼歯、左の第一後臼歯、右の第四後臼歯である。1㎥余の土坑であり、まるまる一体分を納めるには小さすぎるし、上顎臼歯は検出されてないため下顎骨だけが埋葬されたと考えられる。歯列をほぼ南北に向け、前部が南側にある。右側は咬合面を上に向け、左側は咬合面を東に向けて横たわっていた。当初は、下顎に全部の歯が植立していた状態で埋存していたものと思われる。歯冠高の最大歯冠幅にたいする比（歯冠高指数）は第二後臼歯で約1.8、第三後臼歯で約2.1で、Ducos の歯冠高指数と年齢との関係図に当てはめてみると、9～10才程度の年齢が得られる。Ducos はンダーマ牛を研究対象としていて、品種も飼料の内容も違うこの牛から得られたデータを日本の古代牛に応用するのは、妥当性を欠くが、日本の古代牛あるいは在来牛にこの様な研究例がない状況では、一つの目安にするのならば許されるであろう。日本の現世牛と歯の大きさを比べてみると、歯冠長は後臼歯が黒毛和牛[7]よりは大きく、見島牛の雌雄[7]の中間の大きさである。また、他遺跡の古代牛との比較では、長野県佐久市の奈良～平安時代の池畑牛[8]、群馬県前橋市の奈良時代の下東西牛[9]、東京都港区の伊皿子牛[7]のいずれよりも大きい。しかしその割に、歯冠幅の小さい個体であった。性別は不明である。

Ⅲ、おわりに

熊野堂遺跡のようにウマとウシが埋存していて、祭祀跡を思わせる9世紀前後の遺跡が他にもいくつかしられている。群馬県高崎市の田端遺跡、渋川市有馬条里遺跡、長野県佐久市の池畑遺跡などその例である。これらの各遺跡の共通性、相違点等を詳細に分析した当時の動物祭祀にかんする考古学的考察は、考古学分野の人の手によってなされる予定である。

本稿をそうするに当たって、群馬県埋蔵文化財調査事業団の女屋和志雄氏はじめ関係各位には多大なお世話をいただいた。ここに記して衰心よりお礼申し上げる次第である。

引用文献

1）Eisenmann. V, Alberdi. M. T, De Giul. C. and Staesche. u. (1988) Studying fossil horses E. j. Brill

2）Levin. Marsha. A (1982) The use of crown height measurements and eruption-wear sequences to age horses teeth In Wilson. B, Grigson. C and Payne. S. (eds) , Ageing and Sexing Animal Bones from Archa eological Sites, 223-250. Bar British Series 109

3）長谷川義和、原田俊治（1979）馬と進化．どうぶつ社、東京．

4）Goubaux. A and Barrier. G. (1892) The Exterior of the Horse, J. B. Lippincott. Phil adelphia.

5）林田重幸（1978）日本在来馬の系統に関する研究．日本中央競馬会．

6）Grigson, C. (1982) Sex and age determination of some bones and teeth fo domestic・cattle: Areview the literature. In Wilson. B, Grigson. C and Payne. S. (eds) ,Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites, 223-250. BAR British Series 109. より引用

7）中西川駿、松元光春（1981）第２号方形周溝墓西溝出土の家牛（Bos taurus）頭骨「伊皿子貝塚遺跡」、476-485、日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会．

8）宮崎重雄（1986）長野県佐久市池畑遺跡の馬と牛の骨について．「池畑」、50-60　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター

9）大江正直（1987）下東西遺跡出土の獣歯、獣骨について．「下東西遺跡」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団．

10）大江正直（1988）田端遺跡出土の獣歯、獣骨について．「田端遺跡」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

11）金子浩昌（1983）有馬条里遺跡出土の馬歯・牛歯．「有馬条里遺跡」、280-283群馬県渋川市教育委員会

第8表　熊野堂遺跡II地区69号住居址馬歯計測値表

I　69住居址

(単位：mm)

左上顎臼歯		E－6	E－2	E－3	E－4	E－5	E－1
		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯冠長	咬合面	39.6	30.2	29.2	26.0	26.5	23.4
	中央	36.3	27.7	26.7	25.0	24.7	25.8
歯冠長	咬合面	23.6	27.0	26.8	27.0	25.4	19.3
	中央	23.4	27.0	27.7	26.7	25.1	23.0
原錐幅	咬合面	10.4	14.0	13.7		14.8	12.4
	中央	9.4	12.8	13.0	12.7	14.1	13.7
歯冠長	LEVIN	44.0	58.5	59.7	50.6	61.3	59.0
	EISENMANN	37.0	58.0	67.0	56.0	71.0	69.0
咬合面の傾斜		103	92	85	90	85	68
エナメル褶曲数		2211	1311	1221	0220	2222	＝20＝
中附錐幅	咬合面	5.1	4.1	3.7	3.2	3.0	2.2
	中央	4.0	4.2	4.1	3.3	3.6	3.7
原錐型		2	2	2	2	2	4

(単位：mm)

右上顎臼歯		D－1	D－2	D－3	D－4	D－5	D－6
		第二前臼歯	第三前臼歯	第四前臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第三後臼歯
歯冠長	咬合面	33.4＋	30.5	29.3	25.3	26.1	22.3
	中央	33.0＋	27.9	27.0	24.5	25.0	24.9
歯冠幅	咬合面	24.0	26.6	26.9	26.7	25.2	19.3
	中央	23.4	26.8	27.7	26.9	25.6	22.5
原錐幅	咬合面	19.3	14.0	13.7	12.7	14.9	12.4
	中央	19.0	12.4	13.1	12.2	14.7	13.5
歯冠高	LEVIN EISENMANN	45.0	57.8	48.0＋	51.0	50.0＋	57.0
咬合面の傾斜		100	92	85	88	85	65
エナメル褶曲数		2211	1421	1231	1241	1431	00＝0＝
中附錐幅	咬合面	5.3	4.6	3.4	3.0	3.0	2.2
	中央	5.2	4.4	4.0	3.2	3.3	3.8
原錐型		2	2	2	2	3	4

Ⅰ　69住居址

（単位：mm）

上顎臼歯		B－25	B16－1	B－28	B16－2	B－26
		第一後臼歯	第一後臼歯	第二後臼歯	第二後臼歯	
		L	R	L	R	L
歯冠長	咬合面	26.0	29.0	27.2	28.0	
	中央	23.6	23.8	23.9	24.3	
歯冠幅	咬合面	21.9＋	24.8	22.8		
	中央		24.6	24.4		
原錐幅	咬合面		11.2	12.5		11.8
	中央		10.5	12.4		11.3
歯冠高	LEVIN	71.0	71.0	73.5	76.1	71.0
	EISENMANN	77.0	76.3	81.2	78.3	
咬合面の傾斜		82	83	73	75	85
エナメル褶曲数		1321	1211			
中附錐幅	咬合面	3.1	3.5	3.0	3.0	
	中央	4.1	4.2	4.4	4.5	
原錐型			2	2		

左下顎臼歯計測値

（単位：mm）

69住		F－6 第二前臼歯	F－5 第三前臼歯	F－4 第四前臼歯	F－3 第一後臼歯	F－2 第二後臼歯	F－1 第三後臼歯
歯冠長	咬合面	29.4	25.0	24.4	22.6	22.4	26.4
	中央	28.8	24.8	22.8	22.4	21.6	26.6
	前葉	16.3＋	13.2	12.3	12.3	11.7	10.9
歯冠幅	中央		13.3	12.8	13.3	11.1	10.9
	後葉	9.6	12.5	12.5	11.8	11.1	9.7
	中央	9.8	13.2	12.4	11.5	10.7	10.0
歯冠高	LEVIN	39.8	50.5	64.5	53.3	62.3	47.0
	EISENMANN	43.0	52.4	66.0	53.7	64.7	60.0
下後錐谷長		7.5	9.6	9.4	7.9	8.4	7.6
下内錐谷長		15.0	12.7	11.0	8.3	9.6	10.4
double knot長	咬合面	12.3	13.4	11.7	11.9	12.1	10.4
	中央						
咬合面の傾斜		90	85	82	80	75	65

左下顎臼歯計測値

(単位：mm)

69 住		第二前臼歯	G－3 第三前臼歯	G－1 第四前臼歯	G－2－2 第一後臼歯	G－4 第二後臼歯	G－2－1 第三後臼歯
歯冠長	咬合面 中　央 前　葉		28.7 28.9 14.9	26.7 26.6 14.5		26.3 25.6 13.6	24.8＋
歯冠幅	中　央 後　葉 中　央		14.7 14.5 14.4	14.1 14.2 14.1		12.9 12.3 11.9	
歯冠高	LEVIN EISENMANN		38.3 42.2	45.5 55.0	35.6＋	46.0 48.5	48.6 49.6
下後錘谷長			9.7	9.1		8.7	8.4
下内錘谷長			12.9	12.2		9.5	11.6
double knot 長	咬合面 中　央		15.7 16.4	14.2 14.7		13.2 13.3	12.0 12.4
咬合面の傾斜			90	90	80	85	68

左下顎臼歯計測値

(単位：mm)

69 住		B－21 第四前臼歯	B－20 第一後臼歯	B－19 第二後臼歯	B－18 第三後臼歯	B－9 R 第二前臼歯	B－10 R 第三前臼歯	B－36 L 第三前臼歯
歯冠長	咬合面 中　央 前　葉	29.5 28.0 15.2	28.0 27.0 13.2	28.6 26.6 14.5	29.6 32.1 11.0	28.2＋	24.6 24.8	28.0
歯冠幅	中　央 後　葉 中央	15.3 16.3 16.3	14.5 13.3 13.5	12.7 13.0 12.0	12.1 10.5 11.5		 12.4 12.8	
歯冠高	LEVIN EISENMANN	71.1 71.4	58.0 61.7	63.8 68.3	48.4＋ 53.8＋	 36.0	50.4 52.0	 19.0
下後錘谷長		11.8	9.7	9.9	8.8	7.0	9.1	9.3
下内錘谷長		15.2	10.8	11.0	9.3	14.3	13.2	5.4
double knot 長	咬合面 中　央	17.0 17.5	15.2 14.5	14.4 14.6	14.2 14.0	12.2 12.1	13.3 14.0	10.5
咬合面の傾斜		88	80	85	80？	80	83	

左下顎臼歯計測値

（単位：mm）

69　住		B－34 第二前臼歯	B－ 第三前臼歯	B－33 第四前臼歯	B－32 第一後臼歯	B－31 第二後臼歯	B－30 第三後臼歯
歯冠長	咬合面	28.3＋		25.8	24.1	24.0	27.5
	中　央			24.8	23.2	23.3	28.0
	前　葉			13.7	13.4	12.5	11.5
歯冠幅	中　央			14.0	13.1	11.9	11.3
	後　葉			14.2	12.2	12.2	10.0
	中　央			14.0	11.8	11.1	10.4
歯冠高	LEVIN	39.8		65.7	57.2	61.0	57.2
	EISENMANN	35.0		65.0＋	58.5	61.3	62.0
下後錘谷長		8.0		9.4	9.5	8.6	8.2
下内錘谷長		12.4		13.3	9.9	10.8	10.2
double knot 長	咬合面	14.5		13.8	13.1	11.7	11.7
	中　央	13.8		14.7	13.4	12.4	11.6
咬合面の傾斜		95？		86	78	78	69

左下顎臼歯計測値

（単位：mm）

69　住		B－23 P_4	B－22 M_1	B17－1 M_2	B17－2 M_3
歯冠長	咬合面	25.5＋		23.7	
	中　央	25.2＋	25.6	23.9	24.0＋
	前　葉	13.1		12.4	
歯冠幅	中　央	14.4		12.5	
	後　葉	12.7		10.8	
	中　央	13.7	12.8？	11.5	
歯冠高	LEVIN	62.6	54.3	66.1	64.5
	EISENMANN	64.0	57.0	73.2	
下後錘谷長		9.7		8.8	
下内錘谷長		14.7		11.6	11.6
double knot 長	咬合面	15.7	15.8	12.3	11.9
	中　央	15.8	15.8	12.7	12.3
咬合面の傾斜		87	90？	80	75

下顎臼歯計測値

（単位：mm）

	36住居	50住居 M_1？ R	3号竪穴48 P_4？ L	3号竪穴49-1 M_1 L	3号竪穴49-2 M_2 L
歯冠高			28.1		
歯冠高（LEVIN）		83.9	57.1	53.5	59.0
下後錘谷長		9.9			
double knot 長（咬合面）	76.0				
咬合面の傾斜			86	75	70

II　遺構外

（単位：mm）

上顎臼歯	第一後臼歯 L	第一後臼歯 R	第二後臼歯 L
歯冠長　咬合面 中　央	28.0 23.7	27.7 24.0	25.0 24.2
歯冠幅　咬合面 中　央	23.2 23.8	23.3 23.8	16.6 24.0
原錐幅　咬合面 中　央	13.4 11.6	13.7 11.9	12.5 13.2
歯冠高　LEVIN EISENMANN	67.3 72.6	67.5 72.9	54.0 65.0
咬合面の傾斜	82	82.0	73.0
エナメル褶曲数	1,＝,2	1,＝,1	
中附錘　咬合面 中　央	2.6 3.4	2.6 3.4	2.6 3.7
原錐型	3	3	4
原錐湾入	2.5	2	2

II　遺構外

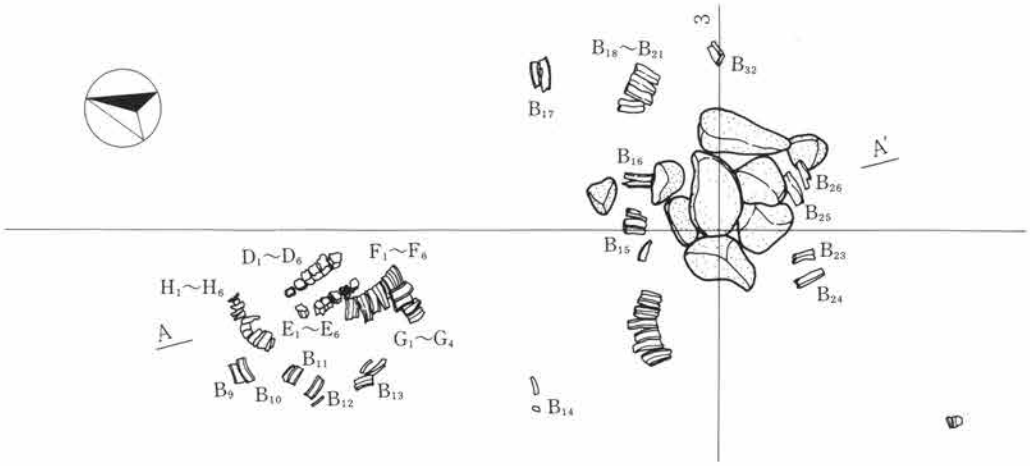
（単位：mm）

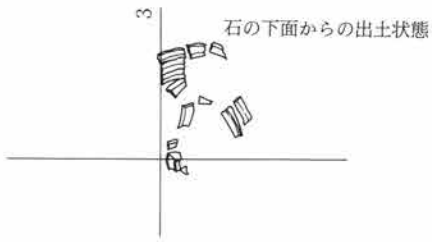
下顎臼歯	第三乳臼歯 L	第一後臼歯 L	第一後臼歯 R
歯冠長　咬合面 中　央 前　葉	30.0 12.5	30.5 25.7 11.2	27.7＋ 10.6
歯冠幅　中　央 後　葉 中　央	12.8	13.8 11.1 12.9	13.1 12.6
歯冠高　LEVIN EISENMANN	12.5 12.3	68.3 73.0	70.0 70.0
下後錘谷長	8.7	10.0	10.0
下内錘谷長	10.9	13.0	12.7
double knot 長　咬合面 中　央	15.5	14.3 13.1	14.4 13.2
原　錐　型	85	80	83

Ⅲ　牛下顎臼歯計測値・比較表

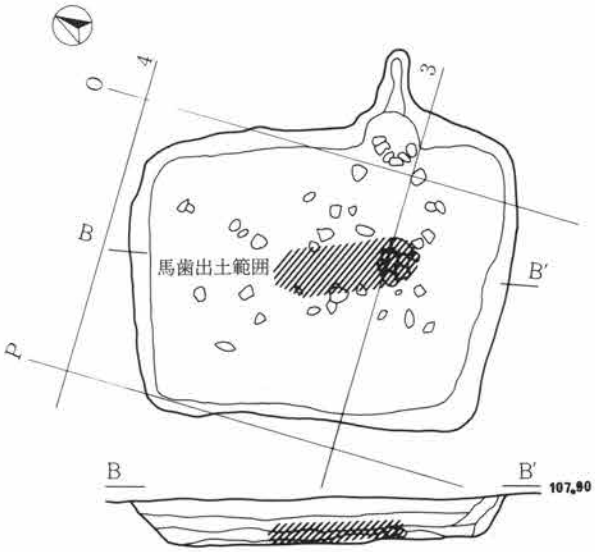
遺跡名			熊野堂	※池畑[8]	下東西[9]	※※伊皿子[7]	見島牛[7]		黒毛和牛[7]	
雌雄							♂	※♀	♂	♀
時代				奈良末～平安	奈良前期	弥生中期	現　生			
第四前臼歯	歯冠長		22.2	20.3	20.8	22.1	21.2	21.1	18.3	19.3
	歯冠幅	咬合面	13.2	10.9		13.5	12.2	14.0	13.5	12.3
		最　大	13.2							
	歯冠高	舌　側	17.6	23.2	8.3					
		頬　側	20.4							
第二後臼歯	歯冠長		27.6	27.1	22.3	27.1	28.0	25.6	24.6	25.6
	歯冠幅	咬合面	14.6	14.6			17.0	16.7	16.2	16.0
		最　大	16.3							
	歯冠高	舌　側	29.0		9.1					
		頬　側	25.2＋	28.4						
第三後臼歯	歯冠長		41.5	38.2	37.8	39.5	42.3	39.6	36.9	37.1
	歯冠幅	咬合面	13.9	14.8			16.3	16.0	15.8	15.2
		最　大	17.1							
	歯冠高	舌　側	36.8							
		頬　側	30.8＊	23.1	10.1					

＊臨床的歯頸部から　　※※筆者の算出による左右または複数個体の平均　　単位：mm

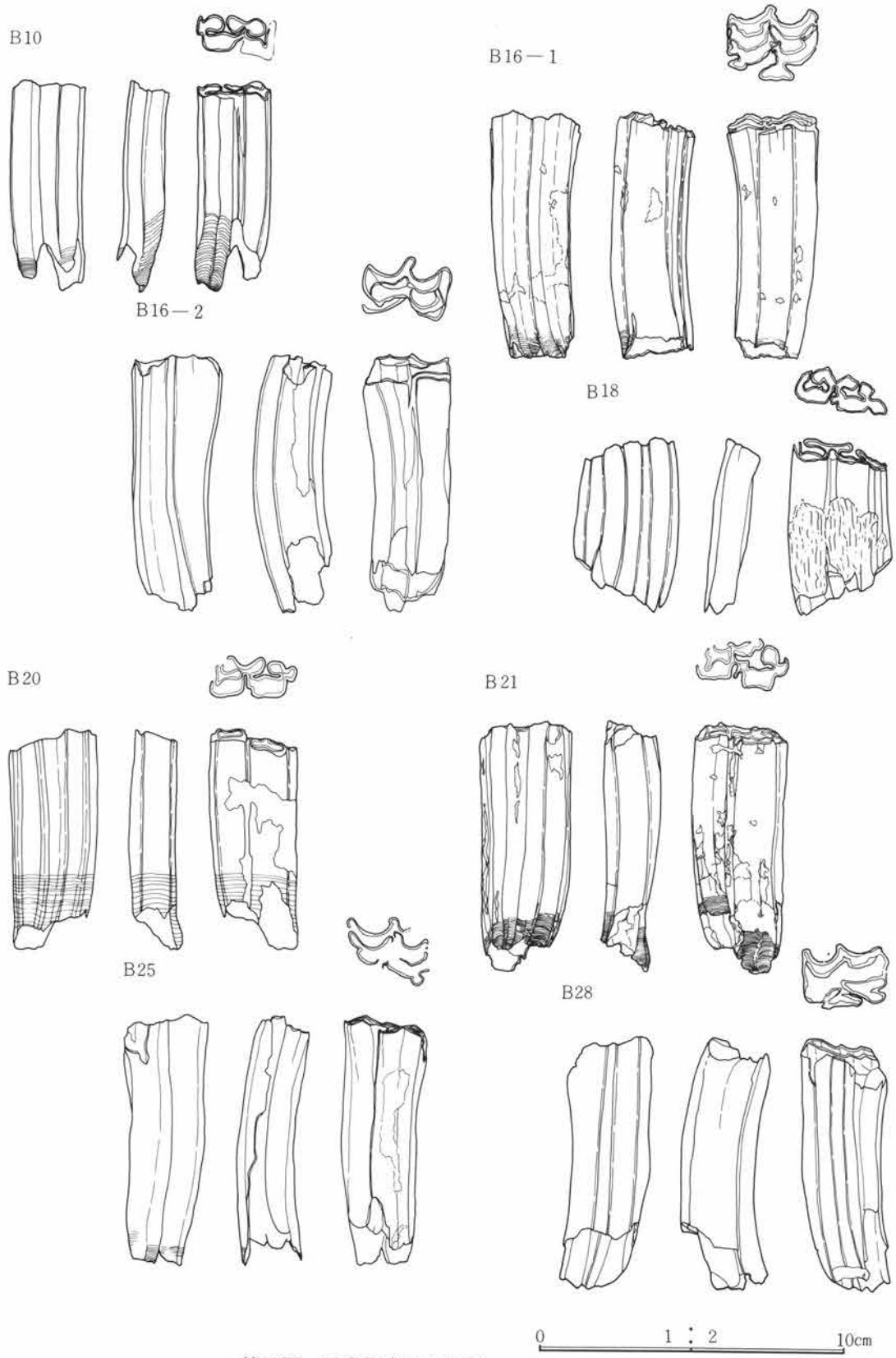




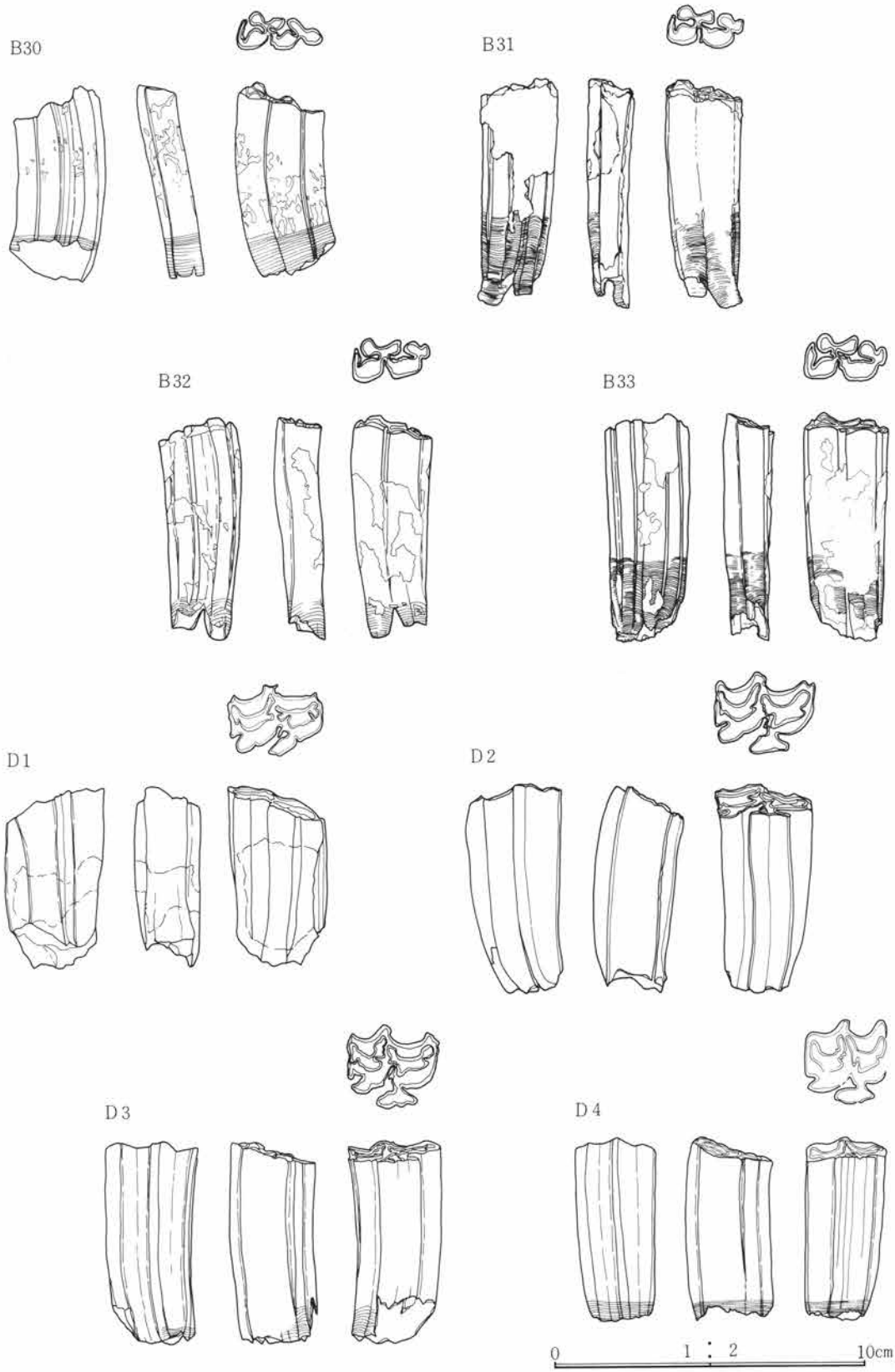
馬歯出土状態拡大図



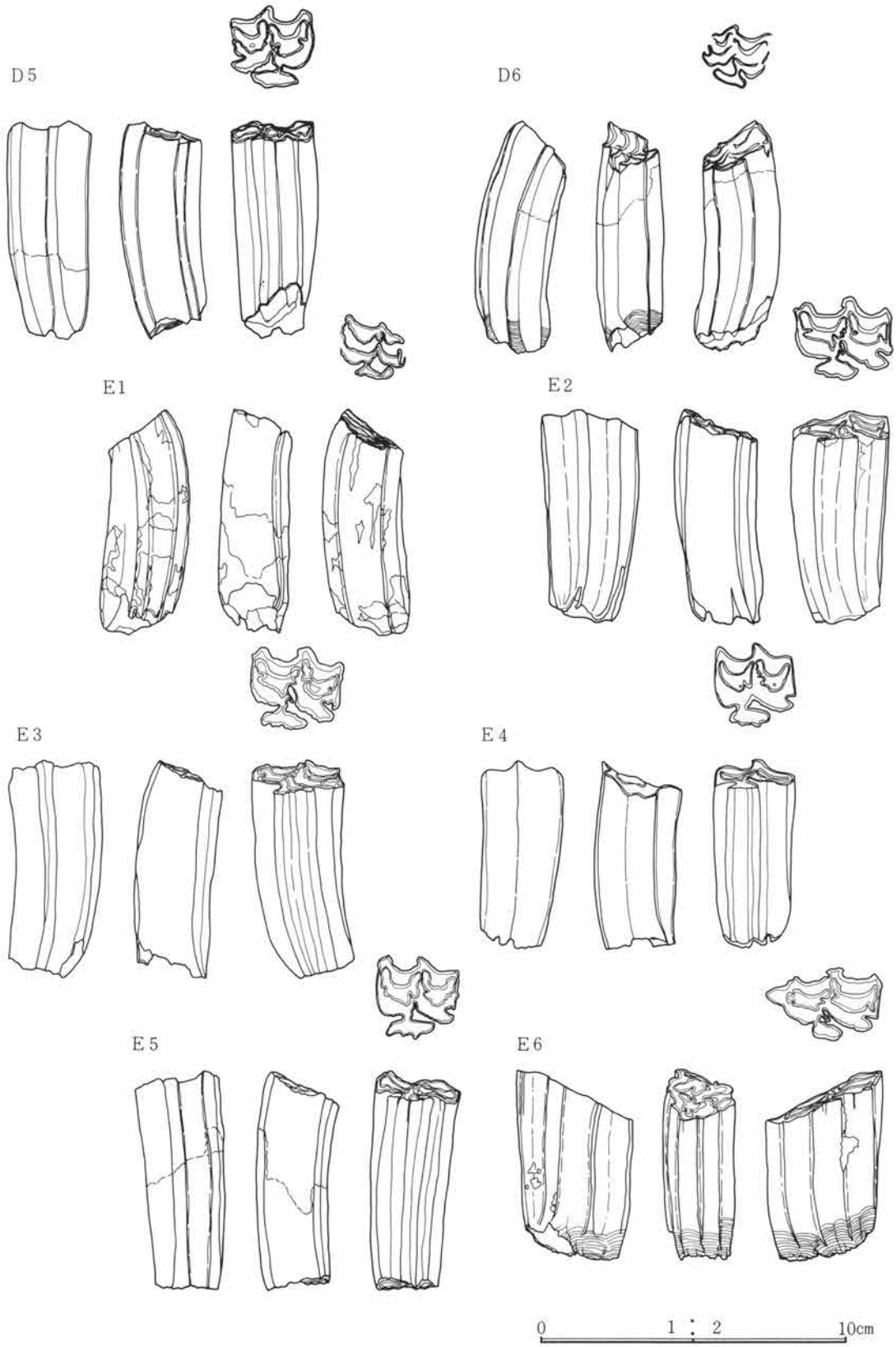
第65図　69号住居址馬歯出土状態図



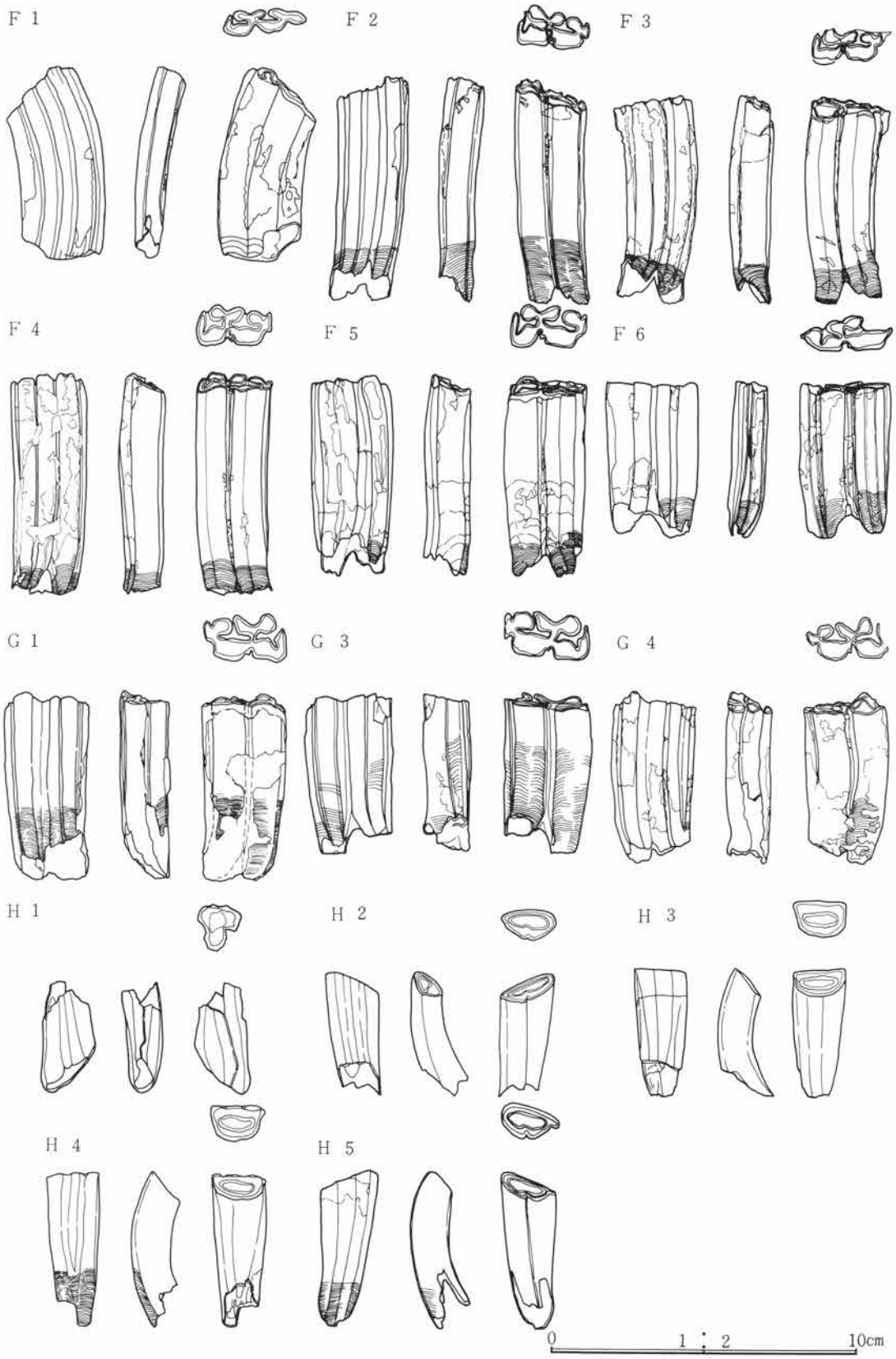
第66図　馬歯集成図69住(1)



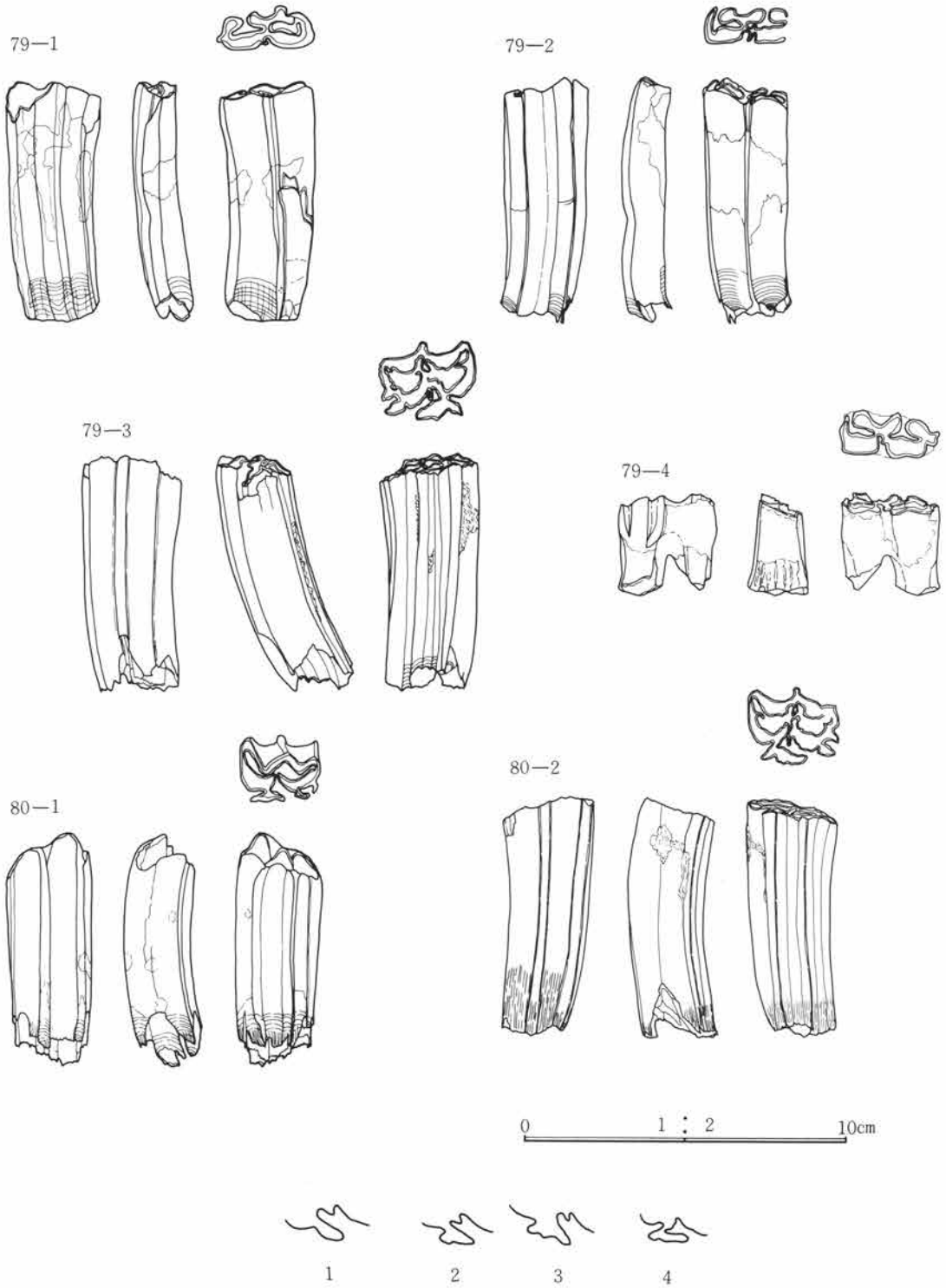
第67図　馬歯集成図69住(2)



第68図　馬歯集成図69住(3)

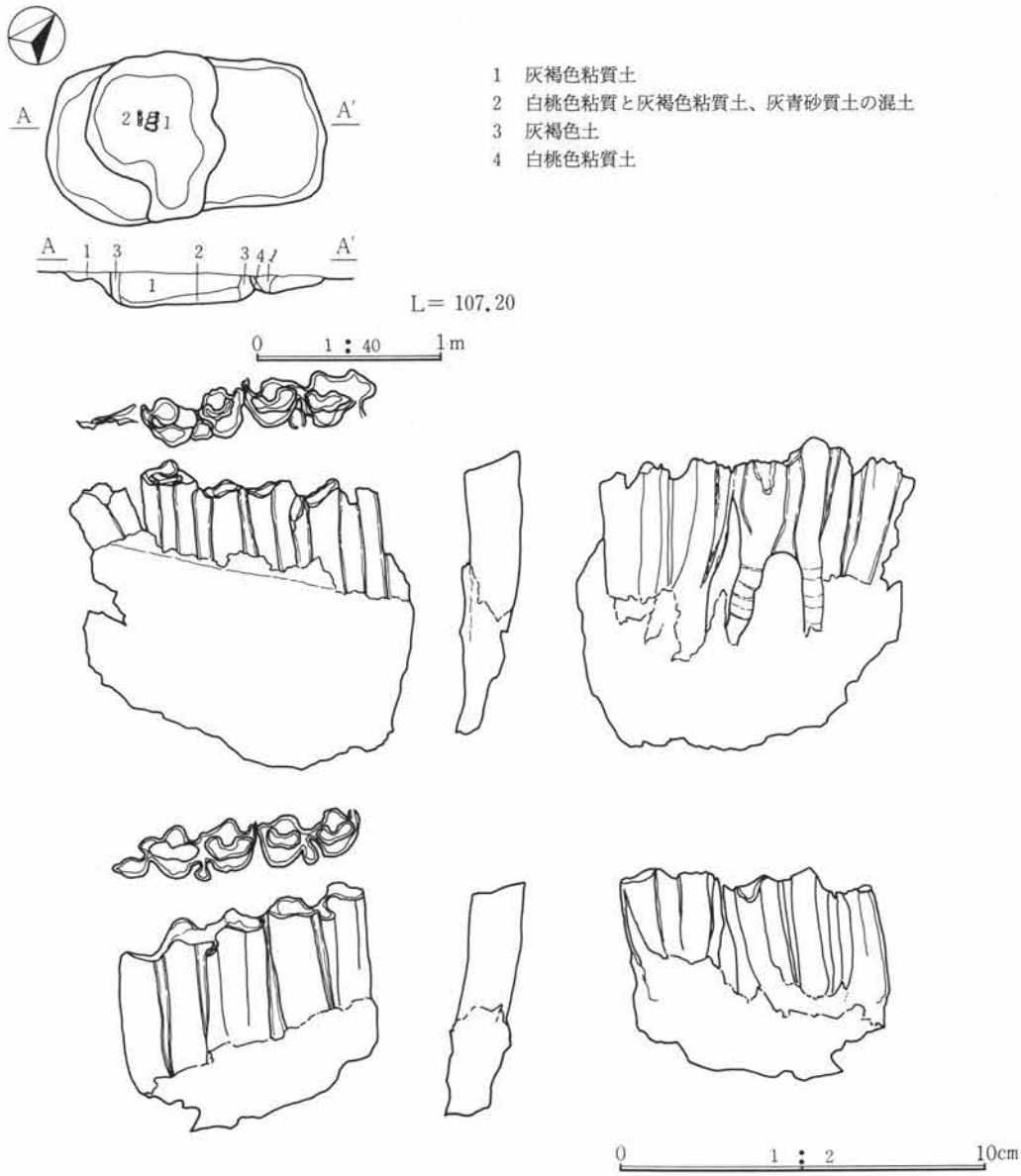


第69図　馬歯集成図69住(4)



ウマの臼歯原錐型

第70図　馬歯集成図



第71図　192号土坑平面図、牛歯図

第３節　プラント・オパール分析による群馬：熊野堂遺跡水田址の考察

宮崎大学　藤原宏志

熊野堂遺跡は日高遺跡、新保遺跡などとともに前橋台地における古代水田址様遺構をともなう遺構として注目されている。これらの古代水田址は他の地域（福岡・板付遺跡、滋賀・服部遺跡）で最近検出された古代水田址とは様相を異にしている。前橋台地における古代水田址様遺構の主な特徴は、①．火山灰の堆積した台地上に立地し、火山灰を耕土にしていること、②．畦畔様遺構に区切られた区画が極めて小さく、その数が多いことである。火山灰台地における開田には高度な水利技術を要するのが通例であり、本遺跡における水田様遺構でイネが栽培されていたとすれば古代における稲作技術を考える上で貴重な資料をもたらすことになるであろう。本分析の主な目的は水田様遺構でイネが栽培されたかどうか、また、その水田様遺構で生産されたイネ籾総量がどれくらいであったかを推量することである。

分析方法および試料

プラント・オパール分析法はイネ科植物を対象とした古代植生分析法である。イネ科植物の葉身には機動細胞珪酸体と呼ばれる厚いガラス質で覆われた特殊な細胞がある。この機動細胞珪酸体は植物種によりその断面形状が異なり植物種判別のｋｅｙになる。また、厚いガラス層でできているため、植物体が土中で酸化分解した後もその形状は変わらず土粒子の一種として長期間残留する。このような植物に起源する土粒子はプラント・オパールと総称されている。プラント・オパール分析は遺跡土壌等に含まれる機動細胞プラント・オパールを検出し、当時のイネ科植生の種類・生育量を推定するものである。

分析過程は右図のダイアグラムでしめしたとおりである。

① 土　壌　採　取	① 土壌採取（100cc採土管）
↓	↓
② 脱有機物処理（H_2O_2）	② 絶乾重量測定
↓	↓
③ 超音波処理による分散（150W・20kHz・10min）	③ 少量を秤量
↓	↓
④ Stokes式による粘土除去	④ 沈底法による粘土除去
↓	↓
⑤ プレパラート作製・検鏡	⑤ 70%グリセリン5.0cc中に分散
	↓
定性分析ダイアグラム	⑥ 0.01ccをマイクロピペットで採取
	↓
	⑦ プレパラート作製・検鏡計数
	定量分析ダイアグラム

分析用土壌試料は定性分析試料10点・定量分析試料6点であったが、より詳細な考察を行うため、定量分析点数を11点に増やした。

主な試料採取地点の土柱図と採取位置を第72図に示した。なお、試料は100cc採土円筒を土層に対して垂直に打ち込んで採取し、後日仮比重を計量した。

分析結果

VI層を除く各層にイネ科植物に由来するプラント・オパールが検出された。イネ科植物種はイネ・ヨシ・タケ・ススキ・チガヤであり、古墳時代および弥生時代の水田址様遺構をともなうVIII層およびX層と両層に挟まれるIX層にはイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。検出された植物種のうち量的にも多く、また土層の堆積環境を推定するうえで有用なイネ、ヨシ、タケについて定量分析を行い、その結果をプラント・オパール密度として第72図に示した。

当該遺跡の立地する前橋台地は周辺火山の活動による火山灰の堆積層がある。この火山灰層は遺跡の時代区分に採用されるだけでなく、植物遺物の混合を防ぐフィルターとしても格好の役割を果している。図に示した各層のプラント・オパール密度分布をみると、I、II層にはイネ、ヨシ、タケのプラント・オパールが密度高く分布しているのに対し、III層の火山灰（浅間山、Bパミス、1108年）およびVI層の火山灰（榛名山二ツ岳6C後半）にはほとんどプラント・オパールが検出されない。このことは、もしプラント・オパールが重力や地下水の上下動あるいは生物的要因により垂直移動するものであれば、当然起こりえない現象である。すなわちこれらの自然的要因によりプラント・オパールの垂直移動が生じえないことの実証例といえるものであり貴重なデータと思われる。

植物体における機動細胞珪酸体の密度は植物種によって異なる。別にもとめた植物種ごとの機動細胞珪酸体密度と各土層の仮比重データを加え、プラント・オパール密度分析から、各土層に生育した各植物の単位面積（10a）あたり地上部乾物量、イネ籾量を第72図に示した。

第72図でみられるとおり、VIII層以下ではヨシの植物体量が極めて多いことが特徴的である。これはVIII層より下層が堆積した環境が湿潤であったことを示しており、VII層より上層ではかなり乾燥した環境に変化したことを示している。その後、IV層が堆積した時代はやや湿潤な環境であったことが推定される。

イネの生産量をみてみると、I層、II層が大きな値を示している。これは、近世以降の陸稲栽培によるものと思われる。VIII、IX、X層には明らかなピークが認められ、この時代にイネが生育したことは明瞭である。IX層はVIII層で検出された古墳時代水田面の作土層にあたるので、古墳時代水田で生産されたイネの総量はVIII層およびIX層に含まれるプラント・オパールの和から推算される。また、弥生時代の水田面はX層で確認されており、VI層ではイネ機動細胞プラント・オパールが検出されていないことから、弥生時代水田のイネ生産量はX層に含まれるプラント・オパール量から算出することにした。試算の結果、古墳時代水田で生産されたイネ籾総量は3.01t／10aであり、弥生時代水田では1.51t／10aであることがわかった。

考察および結論

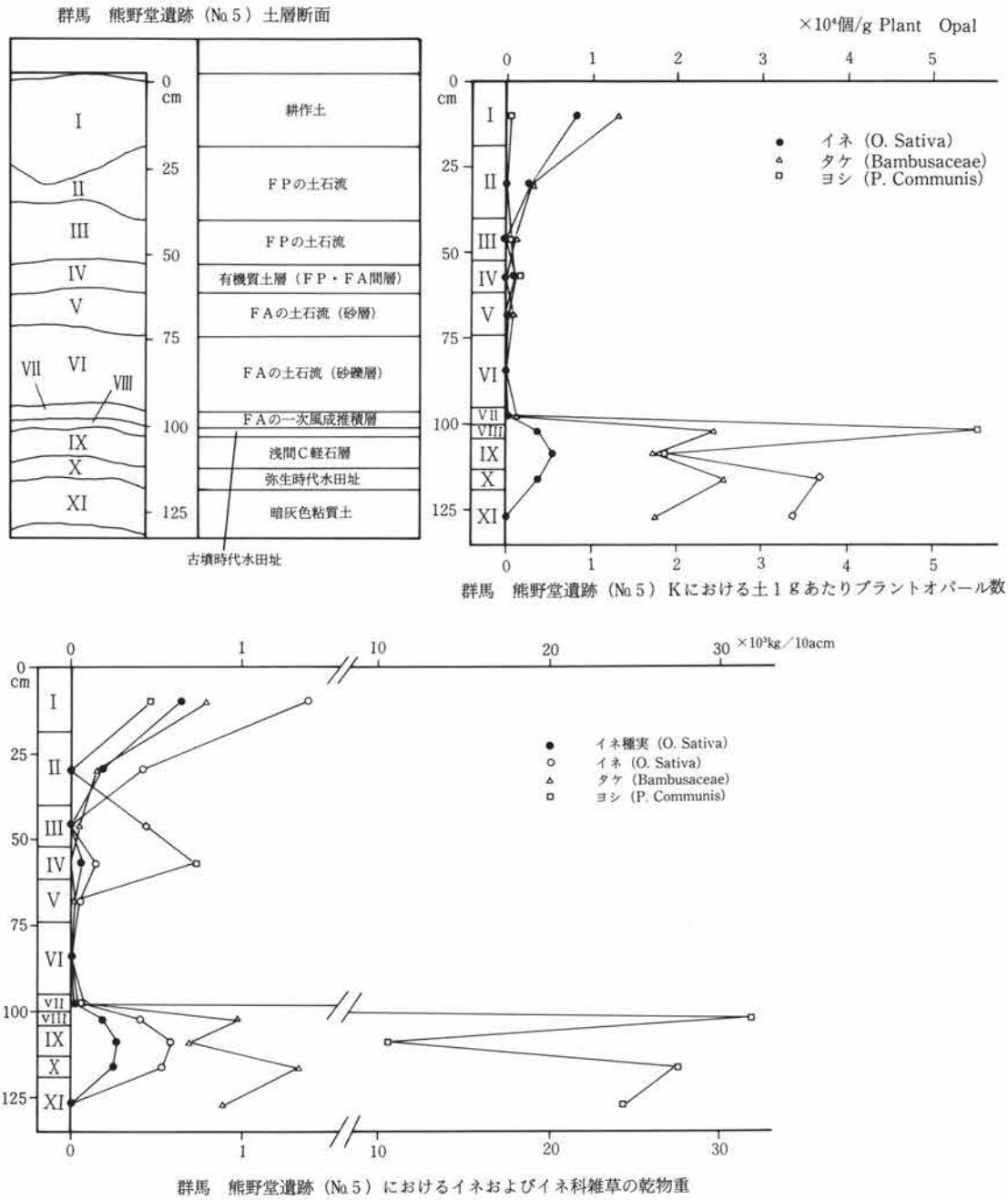
１．本遺跡のⅧ層、Ｘ層で検出された水田址様遺構は前節で述べたとおり、水田址とみて良かろう。両水田におけるイネ籾の総生産量はⅧ層：古墳時代水田の場合3.04ｔ／10ａ、Ｘ層：弥生時代水田の場合1.51ｔ／10ａである。ただし、これは次の諸点を前提としていることに留意されたい。①、当時の収穫法が穂刈りであったこと、②、堆肥などの形でイネワラを水田に還元する技術、慣行はなかったこと③この計算にもちいてイネの籾：ワラの比は現在のイネ品種（水稲：ミズホ）の値をもちいており、当時の古い品種より大きな値になっていること、この点については当時のイネ品種の特性に関する知見がない現状ではやむをえないとおもわれるが検討の余地があろう。なお、プラント・オパール定量分析で推定しうる生産量はその水田層（あるいは土層）が堆積する間に生育した総量を示すものであり、一年あたりの生産量を示すものではない。年あたり生産量は別にその水田層（あるいは土層）が堆積するに要した年数が求められれば算出できることになる。

２．ヨシの生育量が古墳時代および弥生時代の水田で極めて多いことが注目される。この傾向は本遺跡に限らず、両時代における他遺跡水田でもみられるところである。この点については次ぎの二要因が考えられる。一つは、この時代の水田が連続的に活用されず、休耕期があり、その間にヨシが繁茂した結果による場合、他の一つは、水田は連続的に活用されたが、水田雑草としてヨシが繁茂した場合である。両要因のいずれによる結果であるかは即断できないが、他遺跡でも同様な現象がみられることを考えると後者の可能性が大きいのではなかろうか。

３．最後に、本遺跡をはじめ前橋台地上で発見される弥生・古墳両時代の水田（いわゆるミニ水田）形式について触れておきたい。

最近、あいついで発掘された古代水田址を大きく類別すると、福岡：板付（Ｇ７ａ区）遺跡に代表される大型水路をともなう方形大型水田と三重：北堀池遺跡にみられる不定形中型水田および本遺跡を含む前橋台地の数遺跡で検出された方形小型水田といっても100㎡前後であり、現在の水田からみれば極めて小さいものである。しかし、ここでいう小型水田は３～４㎡を一区画とする長方形で整然とマトリックス状に配列されている。しかも、不定形中型水田が等高線を配慮して区画されているのに対し、これら小型水田の区画配列形式は等高線だけで説明することが困難である。この点について所有制など社会的見知から検討されるべき側面を残しつつ、栽培管理的立場から若干の検討を加えておきたい。前橋台地には火山灰の互層が堆積している。火山灰土には透水性が高く湛水する必要のあるいわゆる水田には不適な立地である。こうした立地条件のもとで水田を造成し、維持するためには水田土層に不透水層を造ることが必要である。人為的な不透水層造成作業として代掻き作業がある。この作業は水田にまず多量の水を導き満水した後、泥土を撹拌することにより粘土の薄層を造る（この層は代掻き層と呼ばれ透水性が低い）ことにより水持ちをよくする目的で行われる。

このように、代掻き作業を行うためにはどうしても水をためる必要がある。しかし、火山灰土は水持ちが悪く、代掻き以前に大面積を湛水するためには多量の水が必要になる。もともと用水の少ない火山灰台地で大量の代掻き用水を求めることは不可能であろう。この点を解決する方途として小区画水田技術が考え出されたのではなかろうか。すなわち、小区画水田であれば一枚の水田に要する代掻き用水は小量で済み、代掻き後ただちに隣の水田へ水を廻し次ぎの代掻き作業を行う。このようにし

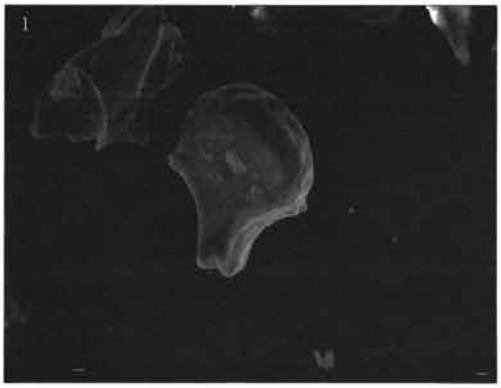


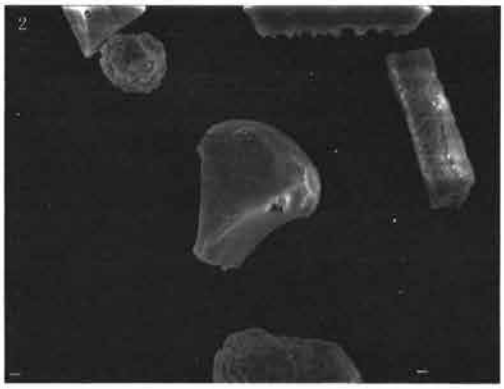
第72図　プラントオパール分析図

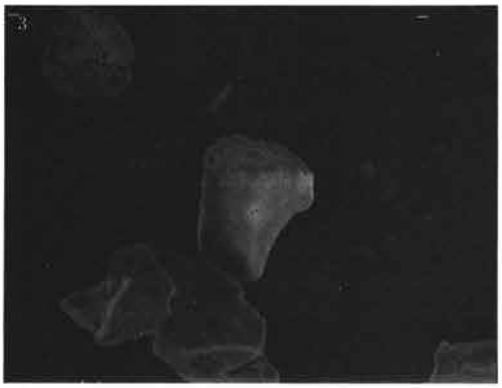
て、順番に水を廻せば小量の水でも全体の水田に代掻き作業を施すことが可能になる。

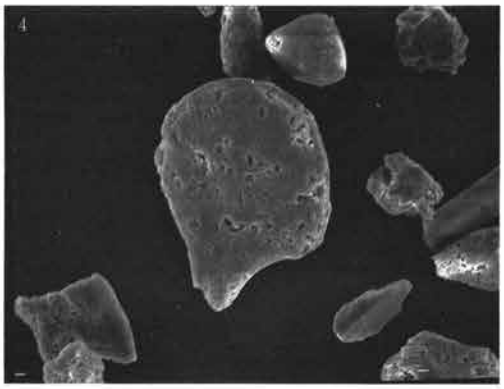
しかし、それにしても、このような立地の水田は平野部の水田に比べ水の消費が大きく常時湛水することはおそらく難しかったであろう。その意味では、常時湛水を原則とする通常水田とは異なり、かなり〝畑作的要素の多い水田〟だったものと思われる。

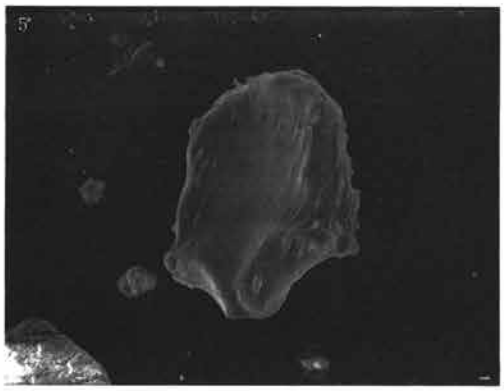
（昭和54年３月31日）

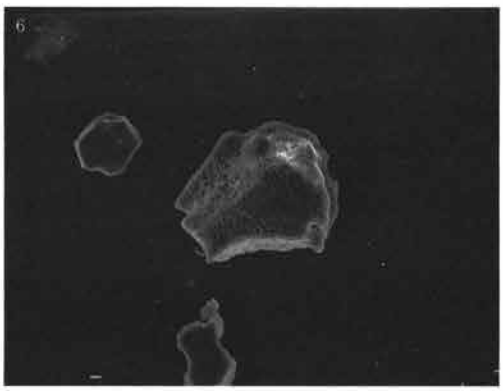












写真説明（走査型電子顕微鏡×1000）

1.
2. } イネ機動線胞プラント・オパール（X層）

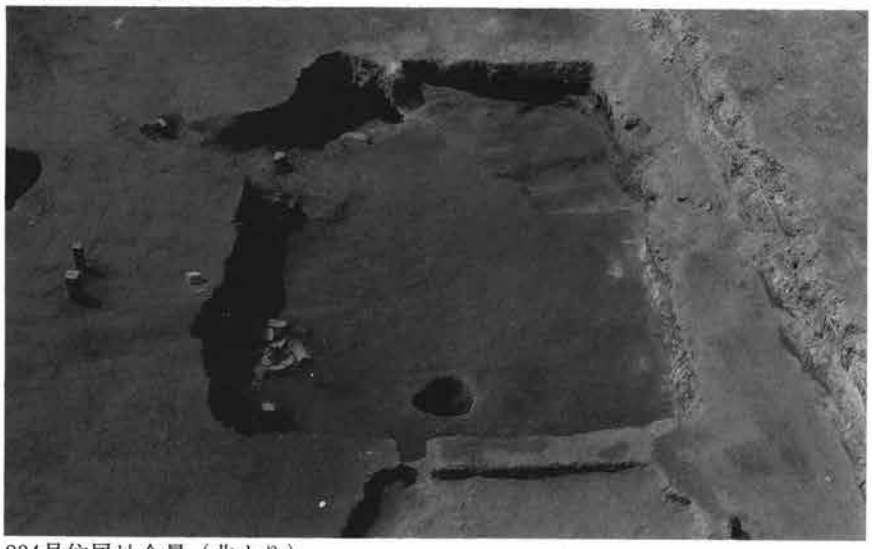
3. ススキ機動細胞プラント・オパール（X層）

4.
5. } ヨシ機動細胞プラント・オパール（X層）

6. タケ（メダケ）機動細胞プラント・オパール（X層）

写　真　図　版

233号住居址全景（北より）



234号住居址全景（北より）

234号住居址遺物出土状態（東より）

図版　2

235号住居址全景（西より）

235号住居址カマド（西より）

237号住居址全景（西より）

237号住居址カマド遺物出土状態（北より）

238号住居址全景（西より）

238号住居址遺物出土状態（東より）

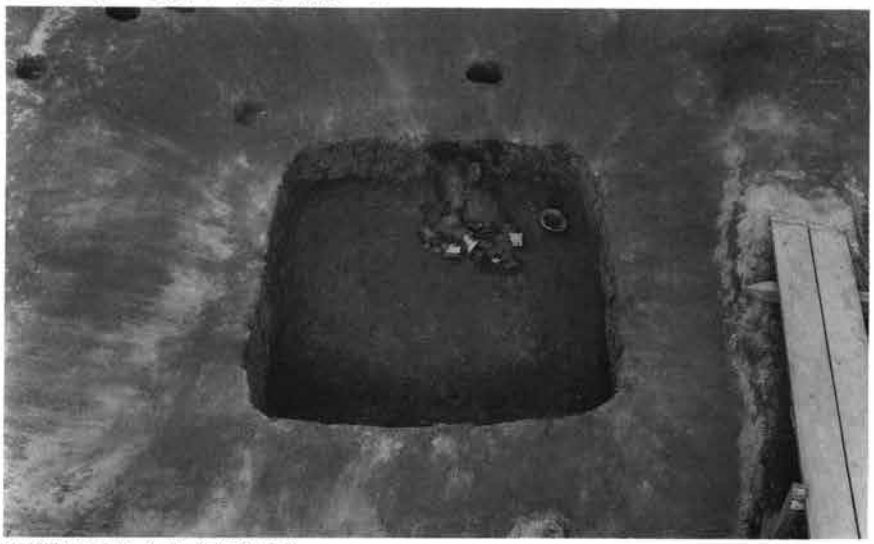
239号住居址全景（西より）

239号住居址カマド（西より）

240号住居址全景（西より）

241号・246号住居址全景（西より）

241号住居址遺物出土状態（南より）



242号住居址全景（西より）

242号住居址遺物出土状態（西より）

246号・243号・245号住居址全景（西より）

243号・246号・245号住居址全景（南より）

243号住居址遺物出土状態（西より）

243号住居址カマド（西より）

245号住居址全景（西より）

246号住居址遺物出土状態（西より）

246号住居址遺物出土状態（西より）

244号住居址全景（西より）

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第100集

熊野堂遺跡(2) まとめ編

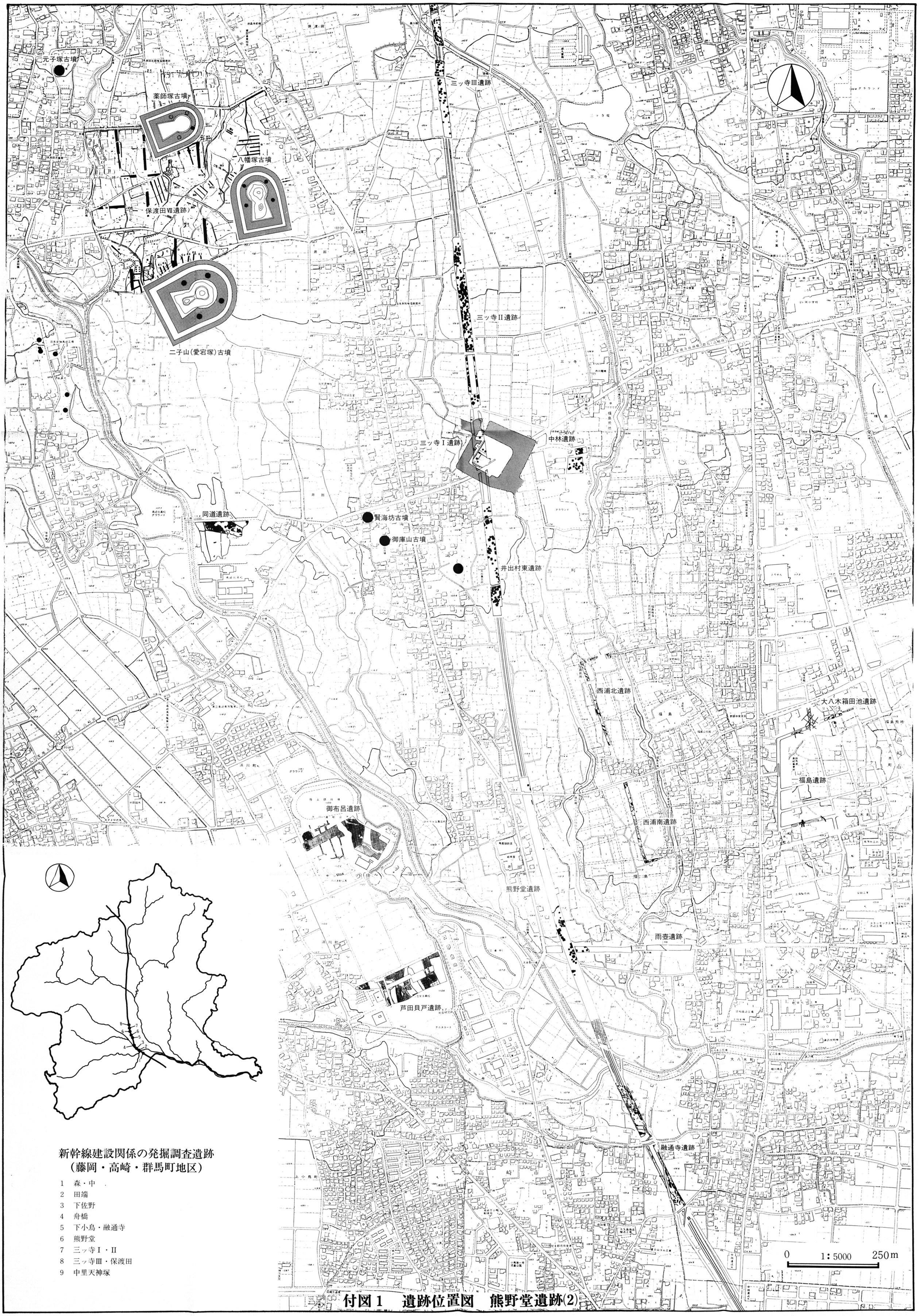
－上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告　第14集－

平成3年3月8日 印刷
平成3年3月15日 発行

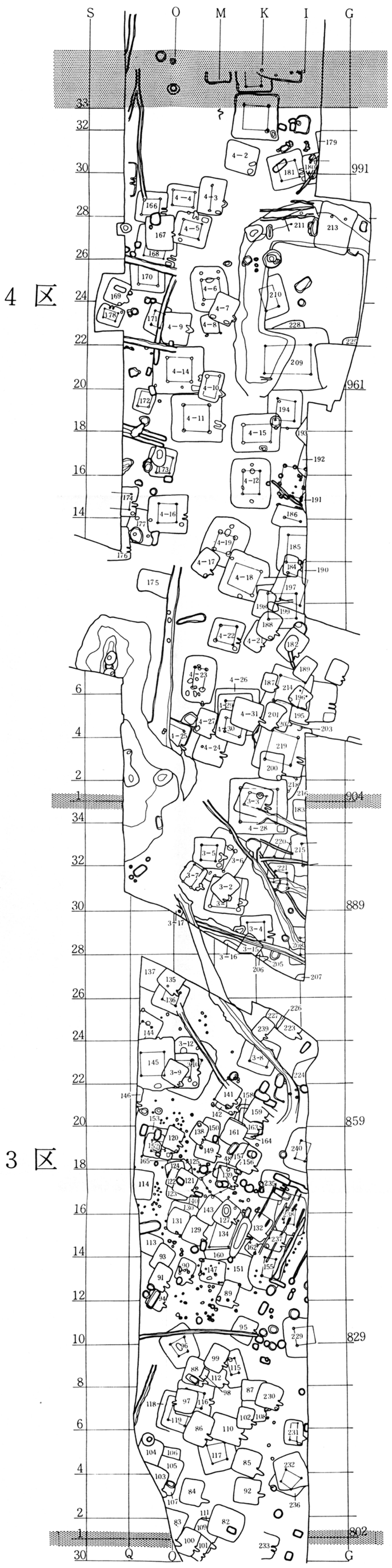
編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52－2511(代表)

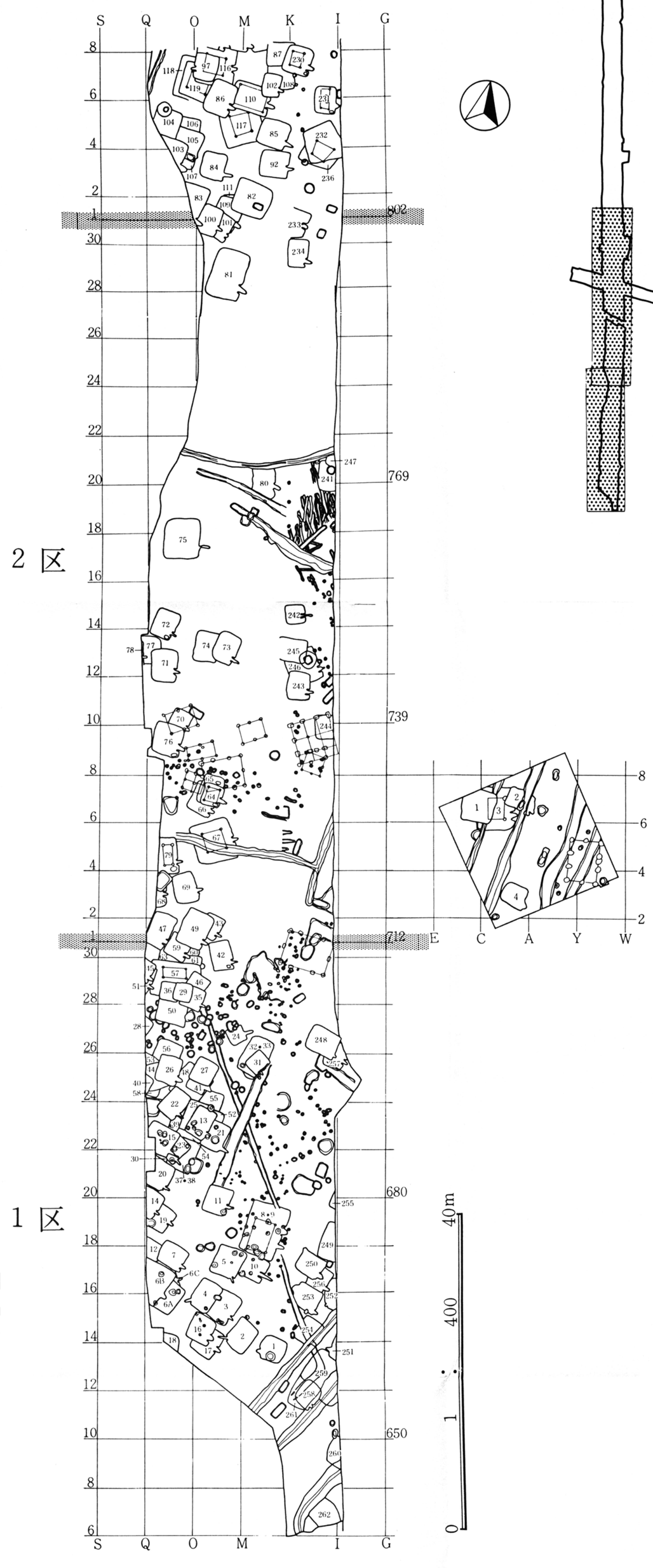
発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52－2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社



付図1 遺跡位置図 熊野堂遺跡(2)

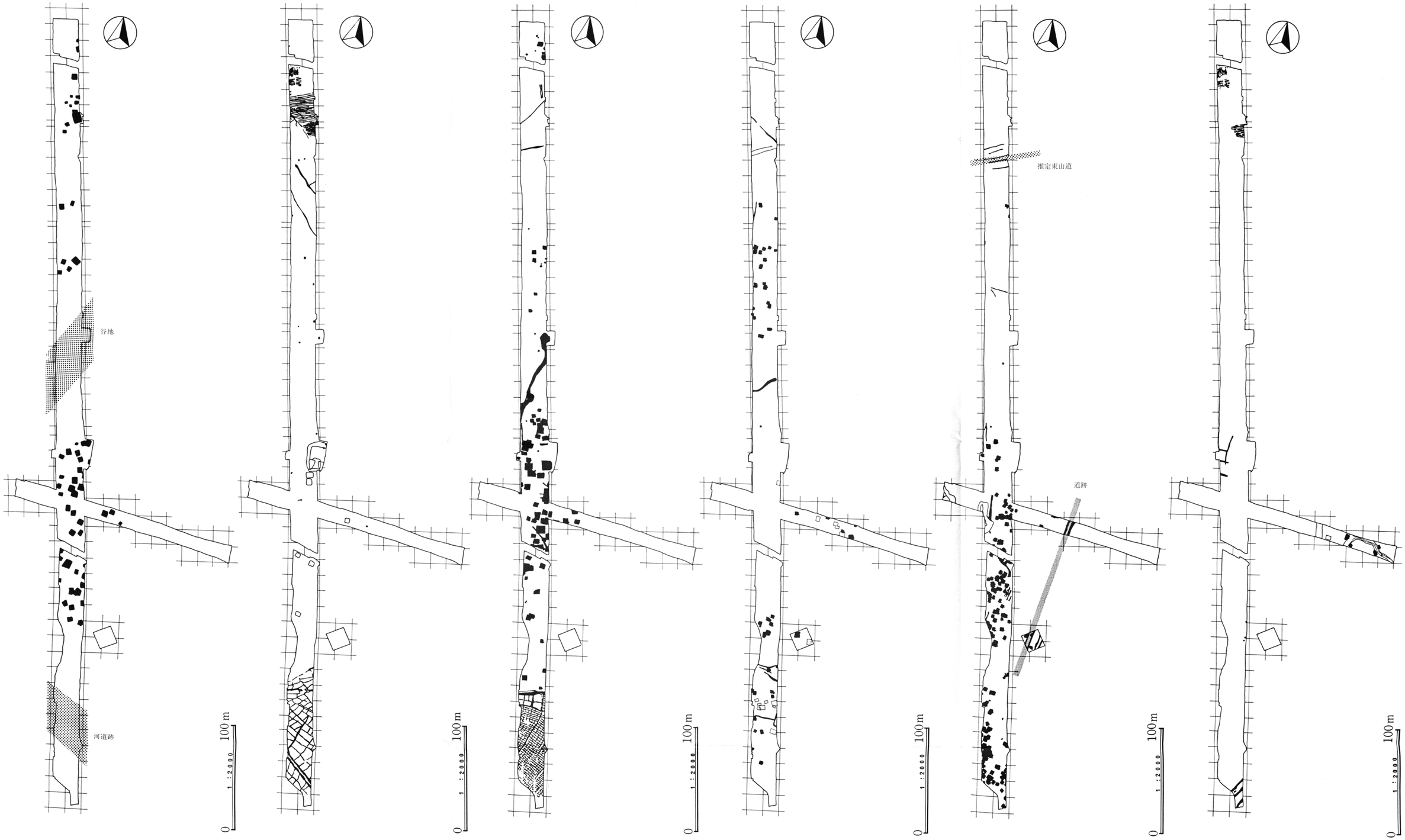




遺構数

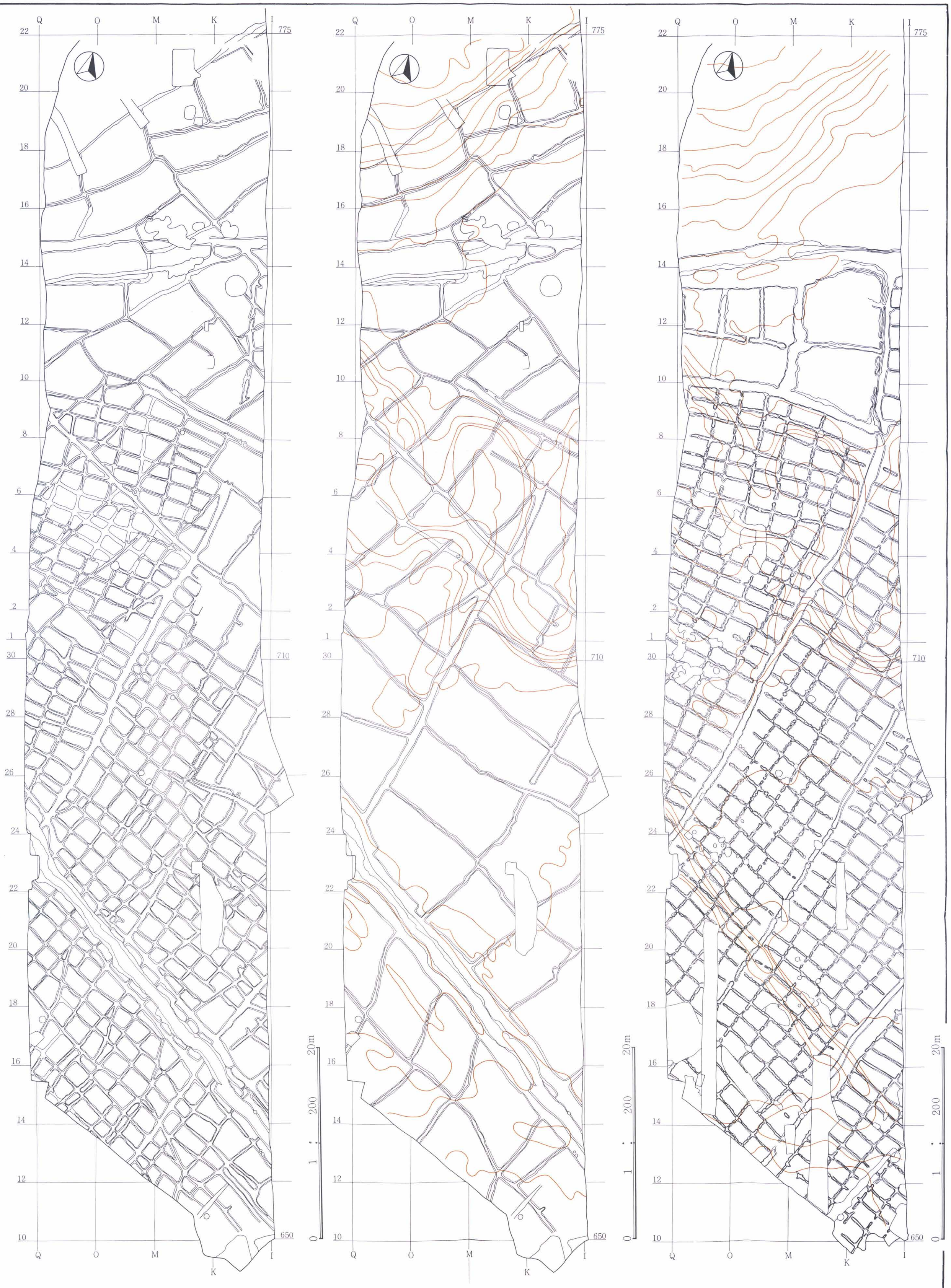
1　住居　302軒（弥生時代43、古墳時代62、古代197）
2　掘立柱建物　11棟
3　井戸　3基
4　土坑　186基
5　溝　43条
6　竪穴状遺構　7基
7　方形周溝墓　1基
8　水田　2面
9　畠　2箇所

付図2　熊野堂遺跡第II地区全体図



弥生時代　古墳時代（4世紀）　古墳時代（5～7世紀）　奈良時代（8世紀）　平安時代（9～11世紀）　中世～近世

付図3　熊野堂遺跡時代別全体図



1　浅間Ｃ軽石下水田（既報告のもの）

2　浅間Ｃ軽石下水田）

3　二ッ岳ＦＡ水田

付図４　熊野堂遺跡水田全体図